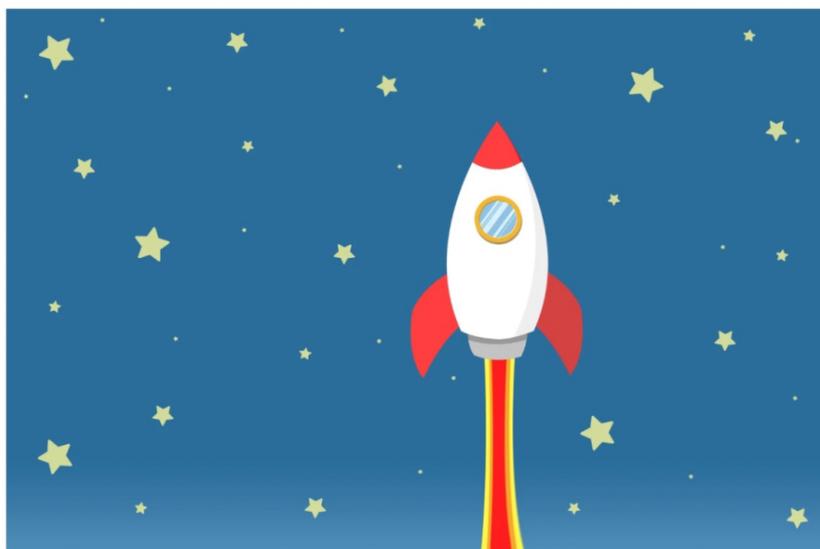


宇宙ステーション・救世主編

SKY BLUE



目次

(序)	
(序)	3
(一)	
(一・一) イヴ	
(一・一) イヴ	9
(一・二) ゼロステーション	
(一・二) ゼロステーション	15
(二)	
(二・一) 一人目の客	
(二・一) 一人目の客	23
(二・二) 夢	
(二・二) 夢	31
(二・三) 子犬と少年	
(二・三) 子犬と少年	37
(二・四) 白鳥座ステーション	
(二・四) 白鳥座ステーション	43
(三)	
(三・一) 二人目の客	
(三・一) 二人目の客	51
(三・二) 夢	
(三・二) 夢	57
(三・三) 子犬と少年	
(三・三) 子犬と少年	63
(三・四) オリオン座ステーション	

(三・四) オリオン座ステーション	69
(四)	
(四・一) 三人目の客	
(四・一) 三人目の客	77
(四・二) 夢	
(四・二) 夢	83
(四・三) 子犬と少年	
(四・三) 子犬と少年	89
(四・四) 蟹座ステーション	
(四・四) 蟹座ステーション	95
(五)	
(五・一) 四人目の客	
(五・一) 四人目の客	103
(五・二) 夢	
(五・二) 夢	109
(五・三) 子犬と少年	
(五・三) 子犬と少年	115
(五・四) 蠍座ステーション	
(五・四) 蠍座ステーション	121
(六)	
(六・一) 五人目の客	
(六・一) 五人目の客	129
(六・二) 夢	
(六・二) 夢	135
(六・三) 子犬と少年	
(六・三) 子犬と少年	139
(六・四) 乙女座ステーション	
(六・四) 乙女座ステーション	143
(七)	
(七・一) 六人目の客	

(七・一) 六人目の客	151
(七・二) 夢	
(七・二) 夢	157
(七・三) 子犬と少年	
(七・三) 子犬と少年	163
(七・四) 大熊座ステーション	
(七・四) 大熊座ステーション	169
(八)	
(八・一) 七人目の客	
(八・一) 七人目の客	177
(八・二) 夢	
(八・二) 夢	183
(八・三) 子犬と少年	
(八・三) 子犬と少年	187
(八・四) 冥王星ステーション	
(八・四) 冥王星ステーション	193
(九)	
(九・一) 八人目の客	
(九・一) 八人目の客	201
(九・二) 夢	
(九・二) 夢	209
(九・三) 子犬と少年	
(九・三) 子犬と少年	215
(九・四) 土星ステーション	
(九・四) 土星ステーション	221
(十)	
(十・一) Mr霧下	
(十・一) Mr霧下	229
(十・二) 夢	
(十・二) 夢	235

(十・三) 子犬と少年	
(十・三) 子犬と少年	241
(十・四) 木星ステーション	
(十・四) 木星ステーション	247
(十一)	
(十一・一) 拉致監禁	
(十一・一) 拉致監禁	255
(十一・二) お化け屋敷	
(十一・二) お化け屋敷	261
(十一・三) 夢	
(十一・三) 夢	267
(十一・四) ゴロ助	
(十一・四) ゴロ助	271
(十一・五) お雪さん	
(十一・五) お雪さん	279
(十一・六) 弁天川	
(十一・六) 弁天川	285
(十一・七) 火星ステーション	
(十一・七) 火星ステーション	291
(十二)	
(十二・一) 柿の実	
(十二・一) 柿の実	299
(十二・二) 夢そして救世主	
(十二・二) 夢そして救世主	305
(十二・三) パンデミック	
(十二・三) パンデミック	313
(十二・四) 子犬と少年	
(十二・四) 子犬と少年	317
(十二・五) 狂った宴	
(十二・五) 狂った宴	323

(十二・六) ムーンステーション	
(十二・六) ムーンステーション	329
(十三)	
(十三・一) 第三惑星 Yoshiwara ステーション	
(十三・一) 第三惑星 Yoshiwara ステーション	337
(十三・二) エデンの東	
(十三・二) エデンの東	343
(十三・三) 救世主	
(十三・三) 救世主	349
終わりに	
終わりに	355

(序)

(序)

桜毒(おうどく)

桜毒トレポネーマの感染によって生ずる性感染症である。症状は梅毒と同様であるが、全身に桜色の発疹が見られるのが特徴で、細菌名並びに病名はこれに由来する。感染後早くも数日、遅くとも半月以内という短期間にて抗体の産生と共に発症する。よって発症以前に感染の有無を発見即ち検査することは不可能であり、発症するや直ちに死に至る未だ治療法の存在しない不治の病である。世界のいずこかで既にワクチンが密かに開発されているとの未確認情報もあるにはあるが、真偽のほどは定かでない。

現在までに唯一日本でのみ発症が確認されており、第一の発生から既に十八年が経過、その間の発症累計は僅かに百例を数える程度である。検査が不可能であることから一時は日本国内、特に性風俗産業に混乱と打撃とを与えたが、近年発症数が減少しており、既に過去の性病として忘れ去られつつあった。

(→)

(一・一) イヴ

(一・一) イヴ

ここは夜、夜の世界。夜でなければ或いは罪悪を犯さねば存在し得ない街、今日そして嘗て吉原と呼ばれた、あたかも丸でひとつの村か集落の如き夜の華。

世界は夜、未だ世界は夜の闇に覆われたまま、ここ吉原のネオンが夜の巷に妖しく瞬き続く間、世界は夜によって支配され、いつ果てるともない魔物の呼吸を営み、その積み重ねたる人類の罪の清算をば為すこともなく、日々この夜の世界のひとつの宇宙駅(ステーション)として、あたかも魔物の心臓の鼓動の如くここ吉原のネオンは瞬き続け、瞬き続くことが何よりこの世が夜であることの証明であり、従って夜と共にこの瞬きもやがて訪れる世界の夜明けの前に、滅亡し夢の如く潰えることは、宇宙全体の必定である。

十二月二十四日言わずと知れたるクリスマスイヴのその正にイヴの入り口即ち夕暮れ時、粉雪の降り始めたここ吉原の地に、何故かその重き荷ともいうべき吉原滅亡の使命を背負いて、今ひとりの少女が降臨する。故に少女は絶世美少女であらねばならず、また事実そうである。少女は胸に真紅の薔薇の花束をいだき、湿ったアスファルトに響く履き慣れぬハイヒールの靴音に今にも転げそうな危うさを秘めながらも、派手なネオンの華咲く中心区画から遠く離れた場末にひっそりと身を置く一棟の細長い古びた雑居ビルの前に辿り着く。

そのビルの四階に位置する一軒のソーブランドこそが、少女が救世主の裁きをば待つ待合室である。店の看板に点るネオンの文字は『エデンの東』、僅か昨日まで確かに『エデンの園』であった店名、ネオン看板の文字を急遽『園』から『東』に変更したるは、ふたつの理由からである。

ひとつは、既に七十幾歳という高齢の老婆である店主お節の悲嘆から。一体如何なる悲嘆であるか、その訳は今ビルの前に佇む少女にある。この少女、実はお節の一人娘であると共に、今宵よりエデンの東にて働き出す新入りのソーブランド嬢でもある。誰とて手塩に掛け育て上げた愛しき娘が売春婦になるなど、これ程耐え難きものはあるまい。たとえ自らが若い頃よりソーブランド嬢として各地を転々とした末、ここ吉原の片隅に店を構えて幾数十年今日まで細々と営んできた、ソーブランド一筋のお節とて同様である。

加えてもうひとつ改名の理由、それはエデンの東という名称になすことを少女が深く熱望したからである。されどその理由を少女は明かさない。

「えでんのひがし」

降り続く粉雪の白さに濡れながら、看板のネオンの文字をしみじみと見上げる少女の息が白く凍り付き、ネオン街の夜気へと上昇し消えてゆく。お節は苦そうに吸い込んだ

ハイライトの煙を丸でため息の如くふうっと吐き出しながら、店のガラス窓の曇りをその手で大きく拭き消すと、ビルの前に突っ立っている我が娘に気付く。

「何してんの雪、風邪引くでえ」

がばっつと店のサッシを開けるや顔を下に向け、怒鳴るように少女を呼ぶ。

雪。少女の名である、しかし本名ではない。雪の本名を知る者は誰もいない、雪本人も母親であるお節でさえも。それどころか嘗てほんの一瞬でも、雪に本名が付されたことがあったかどうかすら定かではない。十八歳、一週間前まで名門私立ゴルゴダの丘高校の可憐なブレザーの制服に身を包む女子高生だった雪は、自らの意志により中途退学を果たしここエデンの東にて働くことを決意した。

「ほな、またな。お雪さん」

雪は名残惜しそうに粉雪に別れを告げると、窓辺のお節に手を振りながらビルの中へと入ってゆく。お雪さんとは、雪が、降る雪に向かって語り掛ける呼び方である。自分の名が雪である故、区別するようにそう名付け呼んでいる。口癖であり、雪の秘密のひとつでもある。

雪はビルのエレベータに乗り、お節の待つエデンの東の玄関へ。宵の入り口、まだ客はない。

「ママ」

幼さすら残る声を発し、雪はお節と抱擁する。

「ま、兎に角事務所行こ、な」

お節は雪の肩に腕を置いたまま、自らの常駐する室へと連れてゆく。

「何や、その薔薇」

雪が胸にいだく花束。

「この店地味やろ、玄関に飾ったらええ思て」

「何言うてんの、飾るて花瓶もないのに」

仕方なさそうに花束を受け取るお節。

「そんなことより、先ずあんた名前どうすんの」

源氏名を問うお節。

「雪、でええよ」

事務所の窓辺に佇む雪、ブラインドの隙間から見える外はまだ粉雪。

「雪、でええて、んなあほな」

べっとり塗った口紅が歪む、苦笑いのお節。

「ま、あんたが言うならしゃないな」

案外容易く引き下がる。

「それからな、ママ」

「何やの」

「雪はな、一晚にお客さん一人でええねん」

またも仰天するお節。

「何のこっちゃ、たった一人かいな」

頷く雪。

「そんなん、商売にならへん。幾ら自分の娘いうても、甘やかす訳いかへんで」

「分かってる。その代わりな」

「その代わり何やねん」

「料金たこ目にすんねん」

「なんぼや」

雪を見詰めるお節、答える雪。

「百万」

「ひゃあくまん」

聴いて吃驚、我が耳を疑うというか鼻でせせら笑うお節、そやから小娘は困んねな、まったく世間知らずいうか、このあほ。

「あんた、この商売舐めてんの」

「けど雪のこと、一晩中好きにしてえんやで」

はあ、まだ言うてんの。

「そら、そんだけ大金出すなら、殿方も一晩中楽しませてもらわな、元取れんわな」

しかしお節、ここで内心しめしめとほくそ笑む。未だに雪をソープ嬢になどしたくないお節としては願ったり叶ったり。確かに美少女なのは認める、けど自分に一晩百万もの値が付くなど本気で思っているならお目出度い。そんな奇特な客など百年経っても現れる筈なからうから、実質ソープ嬢ではない。そのうち、ちっとも客来いへんなあ、なんかあほらし、止一めた、と堅気に戻ってくれたらしめたもの。

「ま、あんたが言うなら、好きにしたらええわ」

これまたあっさりとして認めてしまうお節。

「有難う、ママ」

思いのほか簡単に希望叶って雪はにっこり、母親のお節でさえぞくっとする程の笑みを零す。ほんまええ女になったな、とても十八とは思えん、この天使みたいな清純さと大人の色気を兼ね備えた絶世美少女振り、正に魔性の女や、たまらんわ。まさか冗談抜きで、ほんま客付いたりせんやろな。そやかて百万円やろ、まさかまさかとは思うけど。一抹の不安を覚えなくてもないお節ではある。

エデンの東には、今二人のいる事務所の隣りにソープ嬢たちの控え室、その隣りに客の待合室がある。後は商売用の個室が九つ並び、女に飢えた寂しき殿方の訪れをば夜毎今か今かと待ち侘びている。改めて店内を見渡すと、雪が指摘した如く確かに地味、辛気臭い。早速お節は知り合いに頼んで豪華絢爛たる花瓶を取り寄せ、玄関に真紅の薔薇を飾る。その後もお節は花を絶やさぬようにと、定期的に季節の花を玄関に飾るようになり、いつしか花を愛でる喜びを知る。

「ほな、雪、今から商売始めるで」

「何処行くの」

「控え室に決まってるやない」

おっ、そりゃそうや。

「待って」

焦って雪を止めるお節。大事な娘が店のソープ嬢たちにまみれ、俗っぼさなんぞうつされては敵わん、どないしょ。悩んだお節は仕方なく、個室のひとつを雪専用の部屋にすることに。どうせ客なんぞ来いへんやろ、ちょっとの間の辛抱や。そこで雪は玄関か

ら一番奥に位置する九番目の個室を選び、そこを自らの仕事場兼控え室とする。更に雪はその部屋を密かに『宇宙駅』と名付ける。こうして一晩百万円するソープ嬢雪と、雪の宇宙駅の誕生である。

その夜から早速雪は宇宙駅にてただひたすら待ち侘びる、一晩百万円という法外な料金を支払う奇特な客を、待つて待つて待ち続ける。クリスマスの二十五日、その後の二十六日、二十七日と日は流れ、結局誰一人客のないまま宇宙駅は大晦日を迎える。雪は宇宙駅がすっかり気に入って、とうとう自宅へも帰らず宇宙駅で暮らすようになる。こうして雪は、二十四時間宇宙駅で待ち続ける。唯一の愛読書である新約聖書を片手に、この罪深き吉原の地へと降臨する救世主と最後の審判とを人知れず待ち望みながら。

さて大晦日除夜の鐘の鳴りし頃、トントンと宇宙駅のドアをノックする者有り。こんな時間に一体誰や、うたた寝に漂いし雪は飛び起きて、ドアを開けるとそこにはお節。

「何や、ママかいな、驚かさんといて」

「ママで悪かったな、あんた何してんの。はよう家帰ろや、正月やで」

あっさり従うかと思えば然にあらざ、雪はかぶりを振る。

「御免なママ、雪もうこっから離れられへん」

「何でえ」

「実はな、ある御方と約束してん。ここで待つてますさかい、いつでもお越し下さいて」

ある御方、はて誰やろ、まさかお客とちゃうやろな。心配のお節は雪を問い詰める。

「いつでもて、誰やそれ、男か」

「ま、そんなとこ」

「そんなとこて、もしかして客か」

恐る恐る確かめるお節、けど、

「ちゃう、ちゃう」

「なら、ボーイフレンドか」

「ん、まあそんなとこやな」

「ほお、ええ男か」

「分からん」

「分からんて。でもま、それならしゃないな」

ここでもお節はあっさりと引き下がり、

「なあ、気付けてな」

雪をひとり残し、エデンの東を後にする。

(一・二) ゼロステーション

(一・二) ゼロステーション

お節が去り再び宇宙駅にひとり、というかエデンの東自体店仕舞いの為、店内にひとり取り残された雪である。今や誰ひとり雪を邪魔する者はいない、雪は宇宙駅の中でじっと目を瞑る。目を瞑り耳を澄ませ、宇宙の遙かを思いやる。今遙か遠い宇宙の彼方より、無限なる星々の煌めきと無の如き闇の中をただひたすらに、この銀河系太陽系第三惑星そして Yoshiwara 駅をば目指し来る救世主を思って止まない。

今は宇宙のどの辺りやろか、いつ雪の前に現れ来て下さるやろか、閉じた瞳に耳に五感のすべてに夢に、雪は感じられる気がしてならない。救世主と名乗ったその御方が恐らくは乗船されたる未確認飛行物体いわゆる宇宙船の姿や、宇宙の海を渡りてこの銀河系へと高速なれど宇宙からすれば僅かな距離でしかない速度にてゆっくりゆっくりと接近するその運転音や、宇宙船の窓から見渡せる壮大なる宇宙の眺めをば、ため息と共に感じずにいられない。

雪は空想する、十八歳の夢見る少女に帰って。星々の煌めき、爆発し宇宙の藻屑と化する星、新しく生まれくる星、ぶつかり合い合体する星、分裂する星。幾数千万億の星々が群れなし宇宙の中に無数の海を形成し、各々の海に於いては星々の暮らしが営まれ、星々の生命のノイズは潮騒となって宇宙の波打ち際へと押し寄せ、打ち寄せては引いてゆく。その壮大無限なる波音に混じって聴こえる宇宙船内の乗組員たちの会話、やり取り、宇宙の中に点在する宇宙駅との交信電波のノイズまたノイズ……。

ピポピポピー、こちらはメシヤ567号。この宇宙を不完全なるままに産み落としたもうた完全なる虚無或いはゼロステーションに告ぐ、応答願います、ピポピポピー。

バビブベブー、こちらはゼロステーション。メシヤ567号に告ぐ、汝如何なる理由に於いて、この禁断のゼロステーションをば通過せんとするや、至急返答致されよ。さもなくば汝らを永久の無に帰する所存である、覚悟致され、バビブベブー。

ピポピポピー、こちらはメシヤ567号。我らは銀河系太陽系第三惑星の地に Yoshiwara なる罪深き汚れたる街有りとの通報を受け、今調査に向かわんとするところ。彼の地は現在雪なる少女並びに多数の売春婦の犠牲の下に成り立っておりまして、我々直ちに彼の星へと向かい、裁き即ち最後の審判をば下したく願う次第。何卒ゼロステーションの通過をばお許し下さいませませ、ピポピポピー。

バビブペブー、こちらはゼロステーション。なーるほど、救世のお役目御苦労さん。了解了解、それでは無限なる無、如何なる拘束からも断ち切られたる自由の理想郷であるところの無の世界より、有限且つ時空間制約並びに物質的現象的限界に支配されたる有の世界へと墮落せん為の変換径路即ちゼロステーションの通過をば許可致す。良き旅を、バビブペブー。

ザヴザヴシュワー、ザヴザヴシュワー、海の波音のようなノイズに掻き消されたかと思うと交信は途絶え、後は沈黙の宇宙へと沈む。

一方視線を宇宙船内に移せば、壁にずらり幾数千万とも数えるTVモニタが所狭しと並んでいる。何が映っているかといえば、宇宙に存在する各宇宙ステーションの映像である。宇宙の中の要所要所に宇宙ステーションを配置し、そこをチェックすることで宇宙全体を監視するという仕組み。こうして救世主は常に宇宙を見守っているという訳、流石救世主、御苦労さん。

そのモニタ群の中央に何やら見覚えのある映像が流れており、それこそがYoshiwara駅である。銀河系太陽系第三惑星その中の日本の東の都、東京都台東区千束町に存在するという夜と悪の世の仇華、第三惑星人が犯し続ける売春という重き罪と悲しき歴史をば一身に背負いたる魔物巢食う街。ただそれだけの街ならば、ただそれ故にやがて散りゆかねばならぬのは、夜の明けと共に夜が滅び去るが如き宇宙の定めというもの。

とは言いつつも何か気になる、何かが我が心に引っ掛かるのは何故か。Yoshiwara駅のモニタ画面をじっと見詰めながら、思案に暮れる救世主。例えばYoshiwara駅にネオンライトが点り出す夕暮れ時の切なさやら人恋しさ、それから明け方のネオン消えたる街の片隅を餌を探して宛てもなく彷徨う野良猫の侘しさなど、数え上げれば切りなき程の生きる命のいとしさがそこ彼処に詰まっているのではあるまいか。それに顧みすれば、そもそも売春とは罪なりか、必要悪ではあるまいか。うーむ、まだまだ検討の余地ありき。それらを見捨て目を瞑ってまでして、我は彼の地を滅ぼすべしや。

こうして今宵も救世主は途方に暮れる。まだ時間ならある、まだもう少しじっくりと観察してみよう、夜の華咲くYoshiwaraの街を。その為にも我はもっと、第三惑星人の喜怒哀楽をば理解せねばなるまい。

視界をモニタ画面から宇宙船の窓へと戻せば、そこにはただひたすら続く星々の煌めきが広がるばかり。銀河系太陽系へと向かう遙かなる航海は今正に始まったばかり、宇宙船の旅はまだまだ果てしなく続くのであった、ピポピポピー、ピポピポ……ザヴザヴシュワー、ザヴザヴシュワー……。

ふっと雪の空想が途絶える。目を開けた雪の目の前、宇宙駅の窓から見える暗い夜空

に何か小さく光る、しかもふたつ。ふたつの光はそのまますーっと地上の何処へとも
知れず流れ落ちて消える。粉雪の欠片かそれとも流星。

「何やろなあ」

ため息混じりに零す雪。されど粉雪でないことは直ぐに分かる、なぜならはじめから
雪など降っていない。ならば流れ星。

「しもた、願い事すんの忘れた」

ふわあっと大きく欠伸すると、そのまま眠りに落ちる雪。雪の願い事、それは最後の
審判即ち人類滅亡に他ならない。

(\rightleftarrows)

(二・一) 一人目の客

(二・一) 一人目の客

年の始め、お節はエデンの東の玄関に梅の花を飾る。雪は雪で年が明けても相変わらず、宇宙駅にてただひたすら待ち続ける、救世主を或いはお客を。

雪と遊ぶ為には百万円という高額な料金を払わねばならないが、この他にお節は変な客が付かないようにと雪には内緒で勝手にある条件を付す、それは変態プレイの禁止である。

「はあ、何ばかなことぬかしてやんだよ。じゃ何かい百万も払わされて、おまけにてめえのやりたいプレイも楽しめねえってか、んなあほな」

そんな客の不満が聴こえそうであるが、お節は毅然としてこう答えるのである。

「手前共の雪はひとつの芸術品でおます、芸術作品詰まりアート。汚したり傷つけたりはご法度中のご法度でっせ」

これで折角百万払おうって客も、大方白けて退散である。こうなればお節としてはしめしめ。

てな訳で年が変わっても、一向に客は現れない。満を持してお節は雪を説得する。

「なあ、あんた、もういい加減飽きたやろ。この商売どの道あんたにゃ向いてへんちゅうこっちゃ。な、とっとと止めよや」

「ん、そうかもしれへんなあ」

雪の心も揺らぎ出す。ところがその矢先、遂に一人の客が現れる。百万円もOK、変態プレイもなしで結構。ありゃりゃ、お節は仕方なく、その男を宇宙駅へと案内する。

トントンと宇宙駅のドアを叩いて、お節が連れて来た客、その名は三上哲雄、五十五歳。関東を縄張りとする広域指定暴力団三上組十三代組長である。三上は無類の女好き、遊んだ女数はざっと一万人は下らないという性豪。殆ど毎晩のように吉原を遊び歩いているから、吉原の遊女で三上が寝たことのない女はいないという強者。

そんな三上が風の噂に雪のことを小耳に挟んだから、じっとしてられない。宿敵麦山会との血で血を洗う死闘を無事潜り抜けた自分たちへのご褒美と、その足でエデンの東を訪ねた三上組御一行。下っ端共にはとっとと安い女をあてがい、自分はお節と交渉を済ませ今、のこのこと雪のいる宇宙駅のドアの前。

「あんた、お客さん連れて来たで。後はよろしゅう頼むわ」

三上を残して立ち去るお節は泣きっ面、遂に我が娘、手塩にかけたいとしい雪が自分と同じ娼婦の道を歩むなんて、しかもあんな野獣のような男の玩具にされ汚されるなんて、ああ情けないやら泣きたいやら。そんな気持ちをぐっと抑えて、諦める。

「ま、しゃないな」

で雪。宇宙駅にてひたすら待ってはいたものの、いざ実際に客が現れるとすっかり怖気づく。そこは十八の小娘、まじかいな、どないしょ。おっかな吃驚宇宙駅のドアを開

けると、そこにはごっつい如何にもやくざ風というか正真正銘やくざのおっちゃん三上。ほんまお客さんや、間違っても救世主ちゃうわな、初っ端からこんなかい、たまらんわ雪。

でも自分から決めたこと、今更撤回する訳にもいかない。ここはもう腹を括るしかあらへんと気持ちを奮い立たせ、

「いらっしゃい」

にこっと笑って三上を宇宙駅へと招き入れる。

さて、いよいよプレイ開始かと思えば然にらず、実はもう一つここで客としての条件、最終且つ最重要なる秘密の関門てのがあり、それをクリアして初めて雪と遊べるのである。丸で注文の多い料理店、でその条件とは何か。この雪なる少女、多重人格などでは決してないが、実は得体の知れない何者かが取り憑いているのか時より彼女の内部で声を発するのである。条件とは雪が客と対面した時、その声がこう叫べば良し。どう叫べば『こいつをころして』と。雪はこの内なる声に対しても、お雪さんと名付け呼んでいる。

然して宇宙駅にて三上と対面した瞬間、雪の内部で呻くが如き声がある。間違いなくお雪さんが『こいつをころして』と叫んだのである。こうして遂に雪初めてのお客の登場と相成った訳である。

損なこととは露知らず、三上は雪を一目見るなりぞっこん。何だこの絶世美少女は。こんないい女今迄お目に掛かったことない、こりゃ流石上玉、百万でも安い位や。すっかり乗り乗りの三上組長、鼻息も荒く、柄にもなくにこっと微笑んで甘ったるい声。

「ねーちゃん、幾つ」

「十八」

「処女か」

「ちゃう」

「な訳ないなあ」

にたにたと一人上機嫌の三上。

「話によると、店主の婆さんの娘だと」

頷く雪。

「ちっとも似てねえな」

すると、

「捨て子やねん、雪」

あっさりと告げる雪。

「捨て子、ほう」

「ママが拾って育ててくれてん」

「ママてあの婆さんか、大したもんやなあ」

まっ、でもそんなこた、この際どうでもええと三上組長、さあさっさとその十八の生娘のナイスパディを堪能させるとばかり、雪の上着、下着をむしり取る。

「あーら、止めてえ」

雪の声も空しく、てめえもさっさとすっぽんぽんになり、行き成り雪の唇をば奪わんとするエロおやじ。その背中一面には流石お見事、豪華絢爛たる唐獅子牡丹やら鬼、龍

神さんやらが所狭しと踊っている。

しかしここで雪、蛸入道の如き三上の唇をか弱きその掌で懸命に押さえつつ、

「な、お客さん、ちょっと待って」

「何だシャワーか、そんなもん要らん。若い娘の匂いを嗅がせろ、その方が興奮倍増だ」

「ちゃうちゃう、そんなんちごうて」

「じゃ何だ今更、邪魔すんな」

水を差され、幼子の如く不貞腐れの三上組長。そこで雪。

「実はな、大事な話があんねん」

三上の耳元にひそひそ囁く。

「うふっ、こそばゆい。ここ弱いわし、止めてくれ。何だ大事な話で、勿体振らずにさっさと喋れ」

「分かってる。落ち着いて、よう聞いてや」

雪は改まり正直に告げる、言わば客への警告である。

警告。それは、

「実はな、言い難い話やねんけど、雪と寝たら、もしかしたら」

「もしかしたら、何だ」

雪の神妙な顔付きに、ぞくぞくっと悪い胸騒ぎの三上。

「ん、お客さん、死ぬかもしれへんで」

「はあ、何だ行き成り、今度は脅しか」

呆れ顔の組長。

「やれ百万出せ、変態プレイはご法度だ何だとさっきからさんざ御託並べといて、仕舞いにゃ私病気ですってか。ざけんな、この尼、こん畜生。こちとら忙しい身、てめえみたいな暇人に付き合っただけいらんねんだよ」

組長の怒りも御尤も。そこで雪は丁寧に、

「まあ興奮せんと、病気ちゃうから」

「病気じゃねえ、ほんとか」

「ほんま、病院の検査は全部陰性やねん、ほれ」

雪は、診断書を見せ医学的に潔白を証明する。

「じゃどういうこった。てめえさっき死ぬて、はっきりそう言っただろ」

「そやから雪も困ってんねん。雪自身は何も問題あらへん筈やのに、何でかな」

そこまで言うと再び三上の耳元に唇を近付け、ぼそぼそと、

「雪と関係した男、みんな死んでまうねん」

「だから、おめえが病気でもないのに、何で相手の男が死ぬんだよ。頭大丈夫か」

そこで雪は自らの秘密を告白する。今迄自分と関係を持った男、といってもその数は僅かであるが、はみんなその後必ず或る感染症となり、半月の内に一人残らず死亡してしまった、ということ。その感染症とは、桜毒である。

「桜毒か、そら厄介だな」

性豪だけあって性感染症にも詳しい、流石の三上も気が引ける。腕を組み、

「うーん」

考え込んで、けれど直ぐに閃く。

「あれっ、でも妙な話じゃねえか」

「何が」

「だからよ、もしおめえが原因だってなら、おめえが感染源詰まり桜毒ってこったろ」

「そやから不思議やねん」

「いーか、桜毒というのは感染すると半月もしたらみんな死んでしまうもんや。だったらおめえだって、とっくの昔にあの世行ってる筈じゃねんか」

「そらそやろ」

「また可愛い顔ですっとぼけやがって蝟。てめえがこうしてピンピンしてるってこた、てめえが桜毒でないって何よりの証拠じゃねえか、あほ」

「ま、そやけど」

「まーた、兎に角な一んも問題なし。ていうか作り話なんだろ最初っから。な怒らねえから白状しろ」

でも雪は必死にかぶりを振る。

「ちゃうちゃう、嘘ちゃうて。ほんまのこっちゃん信じて」

真剣な雪の眼差しに、

「分かった、分かった。だったら単なる偶然ってやつだろ。な、もうそんなに心配すんな。こちとら今迄世界中の女を相手にしてきた三上組組長様だ。中にゃ確かに病気の女もいたけど、ほれこの通り未だにピンピンしてるだろ、ピンピンのついでにピンピンだぜ。この三上様に限って今更桜毒で死ぬなんてこた有り得ねえ」

「けどお」

「よし、そうと決まりゃ、善は急げだ」

「けど、ほんま知らんよ、雪ちゃんと警告したからな。もし死んでも恨まんといてや」
念を押す雪。

「ああ、わしが全部責任持つ。もう我慢の限界や。さあ、さっさと楽しませろ」

言うが早いか、有無を言わず目の前の甘い果実、雪のナイスバディにむしゃぶり付く三上。

「うう、やっぱ若いおなごはええなあ。活きが違う、匂いもちごとのよ」

その時お雪さんが、雪の心の中で再び叫ぶ。

『こいつをころして』

如何にも悲痛な声である。

後は性欲絶倫、野獣のような三上の攻めに、小娘の雪は一溜まりもない。組んず解れつ、終始ひーひー身悶えながら、何とか無事初仕事を終える。三上は一晩中雪の若い肉体をば弄び、思う存分味わい尽くして、

「もういつ死んでもええぞーっ」

絶叫しながら果てる。

「お前は本当にいい女や、百年に一人の絶世美少女だ」

三上はぼんと百万円を払い、

「わしの女になれ」

「いやや、雪にはいい人おんねん」

といっても、救世主のこと。

「そうか、じゃしゃないな。また来月来るから」

そう言い残し、夜が明ける前に三上は宇宙駅を後にする。

ひとり宇宙駅に残された雪、一晚玩具にされた体はあちこち痛いし、何より眠い。三上の唾液やら体液やらにまみれた体をさあっとシャワーで洗い清めると、そのまま眠りへと落ちてゆく。生涯で初めての売春で精魂尽き果てたか、雪は死人の如く丸一日深い眠りを貪るのである。

(二・二) 夢

(二・二) 夢

眠りに落ちると、雪はいつも夢を見る。しかも決まって過去の回想である。過ぎ去った日々、忘却した記憶、記憶にさえならなかった遠い過去の欠片。お節が幼年期の雪について語る時、決まって零す台詞がある。

「あんたは一度も泣かへんかった。ほんま変わった子やったわ」

確かに雪は物心ついてから、自分でも泣いた覚えがない、泣いた記憶が一切ない。だからといって体内に涙が存在しないという訳では勿論ない。雪の涙はちゃんと雪の瞳を覆い、雪の視線をきらきらと輝かせ時に色っぽく時に哀愁帯びて男たちの心をくすぐるのである。ただ瞼から外界へと溢れ出し、零れ落ちて来ないだけであり、それは雪が意識的に我慢しているというでもない。

お節は雪がまだ子供だった頃、雪の頬っぺたをつねりながら、からかい半分良くこう語ったものである。

「涙が外に出へんその分、あんたの悲しみはあんたの中に蓄積され、それがあんたの美貌へと化けるんやろな」

かくしてお節の説に従えば、絶世美少女雪は悲しみによって造形されたということになる。

さて前置きはこの位にしておいて雪の見る夢に話を戻すと、その夢はいつも決まって降り頻る雪の景色から始まる。夜明け前、何処とも知れない街にただ絶え間なく深々と人知れず降り続く雪また雪……。

どきどき、どきどきっ。幾ら降ろうとも降る雪の音は限りなく無音、その静寂の中で少女即ち雪は、誰かの鼓動を聴いている。どきどき、どきどきっと確かに誰かの、それはお節ではない別の女の。少女はその女のお腹の中において即ち懐妊であり母胎、女が感じるもの、そのすべてを少女もまた感じている。しかしそれは胎児にとって、決して歓迎すべきものではない。

恐怖、戦慄、暴力、責め苦、出血、失神、嘔吐、空腹、痛み、痒み、不快、汚辱、傷み、怒り、諦め、虚無。女を取り囲む複数の男たちの罵声と嘲笑、男たちから発射され女の体中に付着したどろどろの体液、或いは血管に刺さった不衛生極まりない注射針から注入された後血液によって体内を循環し人格を破壊し尽くす薬物、局部へと挿入された異物、大人の玩具の冷たいモーター音、鞭、蠟燭、縄、鎖、手錠、飛び散ったアルコール類の瓶の破片……。プライドも生命の尊厳も人間性もずたずたに引き裂かれ、そんな類の言葉など何の意味も成さないのだと悟らされてしまう程の極限状態に於ける、そしてかなしみ、絶望。

どきどき、どきどきっ。それでも鳴り止まない鼓動と共に、女の心の叫びが一切の障害物を排し少女へと伝わってくる。ぜいぜい、ぜいぜい、動物的な呻き声と共に絶え間

なく少女の心に突き刺さる、まだこの世に誕生さえしていない少女へと。女の叫びはこう懇願している、女の心の奥底からの叫びは、

『だれか、こいつらをころして』

少女は女へと問う。こいつら、とはだれですか。だれか、とはわたしのことですか。けれど女に少女の問い、まだ声にすら成り得ない少女の問いが届く筈もない。どれほど少女が女の叫びに負けぬ程絶叫しようとも、それは届かない。どれほど、こいつらとはだれですか、だれかとはわたし、どれほど絶叫……。

ふっと目を覚ます雪。目が覚めて、ああ、またあの夢を見てしまったと胸が痛む。夢のすべては既に失われ雪の脳裏から消え去っても、あの言葉だけははっきりと甦る。どきどき、どきどき、夢の中の女の鼓動と共に『だれか、こいつらをころして』と。

月が替わる前、宇宙駅のドアを叩き血相を変えお節が知らせに来る。

「あんた、えらいこっちゃ」

「どないしたんママ、顔色悪いで」

「あんたのこないだの、初めての客なあ」

「ん、あの極道のおっちゃんやろ。それがどないしたん」

「聴いて吃驚すなや」

「何、勿体振ってんの」

そこで、お節はぼそり。

「死んだらしいで」

ええっと吃驚するかと思いきやところがどっこい、雪は冷静、顔色ひとつ変えない。ただため息混じりに、

「ほうか。あーあ、ええお客さんやったのにな」

雪の反応に逆に吃驚のお節。

「それだけかい」

如何にも不満げにむっとする。しかしそれも束の間、

「でも死んだもんはしゃないな。さ、こちとら商売、商売」

あっさり宇宙駅を後にするお節。

なぜお節が三上の死を知り得たか、理由は簡単。何しろ吉原界限でも超有名人である名物組長の三上のこと、その死は風の噂に何処からともなく伝わり、あっという間に吉原全体に知れ渡ったという具合。三上の死は、あちこちの店でセンセーショナルに語られたのである。

「まだ若いのに、勿体ねえな」

「気前も面倒見もええ、色男だったのに」

「あたいも、一度は抱かれてみたかった」

「で死因は何だい、やっぱ殺されたのか」

「周りは敵だらけ、いつ命を狙われてもおかしくないお方だよ」

「自業自得さ。墓穴を掘ったか、罰が当たったか、因果応報。桑原桑原」

三上の死の原因についてはまことしやかに噂が飛び交いつつも、真相を知る者は本人と関係者に限られ、それを知る者は固く口を閉ざす。警察も騒ぎの拡大を恐れたか、余計な口出しはしない。その中で誰が言ったか三上の死因は桜毒だったのだ、という噂も興味本位に流れるには流れたけれど、仮にもしそうであれば感染症法に基づき担当医によって保健所に届出がなされていない筈であるが、現状その様な報告は聞かない。その内人の噂も何とやら、いつしか風化し吉原で三上のことを口にする者もいなくなり、三上もその死もやがて忘れ去られるのみである。

(二・三) 子犬と少年

(二・三) 子犬と少年

三上組長の死の知らせを聞いた日の晩、雪は宇宙駅の窓から再びきらきらと光るものを目にする。光はふたつ、しかも夜空ではなく、吉原のネオンの波を越えたこの地上の何処か近くで瞬いているふうに見える。更にはそれらが仄かではあるけれど、ずっと点り続けていて消えそうにない。

不思議に思いながら、雪は光に見惚れている。なぜだかその光の明滅が、自分のことを手招きしている気がしてならない。もしかしたら歩いてもゆける距離ではないやろか。思い立った雪は宇宙駅を後にして、

「ママ、本日雪はもう閉店や」

そうお節に宣言するや、店もビルも飛び出してゆく。

光は建物に遮られ見えねども、雪は導かれるが如く光の方角へと向かう。雪が降り出してもおかしくない真冬の夜の中をミニスカートにコートを羽織り、アスファルトの路地に赤いハイヒールをカタカタッといわせながら白い息吐き吐き吉原のネオンを抜けると、辺りは一気に薄暗くなる。喧騒も途絶え、代わりに絶え間なく続く静かな音が聴こえ来る、川のせせらぎである。川、その川の名を弁天川と言う。

障害物である建造物の連なりが消え、再びふたつの光が視界に現れる、どうやら弁天川の方角より瞬いているらしい。川岸か、それとも川の中か。光の明滅に合わせる如く、どきどき、どきどきと鼓動を高鳴らせ、雪は弁天川へと足を向ける。川も岸辺も今は真冬、鳴く虫の声もなく、植物とて色鮮やかなる花々はとうに枯れ、僅かに色褪せた雑草が木枯らしに錆びた波音を立てるばかり。雪にとって弁天川は、幼い頃より慣れ親しんだ特別な川である。

光を目指し、弁天川の通りに沿って歩き続ける雪。遂に光の直ぐそばまで到達し、光が確かに川岸にあるのを確かめると、一旦雪は河川敷にて足を止める。辺りを見回してみても、誰一人として人影はない。しばし突っ立ったまま息を殺し、じっとふたつの光を見詰める。雪の白い息が漏れ、川の上空に広がる銀河へと上昇し消えてゆく。

ふたつの光は暗い雑草の中であって、丸で蛍の光の如く手を伸ばせば捕まえられそうでならない。しかし雪に見詰められたと同時に、なぜかふたつの光は徐々にその輝きを弱め、終にはすーっと失われてしまう。その代わり残された暗闇の中には、何者かが確かに存在しているようである。ざわざわざわっと、夜の冷たい風に雑草が震えている。

誰やろ、雪は恐る恐る目を凝らす。すると突然、

「ワン」

その場所から犬の鳴き声が発せられ、度肝を抜かれる雪。といっても小さくか細く、弱々しい子犬の声。

「誰、誰かいてんの」

雪が小声で問い掛けると、再び、

「ワン」

今度はさっきより元気やなと思った途端、雑草の中から一匹の子犬が飛び出して来たかと思うと、そのまま勢い良く雪に飛び付く。

「うわあ」

その拍子に子犬を胸に抱いたまま、地面に思い切り尻餅を付く雪。

「あいたた」

痛さと共に、土と湿った雑草の冷たさが瘦せた雪のお尻に沁みる。すると近くから、くすくすくすっと誰かの笑い声。咄嗟に雪は、自分を見ているひとつの影に気付く。子犬を抱いたまま、何しろ子犬はしっかりと雪にしがみ付いているから、雪は直ぐに起き上がり、問い掛ける。

「誰」

「ぼくだよ」

小さく、囁く声が返ってくる。けれど雪に恐れはない、なぜならそこに立っているのは、ひとりの少年だったからである。少年、坊主頭で、冬だというのに上は半袖の白い開襟シャツに下は紺の半ズボン、白のハイソックスと青い運動靴。年の頃は十二歳前後。

弁天川の川沿いに灯る街灯の灰明かりを頼りに、子犬を抱いたままの雪と少年とがしばし見詰め合う。自分をじっと見詰める少年の澄んだ瞳がくすぐったくて、堪え切れずに雪が口を開く。

「何してんの、こんなところで。風邪引くで」

ところが少年は、ぶっきら棒に答えるだけ。

「大丈夫」

しかも雪の呼吸、息はさっきから白く夜気を染めてゆくのに、少年のそれは透明のまま。この子、寒ないの。

「大丈夫や言うても心配や。なあ、誰かいてへんのママとかパパとか」

けれど少年はかぶりを振るばかり。変な子やな、迷子やろか。警察に届けた方が……。一瞬迷い、ぶるぶると首を横に振る雪。いや止めとこ、雪、警察は嫌や。死んだ三上のことを思い出し、警察への拒絶反応が走る。ほなら、どないしょ。

「この犬、きみの」

抱いた子犬を見せる。少年はやっぱりかぶりを振って、ぼそっと、

「ぼくのあと、勝手に付いて来たんだ」

付いて来たて。気付かなかったけれど、子犬は首輪をしていない。今時首輪してへん犬なんて、捨て犬やろか。

「付いて来たて、どっから」

すると少年は嬉しそうに夜空を見上げ、銀河の彼方を指差す。はあっ、やっぱ頭いかれてんちゃう、この子。改めて少年を見詰め、どきっとする雪。何て澄んだ目してんやろ、きらきらと瞬く夜空の銀河みたいや。

この少年、実は不思議なことに何処から来たのか何処に住んでいるのか身寄りはあるのか、何も分からない。分かっているのはただ、年が明ける前の大晦日の夜晩く、突如

子犬と共にここ弁天川のほとりに姿を現したということだけである。雪がそんなことを知る筈もない。

「にいさん、腹減ってんちゃう」

にいさん、雪にそう呼ばれ、ぽっと頬を紅潮させる少年。この時少年の中に、年上の綺麗なお姉さん雪への憧憬、淡い恋心が芽生える。即ち少年の初恋である。

「ぼくなら平気。でも、この子がぺこぺこなんだ」

縋るような眼差しで、雪の胸の子犬を指差す少年。

「ワン」

呼応して鳴くと子犬はすりと雪の腕をすり抜け、地面に着地。少年の足下にじゃれ付く。

「そか、そか。でもどないしょ、にいさん」

思案する雪。

「ほな、これから食べもん買って来るさかい、ここで待ってて。ええ、にいさん」

ぺこんと頷く子犬と少年。かわいい、やっばし子供やな、雪は嬉しくなって駆け出す。息切らしながらカタカタッとハイヒールを鳴らして吉原まで戻ると、コンビニで適当にハム、ソーセージ、少年の為に菓子パンも購入。再び急いで弁天川のほとりへと舞い戻る。

「いた、いた、にいさん」

子犬と少年の前にしゃがみ込んで、早速子犬に食糧を与える雪。少年も雪の隣りにしゃがみ込み、にこにこ雪と二人で子犬を眺める。むしゃむしゃ、むしゃむしゃ、よっぽど空腹だったのか、食ら食する子犬の食欲が止まらない。

「にいさんも食べよ。パンあるで」

けれど少年は黙ったまま、ただにこにこ食事の子犬をじっと見詰めているばかり。

「野良犬やろか、この子。な訳ないな、にいさん。お前捨て犬なん」

まだ食事に夢中の子犬、問い掛けても反応は返ってこない。

「あらら、にいさんら愛想ないな、二人共。そんなんやと、大きゅなって女の子にモテへんで」

笑う雪に、顔まっ赤の少年。もしかしてこの子も捨て子なんちゃうやろか、ふっと閃く雪。そしたら自分と一緒に、しかもこの弁天川で自分が見付けるやて、何ちゅう運命の悪戯やろ、少年に運命を感じる雪。

「な、にいさん。もし帰るとこなかったら、雪とこ来る」

試しに聞いてみる。もう長いこと河原にいるせいですっかり体が冷え、雪の唇は震え気味。どうせ何も返事などしてくれへんやろと高を括っていると、突然少年は立ち上がりさっきそうしたように、嬉しそうに夜空の一点を指差す。

「どないしたん、にいさん」

驚く雪に、少年はこう一言小さく告げる。

「宇宙船」

えっ。

「嘘、いややわ、にいさん。何処」

雪も釣られて立ち上がり夜空を見上げる。けれどそれらしいものは何処にも見当たらず

ない。空にはただ、きらきと星が瞬いているばかり。少年はけれど続けてこう答える。

「今、白鳥座ステーションに停車したよ」

「へ」

息を呑み、雪はまた少年の顔をじっと見詰める。すると無言のうちに少年の瞳が雪に語り掛け、雪は丸で催眠術に掛かった如く少年の瞳の中の銀河或いは空想を共有する。雪は、少年の空想の中へと吸い込まれるのである。

(二・四) 白鳥座ステーション

(二・四) 白鳥座ステーション

ザヴザヴシュワー、ザヴザヴシュワー……我は傷付けり、我が白き翼は底深き傷を負いて羽ばたくことも未だ出来ず、もうかれこれ三千年の昔より銀河を渡ることもままならず、地を這い泥にまみれ来た。いずこより恐らくは太陽系第三惑星辺りから放射されたる邪気、悪気の攻撃に曝され続け、不様にもこの有様なり。飛ぶ夢を奪われ、憎悪の赤き血と罪悪の汚物の中に身を沈めたるまま、我は空しくただ今宵も銀河を見上げたり。救世主はまだか、救世主はいずこ。いつまでも私の絶望を見捨てず、至福の日々を与え給え。

バビブベブー、こちらは白鳥座ステーション。メシヤ567号殿に告ぐ、そなた聞けば太陽系第三惑星へ急がれるとか。ならば今宵ばかりは我が白鳥の翼の中で、安らかに旅の疲れをば癒しなされ。少々傷ある翼なれど、そなたの眠りをお守り致す。何卒第三惑星に行かれたならば、遙かこの白鳥座ステーションにまで及び来る邪気、悪気、その諸悪の根源をば根絶やしに致して下さいよ。以上、バビブベブー。

ピポピポピー、これはこれは白鳥座ステーション殿、痛ましきこと誠に遺憾で御座います、こちらはメシヤ567号。只今救世主は不在にて御免なさい。早速ですが第三惑星の件につきまして、我々は Yoshiwara 駅まで参ります。貴殿の望みに叶いますか分かりませぬが、我々現在彼の星に蔓延したる疾病とも呼ぶべき人身売買、特にも売春について調査中で御座います。

何しろ第三惑星人社会に於いては貨幣制度と銀行なるものが幅を利かせ、悲劇と不幸との諸悪の根源と化しております。かといってこの貨幣制度即ちお金なるものを根絶してしまえばそれで良い世の中になるかと申せば、そうでも御座いません。何しろ第三惑星人の金への依存症たるや凄まじく、金の為なら命も捨てる、金なきは生くるに値せぬ塵芥、命は金で買え、金は命に勝る、とこういった具合。ならば如何にしたら宜しかろうと現在検討の最中、まだまだ旅路はなごう御座いますからして、やがて無事結論即ち救世或いは最後の審判へと辿り着けるものと確信致しております。

さてその Yoshiwara…悪には悪の華栄えるように、夜には夜の花咲く如く、貨幣制度の東の都、即ち Tokyo City の仇華として建設されたる街でありまして、花は花でも腐れ花。如何様に表面をばけばけばしく着飾ってみたところで、そこで働くソープ嬢、風俗嬢らの魂は金の奴隷。残念ながらそこに実るは狂った果実、地にばら撒かれるは悪の種、

性病なるものもこの一種に過ぎません。結局はマフィア共めらが牛耳る悪の森でしかないって訳。それならば迷うことなく、つべこべ申さずとっととぼっさりとすぱーっと一思いに伐採、悪の種をば刈り取れば良からうとお思いなされましようが、一度 Yoshiwara の街の景色をば御覧下され。さすれば私共の躊躇いも御理解頂けるのではないかと存じます。

例えば夕暮れのビルの乱立したる Tokyo の街並みの中に一際鮮やかにネオンの華が咲き始め、そこには第三惑星人や生きものの侘しさ寂しさが弥が上にも醸し出されており、何とも切なく胸詰まる思いに駆られますし、本来ならば夜の Tokyo…渋谷、原宿、六本木なんぞと浮かれながら陽気に華やかに闊歩して然るべき娘たちが、借金漬けの暮らしの中でせせせせとその美しき肉体をば薄汚れた男共へと売ってゆくその憐れさを見るにも聞くにも耐えず、自業自得とは申せ諭うる言葉も見つかりません。日々起こるトラブル、闘争、殺し合い、情死心中等は、三面記事のねたにも事欠かぬ程。またそれにも増して、静かなる夜明けで御座います。あの夜の狂ったような宴も嘘のように消え失せて、僅かに路地を吹く風や、風に揺れる草花や、腹を空かしてうろつく野良の猫共のいるばかりの、まっこと穏やかなる佇まい。昨夜の罪を清めゆくような朝陽の眩しさ清々しさは、矢張りそこにも第三惑星人らの命の息吹きのある証しなりと申さずにはおれません。

それ故つつい私共どう致すべきかと決めかねてしまいますのです。然りとていつまでも放置する訳にも参りませんし、あの我らが絶世美少女にも一步一步と危機が迫っております。おいおい旅路を辿りつつ決断する所存で御座いますれば、もう後残り僅かばかり、ご辛抱、お待ち下さいませませ。

バビブベブー、成る程話は伺いました、こちらは白鳥座ステーション。恐らくは第三惑星を放射線の如く覆う邪気、悪気が、第三惑星人の魂をも飲み込んで、その貨幣制度とやらを私利私欲のみに使っておるのでありましようぞ。貨幣も正しく使えば、何ら問題なし。ではそなたの健闘をば心より祈りつつ、我は再び銀河を飛び回る夢を胸に抱きつつ、この地に座して待っております。

ザヴザヴシュワー、ザヴザヴシュワー、まだまだ終着の Yoshiwara 駅は遙か彼方、宇宙船の旅は続くのである。ピポピポピー、ピポピポ……ザヴザヴシュワー、ザヴザヴシュワー……。

少年の空想が途絶える。雪への催眠術も解ける、けれど雪はじっと少年を見詰めたまま。

「にいさんて誰、何者」

恐る恐る問い掛けたところで、少年の答えが返ってこないことも分かっている。案の定ぼんやりと抜け殻のように夜空を見上げ、少年はただ無言で笑っているばかり。それから突然、

「もうお腹いっぱいなんだね」

見ると、子犬が少年の足にじゃれ付いている。しばし子犬の頭を撫でていた少年の目が再び雪を見詰める時、少年はこぼす。

「子犬のご飯、有難う。でもお姉さんの目、悲しそう」

えっ、いきなし何言い出すの。

「丸で、涙の海だね」

涙の、少年の目をじっと見返す雪。まさか、雪泣いたこともあらへんのに、でも。宇宙船のことといい、少年にはすべて自分のことを見抜かれている気がして、雪は何も言い返せないでいる。更に少年はこう語り、雪を驚嘆させる。

「お姉さんって不思議だね。やさしい人なのに、お姉さんの心は憎しみでいっぱい。それが毒になって、男の人みんな死んでしまうんだ」

ええっ。

「何言うてんの、にいさん。さっぱり訳分からん」

やっど雪が口を開くも、それには答えず少年は悲しげに一頻りかぶりを振ると、

「でもその憎しみが、一体何処から発生するのか、ぼくにはまだ見えないんだ」

その言葉を最後に、少年は子犬を連れ雪の前から何処へともなく歩き去る。後に残された雪は思い出したように寒さに震え、ひとり寂しく宇宙駅へと帰ってゆくのである。

($\vec{\equiv}$)

(三・一) 二人目の客

(三・一) 二人目の客

月が替わりお節は、エデンの東の玄関に椿の花を飾る。寒さは峠を迎え吉原へ足を運ぶ客の勢いは鈍い。エデンの東も同様で、雪も宇宙駅にて暇を持て余す日々。それに雪としては弁天川で会った少年のことばかりがつつい気になって、客どころの騒ぎではない。少年が言い残した言葉の幾つかが思い出されてならない。例えば、宇宙船とか、憎しみが毒になってみんな死んでしまうとか。何であの子そないなこと知ってんの、いやなぜ雪の心を見抜いたんやろ。そもそもあの少年、何者や。

そんな雪だから、自然弁天川へと足が向くのは仕方がない。折角の稼ぎ時の夜だというのに、毎晩せつせと通い詰める。寒さ堪え幾ばくかの食料を携えながら、少年たちと会った同時刻、弁天川の河原で待つ。けれど子犬も少年も一向に現れない。

もう何処か遠い所へ行ってしまったか、それとも誰かに保護されたのか、親の許へ帰ってしまったか。或いはそもそも、あの夜のことはみんな幻だったのではないか、そんな気がしてならない雪である。おかしな夢を見ただけだったのかも知れへん、そう思おうとしてみたところで、未練は尽きない。会えなければ会えない程、会いたくなるのは人の常。雪の関心はいつしか救世主から少年へと移ってゆく。

節分、立春と吉原の街は雪になる。春はまだまだ遠い。吉原の街はただひたすら商売商売、春になり陽気と共に客の勢いが戻るのを待ち侘びるのみ。お節は未だに、雪に普通の娘に戻ってもらいたいと願っている。こないだの三上組長のよう一人でも雪に客が付けば、店としては大きな収益になるけれど、そんなことなどどうでも良い。まだまだ今ならやり直せる、お願い雪ちゃんと、事ある毎に懇願して止まないお節である。

そんなお節と雪の前に、二人目の客が現れる。衆議院議員北聖治六十歳である。北もまた無類の好色。与党幹事長も歴任した大物で以前はちょくちょくTVにも顔を出していたが、TV画面に映るその清潔感漂う紳士然のイメージとは異なり、裏では国会に通う間も惜しんで好き勝手遊びまくっているという噂。

しかしそんな政治家の北がまたなぜ、吉原の場末のけちなソーブランドに在籍する雪という一介のソーブ嬢のことなど知りえたのか。これにはそれなりの訳があった。実は政治家でありながらこの男、あのやくざ故三上組組長の遊び仲間だったのである。どんな因果で顔を合わせお仲間になったものか、その真相は闇の中。知る人ぞ知る、これが裏社会コネクションなのである、だから内緒。

北が最後に三上と会ったのは、先月三上が雪と遊んだ直後のまだ桜毒が発症する前のこと。流石遊び好きの三上の旦那、性懲りもなく六本木のとある摩天楼ビル一室にて開催されたる仮面SMパーティへと赴いた。その席で三上と北のお二人、頭隠してお尻隠さずの穴兄弟、正に裸の付き合いの仲の良さで肩並べ、互いに別の女と相交わりながら

の政治談議ならぬ性事談議に花が咲く。その時三上がついぼろり、そりゃもう自慢げに得意満面笑みを零して雪のことをば口にしたもんだから、北の旦那としたらさあ堪ったもんじゃない。

こうして北、サングラスに付け髭なんて安っぽい変装を施し、のこのこと今夜エデンの東に足を運んだという訳。でも北とて三上の死を知らぬ筈はない。しかし表向き赤の他人の北である故、その死因については知らされていない。ちなみに三上の死についても当然疑ったけれど、何しろ雪自身が未だにピンピンの健康体である以上、雪が桜毒であろう筈がない。従って雪は疑いから免れたという次第。

北にしても三上に負けず劣らずの資産家、庶民からは想像もつかない金持ちである。遊ぶ金に糸目を付けるけちではない。百万の料金も何ら問題なし、変態プレイも駄目なら駄目で良い。

「どうぞ、遊ばせてくれませんか」

丁寧に懇願されては断れない。お節はまたしても苦々しく思いながら、仕方なく北を雪の待つ宇宙駅へと案内する。

「はい、いらっしゃいませ」

宇宙駅のドアを開け、愛想良く二人目の客を迎え入れる雪。その容姿を一目見るなり北、三上同様ぞっこん。その絶世美少女振り、まだ十八のびちびちむちむち、こりゃ堪らん。加えて北はロリコン。まだ仄かに残す幼さも、雪の魅力、強力なる武器である。北のロリコン魂に火を点けない訳がない。北は魔法に掛かったやうにとろーりとろとろ、最早雪の虜。対して雪、北を一目見た瞬間、お雪さんが確かに『こいつをころして』と叫ぶ。これにて北は雪の客としての条件を満たす。

「きみかね、評判の絶世美少女とは。うーん、確かに評判通り、いい女」

警戒してまだ素顔は晒さない北ではあるが、身も心も下半身もうめろめろ、早く雪と交わりたくて我慢がならない。そんな北の姿を内心哀れに思いつつも、雪は甘ったるい声。

「評判で、また。お客さん口上手いんやから」

ちょうど風邪気味で、その声は少ししゃがれたハスキーヴォイス。それがまた男心をくすぐる。

ふう、もうわし堪らんと、北は身に付けた一切を脱ぎ捨て、すっぽんぽん。だから素顔も晒して、生まれたまんまの赤ん坊。すると、

「あれま、どっかで見たことあるう」

北の虚栄心をくすぐる雪。堪らず北。

「どっかで、何処かな」

「んん、ここまで出掛かってんけど」

自らの喉を指差しじらす雪。

「きみ、分からんのかね。このわたしが誰なのか」

北はゴッホんと咳払い。

「誰やろなあ、あれ、もしかして」

首を傾げる雪のその細きうなじ、透き通る白さに、堪らず北は行き成り吸い付くよう

に雪の首に自分の唇を這わす。

「あん。まだ、あかんで、お客さん」

鼻にかかる声も色っぽい、でもしっかりと北の唇を掌で遮る雪。しかし北の理性は既に木っ端微塵。

「わたしはもうそれを我慢出来な一い。金も払うし変なこともしない、だから何も問題ないではないか、さあ早く致そうではないか、きみ」

そこで雪は三上の時と同様、北にも警告を発する。今迄自分と関係を持った男たちはみんな桜毒にて死んでしまったと。勿論診断書も見せ、自らの健康には何ら問題ないことも医学的に証明しつつ、

「そやから雪と遊んだらな、お客さんもあの世行かはるかも知れへんで。それでも構わん言いはるなら、結構でっせ、雪何ぼでもお相手します」

すると北。

「何だって、きみはこのわたしを脅すつもりかね。しかしわたしはそんな脅しには絶対に屈しな一い。なぜならわたしは天下の衆議院議員、北、おっと自己紹介はここまで」

といっても正体は既にばれてはいるけど、ゴホンゴホンと咳払いで誤魔化し、

「兎に角わたしは、きみの脅しには屈しな一い偉い男なのだ。だから、さ遊ば、きみ」

雪が桜毒ではないから安全だとして雪と遊ぶに及んだ故三上組長に比して、いささかおつむが幼稚な北代議士である。

「ま、遊ぶ、遊ばんはお客さんの自由でっけど」

雪も呆れ気味に言い放つ。その商売っ気のないクールな物言いもお高く留まっているふうで、男としては征服欲を掻き立てられる。ミニスカからはち切れんばかりに露なむちむちの太もも、ちらちらと見え隠れする白いパンティも、さっきから北の下半身をずきんずきんと突付いて止まない。

「では何も問題な一し。さ、いざ寝ましょ寝ましょ。夜は短し、恋せよジュニア。先ずはシャワーでわたしのジュニアを」

「なら、しゃない。お相手します」

観念する雪。すると獲物に食らい付く野獣か或いは乳呑み児のように、雪のスレンダーボディに抱き付く北。その時またお雪さんが『こいつをころして』と激しく叫ぶ、雪の目が暗闇の野良猫のその如くざらりと光ったようではない。一見男であり客である北の方があたかも獲物を弄ぶ野獣のように思えるが、その実雪の方が獲物に食らい付き離れない獣のようでもある。己の目的を成し遂げる喜びが獣の全身を満たして止まない。こんな時雪はいつも自分の体が自分のものではない、何か別の何者かに乗っ取られたような感覚でいて、ただ無抵抗操り人形のように従うしかないのである。

こうして北は自らが遊んだようで、実は小娘雪に逆に好きなように弄ばれつつ真冬の一夜を過ごし、時は既に夜明け前。一晚中雪の肉体に遊び、精も根も尽き果てた北は、最早ぼろ雑巾、くたくたに疲労し、迎えの車、公用車を呼ぶ。

「なあ雪よ、わたしの秘書になれ。お手当てははずむぞ」

別れ際真顔で持ち掛ける北に、

「生憎、雪な。この部屋から一步も出られへんの」

「なぜだ、男か」

顔く雪に、

「では仕方がない。また来月必ずや来させてもらうから、待っていてくれ」

そう言い残すと、北は迎えの車に乗り込み、誰にも知られず夜が明けんとする吉原の街を隠密に去ってゆく。

(三・二) 夢

(三・二) 夢

北が去り宇宙駅で一人になると、忽ち強烈な眠気に襲われる雪。北の唾液やら体液やらによって汚された肉体をさーっとシャワーで洗い清めると、さっさとベッドに潜る。直ぐに睡魔が雪を襲う。深い眠りの中へと落ちてゆく雪、眠りの中ではまたいつものように夢を見る。幾度となく繰り返し見る過去を辿る夢。

いつものように夜明け前、何処とも知れない降り頻る雪の景色から始まる夢。どきどき、どきどき、少女はまだその女のお腹の中にいる、どきどき、どきどき……。

暗い、そこは暗黒である。女はひとり、いつも女を取り囲む狂気の男たちも今はいない。その窓一つない牢獄の如き空間の片隅で、今女は束の間の安らかな眠りに身を任せている。或いは意識を失っているのかも知れない。

そこへゴロゴロゴロッ、地響きを立てながら突然の雷鳴が辺りに響き渡る。はっとして女は嫌でも目が覚める。女には見えないが外は深々と降り続く雪、そこへ冬の雷。その時女に異変が起こる。女は、産気付くのである。

けれど既に思考すら奪われた女はそれにすら気付かず、ただその肉体が営むままを受け入れるのみ。かくて誰にも見守られることなく、その暗黒の中で女は体内に宿していた命即ち少女を産み落とす。少女は男たちによって悪戯に傷付けられた女のガラス細工と化した産道を通し、遂にこの現世へと生誕する。

なのに女は自らが出産した自覚すらない故、今産んだばかりの我が子、少女に何ら関心を示すことが出来ない。よって少女は、母であるその女の腕や胸のぬくもりにすら触れる機会を永久に失ってしまう。加えて誰が父親なのか定かでない。そんな少女を今迎え入れたのは唯一、暗黒のみ。今迄辛うじて少女を守っていた母胎すら誕生の名の下に喪失した少女は、文字通り裸一貫である。

そんな自らの境遇、守ってくれる者のない宿命を、生まれ落ちた瞬時にて本能的に悟るのか、それ故に少女は産声を上げず、以後も決して泣かないのである。泣かない故、少女は一滴の涙をも流さない。では少女が生まれ来て、この世界に対し示した反応は何か、それは、震え。母胎の体温を失った少女は極寒に曝され、震えている。

生まれたことで母胎である女から少女が失ったものは、体温のみでは勿論ない。女から絶えず伝えられた様々な感情例えば、恐怖、苦痛、怒り、諦め、狂気、かなしみ、絶望……そして憎しみ、それらも同時に失った筈である。なのに女から離れて尚、まだ少女の中に女より受け継いだものが確かに残され刻まれている気がしてならない。少女は確かに何かを受け継いでいる。何か、ただそれが何かを自覚する為に、少女はまだ余りに幼い。

自覚無き出産を終えた女と、無言にて生まれ来た少女だけがいるその暗闇の世界に、突如光が射す。それが希望の光であろう筈はなく、むしろ息が詰まる程閉鎖的なるその暗黒と凍結境である牢獄の如き空間に射した光は、貧しき一個の裸電球のそれである。また同時に狂気の男たちが集い女を玩具とし観賞する欲望と、女にとっては絶望のそれである。

乏しき光と共に、女の周りを男たちが取り囲む。されど女に反応はない、対して少女は即座に男たちから発する邪気によって恐怖の底に突き落とされる。少女が母胎を離れて初めて自らの肌で感じる恐怖である。少女即ち生まれたての赤子の姿を発見した男たちの驚嘆、どよめき、喚声といったらない。普段注目の的とする女のことなど忘却する程の騒ぎ。

「凄い、本当に生まれたのか」

「素晴らしい、何という生命の神秘」

「しかも女ではないか」

しかし驚き、賞賛の声も長くは続かない。直ぐに罵声と嘲笑とに変わり、容赦なく少女へと浴びせられる。ようやく女に注目が移るかと思えば、床にうづくまる女を誰かが足で転がし蹴り起こす。

「ほら、お前の子だろ。父親は誰だ」

男たちの嘲笑が女へと向けられたのも束の間、少女を見詰める男たちの目は突然怒りに震え出す。

「この神聖なる我らの儀式の場で出産するとは」

「汚れた血によって、冒瀆されてしまったではないか。どうしてくれよう」

「面倒だ、さっさと処分してしまえ」

といっても自分たちで直接手を下す連中ではない。そこで呼ばれたのが、ちんぴらのゴロ助。

「お前の手で始末して、何処か遠くへ捨てて来い」

こうして赤子の少女はゴロ助の手に。しかしゴロ助とて容易なことではない。仕方なく新聞紙に少女を包み、自分の車に乗せ一旦は車内で殺害しようとしたものの、いざ手を掛けようとするや少女の邪気のない笑顔が邪魔をする、とても殺せない。たとえ一瞬でもゴロ助の手に抱かれた少女は、初めて接する人の手肌のぬくもりに、生まれて初めて笑みを浮かべたのである。

どうしたもんかと迷いながら、ゴロ助は雪の降り頻るまだ薄暗い夜明けの町を車を走らせ、近くの川の岸辺まで来る。川のせせらぎ、川か。ゴロ助は閃く、そうだ、そうしちまえ。新聞紙に包んだ少女を手を抱きながら車を降り、きよろきよと周囲を見回し誰もいないのを確かめると、

「後生だから、おいらを恨むなよ」

少女にそう告げるや、ゴロ助は新聞紙と一緒に少女を川の面にそっと流す。川は上流から下流へと静かに流れ、途中吉原の脇を通過し、やがて東京湾へと注ぐのである。

どきどき、どきどき、ゴロ助の手ぬくもりを離れ、雪の降り頻る川に捨てられた少女は玉のように浮いて、川の流れに身を任せる。途中肉体を包んでいた新聞紙は離れ、裸身の少女は直接川の水の冷たさに曝される。寒くない筈がない、それどころか凍り付

く冷たさである。少女は幼いながらも、自分がこのまま凍死するものと悟り覚悟する。けれど幸か不幸か少女は死なない。ここで死んではならぬ定めであったとしか言いようのない奇蹟である。

確かにそこに身を置かれた当初は凍り付く冷たさだった筈の川が、不思議にその後少女には温かく感じられるようになる。あたかも感情を持った水という生物たちが少女を不憫に思い、やさしく包み込み温めるかの如く。それが証拠に少女はにこにこ笑みを浮かべ、川の流れに身を任せゆく、母のように川を慕い揺りかごに揺られるようにゆらゆらと。どきどき、どきどき、少女には川の鼓動さえ感じられる程、その時川は少女にとって確かに母、母胎である。

相変わらず天気は雪、川には雪が降り頻っている。どきどき、どきどきと、少女は雪の鼓動をも感じながら、どんぶらこ、どんぶらこと川の面に浮いて流れる。その姿は裸身である故一個の丸い桃の実、桃太郎のようである。もしこのまま息絶えることなく流れてゆけるならば、やがては辿り着くであろう、東京湾、遙かなる海へ。少女は母なる海への憧憬で胸をいっぱいにする。

夜が徐々に明け、少女にとって初めての朝が間近に訪れようとしている。この世界がいよいよ少女の前にその姿を現さんとするその矢先、ところが聴いた覚えのある声が何処からか少女の耳に響く、あの声が。

『だれか、こいつらをころして』

少女ははっとして、あの女のことを思い出す、思い出し後悔に苛まれる。わたしはあの人をひとり、あの場所に置き去りにして来てしまった。わたしは、この川よりも更に冷たく凍り付くようなあの牢獄の中に……。

はっとして目が覚める雪。その頬には矢張り涙などない。悲しき夢に目覚めた夕暮れ時でさえ、悲嘆の涙になど暮れない雪である。

月が替わる前、宇宙駅のドアを叩いて、

「えらいこっちゃ、えらいこっちゃ」

お節が飛び込んで来る。

「どないしたん、そんなに慌てて」

「何呑気なこと言うてんねん、どういうこっちゃ、な、あんた」

「そやから、どないしたママ、そんな青い顔して。落ち着いて一な、もう」

そこでお節は、一気にまくし立てる。

「どないもこないもあらへんわ。あんた、また死んだで、あんたの客」

ところが、

「へっ」

間抜けな声を漏らしたばかりで雪は顔色一つ変えない、三上組組長の時と同じである。

「へって、それだけかい」

余りの無反応振りにまたも呆れ返るお節。そんなお節をよそにぼんやりと雪は窓の外

に目をやる、迷子になった幼子の如く、それは寂しげな眼差しをして。

そやから言うたっただのに、ちゃんと。かなわんわ雪、あのおっさんの自業自得や。窓の外には雪が降り始める。

「ママ見て、ほら、雪や」

お節の話など忘れたふうで、雪は興奮した声。

「そなんん分かってる。そんなことよりあんた」

「な、名残り雪やろか」

「そなんん知るか」

お節の不機嫌など意に介さず続ける雪、といっても話の相手はもうお節ではない。

「何の名残りなん。な、お雪さん」

宇宙駅の窓ガラスに凍えるような雪のため息が白く曇る。

「そなんん、どうでもええやろ。それよかあんた、今ニュースで大騒ぎしてるで」

「そか」

「そか、て、もっと吃驚せんかい。あんたもほれ、事務所行って見てき」

「ええは」

「何で、あんたの客がまた死んだんやで。ほんまおっそろしい子やなあ」

「嫌いやねん雪、TVで。ただうるそうて、嘘ばっかしで」

「何偉そうなこと言うてんねん。それよかあんた、まさかとは思うけど、変なことしてへんやろな」

「変なことて」

「そやからお客さんに危ないこと。嫌やで、悪い評判が立ってもたら死活問題や」

「なんもしてへんて。何、危ないことて。そなんん雪なんも知らんわ、なあ、お雪さん」
曇ったガラス窓を拭き消すと、外は純白の雪。

お節の興奮も次第に冷め、

「まあ、あんたがそう言うんなら、ほんまやろ。信じるしかあらへんなあ。しゃーない、しゃーない」

お節が宇宙駅を出てゆくと、けだるい午後降り続く雪を眺めながら、何するでもなくぼんやりと時を過ごす雪。

北の死についてはマスコミで大きく報道されたものの、死因は心不全とされ、その詳細は伝えられない。結局三上のケースと同様、関係者以外真相は闇の中。北はこの半月内に複数の女と関係を持っていたが、雪を含めみんな性病検査に問題もなく且つ未だに元気に生存しており、桜毒の感染源として疑われることはなかった。

(三・三) 子犬と少年

(三・三) 子犬と少年

北代議士の死の知らせを聞いた後ぼんやりと降り続く雪を眺めているうち、日が暮れて夜が訪れる。雪は路地にネオンに積もり出し、音もなく吉原の街を白く染めてゆく。北の死によってどうにも気が滅入る雪は、宇宙駅にじっとしていられず、外に飛び出す。

「ママ、ちょっと出て来る」

「はあ、またかいな。ちょっとあんた、この商売夜稼がんでいつ稼ぐの」

「雪も積もり出してるし、誰も来へんて」

「またーっ」

苦笑いしつつも咎めるお節ではない。

「そんな恰好しとったら、凍え死ぬで」

「平気や、平気」

お節の言葉も聞かず、夜の巷に飛び出す雪。

お節が忠告するのも無理はない、雪の服装ときたらいつものハイヒールにコートで、コートの下はミニスカ。そんな恰好で雪の積もる路地を、雪はひたすら弁天川へと向かう。今夜会えるかどうか定かではないけれど、いつものようにコンビニに立ち寄り子犬の食料を買う。レジの前に並び外を見ると相変わらずの雪、ついでに透明のビニール傘も購入。

コンビニを出て、直ぐに傘を開く。ぽたっぽたっ粉雪が、ビニール傘に引っ切り無しに落ちて来る。

「お雪さん、今夜は元気ええな」

零す雪の息が粉雪の中に解けてゆく。ふうふう息を吐き吐き、つるつるっと幾度も滑りそうになりながら、ようやく弁天川の見える通りへ。そこではっと息を呑み、足を止める雪。

河原にふたつの小さな光が点っている。光は鼓動のように明滅し、あたかも冬の螢火のようである。どきどき、どきどきっ、もしかして。滑るのもお構いなしカタカタッとハイヒールの音を響かせ、夢中で駆け出す雪。はあはあ乱れる息が白く凍える大気の中に上昇し消えてゆく。

息を切らしハイヒールの音と共に雪が河原に近付くに連れ、ふたつの光はその輝きを弱める。雪が河原に足を踏み入れ光のそばに辿り着く時には既に光は失われ、そこには子犬と少年の姿が。思った通りや、雪に濡れた足の冷たさも今は気にならない、雪は近付く。そんな雪よりも早く、

「ワン」

子犬が元気に雪に飛び付く、嬉しくて堪らないと千切れる程に尻尾を振って。

「うわっ」

傘を持ったまま、片方の腕で必死に子犬を抱き締める雪。

厚化粧の雪の頬ぺたを、ぺろぺろぺろっとくすぐるように子犬の舌が舐める。

「分かった、分かった。二人共びしょ濡れやない」

雪の声もはしゃいでいる。どきどき、どきどきっ、子犬の鼓動と体温が伝わって来て、その命のいとおしさに胸が詰まりそうな雪である。この寒さの中、弁天川の川沿いを飾るように河原には水仙の花が咲いているけれど、今夜ばかりは雪を被ってぶるぶると震えている。

「にいさん、元気してたん。雪、心配でしょっちゅう来てたんやで、ここ」

けれど相変わらず無愛想な少年は、黙って川を見詰めている。

「寒くないの、にいさん」

少年の恰好といえば先月初めて会った時と変わらない、半袖の開襟シャツに半ズボン、丸であの夜のまま時が止まっていたかのようなようである。なのにこの寒さでも平然としている少年、その息は矢張り白くならず無色透明。ほんとに息をしているのかと疑いたくなる程。

子犬がするすると雪の腕からすり抜け、雪の地面に着地すると少年の足下に擦り寄る。雪は少年の濡れた肩に傘を差し掛け、そのまま並んでしばし川を眺める。灰色の空では川の面に星影も映りはしない。その代わり天から落ちて来る粉雪が、次から次へと川に吸い込まれ融けてゆく。ひゅるひゅるーっと時より木枯らしが吹いて、驚いたように粉雪が舞うのである。

「雪って本当にきれいだね、どうしてこんなにまっ白なんだろう」

ようやく少年が口を開く、頬を紅潮させて。

「そやね、にいさん」

顔く雪の顔を見詰め、突然少年がくすくすっと笑い出す。

「お姉さんの顔、化粧が剥がれて、お化けみたいだよ」

へっ。

「何言うの、にいさん。雪怒るで」

頬ぺたを風船のように膨らませて見せるけれど、笑っているから少しも恐くない。見ると少年のそばに小さな雪だるまがひとつ。

「あれ、にいさん作ったん」

照れ臭そうに顔く少年。

「やっばし子供なんやね、にいさんも」

喜びが込み上げてくる雪。

「雪も作ろうかな、雪だるま」

そこへくんくん、くんくん、子犬がコンビニのレジ袋に鼻を近付ける。

「忘れてた、御免御免。お腹空いてるやろ」

レジ袋を地面の上に敷いてその上に食料を並べるや、直ぐにぱくつく子犬。

「あれからなんか食べたん、子犬のにいさん」

しゃがみ込み子犬の頭を撫でるも、顔も上げず子犬はひたすら食べる。少年も雪の隣りにしゃがみ、並んでにこにこ子犬を見詰めている。

よし、とばかりに雪は傘を少年に預けると立ち上がり、せっせと素手で雪だるまをこしらえる。出来たそれを少年の雪だるまの隣りに並べ、

「お似合いやろ、な、にいさん」

今度は雪が化粧の落ちた頬っぺたを赤くする。

「ふーっ、にいさん冷たい。ほら雪の手、まっ赤や」

白い息を掌に吹き掛ける。

しゃがんだままじっと雪を見上げる少年、見ているのは雪の手か白い息か。その瞳を見詰め返す雪、引き寄せられるように少年の目の前で再びしゃがみ込む。まっ直ぐに目と目が合う。

「にいさんの目、綺麗なな、よう見せて。あらっ、にいさんの瞳の中に銀河が見える、なんで」

けれど少年は、まっ赤な顔のままかぶりを振る。

「空の星が映っているんだよ」

少年が真顔で答えるから、雪は大きな声で笑い出す。

「にいさんの嘔吐き、空曇ってるで」

あ、しまったという顔ではにかむ少年。

互いの息が互いの顔にかかる、雪の白い息と少年の透明な息と。どきどき、どきどき、雪は俄かに興奮を覚える、寒さの中で体の芯が熱く火照る。少年の目を見詰めたまま、言葉を漏らす雪。

「にいさん、雪なんか、変な気してきた。な、キスしてもええよ」

甘い香水の香りを漂わせ女の表情で少年を誘う雪は、正にお節の言う魔性の女。潤んだ雪の目をじっと強張った顔で見詰め返す少年。しかし咄嗟に雪は後悔する、しもた、忘れてた。雪が思い出したのはお雪さん、男という獲物を前にしたら必ず叫ぶあの言葉『こいつをころして』。払っても払っても心の奥底から響いて来るあの叫び……。

ところがいつになってもお雪さんの声はしない。おかしな、首を傾げる雪。どないしたんやろ、相手がまだ子供やからやろか。ふっとため息を零す雪。

「キスならぼくより、この子の方が得意だよ」

子犬の頭を撫で微笑む少年の、汚れを知らないその目が眩しくてならない。

ほれ、やっぱしまだ子供や。でも良かった、にいさんまで桜毒で死なせとない。胸を撫で下ろす雪。危ない危ない、口だけでもうつるねんから、気付けんと。にいさん死んだら、雪、生きてゆけへん。最早雪の中ではかけがえのない存在となっている少年である。

「にいさんにはまだ、刺激が強過ぎる。お預けや、もちっと大きくなってから」

自分に言い聞かせるように少年に告げる雪。

その時、食事を終えた子犬が顔を上げ、曇った夜空に向かって「ワン」と吠える。釣られて少年が立ち上がる。

「どうしたん」

雪も立ち上がり、子犬と少年と共に空を見上げる。子犬の代わりに、灰色の夜空の一点を指差しながら少年が静かに答える。

「ほら、宇宙船だよ」

「へ、ほんま、にいさん」

驚く雪の声に、少年は頷く。けれど幾ら夜空を見上げてみても、雪には何も見えない、ただ降り頻る粉雪が落ちて来るばかり。少年は言葉を続ける。

「今夜は、オリオン座ステーションに停車するみたいだよ」

オリオン座、何も見えないけれど頷く雪。

「綺麗やろな、にいさん、オリオン座ステーションで。雪も行ってみたい」

少年の目をじっと見詰めると、その瞳の銀河の中に確かに何かが映っている。子犬と少年に傘を差し掛けながら、雪は少年の空想の中へと吸い込まれる。

(三・四) オリオン座ステーション

(三・四) オリオン座ステーション

ザヴザヴシュワー、ザヴザヴシュワー……夜の海鳴りの打ち寄せる先に夜の港のある如く、宇宙の星々の瞬きの彼方にも、長旅の疲れをば癒す港あり。宇宙の闇のまっ只中に燦然と光り輝くここオリオンの宇宙ステーションにも、幾多の旅の星々が宇宙の果てより流れ着いては旅の疲れを癒したものである。その多くはオリオンの光の眩しさ美しさに魅かれ、そのままこの地にて余生を送り星の一生を全うし骨をば埋めた。かくしてオリオンの瞬きはそれら無数の星々のエネルギーを吸収し、いや増しに増して光り輝き、今も尚宇宙の中に唯一無比なる栄華を誇っている次第にて候。

バビブベブー、こちらはオリオン座ステーション。メシヤ567号殿、貴船に於かれても、永くこの地に滞在されんことを望む次第。ここには光も熱もあり夢も希望も、おまけに女も酒もその他ありとあらゆる宇宙の娯楽が揃っております。なのに、はて何故に、そなたそうして旅を急がれるか。是非ともその訳をばお聞かせ願ひ奉り候、バビブベブー。

ピポピポピー、こちらはメシヤ567号。まことに有難き御言葉痛み入ります、オリオン座ステーション殿。わたくし共はこれから太陽系第三惑星 Yoshiwara 駅へと参る途上で御座います。なぜわたくし共こうまで先を急いでいるかと申しますれば、他でもない、Yoshiwara の地に存在します雪なる一人の少女の訴えによるものであり、尚且つ雪の身に大変なる危機が迫っております故でも御座います。一刻も早く第三惑星へと向かわねば、彼の星は悲しみの涙の海へと沈没してしまうことになりましょう。そうなれば、この大宇宙にも幾ばくかの影響が及ぶのは必至、オリオン座ステーション殿とて例外では御座いません、はい、ピポピポピー。

バビブベブー、何々、こちらはオリオン座ステーション。はて太陽系第三惑星と申せば、我々の目にも映りますあの青く透き通った宝石にも似たる、正に暗黒の宇宙の中に浮かぶ奇蹟の楽園とでも呼ぶべき美しき星のことに相違御座いませぬか。でありますなら、なぜそのような星が悲しみの涙の海になど沈没致さねばならぬ定めでありましょうかいな。俄かには信じ難きこと、我が耳をば疑うばかりなりき。

ピポピポピー、それなんですね、こちらはメシヤ567号。彼の星の青さ、美しさこそが、実は第三惑星人共自身の悲嘆の涙によって映し出されたる哀愁の美しさに他なりません。

バビブペプー、何ですと、こちらはオリオン座ステーション。それではあの星の美しさは、何と第三惑星人共の苦悩と犠牲の下に成り立っておると申されるかや。むむ、またまた俄かには信じ難き。ではあの星に於いて一体現在、何が行われておると申されるのですかしら。

ピポピポピー、はいはい、こちらはメシヤ567号。現在それをば調査致しておる所で御座います。が簡単に申せば彼の星では数千年の永きに渡って貨幣制度なる玩具をば操る経済と名乗る化け物が第三惑星人らを巧みに支配しておりまして、彼ら第三惑星人は自らの命よりも重き貨幣即ちお金をば得んとして、なぜならお金持ちになることが幸福になる第一条件であると信じて止まない彼らですから愚かな程に必死でして、その結果現在彼の星の上では人身売買が横行しているという始末。ええそうですも人身売買、売春はおろか違法なる臓器売買、未だに続く強制労働等々。然してかの Yoshiwara されど Yoshiwara なる街は売春のメッカで御座います。

そこでわたくし共、目下売春について審判の最中でも御座います。審判とは、売春は善か悪かの判断を下すこと。でははたして売春は悪なりか、Yoshiwara は罪惡の街、貨幣制度の夜に咲いたる仇華かいな。まあ厄介な話では御座いますが、少なくとも貨幣制度なくして Yoshiwara はなし、経済が支配しておらねば売春もなし。お金の授受によって正当化されたる婦女暴行、それが売春と呼ばれるものの本質であります。そうであるなら話は超簡単、善か悪かと問われれば、売春は即ち悪である。しかしまた一概にそうとも断罪出来ぬところが歯がゆいところ、なぜならその悪の華売春が第三惑星人社会の進歩、高度経済成長をば裏で確かに支えきたのも事実でありますからです、はい。でええと、おっとここいらでちょっくら午後のお茶とでもいきませんか、ふー疲れた。

バビブペプー、成る程、こちらはオリオン座ステーション。では兎に角悪の仇華 Yoshiwara とやらをば滅ぼさんとして、メシヤ567号殿は旅路をお急ぎなさるところいう訳ですな。ならば分かりやしたぜ、それではお急ぎなさい、お急ぎなされ。どうぞ良き旅を、バビブペプー。

ザヴザヴシュワー、ザヴザヴシュワー、善と悪とを立て分ける節分の宵にも Yoshiwara 駅のネオンに眩しき灯りの点る。夕暮れより寂しき男たち背中丸め集い来る夜の都、ネオンの華咲く我らが Yoshiwara…雪花の舞う夜も寂しき男たちの心を慰め今宵も更けゆく。朝には寒き心しか残らぬと分かってはいても、浅き夢見たし今宵もつつい訪ねて

しまう、我らが罪悪の都 Yoshiwara…欲望の街。

という訳で、星の海を掻き分け掻き分け、宇宙船の旅はまだまだ果てしなく続くのであった、ピポピポピー、ピポピポ……ザヴザヴシュワー、ザヴザヴシュワー……。

ふっと少年の空想が途絶える、粉雪は既に止み夜空には銀河が瞬いている。

「あらまあ」

雪は慌ててビニール傘を閉じる。くしゅん、少年がクシャミ。子犬も釣られてくしゅん。笑いながら雪が

「にいさんらも、風邪引くねんなあ」

ところが言ったそばから今度は雪が大きなくしゅんで、鼻水も飛ばし色気もへったくれもなし。子犬が「ワン」と呆れ、少年も笑みを零すから、頭を掻いて苦笑いの雪。ところが、

「じゃ、またね」

不意に別れの言葉と共に、少年が雪に手を振る。

「へっ」

祭りの後の如き寂しさに襲われ、寒さも忘れる雪。

「な、にいさん。雪たち、また会えるん」

不安な雪に、少年は頷く。

「大丈夫、ぼくたちちゃんとここにいるから。お姉さんをひとりぼっちにしないから」

「へ」

嬉しくてならないながらも、雪は膨れっ面にて、

「にいさん、生意気や。分かったような口利いて」

照れた少年はまっ赤な顔で下を向く。

「じゃね、にいさん」

河原に佇む子犬と少年に手を振りながら、弁天川を後にする雪。

「おねえさーん」

突然少年が雪の背中を呼び止める。

「どないしたん、にいさん」

振り返る雪に、

「お姉さんが良く眠れるように、ぼく子守唄歌って上げるから」

「子守唄。へえ、やさしいんやな、有難う、にいさん」

照れ臭そうに頷く少年。

「どなん、な、聴かせて」

雪に促され歌い出す少年、その澄んだボーイソプラノが河原に響く。

『家の灯り、町の灯り、駅の灯り、ざわめき、犬のなき声、子犬が足に絡み付いてきた、まるで叱られて家出する少年、ひとりぼっち泣きそうな顔こらえて、子犬とふたり。高層ビルの灯り、空港の灯り、宇宙船でもやってきそうだ、寒さこらえて待っていよう、辛

さも悲しみもこらえて、子犬とふたり。都会の灯り、ふるさとの灯り、遠い宇宙の彼方の灯り、ともっては消え、それを繰り返す。道に迷ってしまったのか、それともはじめから、道など存在しなかったのか、みんな夢だったと言うように。宇宙船はいつってしまった、人々の諦めた顔を眺めているうちに、お腹を空かした子犬とぼくを残して……もう灯りは消してもいいだろう、みんな眠りについたから、宇宙船もかえってほこないだろう、もうねむりにおちてもいいんだよ、ベッドにはきみひとり、もうだれも襲いかかったりしないから、こわければ子犬をだいていればいい。ぼくをここに連れてきたのは子犬、ぼくならきみを助けられると思ったんだな、もしもあの宇宙船が、きみを助けにくる夢を今夜見たならば、きみはいつてしまうかい、この悲しき宇宙ステーションを残して』

その歌声を背に、雪はとぼとぼと雪道をハイヒールで帰ってゆく。吉原、雪の宇宙駅へと、白い息吐き吐き帰ってゆく。

(四)

(四・一) 三人目の客

(四・一) 三人目の客

春。まだ肌寒い日が続いてはいるものの、吉原の街も春の予感に舞い上がっている。月が替わりお節は、エデンの東の玄関に桃の花を飾る。加えて例年お節はこの時期、店の子たちの控え室にお雛様を飾るのを習慣としている。生活の為とはいえ、いつも激しい文字通りの肉体労働に耐える彼女らへの慰労と、稼がせてもらっている恩へのせめてもの感謝と罪滅ぼし、謝罪を兼ねてという訳である。

エデンの東には派手な娘や美人など決していないけれど、若かりし頃のお節がそうであったようにぼっちゃり型でおっとり、情に厚い女たちが揃っている。ま、粒揃いといったところ。お節というママ、母親の如き存在を慕い集まったような娘たちばかり、言わばお節ファミリーとでも呼ぶべき和気藹々とした店である。

その中であって、絶世美少女の雪は異端である。お節の知り合い、店の子の間で、雪がお節の実の娘或いは孫だと信じている者はいない。年齢的に子供というのは無理があるし、容貌の違いからして血の繋がりが無いことも容易に想像がつく。寂しきひとり身のお節のこと、大方養子でももらったのだろうという話で皆納得している。

寒さもめっきり和らぐと、普段は訪れることのない客が吉原の街を闊歩するのも、この季節ならではの。卒業祝いに童貞を捨てに来る男子、地方から上京した新入社員の集団がぞろぞろぞろぞろ修学旅行宜しく押し掛け、華の都の花街巡りとくれば、吉原にとっては稼ぎ時である。といってもそういった輩は得てして上辺見せ掛けのケバさ、若さに吸い寄せられるもの。残念ながら玄人受けするよな渋い娼婦の揃ったエデンの東など見向きもされず、従ってお節の懐までは潤わないのが常。お節としては馴染みの常連客である近所のおじちゃん、おじいちゃん連中を相手に地道にやっていくしかないが、台所事情は決して楽ではなく、店のソープ嬢たちを何とか食べさせるので精一杯といったところ。

そこへ思わぬところで先月、先々月と丸で臨時ボーナスの如く雪の稼ぎが転がってきたものだから、お節としては何とも複雑な心境。今でも雪に一日も早く商売から足を洗ってもらいたいという願いは変わらない、相手した客だってまだたったの二人。されど百万円も捨て難いとくる。でも物は考えよう、たかが月に一人の客程度やったらどうやら。例えば芸能界のアイドルたちの枕営業みたいなもんちゃうやろか。そやったらどうってこともないんちゃう、などと微妙に割り切ってしまいたい近頃のお節でもある。

当の雪は相も変わらず暇なのを良いことに、昼間は宇宙駅に閉じこもって新約聖書ばかりを繰り返し読み耽っている。夜は夜で例によって弁天川へと通っているけど、残念ながら子犬と少年には会えずじまい。それでも雪はがっかりせず、きっとまたいつか会える筈と信じている。なぜなら少年の言い残した「お姉さんをひとりぼっちにしないか

ら」という言葉が、しっかりと雪の心を支えているからである。それに加え先月少年の子守唄を耳にしたあの晩から、少年の言葉通り不思議にぐっすりと眠れるようにもなり、もしかしたら雪の為毎晩何処かで少年があの子守唄を口遊んでいてくれるのではないかとさえ思ってしまう。

そんなお節と雪の前に、またまた三人目の客が現れる、彼岸前である。客の名は和田英二、四十代後半とまだ若くそれだけに性欲も強い。職業は医者、メンタルヘルスの開業医である。和田がエデンの東を訪ね、雪を指名したのは一にも二にも好奇心、アブノーマルな刺激を求めてのことである。何しろ若い頃より金に不自由することもなく、一通りの女遊びも済ませてきた。日々の暮らしは倦怠そのものであり、余程のことがない限り最早快感を得ることは難しい。そんな和田がでは一体どうして雪のことを知り得たのかと言えば、実はこの和田も医者でありながら、なぜか三上や北の遊び仲間、謎多き闇の組織の一員なのである。

三上と北の急死について組織内では既に大騒ぎとなっており、水面下で噂が囁かれる。どうやら二人共桜毒で死んだのだが組織によって保健所に圧力が掛かり届出が抹殺されたとか、三上も北も吉原の或る娼婦と遊んだ末に桜毒を発症したらしいがその娼婦自体はまだ生存しているとか。この噂話を小耳に挟んだ和田が尋常ならざる興奮を覚え、自分も是非その娼婦に会ってみたいと吉原のソープランドを巡り巡って、遂にここエデンの東に辿り着いたという訳なのである。

お節に変態プレイは御法度と言われむっとするも、たまにはそれも新鮮で良いかもと渋々同意し案内された雪の宇宙駅。ドアが開いて一目雪を見るなり、女など星の数程も遊んだ筈の和田が脆くも雪にいちころ。胸はキュンキュン股間もピンピーンと張り詰めて、こりゃ百万でも二百万でも出しますよの舌なめずり状態。

対して雪の方は雪で、和田と対面した瞬間矢張りお雪さんが確かに『こいつをころして』と発する。これで和田は雪の客として合格、商談は成立。

でもちょっと待った、一応念の為ヘルスチェック、ヘルスチェックと和田御自ら持参した聴診器を用いて性病検査。というかさっさと雪の上半身を脱がせ、自分は白衣姿で早速お医者さんごっこのプレイのつもりでもいるらしい。

「あん、先生、くすぐったい」

雪の体のいたるところに聴診器を当ててご満悦。

で検査結果は異常なし、ほんまかいな。

「良し。何にも問題ありません」

和田自身のお墨付き。雪も、

「そりゃそや先生、安全第一。雪は三日に一度は必ず検査行ってまっさかい」

「ほう、そりゃ感心、感心。では安全確認が取れた所で早速」

行き成り雪のおっぱいに唇を這わせようとする和田を押しとどめ、

「先生、ちょっと待って。検査結果は確かに問題ないんやけど。吃驚せんといて、実はな……」

例によって雪は警告を発する。

「桜毒かあ」

話を聞いた和田は腕組み。矢張り三上と北の噂は本当だったか。ぞくぞくっと死の恐

怖に怯えるも、目の前の絶世美少女雪の魅力には敵わない。むしろ死の恐怖と隣り合わせの快感、未体験ゾーンの興奮が全身を貫いて、和田は無条件降伏。こんないい女と寝て死なねばならないなら喜んで死のう、僕の人生この子に捧げちゃう。それに良く考えりゃそもそもこの子自身こうして死んでないんだから問題ないんじゃない、きっとあの二人は老いぼれ爺さんだったから免疫機能が低下してたのさ。それに、それに何たって僕は名医、医者なのだから大丈夫。そんな根拠のない自信に支えられ、雪と交わる決意に至る和田。

「そんなに心配なら、念の為精密検査してみよう」

とか何とか今度は雪の下半身を脱がす。

「ちょっと先生。精密検査で、こないなところでも出来んの」

「当然さ、僕は名医なんだよ」

「でもどないすんの」

「詰まりきみの場合パディには何ら問題ない。だから何処か精神に異常をきたしてないか僕お得意のメンタルチェックをして上げようって訳。さ、じっとしてて」

で何するかと思えば、しっかりと雪の下半身に聴診器を当てる和田。

「メンタルで先生、そこ、雪のメンタルちゃうよ」

「何言ってんだ、ここがきみのメンタルの中枢部分じゃないか」

はあはあと、鼻息も荒い和田。

最早和田の欲望を止める術はなし。もうこれ以上我慢出来んと聴診器をかなぐり捨て、今度は自分の舌と唇とで雪の下半身を弄ぶ。

「あん、先生ちゃんと診てはんの。でもなんか雪、変な気持ちなってきた、あん、あーん。駄目、先生」

雪の呼吸が乱れる。和田も、

「僕もだよ、もう我慢の限界だ。メンタルチェックは一旦中止」

「中止で」

遂には白衣も脱ぎ捨て、素っ裸になる和田。

「ほんま知らんよ先生、どうなっても。雪はちゃんと警告したで」

「ああ大丈夫、だってきみは何も問題ないじゃないか。至って健康、ちょっと淫乱の気があるがね、注意し給え」

にやける和田にとうとう観念する雪。

「先生がそう言わはるなら、しゃない。もうどうでも好きにして先生」

待ってましたとばかり、雪の肉体にむしゃぶり付く野獣の和田。その時雪の内部ではお雪さんの声が響く。

『こいつをころして』

すると雪は何者かに操られるが如く、ただもうその声に身を委ね、男を手玉にする最強淫乱女と化す。

和田は一晩中、

「ああ、もういつ死んでもいい」

などと口走りながら、小娘のように幾度となく昇天する。その姿は哀れ廃人のようでもあり、ただの阿呆でもある。しかしそれも無理はない。なぜなら雪は一人また一人と

男を相手にする度に、男を悦ばす魔物のようなテクニックをば無意識のうちに磨き上げているからである。

そして和田にとって夢幻、楽園の一夜が終わりを告げる。夜が明け、まだとろーんと快樂の余韻に浸りつつ、

「また来月来る、絶対来るからね。マイラブ、僕の雪」

などと他愛ない別れの言葉を告げ、宇宙駅を後にする和田。その背中を見送った後、雪は疲れ果てた体を引きずりシャワーを浴びる。体中を洗い清めた後はただ眠りへと落ちてゆくばかり、何処から飛んで来たものか桜の花びらが宇宙駅の窓に当たっては落ちてゆくその姿にも気付くことなく。

(四・二) 夢

(四・二) 夢

眠りの中で、いつものように夢を見る。今朝もまた、雪の過去を辿る夢……始まりはいつも同じ、夜明け前何処とも知れない街に降り頻る雪の景色。その後に絶え間ない雪の白さの中を流れる川が見える。

どきどき、どきどきっ。川のせせらぎの音さえも凍り付く沈黙の中に響いて来るのは、川の鼓動かそれとも、今川の流れにただひとり身を任す赤子、まだ生まれたばかりでありながら捨てられ必死に誰かに助けを求める少女の鼓動なのか。どきどき、どきどきっ、少女は何処までも何処までも川を下り、宛てもなくぬくもりもなくただ流されるまま。そんな少女の唯一の希望は、やがて東京湾へと辿り着くことのみ。

母なる海に抱かれることを夢見る少女を乗せ川は流れる、降り続く雪を無限に吸い込みながら。辺りはまだ真冬の夜が白々と明けたばかり、加えて雪の降る川の岸边に佇む人影などあるとも思えない。あったにしても精々酔っ払いか、じゃれ合うのに夢中の恋人たち位。まさか凍り付くよな川の面を赤子が、しかも素っ裸で流れゆくなど誰も夢想だにしない事。もし万が一発見したとて、大方捨てられたキューピー人形か何かだろうと勘違いし見過ごすのが関の山。と思いきや、幸か不幸かその時川の途上の河原にひとりぼんやりと佇む厚化粧の女がいる。

女は降り頻る雪の中に傘も差さずハイライトをくゆらしながら、寒々とした朝の大气中へと気だるげに白い煙を吐き出している。女、年は中年か初老といったところ。その女がぼったりと、川を流れる赤子に気付くのである。

どんよりと空は灰色に曇り、朝といってもまだぼんやりと薄暗い。なのに雪の降り注ぐ川の面の或る一点、ちょうど赤子が浮かんでいる場所だけがなぜか朝陽が射したようにきらっと眩しく光ったものだから、女はついそこに目を奪われる。

なんや、あれ。当然初めは物か何かと思う。お人形さんか、それともどんぶらこと流れる大きな桃の実みたいなものかいな。ところがどうも様子が違う。まさか、はっとして女は息を呑む。まさか、赤ん坊ちゃうやろな。そんな筈ない、冗談か悪戯か、悪い夢でも見てるんちゃうやろなあ。

でも、そのまさか。どきどき、どきどきっ、女の鼓動が高鳴る。何度目を擦ってみても、間違いない。あれま、何でや。もしかして死んでんの。兎に角急がな。

女はさっさとハイライトを放り捨てると、ざぶざぶ、ざぶざぶっ、はあ冷たい、でもそんなん気にしてる場合ちゃうと、勢い良く川の中に入ってゆく。幸い浅瀬、しかも具合良く強風が岸边の方角へと吹いて、ゆらゆらと赤子を乗せた川の流れを女の足元へと引き寄せる、かくして赤子は女の目の前に辿り着く。

女は無我夢中迷うことなくその両腕で、さっと赤子を拾い上げる。どきどき、どきどきっ、女の鼓動が今にも止まり掛かった少女の鼓動を包み込み、女の手ぬくもりが凍

り付いた少女の心を溶かす。こうして少女はやっと生まれて初めて、人の胸、人の愛に触れるのである。これが少女が初めて迎えた、この世界の朝。

何や、やっぱし赤ん坊やないの、しかもすっぽんぽん。何て哀れ何て酷いことを、犬畜生でもようせんわ。あほか、何処のどいつや、どんなばか女の仕業や、しょうもな、呆れ返って文句も言えへんと、文句のひとつも言いたいところ。でも今はそんなことして場合ちゃうと、女は血相変えて慌てまくる。

死んでへんか、いや生きてる。凄いな、ようまあ生き延びて。きっと運のええ子や、何とか助かるんちゃうか。女は確信を持つ、絶対助かるで、だって見てみ、この子、ここにこ笑ってるやないの。確かにその時女の腕の中で、少女は笑っているのである。その健気さについ女は涙を零しながら、救急車を呼ぶ。

女の努力の甲斐あって、少女は病院で手当てを受け奇蹟の如く一命を取り止める。その後結局、女が少女を引き取ることに。なぜかという、懸命なる警察の捜索にも関わらず少女の身元は分からず、名乗り出る親も現れない。このままでは施設行きとなるのを不憫に思った女が、これも何かの縁や、この子は自分への天からの授かりものかも知れへんと、養子縁組するのである。

女はそれが可能な境遇でもある。女はひとり身で、親も亭主も子供もいない。ひとりで店を経営し、細々と暮らしている。少女を引き取った女は店を営みながら、少女の面倒を見る。女は結婚も出産の経験もないけれど、女の店には経験豊富な女たちがいて、惜しみなく女の育児に協力する。女の店とは、ソーブランドである。女は少女が捨て子であることは周囲には伏せていたが、誰も皆女の実の子でないこと位は直ぐに見抜く。少女はこうしてソーブランドの片隅でソーブランド嬢に囲まれながら育つ。

幼い少女は、まだそこがどういう場所なのか知る筈もない。凍り付く川から救い出された少女にとってそこはまだ天国であり、その頃が少女にとって一番幸福な季節でもある。同様に女にとっても少女は天使であり、どうにも可愛くて堪らない。まだ赤子の少女は手は掛かるけれど、女の最大の喜び、生き甲斐となる。と共に店のソーブランド嬢たちにとっても、少女は慰め、アイドルになる。彼女たちは皆満面に笑みをこしらえ、代わる代わる少女を抱きかかえ、満足しては辛い仕事へと赴く。一仕事終わると女たちはまた少女の許へ帰って来て、金銭と引き換えに犯した自らの罪を清めるかのように、清らかなる少女の笑みに触れ束の間の安らぎを味わう。

「ほんと、雪ちゃんはいいい子ね。ちっともぐずらないもの」

店の娼婦たちは、少女が泣かないことに一様に驚く。

「いや、それがな、実は今迄いっぺんも泣いたことないねん」

「へえ一回も、嘘」

「ほんまや。そやさかい心配やねん、何や悪い病気ちゃうやろか思て」

女の心配も当然のこと。気のやさしい女とソーブランド嬢に囲まれながらも、少女は一時としてあの事を忘れられない。

あの事……。あの女、自らを宿し初めて少女が接する鼓動で包み守り、この世界に産んでくれた女。あの場所、自らが生まれた暗黒の牢獄のような空間とそこにいた狂気の男たち。ゴロ助の手のぬくもり。あの川の冷たさとあたたかさ、自らを運んだ雪降り頻る川の流れと、海への憧憬。

ところが成長し物心つく年頃になると、少女は女が自らを川から拾い上げてくれたことすらも含め、それら過去の記憶の一切を綺麗さっぱり忘却してしまう。

嘘や、わたしは絶対に忘れへん、絶対にあの頃のことを。なぜなら、あの頃こそわたしの命の原点やし、わたしの人生のすべてなんやから。幼い少女は必死に誓う。けれど時の経過と忘却の定めから逃れることは少女とて不可能である。いや、それでもわたしは忘れへん、絶対にわたしは……。

はっと目が覚める雪。たった今身を任せていた筈の夢の記憶さえもまた、さっと綺麗に忘れ去り、雪の中にはただぼんやりとした悲しみだけが残る。

春の彼岸が過ぎると、お節がけたたましく宇宙駅のドアを叩く。その時雪は窓の向こう、風に舞う桜の花びらをぼんやりと眺めている。

「何、何の騒ぎ。ほんま騒々しな」

怒ったように宇宙駅のドアを開ける雪。ところが目の前には青ざめた顔のお節が突っ立っている。

「どないしたんママ、そんな死にそうな顔して。しっかりして」

「これがしっかりしてられるかいな。な、あんた、よう聴いてや」

「何、改まって」

「今な、変な電話あってん」

「変な電話、何それ」

で、お節が語る電話の一部始終。

「和田いう人の奥さんからや」

お節の声は徐々に熱気を帯びる。

「和田、誰やろ」

「知らんわ、大方こないだのあんたの客ちゃうか」

「あの先生。知らんわ、そないなこと。で、何て」

「それがな、聴いて吃驚、ご主人さんが昨日亡くなりはってんて。なあ、何でや」

「何でやて、知るかいな、そんなこと」

けれどお節の興奮は高まるばかり。

「けどおかしいやろ、これで三人目や。あんたの客の三人が三人共て。なあ、どう考えてもおかしいやろ」

「おかしいも何も、知らんわ雪」

「ほんま。ほんまに何にもあんた、変なことしてへん。恐いで、うち」

「分かった、分かった。ほで電話て、それだけ」

雪としては和田が死んだことより、なぜ和田の奥さんが電話してきたのか、そっちの方がよっぽど気になる。

「ああ、それだけや。何でも生前もし自分が死んだら、ここに連絡して知らせろ、いう本人の遺言があったらしい。そやさかいわざわざ奥さん掛けて来はったんやて」

「ふうん」

「ふうんて、それだけか」

さっぱり気のない雪に、逆にお節の興奮はピークに到達。

「あんた、なんか呪われてんちゃうの、ええ。あんたやっばし、この商売向いてへん。な、止めよ、さっさと。このままやと、もっと大変なこと起きる」

「んな、大袈裟や」

「何が大袈裟なもんかい、ほんま、おっそろしい娘やな、あんた。ちっとは恐ろしがってよ」

「なんも、恐ろしことあらへん」

「何言うてんの。な、何でその人そんな遺言残さなならんの、え、気色悪う」

けれど雪は「ふわーっ」と大欠伸、ぼんやりと窓の外の桜の花びらを眺めている。その細い背中が妙に寂しげで、お節の興奮も途端にトーンダウン。

「でもまあ、あんたが殺したという訳でもないし、死んだもんはしゃないなあ。死人に口なし、桑原桑原」

言葉を濁して、宇宙駅を後にするお節。

(四・三) 子犬と少年

(四・三) 子犬と少年

ひとりに戻った雪は、風に舞う桜の花びらをぼんやりと見詰めながら物思いに耽る。桜と雪とどう違うんやろ、どっちの方が寂しいんやろかいなあ、なあ、お雪さん。どっちもはかのうて、どっちも美しゅうて、どっちも哀しい。しかもはかないも美しいも哀しいも、みんなおんなじ意味や……。和田の死の知らせを聴いて、気が滅入ってならない雪である。日暮れまでそうやって宇宙駅の窓辺に凭れていたものの、宵が訪れ吉原の街にネオンの華が咲くと、痺れを切らして雪は宇宙駅を後にする。

目指すは弁天川、川の岸辺も今は春の芽生え。菜の花、たんぽぽ、チューリップが咲いてちょっとした花畑と化し、その中を蝶々、蜜蜂、天道虫が飛んでいる。更に川に沿った舗道には、桜並木が続いている。といっても生憎弁天川の桜はまだ蕾。

今夜は子犬と少年に会える気がしてならないと、例によってミニスカにハイヒールの恰好で弁天川へと急ぐ雪。夜はまだまだ冷える故、コートに羽織るのも忘れない。早くにいさんたちに会いたい、会いたくてならない。三上、北が死んだのを知った時も、その夜子犬と少年は河原にいた。なぜなのか単なる偶然か、それとも何か訳でもあるのやろか、雪にはまだ見当がつかない。

自らの客の死を知って、雪が穏やかである筈もなく内心は混乱に陥っているのであるが、お節の前では余計な不安を抱かせぬようお芝居で平静を装っているばかりである。そんな気持ちを分かってくれるのは、現在のところあの少年しかいない、そう信じる雪である。だから今夜も会いたい、会ってすべてを忘れさせて欲しい。川へと近づくに連れ雪の足は速まり、ハイヒールの音がけたたましく舗道に響く。

そんなハイヒールの音がパタリと止まって、雪は弁天川の岸辺に立つ。今迄子犬と少年と会った河原の同地点に、今宵も小さなふたつの光が瞬いている。やっばし思った通りや、ほっとため息を零して再び歩き出す雪、ゆっくりゆっくりとあのふたつの光を目指して。

先月は雪道やったなあ、そうそ、雪だるまこしらえたんや。肌を刺すよな木枯らしや、指が千切れる程の雪の冷たさが、僅かひと月前のことなのに今は懐かしく思えてならない。未だ夜風はひんやりとして肌寒く、雪はコートの襟を立てる。

雪のハイヒールの音が河原に近づくに従い、例によってふたつの光は弱まる。蝋燭の炎が暗闇へと帰る如く終にはその光が失われる時、そこに子犬と少年の姿だけが残される。

「ワン」

子犬は威勢の良い鳴き声と共に、千切れる程尻尾を振って雪に飛び付く。嬉しくてならないとぺろぺろ雪の顔を舐めるから、また雪の厚化粧が溶ける。比べて少年は雪に気付いているのかいないのか、お澄まして弁天川の川面に映る空の銀河を眺めている様子。

「にいさん」

じれったさを押し殺して、雪は恐る恐る少年の前へ。黙って頷く少年。

「にいさんたち、元気してた」

持参した食料を子犬に与え、食事を始める子犬の頭をしゃがみ込んで撫でる雪。

「ぼくたちなら、心配いらないよ。この子も凄く元気」

少年もにこにこしゃがみ込んで、一緒に子犬の食事を眺めている。

ところが突然、

「お姉さんの顔、いつも悲しそう」

少年がぼつりと呟く。また行き成りそないなこと言うて、

「しゃないねん。にいさん、だって雪な」

困惑顔でかぶりを振る雪。すると、

「知ってるよ」

少年が告げる。

「へ、知ってるて、何知ってんの、にいさん」

頷くように言葉を続ける少年。

「男の人、また死んだんだね」

へっ、きょとんとして少年を見詰める雪。にいさん、何でそんなこと知ってんの。そう問おうとして止め、代わりに雪はこう尋ねる。

「にいさん、死ぬて分かん。人が死ぬて、どないなことか、分かる」

うん、と頷く少年。嘘やろ、ほんまかいな。

「へえ、ほんま。にいさん、偉いな」

雪は冷やかし半分で笑う。

「ほな、雪に教えて、にいさん。人が死んだら、どないなんの」

少年はけれど直ぐには答えない、黙って川の面に揺れる星影を緊張したふうにじっと眺めている。返事を待って雪も黙ったまま。ただ子犬だけがむしゃむしゃと無心で食事中。その後少年は雪を見詰め返しながら、

「死ぬていうのはね」

「うん、何、にいさん」

「宇宙船に帰るってこと」

へっ、思わず吹き出す雪。やっぱしまだ子供やな。

「おもろいこと言うな、にいさん」

けれど少年は真顔で続ける。

「この宇宙の生きものはね、みんな銀河を旅しているんだよ。みんな自分の宇宙船を持っているんだから」

「へえ、そうなん。にいさん、物知りやな」

雪に褒められ、はにかむ少年。

「でもにいさん、何で死なな、宇宙船には帰れへんの」

「それはね、この星と宇宙空間との間に次元のギャップがあるからなんだよ。肉体を引きずったままだと重過ぎて、宇宙船は宇宙空間を飛べないんだ」

「へーえ、なんか分かったよな、分からへんような。でも、なんか雪、お陰で元気なって

きた。にいさん、雪もはよう、雪の宇宙船に帰りたい」

夜空の星を見上げる雪、きらきらと銀河が眩しい。

「それとも、にいさんの宇宙船と一緒に乗っけてもらおかな。どない、ええやろ、にいさん」

けれど返事はない、その代わり少年は立ち上がり銀河を見上げる。雪も立ち上がり、少年の顔をじっと見詰める。

「な、にいさん。雪、恐いねん、雪のことひとりにせんといて。雪、死んでもずっとにいさんと一緒にええ」

思いが言葉になるに連れ、雪の気持ちは高まってゆく。気持ちの高まりは興奮へと連なり……。けれど少年は顔を真っ赤にして空を見上げるばかり。興奮を抑え切れない雪は、少年の手をぎゅっとつかまえる。どきどき、どきどきっ、互いの鼓動が行き交う。

「な、にいさん。お願い、ええやろ」

どきどき、どきどきっ、興奮はやがて快感へと上昇する。

「にいさんの手、冷たいな、お雪さんみたいに冷たい。けど気持ちええ、気持ちええよう、にいさん。気持ち良過ぎて、どうにかなりそ」

もどかしいばかりに少年の手を握り締める雪の呼吸は既に荒い。雪を襲う快感は、このまま雪を女の喜びへと導き到達させんとする勢いであり、雪にとってそれは初めての経験、エクスタシーである。しかも相手が少年とあって、雪は自らが性的異常者ではあるまいかと悩みを覚えさえする程である。雪は立っていられず、地にしゃがみ込む。今女として至福の中にいる雪、自らが少年を男として愛していることを自覚する。そして雪は、愛を知る。

ところが愛のパートナーである筈の少年は、まだ少年であるが故、雪が感じている程には感じてくれないのも事実である。

「にいさんは、なんか感じる」

「ううん、何にも」

少年は冷めた声で冷酷にもかぶりを振るばかり。落胆する雪の中から、潮が引くように快感が去ってゆく。少年の愛を得られないと悟った心が、急激に冷めたからである。

失意の中で少年の手を雪の手が解放するその時、少年は待っていたように銀河を仰ぎ見ながら告げる。

「ほら、お姉さん、宇宙船だよ」

いつか食事を終えた子犬も、少年と同じ方角を見上げている。

「ほんま、にいさん」

気のない返事で立ち上がる雪の目には、何も見えない。けれど少年はにこにこ満面に笑みをたたえている。ほんまにいさんは、宇宙船が好きなんやな。宇宙船にさえジェラシーを覚える雪である。

「何処、にいさん。雪にも見せて」

「ほら、あそこ。たった今、蟹座ステーションに着陸したばかりだよ」

「蟹座。へえ凄いな、にいさん」

頷きながら雪は、じっと少年の目を見詰める。確かにその中に蟹座の瞬きと宇宙船の姿が映っている気がしてならない。雪は少年の瞳の中の宇宙に吸い込まれてしまいたい

と願う、少年のつぶらな銀河の海の中に溺れてしまいたいと。

(四・四) 蟹座ステーション

(四・四) 蟹座ステーション

ザヴザヴシュワー、ザヴザヴシュワー……第三惑星に於いて第三惑星人の生き死にが絶えず繰り返される如く、宇宙空間に於いても星々の消滅と生誕とが繰り返される。ただ第三惑星人の寿命は余りに短い故、未だに彼らは星々の生死と彼らの生死との間に存在する因果関係を解明出来ずにいる。即ち星々によって彼らの命運が握られ操られ支配されたるを理解出来ずにいるのである。

また月の引力によりて第三惑星に潮の満ち引きが起こるが如く、宇宙の海の星々の満ち引き、星々の潮騒は第三惑星人の悲しみの引力によって起こされる。従いまして宇宙の彼方より第三惑星の浜辺即ち第三惑星人の心へと打ち寄せたる星々の波音は、彼ら第三惑星人の悲しみが続く限り途絶えることを知らないのである……ザヴザヴシュワー、ザヴザヴシュワー。

ピポピポピー、こちらはメシヤ567号。蟹座ステーションに告ぐ、応答願います、ピポピポピー。

バビブベブー、はいはい、こちらは蟹座ステーション。メシヤ567号に告ぐ、汝如何なる理由に於いて、この蟹座ステーションをば通過せんとするや。至急返答なくば、蟹の鉄にてまっぶたつにちよん切るまで。覚悟致され、バビブベブー。

ピポピポピー、こちらはメシヤ567号。只今宇宙船の主即ち救世主はちょっくら出張中で御座いましてお許し下され。代わりに返答致します、我らはこれから、彼の太陽系その中の第三惑星に御座います Yoshiwara 駅に向かう所。永き宇宙の旅の道すがら、我ら彼の地について現在調査を進めておる最中ですが、どうやら Yoshiwara に於いて、第三惑星人の長き歴史の中でも汚点とも呼ぶべき人身売買なる行為が成されている模様。

バビブベブー、何ですと、こちらは蟹座ステーション。人身売買即ち売春ちゅうことかいな。そらまたえろう低俗且つ原始的。第三惑星人たあ、えらい未熟な生物ちゅうことでんな。

ピポピポピー、左様、こちらはメシヤ567号。現在彼の地は冬から春へと移り変わる季節にて、ネオン瞬く街の路地や、雑居ビルの屋根にも時より純白の名残り雪或いは桜の花びらも降りなん。ことに夕暮れの侘しさと来たら、宇宙の中に比類なき程。ましてや夜のネオンに彩られ、罪を重ねる第三惑星人たちの憐れさと来たら、飛んで火に入る夏の虫の如し。然りとて裏通りのゴミ箱を漁りて餌を得、何とか生きながらえる野良猫も数知れず。薄暗き路地の片隅にはネオンライトにて育つ草の花々もありて、金の為とはいへ着飾る娘たちの色鮮やかさ、年増女の厚化粧のピエロの如き可笑しさ哀しさ。更にはネオン消えたる街に昇る朝陽の眩しさ、清らかさ等々、数え上げればそれなりに何とも言えぬ風情、情緒もあるには有りなん。

そんな Yoshiwara なれども、その汚辱に満ちたる歴史を紐解けば、丸で第三惑星人の罪の歴史の縮図の如きもの。なぜに彼らは Yoshiwara なる都市を造ったか、なぜ売春を始めたか、なぜなら宇宙の他の生物に売春など有り得ない、また彼らとしてその生命発生当初は売春を致すなど考えも及ばなかった。よって何らかの理由の有る筈で、いや、そもそも売春とは罪なりか。そこら辺の所も含めて彼らの歴史と共に、よく勉強し検討致すべき必要ありと痛感しておる次第、そんな今日この頃のわたくし共です、はい。

バビブベブー、はて、こちらは蟹座ステーション。いやはや随分と長い前置きやったね。で結局何が言いたかと、メシヤ567号ちゃん。

ピポピポピー、ま要するに、こちらはメシヤ567号。結局の所現地に赴かんと、なんも分からんちゅうことです。

バビブベブー、ま難しいことはよう分からんけど、こちらは蟹座ステーション。了解了解、兎にも角にも行ってきなはれ、その Yoshiwara とやらへ、バビブベブー。

ザヴザヴシュワー、ザヴザヴシュワー、海の波音の如きノイズに掻き消され、蟹座ステーションとの交信も途絶える。後は宇宙の沈黙の中へ。宇宙船の旅はまだまだ果てしなく続くのであった、ピポピポピー、ピポピポ……ザヴザヴシュワー、ザヴザヴシュワー……。

少年の空想が途絶える。夜の闇の中にたんぼぼの種子が飛んでいる。例えば星のように例えば夏の蛍の如くに、それらが光を放てばどんなにか綺麗であろうと雪は願う。この弁天川のほとりに舞い踊るたんぼぼの種また種、さすれば遠く遙か宇宙の果てまでも飛んでゆけるのではないかとさえ思えてくる。

いつか少年の唇には歌、それは雪への子守唄である。

『家の灯り、町の灯り、駅の灯り、ざわめき、犬のなき声、子犬が足に絡み付いてきた、まるで叱られて家出する少年、ひとりぼっち泣きそうな顔こらえて、子犬とふたり……もしもあの宇宙船が、きみを助けにくる夢を今夜見たならば、きみはいつてしまうかい、この悲しき宇宙ステーションを残して』

「ほな、にいさん、お休みなさい」

雪はとぼとぼ、といってもハイヒールの音を鳴らしながら、少年の子守唄を背中に宇宙駅へと帰ってゆく。

(五)

(五・一) 四人目の客

(五・一) 四人目の客

春、桜が満開である。月が替わりお節は、エデンの東の玄関に桜を飾る。何処ぞやの桜の木からちゃっかり枝を折ってきたのではないかと、店の女の子たちはひそひそ話。ところがそんなのんびりと春の陽気に浮かれている場合ではなくなって来つつある今日この頃。というも雪の周りが俄かにざわつき、波音を立て始めるのである。

遂に警察この吉原の地に於いては警視庁が動き出し、雪の周辺を嗅ぎ回る。和田の奥さんからぼろりと雪の名が警視庁に伝わったことが発端。では警視庁、その調べの結果は如何なるものか。先ず和田の死因が桜毒であることが判明。しかし肝心の雪は現在も健康であり、念の為雪が普段定期的に検査を受ける毒島性病科医院にも確認するが矢張り問題なし。美人の女医である毒島性病科医院長毒島女史などは、

「わたくしのプライドを掛けて、彼女の検査結果に異常は認められません。これはどうしようも覆すことの不可能な医学的事実ですから」

猛然と主張し、雪の身の潔白を証明してくれる。

これでは雪を疑う根拠も証拠もなし。で結果雪は無罪放免のまっ白とされ、警視庁の捜査も打ち切らざるを得ない。これでエデンの東も雪も営業停止を食らわずに済む。しかしかといって天下の警視庁が雪の逮捕、犯罪立証を諦めた訳ではなく、桜毒を発症させるようなドラッグを所持或いは秘密の組織から入手していないか、雪に殺害を依頼するような人物はいないか等々、雪の身辺調査は密かに継続させるのである。

お節も幾度か事情聴取を受ける。お節とて正直なところ、雪に疑いを持たない訳ではない。確かに雪には何か秘密がある筈や。それでも警視庁に対しては、敢然と我が娘雪を守る。

「そんな単なる偶然でっしゃろ。よう考えてみて下さい、わたし等商売人でっせ。お客様は大事な大事な神様。お客様なかったら、おまんまの食い上げ。そんな殿方を何で好き好んで殺さなあきまへんの。自殺行為でっしゃろ、そんなん、なあ」

では、肝心の雪の事情聴取。

「雪もどうしてなんか、ほんま、よう分からしませんねん。自分でも恐ろしゅうてな、どないしたらええのんか、いっそ死んでしまいたい位です」

絶世美少女に見詰められ、切々と訴えられては流石の刑事たちも形無し。

「じゃ、兎に角今の仕事辞めちゃえば」

などと無責任に提案するも、

「そらあかん。今迄育ててくれたママへの恩返しやもん」

またたとえ警察官や刑事とはいえども、男は男。雪の魅力には適わない。つつい手を出したくなるのも男心。ところが幸か不幸か桜毒の疑心暗鬼である。下手に手など出

した日には、自分もあの世行きかも知れない。そんな恐怖が彼らの欲望にブレーキを掛け、今の所何とか警視庁の不祥事には至っていない。

こうして運良く雪の問題はまだ世間には知られず、エデンの東はしぶとく営業を続けたという訳。そんな中、雪への四人目の客が現れる。客の名は、黒石慎吾。某国立大学の教授であり、自称ノーベル賞候補にもエントリーされた経験を持つという著名な科学者であるらしい。この黒石、如何にもぶらりとエデンの東に立ち寄ったふうではあるが、実は矢張り三上たちのお仲間、闇の組織の会員である。お仲間内ではどうも都合良く、雪の良い評判だけが耳に入って来るらしい。

職業柄ピチピチむっちり太腿の女子大生との接点も多く、本音はセクハラでもして楽しみたいところではあるが、危険を冒して社会的地位を失いたくはない。何とか我慢して社会の表では真面目な大学教授を演じ、裏ではお仲間たちとしっかりと欲望を満たしている。

どちらかと言えばロリコン、ピチピチの若い娘に目がない。弾けるようなナイスボディに埋もれながら腹上死出来れば、これ以上の至福はないと夢に描いている愚か者である。もう還暦を過ぎた爺さんながら、困ったことに性欲は一向に衰えない。お節との交渉を終えた黒石は、いざ宇宙駅へ。

宇宙駅のドアが開くと、そこには燦然と光り輝き天照大神かと思紛うばかりの我らが絶世美少女雪。初対面の黒石は一目見て、くらくと眩暈を覚えんばかり。その欲望は弥が上にも掻き立てられ、最早爆発寸前。

「おお、お嬢さん、何ともお美しい。そのはちきれんばかりの若さに加え翳り或いは妖艶さといった大人の魅力をも兼ね備えたる例えれば散りゆく桜の花の如き可憐さ。正にわたくし好みで御座います」

ごくんと生唾を呑み込み、にたにたと笑みを隠しきれない黒石に、何や気色悪い爺さんやなと思ながらも「有難う、お客さん」

愛想良く作り笑いの雪。その時雪はお雪さんが例によって『こいつをころして』と発するのを聴く。

「ささ、服をば脱ぎ捨て、その隠されたる美肌をばお見せ下され」

「ええよ。でもお客さん、ひとつだけ警告があんねん」

「警告、それはまた物騒な。では伺いましょう、その警告とやら」

既に雪の腕やら太腿やらをいじくりつつ問う黒石。

「実はな、雪、今迄三人お客さん相手したんやけど。その三人が三人共なあ……」

名前は出さねども今迄の経緯をちゃんと説明する雪。

「成る程。それはまた偶然で片付けるには余りに不可解なこと。この万能の科学の支配する世の中であって何とも考え難いことでありますな」

腕を組み思案顔の黒石。

「これは何か深き理由のある筈。もしもこの謎が解明出来た暁には、遂にわたくしもノーベル文学賞ではありますまいか」

「文学賞でええの」

「ごっぼん。良いから良いから、細かいことは気になさらんように。それはさておき、お嬢さん」

じっと雪を見詰める黒石。

「夜は短し、恋せよじじい。という訳で、ささ、この夜をば思う存分楽しみましょうぞ」

雪を相手にロリコン魂は十分に満たされずとも、腹上死の方の願いなら、もしかしたら叶えてくれるやも知れないと淡い期待を抱く黒石。何しろ雪と関係したお仲間の三人が三人共既に死に、この世を去っているのだから。

「お嬢さん、警告の件は了解しました。しかしながら、わたくしには何ら問題なし、恐るるには至りません。むしろ半月と言わず、どうせなら今この場でわたくしを昇天させて頂きたい位。如何です、昇天というのは比喻でなく、その実際に……」

これには吃驚の雪。

「何言いはんの、お客さん。そんな無理に決まっていますな」

けれど黒石の顔は真剣そのもの。それに加えお雪さんもまた叫ぶ、『こいつをころして』と。従ってその途端雪の理性は何者かに乗っ取られたかの如くに、自分の感情が制御不可能に陥る、ほな、しゃないなど。

「雪のこと買うてくれはんのは、ほんまに嬉しい。でも知らんで、どないなっても。雪はちゃあんと警告しましたよって、警察にはそう証言しますで」

「警察。ああ、構わんよ。警察など、いざとなったら役に立たぬのは衆目の事実。それより早く二人手に手をとって、ヘヴンへと参りましょう」

何がヘヴンやねん、あほか、このじいさん。雪は苦笑い。

こうして黒石は精も根も尽き果てる程、雪の肉体の中に溺れ遊び、年甲斐もなく幾度となく昇天を迎えたのである。けれど残念ながら肝心の夢、腹上死は果たされず、夜明け前瘦せた背中に哀愁を漂わせながら、とぼとぼと宇宙駅を後にする。

ひとり残された雪は、夜明けと共に眠りに落ちる。また夢に沈んでゆく、幼い少女時代の夢へと。

(五・二) 夢

(五・二) 夢

雪の降り頻る何処とも知れない夜明け前の景色が静止画のように続く。その後景色は薄れ、白いチャペルに似た建物が現れる。保育園である。少女は一日の大半を、同じ年頃の子供たちと共にそこで過ごしている。女、少女を川から拾い養女として育てる女が朝と夕、少女を送り迎えしている。その為少女が女の経営するソーブランドで過ごす時間はめっきりと減ってしまい、保育園が休みの日曜日だけ店に遊びに行く程度。少女が好きだったソーブランドたちとの交流も、花街に灯るネオンライトを見る機会も今は少ない。

物心ついて初めて目にしたネオンライトの眩しさは、幾つになっても忘れ難い。そこは丸で七色の光の海であり、光の中を泳いでゆけば何処か見知らぬ遠い宇宙の星に辿り着けるように思えてならない。しかしその眩しさは虚飾であり、そこで働くソーブランドたちも彼女らと遊ぶ客も皆、その人生が決して幸福ではないことを敏感に感じる少女でもある。どうしようもない悲しさが、雪の日に空を覆う灰色の雲のように、吉原の街全体を支配しているようで、幼いながらも少女は気が重くなるのを禁じえない。

そのうち少女は保育園が休みの日でも、女の店には行かず近所の友達と遊ぶようになる。こうして少女は次第に吉原から遠ざかるのだが、母親である女がそれを望んでいるのは言うまでもない。

ところがである。少女が遊ぶ友達は、すべて女の子。まだ異性を意識するには早過ぎる年頃にも関わらず、男の子とは絶対に遊ばない。なぜか。少女は病的なまでに男を嫌ったからである。保育園内でも同様に、従って男子と手をつながねばならないお遊戯やお散歩の時間を少女は嫌悪する。店の経営に忙しい女は、そんな少女の特異さに気付かない。

人生とは皮肉なものであるというか必然として、そんな少女でありながら男子の人気者である。なぜなら既に少女は絶世美少女の片鱗を見せており、お人形のような美しさ、可憐さは他の少女の追随を許さない。

少女が成長するにつれ、女は時間を作って買い物や散歩に少女を連れて出掛けるようになる。或る日季節は春、女は少女の手を引いて川を訪れる。女が少女を拾ったあの川であり、それは少女が物心ついて初めてのことである。

女と少女は河原に佇む。少女はその川の流れを目にした瞬間、はっと息を呑む。不思議な感動が少女を襲う。どきどき、どきどき、鼓動が高鳴り、切なく胸が締め付けられるような懐かしいような思いが押し寄せる。少女は混乱するも、その感情は抑え難い。川のせせらぎ、川の水の冷たさそしてぬくもりを以前体全身で感じたことがあるような、否それどころでなく、自分はその川の中で生まれたんちゃうやろかとさえ思える程である。どきどき、どきどき、懐かしい、ただ懐かしくてしゃない、何でやろ。幼いながらも少女は答えを求めて懸命に思いを巡らす。

それは、物心ついて初めて雪を見た時の感動にも似ている。あの冷たさ、そしてあたたかさ、何よりも懐かしさ。降り頻る雪の一片一片を掌につかまえてはしゅっと融けてゆく時のそして儂さ。すべてが懐かしい。あの時も自分は雪から生まれたんちゃうよるかど錯覚さえした、と振り返る少女。

けれど女は少女に何も告げない、一言として語らない。お前はな、ここで拾われたんやで。わてがここでな、この川を流れゆくお前を拾ったんや。それは寒い寒い冬、雪の降り頻る朝やったなあ、などと決して口にはしない。何も語らず女は少女の手を握り締め、ただ黙って川の流れを見詰めるばかり。どきどき、どきどき、女の手ぬくもりが女の鼓動と共に少女へと伝わる、少女の鼓動を包むように。

その時少女は何も語らない女の横で、川と雪とが自らに与える郷愁の意味を解くのに懸命である。忘却した記憶の海を彷徨い、捜し出そうとしてもがく。もがくけれど、いくらもがいてみても、思い出せはしない。歯がゆさに小さな胸が張り裂けそうになる。それでも少女は、決して泣かない。思い出せ、思い出して、わたし……。

はっと目を覚ます雪、汗が零れている。額の汗を拭った瞬間、夢の記憶は失われ、ただぼんやりとした悲しみだけがまた残される。

桜も散り掛けた月の終わり、お節が宇宙駅のドアを叩く。まだ朝の時刻、驚いて寝惚け眼で飛び起きた雪がドアを開けると、そこにはお節の他に重々しく突っ立つ警視庁の面々。

「何やの、ママ。こんな早くに」

「こちらの方々がな、どないしてもあんたに用があんにゃて」

警察への対応も最早慣れたもので、お節は落ち着き払っている。

「何でっしゃろ」

雪もまたお節に負けず劣らず落ち着いたもの。警察官が答えるより早く横からお節が口を出し、

「こないだのお客さんな、あんたの。大学の先生やて」

「知ってる」

「ほか。その先生が、死にはったそうや」

淡々と告げるお節、もうその声に驚きはない。雪とて同じである。

しかしここは警察の手前、雪は、そこら辺の小娘の姿を演じて見せる。

「ええっ、うっそーっ、ほんまかいなママ。どないしょどないしょ、雪恐っ」

ぶっ、何や下手なお芝居、却って怪しまれるで。お節は内心苦笑い。

「何であんたのお客さん、みんな死にはんやろな。この部屋、呪われてんちゃう。一遍お払いしてもらうか」

そんな母娘の会話には乗らない警視庁の連中。彼らも、仕事だから仕方ないけど面倒なことには関わりたくない、そんな顔をしている。

「雪、今回もちゃんとお客さんには警告したんです。それでもええから言わはって」

目を潤ませて、といってもお芝居で、警察官に訴える雪。それを見てお節、恐あっ、嘘泣きかい、ほんま女は恐ろし、とまた苦笑い。早速調査班が、指紋、不審物等々、宇宙駅

をくまなく調べる。

黒石の死因もまた、桜毒。黒石と接触した際の言動について、事情聴取が再びお節と雪に対して行われる。雪はもうへとへと。警視庁の連中がやっとエデンの東を引き上げた時は、もう既に昼下がり。

宇宙駅に残されたお節と雪の二人。

「あんた、ほんま心当たりないの」

お節の問いにかぶりを振るばかりの雪。それでも心配でならないお節は、続けて問う。

「な、あんた恐ない。もういい加減こないなこと止めよ思わへん」

ところが、

「ちっとも恐ない、雪平気や」

けろっとした顔で答える雪は、余裕の笑みさえ浮かべる程。ほんま、恐一っ、怖い女になってもた、こないだまで女子高生だったというのに、もうまったくの別人や。背筋がぞっと凍るお節は、とっとと宇宙駅を後にする。

(五・三) 子犬と少年

(五・三) 子犬と少年

宇宙駅にひとりの雪。思うは死んだ黒石ではなく、子犬と少年のこと。実は雪、月の初めより弁天川に行くのを止めている。なぜなら、警察が動き出したのに気付いたから。このこと弁天川へなど出掛ければ間違いなく尾行されるであろうし、少年の存在を知れば警察の手はあれこれと少年にまで及ぶに違いない。

子犬と少年のことは誰にも触られたくない、知られたくない、雪にとって大切な宝物であり秘密であり、今や雪の唯一の心の支えでもある。そんな汚れなく美しき宝石が誰かの手によって汚されてしまうことが、雪には耐え難い。なぜなら今の雪自身には何ひとつ純粹なるものなど一欠片も残されていない、身も心も汚れていると自分でも悟っているから。だから守りたい、せめて少年の純粹さだけは、どうしても守りたい雪である。

けれど今日は、無性に会いたくてならない。死ぬ程の疲労困憊と、黒石の死を知ったことによる憂鬱。それに今迄、誰かが死んだことを知った日あの場所、弁天川の河原にゆけば、子犬と少年は必ずいてくれたのだから。警察が調べるかも知れないとはいっても、少年は少年、所詮まだ子供である。幾らあの少年を調べたところで、手掛かりなど何もつかめる筈はない。なぜなら当の雪ですら、なぜ自分との関係によって男たちが桜毒に感染し死んでゆくのか、今もってその理由が分からないのだから。

よっしゃ、行ったら。雪は弁天川に行くことを決意する。夜の訪れを待って、宇宙駅を出る。変装することも考えたが、ばれたら却って怪しまれる。だから正々堂々とコートにミニスカ、ハイヒール、いつものファッションで決める。春とはいっても夜はまだまだ肌寒く、コートなしでは心許ない。

エデンの東を出て、ネオン煌めく吉原の街を颯爽と歩く雪。ほら、来た来た。足を止め振り返ると、背広姿の男二人組がぴったりと後を尾行している。そんなことは気にもせず、まずはコンビニに寄り子犬の食料を購入。後は一路弁天川へ。でも警察が付いて来るのに、あの子たち姿を現すやろか。歩きながら、不安がよぎる。

やがていつものように、弁天川のせせらぎが耳に届く。岸边には小さなふたつの光。ああやっぱりいてるわ、どないしょ。雪は川に沿った桜並木の通りで一旦足を止める。桜は既に満開を過ぎ今はひたすら吹き荒れる風に花びらを散らして、川沿いは一面桜の雨。川岸には草が生い茂り、昼間は色とりどりの花が咲いて、虫たちが忙しく飛び交っている。

ぼおっと立ち止まったまま、灰かなふたつの光を見ていた雪の耳に「ワン」と子犬の鳴き声。雪に気付いたのだろうか。と同時にふたつの光は明滅を始める。しかもその速度は徐々に高まり、今にも消えてしまいそうである。慌てた雪は一気に駆け出す、カタカタ、カタカタッとハイヒールの音が辺りに木霊する。雪の足音が近付くと共にふたつの光は失われ、河原には子犬と少年がその姿を現す。

「ワン、ワン」

雪に飛び付く子犬。にこにこいつものようにその様子を眺めている少年。

「にいさん、元気してた」

早速子犬の食事、雪はしゃがんで子犬に食料を与える。少年も雪の隣りにしゃがみ込んでしばしにこにこしていたけれど、不意にその顔が悲しみに曇りじっと雪の横顔を見詰める。

「にいさん、なんか雪の顔、付いてる」

気になる雪は少年に問い掛ける、けれどかぶりを振る少年。

「お姉さんの顔、今夜も悲しそうなんだもの」

そら、しゃない。諦めたように雪が答える。

「だって、にいさんな、また男の人死んでもた」

ため息の雪に、少年もまた困惑の相を浮かべる。二人は黙って子犬を見詰める。

本当なら雪は、少年の手をぎゅっと握り締めたい。けれど恐らく何処かから、さっきの男二人組が覗いているに違いない。ここはじっと堪える雪。小児性愛者などと思われてはかなわない。とはいっても今となっては正直雪も自信がなくなっている。こんな少年に興奮するなんて、正に小児性愛ではないか。

「な、にいさん。桜綺麗なな、あんな一杯散って。あっち行って花見しよ」

子犬が食事を終えると、雪は少年を誘う。少年は黙って頷く。立ち上がり少年の手を引いて、河原から桜並木へと移動する。尻尾を振って子犬も後から付いて来る。並木の中の一本の木の陰に例の二人組が身を潜めているのに気付いた雪は、彼らから離れた木の下で仲良く少年と腰を下ろす。

「桜の木の下にはな、にいさん。死体が埋まってんやて。そやさかい桜の花は綺麗なんやろか。きつとな、にいさん」

じっと雪の顔を見詰める少年を、雪もまた見詰め返して、

「死んだ人の顔は、みんな綺麗なんやろなあ。そやさかい、にいさんな、死んだらみんな、仏様て呼ばれるんちゃう」

黙って頷く少年。

「こんな夜は、お酒でも飲みたいな、にいさん。ほやからはよう、にいさんも大きくなって一緒に飲も」

すると「ワン」少年と雪の間で子犬が鳴く。

「そやさ、子犬のにいさんも一緒にな」

くすくすっと笑みを零す少年。

「笑い事ちゃう、にいさん。ほんま、はよ大きくなって立派な男の人になって、な、雪のことお嫁さんにして」

ぼっと少年の頬が赤らむ。

「御免、御免、冗談や。でもにいさん、そんな時雪もう、ええおばちゃんやな」

ところが少年はかぶりを振って、

「そんなに待たなくても、ぼくなら直ぐに大きくなるよ」

「へえ、ほんま。そら頼もしな、にいさん」

少年の手を握り締める雪。汗ばんだその手がいじらしい。くすぐったそうに笑う少年。

その時微かな物音がして、少年の顔から笑みが去る。少年は立ち上がり叫ぶ。

「そこのおじさんたち、もうばれてるんだよ」

すると例の二人組の男たちが、さっと何処へともなく逃げてゆく。

「ずっとお姉さんのこと、見張っていたね」

えっ、知ってたん。じっと少年の顔を見上げる雪。

「でも大丈夫。お姉さんなら絶対に捕まらないから」

絶対にて、捕まらへんて、何で断言出来んの、ほんま不思議な子や。

男たちが遠くへいなくなると、待っていたかのように少年は空を見上げる。桜吹雪の上空に瞬く銀河を仰ぎ見る。星々の瞬きの中に何かがきらりと光る。

「ワン」

子犬も光に向かって吠える。

「ほら、宇宙船だよ」

「にいさん」

少年の声に頷くように立ち上がる雪。

「何処。な、にいさん、今夜は何処いてはんの、宇宙船」

「ほら、あそこだよ。今夜はね、蠍座ステーションに停泊するみたいだよ」

蠍座、蠍かいな、縁起でもあらへん、蠍の毒に桜毒の毒。苦笑いの後、少年の瞳をじっと見詰める雪。見ているのは少年の瞳なのか宇宙の銀河なのか、雪には判断がつかなくなる。ただその中に、確かに一艘の宇宙船が浮かんでいるのが見える。今はただ少年の瞳の中に映る、銀河の海だけが雪を包み込んでいる。

(五・四) 蠍座ステーション

(五・四) 蠍座ステーション

ザヴザヴシューワー、ザヴザヴシューワー……宇宙の中に一際妖しく燃ゆる蠍の炎。されど暗黒の宇宙をば照らさんとして蠍は燃烧するにあらず、怒りと悲しみと憎しみとによって燃え滾るなあり。殊にも憎しみの炎は毒を放ちて、宇宙に漂う星屑共をば飲み込まん。さすれば蠍は何故に永久とも思える年月、そげに憎しみの中に身を置き続けるや。それは宇宙に悪の文明はびこり、栄華を誇り続ける故。蠍は今宵も怒り、嘆き悲しみ、憎しみの毒をば宇宙の闇へと撒き散らす。目には目を、悪には毒を、蠍の毒にて悪を滅ぼさんと願いつつ、されど願いは未だ叶わず、憎しみだけが万年雪の如く降り積もる。その苦々しき宇宙の惨状の中で、悪は笑い蠍は嘆く。誰ぞ蠍の涙を拭ってくれる者はなきや、救世主はまだか、救世主はいずこ。いつまでも蠍の絶望を見棄てず、どうか幸いとやすらぎの日々を与え給え。

バビブベブー、こちらは蠍座ステーション。メシヤ567号殿に告ぐ。そなた宇宙塵の噂によれば、太陽系第三惑星まで行かれるそう。お止しなさい、悪いことは言わんからお止しなさい。彼の惑星は地獄でせ。第三惑星人の面を被った鬼畜外道共が、第三惑星人をば支配し、好き勝手し放題。酒、女、金、犯罪、殺人、戦争、何でも御座れ。悪いこと言わねから、お帰りなさい、引き返しなはれ。救世主の都、宇宙のパラダイスへと。以上、バビブベブー。

ピポピポピー、これはこれは蠍座ステーション殿、有難き助言痛み入ります、こちらはメシヤ567号。ただ今救世主は出張中にて失礼致します。どうやら今宵は宇宙も激しい嵐の様子、その中を一晩のお宿かたじけない。嵐の治まるまで、しばし長旅の骨休みお許し下され。早速では御座いますが、我ら、第三惑星は Yoshiwara 駅へと参ります。貴殿のご忠告は御尤も、なれど我ら、そうと分かっておりまして参らねばなりません。なぜなら売春について、最後の審判をば下さねばならぬ為です。

ええ確かに一握りの鬼畜外道、其奴等が上手なことに例えば経済だとか貨幣制度だとか民主主義だなどと聞こえの良いものをこしらえ、第三惑星人全体をたぶらかし、好き勝手支配しております。悪には悪が集い来るもので、マフィアは勿論のこと、政治、経済、芸能、司法に至るまで、その道の野心を持った連中が、闇の支配者の下へぞくぞくと集結し、裏で蠢き暗躍し、悪の華をば咲かせているのが第三惑星人社会の現状。その中であって一際毒々しき仇華こそが何でありましょう、売春に他なりません。

彼の Yoshiwara も見た目はネオンチカチカ、厚化粧の娘たちが色鮮やかに咲き誇ってはおりますが、裏を覗けば第三惑星人の生き血を吸い尽くすバンパイアの如くヤクザ共が小娘たちの折角の稼ぎをばねこばばしておいて、それがさもご立派なビジネスモデルだとか経済だと申してふんぞり返っている。正に強き者が弱き者から搾取する、誰かの犠牲によって初めて繁栄の成り立つ、これが貨幣制度下に於ける典型的民主主義の正体であり敗北であり、これこそが悪の文明システム。かくて衰れなるかな厚化粧の娼婦共は身も心もぼろぼろのぼろ雑巾の如く使い捨てられ、年老いてゆくのです。

ならば売春やら Yoshiwara などさっさと滅ぼしてしまえば良いではないか、そんなことあんた、救世主さんならお茶の子さいさいと思われまじょうが、確かに滅ぼさんとするればほんの一瞬、赤子の手を捻る、玩具の積み木を崩す、或いは端から幻影でしかない砂上の楼閣をばふっと一息で吹き消してしまうようなもの。されど悲しいかな、救世主にもひとかけらの心有りて、情けやら憐憫やらまた感傷などといった雑念が、どうも邪魔をしてしまいます。邪魔の魔も悪魔の魔ならば、何とも面目ない、また致し方なき事かいな。

悪の中にも、鬼畜外道、バンパイア共の心にも、勿論心などという代物が奴等めの中に存在するならばという前提で、彼らにもひと滴のやさしさは無きや、温もりは、幼き日に見た清き夢の記憶は残っておらぬものかと、つつい淡き期待をば掛けてしまいます。Yoshiwara の夕映えに溶けるネオンやら、ソーブランドのビルの上にも瞬く銀河やら、夜の罪をば洗い清めるが如く朝のアスファルトの路地に舞い落ちる桜の花びらやらが何ともついいとおしく、自らは腹を空かして野良の子猫に餌を恵む娼婦共の情けに満ちたる姿などをば垣間見ますと、もうどうにもいけません。ついもう堪らなくなって、こうしてまだ上手く迷いを断ち切れずにいる愚かな救世主で御座います。

なれどそうそう迷ってもおられません。蠍座ステーション殿のお怒りと悲しみそして憎しみも御尤も。それに加えひとりの娘、第三惑星 Yoshiwara に咲く少女の運命も掛かっておりますから。と申しますのも本来ならばミスユニバースに選ばれてもおかしくない程の美貌と、一面か弱き一輪の野の花の如き可憐さを持ち合わせたその娘が、何故かそのか弱き肩に背負い切れぬ程の憎しみを背負いて、ただ今たったの一人ぼっちで巨悪連中へと闘いを挑んでおる最中で御座います。このままだと娘の身も危うき故、どうしても我ら急いで第三惑星 Yoshiwara 駅へと向かわねばなりません。どうぞどうぞ、何卒ご理解賜りますよう宜しくお願い致します。

バビブベブー、成る程、そなたのお気持ち痛い程にお察し致します、こちらは蠍座ステーション。ならならばメシヤ567号殿に告ぐ。今宵宇宙はまだ、泣かせて下さい、蠍の涙の土砂降りの中、もうしばらくごゆるりとお過ごし下さいませませ。なぜなら明日になれば宇宙も晴れる、晴れて良き旅立ちの朝となりましょうから。それではご機嫌よう。

ザヴザヴシュワー、ザヴザヴシュワー、宇宙の旅路はまだまだ長いなれど、それでも

一星一星着実に、Yoshiwara 駅へと近付きつつあるのもまた確か。かくして果てしなき宇宙船の旅はこれからも続くのである。ピポピポピー、ピポピポ……ザヴザヴシュワー、ザヴザヴシュワー……。

気付いたら雪の耳には、少年の子守唄が聴こえている。

「ほな、またな、にいさん。おやすみ」

子守唄を背に雪が弁天川の河原を去ってゆくと、何処とも知れず潜んでいた男二人組が再び姿を現し、音もなく少年へと近付く。ところがそれより早く、子犬と少年は蛍の如く体中から光を発する。その目映さに男たちは堪らず立ち止まり、腕で目を隠す。すると光は弱まりそれからすーっと失われ、男たちが再びその場を目にする時、もう子犬と少年の姿はない。にも関わらず何処からか少年の歌声が、しばし男たちの耳にも聴こえ来るのである。

『……高層ビルの灯り、空港の灯り、宇宙船でもやってきそうだ、寒さこらえて待っていよう、辛さも悲しみもこらえて、子犬とふたり……もしもあの宇宙船が、きみを助けにくる夢を今夜見たならば、きみはいつてしまうかい、この悲しき宇宙ステーションを残して』

ただ弁天川の河原には、最後の桜の花びらたちがゆらゆらと夜風の中に舞っている。

(六)

(六・一) 五人目の客

(六・一) 五人目の客

桜は散れど、春の陽気はまだまだ続く吉原の街。月が替わりお節は、エデンの東の玄関にチューリップを飾る。雪への客がない為表面上は警察の動きも特に見られないまま、日々が穏やかに過ぎてゆく。巷はゴールデンウィーク、一般市民の住む住宅街では景気良く風に泳ぐ鯉のぼりの姿が見られ、街路には皐月の花が色付いて街を飾り、一年でも一番長閑なる季節である。

警察の動きは影を潜めているものの、雪の存在は徐々に吉原の街へと知れ渡り、話題の中心となりつつある。しかもその評判たるや頗る悪い。なぜか、先ず料金。あんな素人に毛の生えたような小娘が一晩百万円だって、あほかと誰もが腰を抜かす。笑わせんじゃないわよ、あんた、こちとらやってらんないわ。プライドの高いベテラン泡姫やら、芸能人崩れ、AV女優連中が対抗意識剥き出し。

その程度の騒ぎなら良いけれど、客が連続して死亡しかも桜毒に感染して、とあっては吉原の経営者連中も黙ってはいられない。悪い噂が立ち吉原全体があたかも桜毒の感染源であるかのように誤解され客足が遠のいては、街の死活問題にもなりかねない。そうなれば吉原を影で牛耳る裏社会の連中だって大人しくしてはいまい。

そこで月に一回定期的に開かれる吉原の経営者会議にて、お節は質問攻め。

「なあ、お節さん。あんたとはいもう長い付き合いになるけどねえ……」

前置きの後、

「言い難いんだけど、あんたの娘どうなってんの」

「一体どういうことなんだ」

「ちゃんと説明して頂戴」

「こっちだって迷惑なんだよ」

「兎に角どうにかしてもらわんと」

丸で針のむしろ状態、仕方なくお節は手を付いて平謝り。

「皆皆様には多大な御迷惑をお掛けしまして、大変申し訳なく思っております。わてかてかわいい自分の娘やさかい、ほんまは働かせとうないんやけど、こればっかしは本人がどうしてもやりたい言うもんやさかい、すんまへん」

「じゃ桜毒の件は、どうなってんの」

「へえ、それがさっぱり訳が分からんのどす。何しろ雪は昔っから一度としてその病気には感染したことありまへんもんで。何でこないなことになんのか、こっちが聞きたい位ですわ」

「そんなこと言ったってよ、現に死人が出てるじゃねえか、おい」

「はあ、そやから、死にはった殿方皆さん、雪のような小娘にぼんと百万出して下はるようなお方ばかりでっから、それなりに遊んではったかと思ひます。失礼ですが元々何ら

かの御病気をお持ちだったんちゃいますやろかと。それが雪と遊んだタイミングで、たまたま発症したんかなあと……」

「たまたま、ねえ」

「そうとしか、言い様がありまへん」

如何にも苦しい弁明に終始するお節。

「ま、確かに自宅の雪ちゃん、今でもピンピンしてるからなあ」

「そうなんでっせ、不思議でっしゃろ」

「まあねえ」

一同顔を見合わせたため息。まあ、まだマスコミに騒がれたり、広く世間様に知れ渡った訳でもなし、という訳で、

「じゃ兎に角、気付けて下さいよ」

注意を受けたばかりでその場はお開き、何とか切り抜けたお節。

では、渦中の雪の方はどうかといえば、あっけらかんとしたもの。いつも宇宙駅に閉じこもった生活だし、たまに表に出て白い目で見られたところで気にするような雪ではない。堂々といつものミニスカにハイヒールの出で立ちで吉原の街を闊歩する。そんな雪に街の連中も文句の一つや二つは言いたいけれど、何しろ相手は絶世美少女、かつ今や客が次々と死んでゆくという最強魔性の女。何となし緊張と恐怖、声を掛け辛く無言で見送ってしまう。

そんなお節と雪の許へ五月の陽気に誘われたのか、ふらっと五人目の客が現れる。まさかと思いつつ、先ずはお節の面談。これ以上騒ぎを大きゅうしとないお節としては、雪には内緒、何とか難癖付けて端から断る腹積もりでいる。

ところが相手は相手に、一癖も二癖もありそうな猛者ときている。その名も海野保雄、職業は自称作家。自らエログロ、変態小説の大家、文豪であると豪語し、ご丁寧に手作りの名刺まで手渡す始末。幼年期の屈折した性体験が基で、三度の飯より変態プレイが好きなのだと喜々としてお節に語る。

「成る程、そうでっか」

では、しめしめとお節。

「折角でっけど、女の子への変態プレイは厳禁、御法度ですねん」

ところが海野、にやっと笑って、熱い眼差しをお節に向ける。

「なら、わしへの変態プレイはOKなんやな」

「はーあ」

「そやから女王様になって、わしんこと、とことん苛めて苛めて苛め抜いてんか」

ああ、しもた、そっちの方がいなと後悔しても後の祭り。これで断ったら、逆上して暴れまくりそうな海野。

仕方なくお節は、海野を宇宙駅へと案内する。ドアをノックする前、お節はぼろっと漏らす。

「でもお客さん。これ脅しやのうて、もしかしたら女王様の愛の鞭でな、ほんまに御昇天遊ばして、そのまんまあの世行きてことになるかも知れまへんで」

すると海野、

「ああ知っとる、知っとる。あいつらやろ」

あいつらで……。何で知ってんやろ、まだ公にはなってへん筈やのに。もう訳分からん、この変態男。ええい、どうにでもなりなはれと匙を投げるお節。宇宙駅のドアをロックし、出て来た雪にさっさと客を引き渡す。丸で魔女に差し出す生け贄の如く。

「いらっしゃいませ」

にこっと海野を迎え入れる雪。例によって警告と称し、三上組長から始まる今迄の経緯をちゃんと話して聞かせ、

「お客さん、ほやから、止めといた方がええかも知れへんで」

親切に海野に忠告する。雪としても騒ぎを大きくしたくはないから、しばらく商売せずに大人しくしてきたい気持ちもある。けれど客と対面するとどうしてもその瞬間、『こいつをころして』とお雪さんが叫ぶから止められない。

「ほんまええの、雪知らんよ。一応警告したさかい、恨まんといてや」

憂鬱な顔で告げる雪に、あっけらかんと答える海野。

「ええねん、ええねん。実はあいつらから話聴いって、何や分からんけど、どないしてもきみと遊びとなつてしもてな、わざわざ関西から夜行列車ちゃう夜間飛行機で飛んで来たんや。何でか言うたらな、騒ぎになつてもたらもうきみとは遊べへんようになるやろ。ほやから今のうち頼むわ」

要するに、海野も今迄の客のお仲間、闇の組織の恐らく下っ端下層階級ではあろうが一応構成員という訳。

従順な性奴隷として雪の前にひれ伏し、女王様からのお仕置きを今か今かと待ち侘びる愚かなる子羊、海野。

「な、お願いします。わしもう普通の刺激じゃあかんねん、スリルがないとな。ま、ロシアンルーレットみたいなもんや」

その哀れな姿を前に、またもやお雪さんが叫ぶ。

『こいつをころして』

しゃない、もう、行くところまで行くしかあらへんな。

覚悟を決めると雪、後は無慈悲残酷なる女王様として海野の前に君臨。ご奉仕を強要し、鞭、蝋燭など海野持参の変態グッズで海野をいたぶる。海野は虐待されるマゾの快感に身悶え酔いしれ、一晚のうち幾度となく狂ったように絶頂を迎える。最後に二人交わって、夜明け前海野は遂に果てる。

しばし海野は眠りを貪る。死んだように横たわっているけど、寝息でまだ生きていると分かる。その姿を見ていると無邪気な子供の寝顔のようで、寝息もまた儂げでいとおしく、男とは何て哀れな生きものなんやろかと同情を禁じえない。夜が明け、海野を揺り動かして起こすとタクシーを呼んで、見送る。

「ほな、元気でな」

再び宇宙駅でひとりに戻る雪。ああ、またやってもた。それにしても女王様など初めての経験であり、相手が望んで狂喜するとはいえ、誰かを鞭で叩いたり蝋燭の蝋を垂らしたりなど、思い出だけで気分が悪くなる。雪は吐き気を催し、その日食べたものすべてを戻すほど嘔吐する。

気分が持ち直した雪は目映い五月の朝陽の中、そのまま倒れるようにベッドへ。ぐっすりと眠りに落ちる。眠りの中では夢がまた雪をとらえる、雪をつかまえて離さない。夢

は雪を少女時代へといざなう。

(六・二) 夢

(六・二) 夢

夜明け前何処とも知れない雪の降り頻る景色がしばし沈黙の中に続いた後、眩しい空の青さが窓の向うに広がっている。窓とは、教室の窓、そこは小学校である。授業中、少女はいつもぼんやりと窓を見ている。

女に手を引かれ、少女は無事小学校の門をくぐる。一年生の時から少女は男子の人気者、うじゃうじゃ周りを取り囲まれる。ところが相変わらず少女は男嫌い、一向に男子に関心を示さない。他の女子生徒は少女がお高くとまっているようで面白くない。日を経るに従い女子生徒たちは少女から離れ、少女はクラスの中で孤立してゆく。

それでも絶世美少女の片鱗は事ある毎にきらりと光り、お人形のような愛苦しきは健在である。加えて聡明でもあり、学校の成績は優秀で文句のつけようがない。誰からも一目置かれる孤高の人的存在になる。

そういった一切を、少女自身は余り気にしていない。性格は穏やか、暢気で楽道家。家では唯一の家族であり母親である女を大切に、心優しい娘として育つ。女も最早少女を吉原の街に連れて行くことはなくなり、家の職業については学校にも少女にも曖昧にサービス業とだけ教え、詳しくは語らない。それでも低学年は何とか波風も立たず無事時は流れ、少女は順調に進級を重ねる。

五年生になると、絶世美少女振りに加え女としての色気も香り始める。相変わらず頭も賢く真面目に勉学に励み、男子には変わらず絶大なる人気を誇る。なのに病的なまでの男嫌いに変化はなく、男子には無愛想。そんな一貫して男子に冷たい態度を取る少女に、少女を傲慢と嫉妬していた女子生徒たちは徐々に少女との仲を回復させてゆき、一転少女はクラスの人気者に。友達が出来て、少女は友達の家遊びに出掛けるようになる。

すると他人の家庭の様子が、自分の所と大きく違っていることに気付く少女。先ず父親の存在、それから兄弟姉妹の存在。またどの子の母親も若く、自分の母親とは大違い。どう見てもお婆ちゃんにしか見えない自分の母親に少女は疑問を抱き始める。ママて本当に自分のママなんやろか、ママが本当に自分を産んでくれたんやろか。けれど毎晩深夜仕事に疲れて帰宅する女に対し、少女は疑問をぶつけることが出来ないでいる。本当のことを知るのが怖い、それにママを傷付けてしまうんちゃうやろか。

少女は曖昧な気持ちのまま、悶々とした日々を過ごす。何でパパいてへんのやろ、もしかして自分は養女かも知れへん。もしそうだとしたら、本当の親が何処かにいてる筈。ああママに確かめたい、でもでけへん。あれこれと思ひ煩う少女は、勉強も手につかない。

何処か遠い自分の知らない町に、自分の本当の親がいるかも知れない。ぼんやりと教室の窓から遠くを見ていることも多くなり、穏やかで天真爛漫だった少女は時より暗い表情さえ見せるようになる。本当のパパとママて何処にいるんやろ、どんな人たちなんやろ、何で自分のこと養女なんかに……。

はっと目を覚ます雪。まだ残る夢の余韻の中で、懐かしさと切なさが胸を締め付ける。まだ子供だった、何にも知らない或いは何もかも忘れていた自分がいじらしくてならない。と同時にもう二度とあの頃、少女時代には戻れないことも悟る。尤ももう戻りたいとも思わへんけど、と苦笑いの雪。

時より夏の暑さも顔を覗かせる月の終わり、青ざめた顔をしてお節が宇宙駅のドアを叩く。変態作家海野が死んだことの知らせである。エログロ三流作家のこと、新聞の三面記事の片隅にちょこっと載っているだけの、ワイドショーにも取り上げられない小者の扱い。しかも死因は不明とされている。

「ママ、よう見付けたなあ」

雪も感心するお節の注意力ではあるが、すっかり神経過敏になったお節は、海野が来店した日以降ずっと主要な新聞、雑誌、TVのチェックを怠らずにいたという訳。

「ま、しゃないわな。ご本人が望みはった結果やさかい」

肩をすぼめるお節に、

「そやねん、ロシアンルーレットとか言わはって。でも御免なママ。ほんま迷惑ばっか掛けて」

母娘で互いにかばい合い、今後は警察の取調べやら吉原の街の風当たりもますます強くなるだろうと覚悟、警戒を強める二人。

お節が宇宙駅を後にすると、例によって憂鬱がどんよりと雪の心を重苦しくする。逃れるように雪は、子犬と少年のことを考える。そういえば警察は少年に何かちょっかい出してへんやろか。心配でならなくなり、雪はどうしても今直ぐ少年に会いたくなる。会って無事を確かめたい、会わなならん、会いにいこ。こうして雪は、夜を待って弁天川へと向かうことに。

何もない日、詰まり客が死んだことを知った日以外に弁天川の河原に赴いても、子犬と少年がそこにいないのはもう充分分かっている雪であるから、近頃はもう無駄に足を運ばない。逆に誰かが死んだと知った日は、必ず会える。丸で少年と会いたいのが為に誰かの死を望んでいるようなものやな、その為に商売しているようなもんや雪、とは悪い冗談にもならないと苦笑いすら出来ない雪。

(六・三) 子犬と少年

(六・三) 子犬と少年

吉原に夜が訪れると、雪はいつものファッションに身を包み宇宙駅、エデンの東を後にする。ミニスカにハイヒールは良いけれど、流石にコートはもう季節外れ、重く暑苦しい。そうと分かっているけど、コートを羽織らずにいられない今夜の雪。何かで自分の全身をくるみ守っていないと落ち着かない、外出するのが不安、恐怖でならないのである。

吉原の目映いネオンの通りを歩きつつ幾度となく後を振り返ってみるけれど、尾行の気配はない。警察はまだ海野の死に気付いてへんのやろか、否そんな筈はない、天下の警視庁やろ、油断したらあかん。コンビニに寄り、後は一路弁天川へ。

川沿いの通りに出ると、矢張りいつもの河原に小さな光がふたつ、流星の欠片の如く明滅している。今夜も雪を呼ぶように瞬いている。誰かが死なな、おうてくれへんやて、つれないお人やなあ、とため息吐いて、ゆっくりゆっくりハイヒールの音も静かに近づく雪。歩調を合わせるように河原の光は弱まり、やがて息絶える如く消えてしまう。

「ワン」

子犬の鳴き声は相変わらず元気、勢い良く雪へと飛び付いて来る。少年は黙って、子犬と雪の抱擁を嬉しそうに見ている。

「元気してた、にいさん」

早速子犬に食事を与えながら問い掛ける雪に、少年は黙って頷くばかり。

「な、にいさん。こないだのおじさんたち、なんかにいさんにしてこんかった。大丈夫やったの」

心配な雪の問いに、今度はかぶりを振る少年。

「ほんま。なら良かった、にいさん」

胸を撫で下ろす雪。

見渡すと河原には草花が咲き乱れている。昼間なら虫たちが集い、さぞや賑わっているに違いない。夜とてお月さんが照り無数の星々が瞬いているから、川の面は煌めき、せせらぎも耳に心地良く歌い掛けて来る。弁天川もそろそろ夏の佇まいへ移り変わらんとしている。

「にいさん、また男の人死んでもた」

食事中の子犬の頭を撫でながら、雪がぼつり。少年は黙ったまま、悲しそうに雪を見詰めるだけ。子犬の食事が済むと、少年と雪は河原に腰を下ろし川面を眺める。雪の手が少年の手をつかまえる。川の水はもう冷たくないのか、子犬は無邪気に川に入ってじゃぶじゃぶと水浴び、驚いた魚たちが飛び跳ね逃げ惑う。

少年の手を握り締めながら、雪がまたぼつり、今度は問い掛ける。

「な、にいさん。男の人、何で死んだ思う」

けれど少年は困った顔でかぶりを振るばかり。川面に映った満月を子犬が蹴散らし、水飛沫が雪にもかかる。

「冷たいなあ、子犬のにいさん」

くすくすっと少年が笑みを零す。

「にいさん。雪な、その男の人と寝たん」

ねたん、きょんとした顔で雪を見詰める少年。

「にいさん、分かる、寝たて。寝るてどういうことか分かる」

けれど少年は泣きそうな顔でかぶりを振るばかり。しばし黙って見詰め合う二人、雪の手は少年の手をぎゅっと握り締めて離さない。女の喜びが雪を襲う。じっとそれを噛み締めながら、呼吸も乱れ、とろんとした目で快感の中に身を漂わせる雪。

「にいさん、雪、怖い」

雪に伝えて、うん、と頷く少年。

「にいさん、雪と寝た男の人、みんな死んでまうねん。みんな、おんなじ病気なあってな。何て病気か分かる、にいさん」

少年に分かるう筈もない。

「桜毒、言うねん、病気の名前。な、にいさん、桜毒」

すると少年は、雪の言葉を真似してゆっくりと呟く。

「おうどく」

その時、川の中で子犬が「ワン」と吠える。川の面に映るひとつの光が、夜風に吹かれてちらつく。子犬は川から上がり、その光を捜して夜空を見上げる。少年と雪も後に続き、二人は立ち上がり銀河へと目を向ける。

「ほら、宇宙船だよ」

嬉しそうに少年が雪に向かって微笑む。おうどく、うちゅうせん、汚れ無き少年の眼差し。

「今夜は何処。何処まで来はったの、にいさんの宇宙船」

にいさんの宇宙船、にいさんの。ぽっと顔を赤らめる少年、ぶっきら棒にこう答える。

「乙女座ステーション」

「乙女座、ほうか、にいさん。ええな、雪もそんなとこ、行ってみたい」

雪は目を瞑る。雪の暗黒の脳裏の中に、少年の空想が流星のように雪崩れ込む。

(六・四) 乙女座ステーション

(六・四) 乙女座ステーション

ザヴザヴシュワー、ザヴザヴシュワー……宇宙の起源と申しましても諸説ありますけれど、如何にも真実めいておりますのが、可憐なる乙女が流したる失恋による涙。これによりて宇宙は産み落とされたと、そんな伝説が御座います。従って宇宙は涙の海と申せましょう。これに従えば、宇宙から恋する乙女がいなくなります時、宇宙は涙の成分をば失いまして、徐々に干からびやがて萎縮し、仕舞いには無に帰すると、そんな恐ろしき事態をも招きかねない、今日この頃で御座いますれば。それをば阻止すべく、宇宙に存在したる乙女共に恋のエネルギーをば供給せんとして、この宇宙の闇の中に今も瞬き続けておりますのが何を隠そう、私共乙女座ステーションにて候。命短し恋せよ乙女、宇宙儂し、乙女の涙、はい。お後が宜しいようで。

バビブペブー、こちらは乙女座ステーション。メシヤ567号殿に告ぐ、そなた聞けば遙か遠き太陽系第三惑星まで向かわれるとのこと。しかもこの恋の華咲く乙女座ステーションをば、たったの一泊ぼちで旅立たれておしまいになられるとか。それはあんまりにも薄情、つれなきこと甚だし。しかしまた何故そうお急ぎなされる、遙か遠き旅の目的とは何ぞや。そげに第三惑星は良かとかね、さぞや良かおなごのおりますことやろな、ああ憎たらし。さあさ、お答えをば頂戴下され。もしその答えもつれないなれば、銀河の海は直ちに荒れまして、乙女の涙で濡れて溢れてしまひましょうぞ。さすればメシヤ567号殿の宇宙船も難破、沈没、宇宙の藻屑と消え去るのみ、覚悟致されよ。以上、バビブペブー。

ピポピポピー、これはこれは乙女座ステーション殿、ジェラシーも御尤も、こちらはメシヤ567号。只今救世主は不在にて御免なさい。実は何を隠そう、我ら第三惑星はYoshiwara 駅まで参ります。彼の地は売春のメッカとして宇宙的にも有名で御座います。

バビブペブー、何、売春ですと、こちらは乙女座ステーション。そりゃまた乙女の敵で御座います。なぜなれば汚れない乙女の恋の華をば金銭によりてむしり取る、何とも野蛮で品性お下劣極まりなき所業。神聖なる乙女の純愛をば冒瀆し愚弄する、殆ど死刑にも値する許し難き宇宙の罪穢と申せましょう。

ピポピポピー、正にその通り、こちらはメシヤ567号。我らその実態調査をば進めながら、旅を急いでおる途上です。我らとて何を好き好んで、折角宇宙一とも賞賛されたる華麗な乙女座殿の接待をば蹴ってまでして急ぐ必要が御座いましょうか。出来ることならこの地に於いて、ゆるりと恋の華の果実をば思う存分味わいまして、甘き快感に酔いしれながら幾夜も過ごしてみよう御座います。がしかし何しろことは急を要しております、なぜなら第三惑星 Yoshiwara 駅に住むひとりの少女否乙女の命がかかっておりますもので、はい。と申しますのも彼の乙女、生まれる前より乙女の涙をば何故か喪失しております、生まれてこの方一度として一粒の涙さえ流したことのなき乙女で御座います。加えて今迄一度として男に惚れたことすらないという、何とも不憫なる乙女でも御座いますからして。

バビブベブー、なっに一っ、それはまた大変なりなり、こちらは乙女座ステーション。なぜにそげな哀れなる乙女がこの宇宙の中に存在しますやら、ああ嘆かわし、ああ悲し。もう絶句、失神寸前。ならばこの乙女座の怒りの涙で、第三惑星に永久の嘆きの雨をば降らせましようぞ。

ピポピポピー、お待ち下され、こちらはメシヤ567号。その乙女の問題についても現在調査中。恐らくは第三惑星人社会に於けます諸問題、例えば売春例えば性犯罪並びに異常なる性行為の、あたかも代償、贖罪、生け贄、十字架としまして、彼の乙女、折角の絶世美少女でありながら、その魂に深き傷をば背負いつつこの宇宙の闇の中に産み落とされたのではないかと推測致しております、はい。なぜなればそれらの行為によって、やがて第三惑星人の中に性病なるものが発生、蔓延するに至るのですが、これは如何にも神の警告或いは怒りの如きものであります。なのに愚かにも第三惑星人はあらゆる科学、医学を駆使して、病気を抑えることのみ汲々とし、自らが犯したる罪をば悔い改める気配など一切なし。かくして第三惑星人らの罪悪は拡大し続け、最早何らかの犠牲なくしては第三惑星人の存続すらも許されざる逼迫した事態にまで立ち至ったとこういう訳で御座います。

バビブベブー、成る程成る程、何となく分かりました、こちらは乙女座ステーション。ではではメシヤ567号殿、旅のご無事をお祈り致します。今度また是非とも熱き恋に落ちましようぞ、Falling in My Love。

ザヴザヴシュワー、ザヴザヴシュワー、かくして果てしない宇宙船の旅は続くのである。宇宙船のモニタに映し出される Yoshiwara の街も今は春並びに初夏の香り。その街並の景色、眩しきネオンの華の波また波の情景は、乙女座ステーションの都市の姿に似ていなくもないのであるが、何しろ Yoshiwara の男女の交わりは恋ではなく商売によっ

て成り立っている故一種罪悪の翳りを帯びて、両者は似て非なるもの。例えば甘い果実ではあっても、Yoshiwara のそれは狂った果実。そんな淫靡なる夜の街に今宵も舞う羽根を失くした妖しき蝶の群れへと、寄って来るのは金の匂いだけをさせた芋虫共ばかり。一夜の夢は朝陽の中に跡形もなく消え去り、ただ裏通りのゴミ箱を漁る野良猫だけが、捨てられし夢のほろ苦さを知っている。ピポピポピー、ピポピポ……ザヴザヴシュワー、ザヴザヴシュワー……。

少年の空想が途絶え、目を開けた雪の頬にひと滴の水分。まさか涙かと思えば然にあらず、ぼらぼらぼらっと天から落ちて来る夜の雨、銀河もいつのまにやら曇り空。

「あらま、にいさん、雨」

けれど少年はお構いなし、既に子守唄を口遊んでいる。

「にいさん、濡れてまうで」

それでも少年は歌い続けるばかり。

『……都会の灯り、ふるさとの灯り、遠い宇宙の彼方の灯り、ともっては消え、それを繰り返す。道に迷ってしまったのか、それともはじめから、道など存在しなかったのか、みんな夢だったと言うように……もしもあの宇宙船が、きみを助けにくる夢を今夜見たならば、きみはいってしまうかい、この悲しき宇宙ステーションを残して』

にこにこ雪に向かって手を振る少年。

「しゃない。ほな、にいさん、またな。風邪引かんように、気付けて」

今宵も少年の歌を背に、弁天川を後にする雪である。

(七)

(七・一) 六人目の客

(七・一) 六人目の客

月が替わり、と共に夏が訪れ、先ず梅雨のシーズン到来。お節はエデンの東の玄関に紫陽花を飾る。心配した変態作家海野の死去に伴う警察の動きは特になく、吉原でも殆ど無名の海野だった為か、お節と雪への非難も強まる気配はなさそうである。

それでも心配性のお節は悩む。もしこれ以上騒ぎが大きになったら、そのうちマスコミにも知れる。そないなったらワイドショーの恰好の餌食や、その前に何とかせなあかん。もうここいらが限界、潮時やろ。お節は腹を括ると、雪を説得しソープ嬢を止めさせようと決意する。

早速宇宙駅のドアを叩くお節。

「な、あんた、ちょっと話あんねん」

「何ママ。いやや、そんな深刻そうな顔してから」

二人は宇宙駅の窓辺に佇む。たった今降り出した雨が、宇宙駅の窓ガラスを激しく叩く。

「な、もうそろそろ限界や思わへん」

「まーたその話かいな、ママ。いい加減耳にたこが出来てまうわ」

「そない言うてもな。もう五人やで、五人」

「雪かて分かってる」

「分かってへんて、あんた。何ぼ何でもな、いい加減みんな変に思うで。あんたももう気済んだやろ。悪いこと言わへん、今のうち足洗お、な。あんたにはこの商売向いてへんいうこっちゃ」

しかし雪はかぶりを振って、

「ママの気持ちはよう分かる。雪かて店やみんなにまで迷惑掛けとない。でも、でもな。こればっかしはもう止められへんねん、御免な」

「そやから、その訳を教えて頂戴よ」

そもそも雪がなぜ急にソープ嬢になどなったか、未だにお節はその訳を知らされていないのである。高三の秋、突然高校を中退してお節の店で働かしてと雪が言い出したその時から、幾度となく尋ねては来たものの、決して雪は喋ろうとしない。

「あかん、大事な御方との約束やねんから。こればっかしは幾らママでも教えられへん」
その一点張り。

「はいはい、分かった。なら、しゃないな。あんたの好きなようにしなはれ」

結局お節は引き下がる。しゃない、いざとなったらわてがこの子守ったるしかないやない、と覚悟を決める。と同時に、もし騒ぎが大きくなったらエデンの東を畳むしかないとも思い始める、年内一杯かそれとも来年早々。そんなこととは知らず、

「有難う、ママ」

にっこりと微笑む雪。

そんな二人の許へ、しとしと六月の雨に濡れながら六人目の客が現れる。お節としたら出来たら騒ぎになりそうな有名人だけは避けたいところ。なのに、その夜のお相手は超有名人。初老の大物男優山口元である。といってもそこは有名人、簡単には素顔を晒さない。お節の前ではサングラスに付け髭、花粉用マスクにかつらと変装したまま。お陰でお節は見抜けず、

「どうしてもお願いします」

懇願する山口の熱意に押し切られ、宇宙駅へと案内する。

宇宙駅という密室の中で雪と二人切りになった山口は、そこで初めて素顔を見せる。ところが生憎TVなど一切見ない雪は、相手が誰だか気付かない。芸能人などとは夢にも思わず、相手をしてしまうことに。だって例によって山口と対面の瞬間、お雪さんが『こいつをころして』と発したから。

この山口もまた、今迄の客のお友達、闇の組織のメンバーであり、華やかなる芸能界の顔とは正反対の裏の顔を持っているのである。TVドラマやスクリーンの中では如何にも温厚でさわやか、憧れの上司とか父親といった役柄を演じる名優も、一皮剥けば狂気の変態エロおやじというのがその素顔。仲間内で囁かれる雪の噂に、死と隣り合わせという究極の快樂への欲望抑え難く、ここエデンの東へと隠密に足を運んで来る。

実は彼らの属する闇の組織内では、といっても日本支部に限定されるが、現在雪の話題で持ち切りである。誰かその雪という魔物、桜毒の使者をば相手にして、無事生き残る同志はおらぬのか、もし生還した強者有らば組織内での階級昇進も有るぞと、嘘か真か囁かれている。もし階級が上がれば、その分権力が増大し、社会的地位、名誉、物欲、色欲等、何でも思うがままということになる。

でこの闇の組織、ではその実体は如何に、ということになるが、何しろ闇の組織と呼ぶからにはすべてが闇に覆われ、従って詳しく知ることは不可能でありまた知ろうとすることは危険である。僅かに知り得たところによると、世界規模の国際組織であり、全世界に於いて人類社会を裏で操り支配しているという。その権力や絶大で、他に敵う勢力なし。宗教的にはフォクシズム (foxism)、女狐崇拜の立場を取っており、もし対抗出来る存在有りとすれば最早神か救世主のみであると、組織の頂点に君臨する支配者Xは豪語する。

そんな国際的組織に於いては、たとえ名優の山口といえども未だ下っ端で、是非とも階級昇進をと目論み、こうして雪の許へ乗り込んで来た次第。

「お客さん、実はな……」

雪がいつもの警告話をしようとしても、あっさりしたもの。

「あ、分かってる、分かってる。桜毒のことだね」

「雪、ほんま知らんで」

戸惑う雪を尻目に、野獣の如くさっさと雪に襲い掛かり、雪とのプレイをご堪能。夜通し雪を弄び、夜明けを迎える。

「雪ちゃんはほんとにいい子だね。何ならアイドルか女優さんにして上げよっか」

自分は芸能プロダクションの社長とか何とか適当に嘘を付く山口。

「有難う、でも雪ええわ。何や分からんけど芸能界て恐そやもん」
「アイドルよかソープ嬢の方がましってかい。ま、堅気の娘は近付かん方がいい世界には違いないな」
一人大笑いしながら、宇宙駅を後にする山口。

(七・二) 夢

(七・二) 夢

夜明けの吉原は雨に濡れている。雪はまた宇宙駅にひとり、ガラス窓を叩く雨音を守唄に眠りに落ちる。

直ぐに夢が雪をとらえる。夜明け前何処とも知れない雪の降り頻る景色。その後に古びた校舎が姿を現し、少女はその中のひとつの教室の窓辺に佇んでいる。中学一年、セーラー服に身を包む少女は正に絶世美少女そのものである。

従って男子生徒に人気のない筈がない。同学年は元より、上級生の男子たちの間でも直ぐに噂的。しかし中学に入学当初の少女はまだ相変わらずの男嫌い。だから愛想のないことこの上ない。ただこの年頃の少女にはあり勝ちなことでもあり、特にこれを持って少女を非難する者がいる訳でもない。

少女はまだ家庭のことで悶々と悩み続けている。現在の母親である女のこと、本当の親のこと。それに加えて何処から漏れたのか、少女の母親が吉原のソーブランドを営んでいることがクラスに知れ渡る。心ない一部の男子が少女をからかい、女子の間でもひそひそと少女の陰口を囁き合っているようで、少女としては堪らない。

相変わらず親思いのやさしい娘ではあるけれど、少女もそろそろ人並みに思春期。吉原やソーブランドが如何なる場所かも少女なりに理解する。

「昔はあんたもようけ遊びに行ったんよ」

今更母親に言われても、知ったことではない。小学校から変わらない勤勉振りで折角中学でも成績優秀なのに、ソーブランドの件と元々の家庭問題とで、少女は一気に反抗期、不良へと突っ走る。

中学の不良連中と付き合い出し、勉強の出来る不良、かつそもそも絶世美少女で、加えて家はソーブランド、しかも関西弁を使う母親の影響で喋りが中途半端に関西弁という、余りにも特異なるキャラクターとして、少女は忽ち学校内の注目の的となる。

不良グループの中には男子生徒も勿論いる訳だから、少女としては付き合い辛い筈であるが、しかし少女に異変が起こる。ちょうどこの頃少女は初潮を迎える訳だが、なぜかそれと同時にそれまでの男嫌いが嘘のように少女から消えてなくなるのである。これには本人も吃驚、しかし事実だから仕方がない。兎に角これによって少女は、男子とも人並みに付き合えるようになる。

といっても少女の精神状態が安定した訳ではない。相変わらず家庭問題、ソーブランドの件を引き摺り、同時に将来への不安、女への目覚め等悩みは尽きず、安らぎを求めるように少女は或る場所へと頻りに足を運ぶ。そこは、川である。

放課後或いは授業をさぼり、少女はひとり河原に佇む。いつ訪れても、川は少女に郷愁を呼び覚ます。川の流れを眺めていると不思議に心が落ち着き、川のせせらぎは少女の心にやさしい少女を思い出させてくれる。

川は四季によってそれぞれ異なる表情を見せてくれるが、少女は何よりも冬の川が好きでならない。寒さも忘れ、いつまでも見ていられる。凍り付くよな川の面もそこに映る銀河の煌めきも、寒さも震えも、そして川へと降り頻る雪も、冬の川のすべてが懐かしくてならない。そんな制服姿の少女をみなもに映しながら、川は流れる。

天から落ちて来る雪のことを、お雪さんと呼び始めるのもこの頃である。

「雪さん、雪さん、お雪さん。もしも本当のママいてるなら、会わせてくれへんやろか。お雪さん、そっと連れてって下さいな、ママのいてはるお家まで。なあ、お雪さん……」

ふっと目を覚ます雪。

「お雪さん」

ぼんやりと呟くその声は、ソープ嬢でも魔物や桜毒の使者でもない、紛れもなく十八歳の少女の声である。窓に向かって幾ら呟けど季節はまだ夏、そこに白い粉雪の姿などなく、曇ったガラス窓を叩くのは透明な冷たい雨でしかない。ふわあっと窓に息を吹き掛けるその時だけ、吉原の街が一瞬雪に向かってやさしく微笑んでくれる、そんな気がしてならない。

まだまだ梅雨の明けない六月の終わり、珍しく雪は宇宙駅ではなく事務所にいて、お節の肩を揉みマッサージの真似事。

「たまには親孝行させてえな」

「ん、有難う。ほんま気持ちええわ、このまんま極楽まで昇っていってしまいそや。まだ殺さんといて」

「まだまだ、ママなら百歳まで生きられる」

「あほか、そんな長生きしとないわ」

事務所では一日中、TVを点けばなし。

「ママ、あんましTVばっか見てると、あほなるよ」

「ええよ、もうとっくの昔にあほやから」

お節が見詰めるブラウン管に流れるは、昼下がりのワイドショー。突然お節が叫ぶ。

「ほう、山口元死んだんか」

「どないしたん、ママ。そんな大声出して」

お節に釣られてTV画面を覗くと、そこには山口の顔写真のどアップ。

「あれま、この人……。もしかして死にはったん」

ぽかんと口を開けたまんまの雪。

「そうらしいわ、しっかし急やな。あんたこそ、どないしたん」

「うん」

黙り込む雪。

「何や、気になるやない。あんた、まさか」

見詰め合う二人。

「そのまさかやねん、この人、こないだのお客さんや。どないしょ、ママ」

「ええっ、どないしょ言うたかて」

絶句、ただ呆然と雪の顔を見詰めたまんまのお節。

「えらいこっちゃ、あんた。こら、えらい騒ぎなるで」

「そんなこと言うたかて、今更死にはったもんじゃないわ」

流石の雪もしくじったと肩を落とし、とぼとぼと無言で宇宙駅に戻る。

夕暮れ、久し振りに雨が止み、宇宙駅の窓から見える空には夕映えが広がっている。ただでさえ物悲しい気分させるのに、加えて山口の死、雪はどん底の憂鬱状態。どうしようもなく子犬と少年に会いたくてならなくなる。

(七・三) 子犬と少年

(七・三) 子犬と少年

夜の帳が下りるのを待って、雪は弁天川へと向かう。コンビニで子犬の食料と共に、透明のビニール傘を一本購入。今は止んでいるとはいえ、夜の空はまた灰色に曇り始めているから、いつまた雨が降り出すか分からない。

弁天川に近付くと、河原には小さな光がふたつ。近付く雪のハイヒールの音に気付いてか光は消え、いつものようにそこには子犬と少年。

「ワン」

鳴き声と共に、雪へと飛び付いて来る子犬。少年はまたいつものように、にこにこ笑っているばかり。

弁天川の河原に今は一面、毒だみの花が咲いている。その白い花から癖のある匂いが漂って来る。

「にいさん」

雪の声がいつになく沈んでいるのに気付いた少年は、不安そうに雪の顔を見詰め返す。

「お姉さん、どうしたの」

少年の問いに、

「御免、何でもない、にいさん」

かぶりを振ると、気を取り直し雪は子犬に食事を与える。少年もしゃがみ込んで雪と一緒に、子犬の食事を見守る。むしゃむしゃと食欲旺盛な子犬。

「ほんま、いつも元気ええな、子犬のにいさんは。雪、羨ましい」

雪はいつものファッション。ミニスカにハイヒール、加えてコートも羽織っているけど、流石にもう正直暑い。雪がコートを脱ぐと、透かさず少年の言葉。

「ぼくが持ってて上げようか」

「ええの、にいさん」

黙って頷く少年に、

「ほな、お言葉に甘えて」

コートを渡す。

「だってぼく、こんなこと位しかして上げられないから、お姉さんの為に」

どきっ、何でそんなこといきなし言うんやろ、不思議に思う雪。

「いい匂いだね。これが、お姉さんの涙の匂いなんだね」

雪のコートを大事そうに抱えながら眩く少年。

「ちゃうよ、にいさん。雪、一度も泣いたことないねん。ほんま、生まれてから一遍もやで」

けれど少年は黙ったまま何も答えない。

食事が終わると、子犬は勢い良く川に飛び込む。気持ち良さそうにすいすいと泳ぎ回っているから、見ているのも楽しくてならない。少年と雪は河原に腰を下ろし、肩を並べて子犬の様子に笑い合う。

ところが突然ピカッと灰色の空に電光が走ったかと思うと、続いてゴロゴロゴロッと雷。地響きと共に雨が降り出す。

「きゃーっ」

雪が悲鳴と共に、少年の肩に抱きつく。川の中の子犬も驚いて急いで川から上がると、寒そうにぶるぶると全身を震わせ、くんくんと二人のそばに寄って来る。二人は立ち上がり、雪は少年から受け取ったコートを再び羽織る。と同時にビニール傘を広げ、子犬と少年を招き入れる。遠慮する少年に、

「はよ、にいさん。濡れてまうで」

傘に入った少年は、ずぶ濡れの子犬を胸に抱きかかえる。

雨は直ぐに本降り、雨粒がビニールに弾ける音が耳に響く。

「にいさん、もっと雪にびたっとくっ付かんと。そっちの肩びしょ濡れや」

片方の手で、少年の肩を抱き寄せる雪、体温と息が伝わる程に。しばらくそうして一本のビニール傘の中、子犬と少年と雪、身を寄せ合いじっとしている。

「寒ない、にいさん」

雪の息だけが白く雨の中に消えてゆく。ううん、とかぶりを振る少年。

川岸に咲く毒だみの花も雨に濡れている、白いその花びらがしっとり夜雨に。

「にいさん、なあ。また男の人、死んでもた」

少年の背中に当てていた手を、少年の手へと移動しぎゅっと握り締める。少年は黙って雨を見詰めたまま。

「な、にいさん。天国であると思う」

問い掛ける雪に、驚いたように少年は雪の顔を見詰め返す。

「死んだら天国行くとかよう言うけど、ほんまやろか」

沈黙を守る少年。

「悪いことした人間はあかんやろ。悪いことしといて天国なんぞ虫が良過ぎる、やっぱ地獄やな。なあにいさん、地獄であると思う」

二人は同じ方向に目をやる、雨に打たれる毒だみの花へ。

「あの花、何や地獄に咲いてる花みたいやな、にいさん」

冷たい雨に濡れる毒だみの花の白さを見詰めながら、泣きそうな顔で少年がかぶりを振る。

「御免、止めた。にいさん、変な話してもて堪忍や」

ところが少年は顔を上げたかと思うと、雪をじっと見詰めながら叫ぶように告げる。

「お姉さん、ぼくと一緒に逃げようよ」

「へ」

その時稲光がピカッと闇夜を照らし、間髪を容れずにゴロゴロゴロッと雷鳴が大地を揺るがす。

「きゃーっ」

思わず傘を放り出して少年の背に抱き付く雪。どきどき、どきどき、ビニールの傘

が地に落下して強風にころころと転がってゆく。雪はただじっと雨の滴に打たれながら、子犬を抱いた少年を後ろから抱き締めている。

「吃驚したあ、にいさん。でもあったかいな、にいさんの背中」

雪の白い息が少年の頬にかかる。少年の鼓動を包むように、雪の鼓動が鳴っている。どきどき、どきどきっ、雨の中、このまま抱き締めていたい。ずっとこのまま、少年の肩に縋っていられたら。

「お姉さん、やっぱりぼくと逃げよう」

少年が繰り返す。

あかん、みんなびしょ濡れやない。我に返ったように雪は少年の肩から手をほどく。その手でさっと転がった傘をつかまえると、再び子犬を抱いた少年に傘を差し掛ける。有難う、にいさん。雪はにいさんのその気持ちだけで充分や。心の中でそう呟きながら、雪は少年にこう告げる。

「なに言うてんの、にいさん。生意気や、そんな台詞十年早いで」

「でも」

その時、少年の頬を伝った滴が雨か涙なのか、雪には区別がつかない。

「にいさん、毒だみの花は雨に濡れても、文句ひとつ言わへんの」

微笑む雪。

「お姉さん、ぼくは死ぬ程悲しいんだよ」

少年の目からすーっと涙が零れ落ちる。確かに雨でなく涙が少年の頬を伝い、それは抱き締めていた子犬の鼻にまで到達する。くんくんした後驚いた子犬は顔を上げ、じっと少年の顔を見詰める。

「ウーッ、ワン」

少年を慰めようとする子犬のやさしさが堪らない。

その時灰色の空に、稲光とは異なる一筋の光が見える。

「にいさん、見て、ほら。あれ、宇宙船ちゅう」

すると、

「うん、そうだよ。お姉さんにも宇宙船が見えたんだね」

涙を拭いながら、少年がそれは嬉しそうに笑う。

「にいさん。泣いた鳥が、もうわろた」

けれど鳥も心の中ではまだ泣いていたのかも知れないと、雪は思う。

「今夜は宇宙船、何処停まりはんの、にいさん。こないな雨の中」

問い掛ける雪に、少年はゆっくりと答える。

「今夜はね、大熊座ステーションだよ」

いつしか少年は目を瞑り、空想の中。子犬も一緒に瞑っているから、遅れないようにと雪も目を瞑り、後を追う。耳には透明なビニール傘に当たる雨粒の音だけが響いている。

(七・四) 大熊座ステーション

(七・四) 大熊座ステーション

ザヴザヴシュワー、ザヴザヴシュワー……ここは銀河の北の果て、打ち寄せる星々の波また波は荒く冷たい。ひと滴触れるばかりで凍り付く寒さである。このステーションの中心にて燦然と煌めく北斗の七つ星は、荒海の如き銀河の果てを照らす宇宙の灯台なり。ここを通過せんとする旅の星々は、良いか、我が安らかなる千年の眠りをば乱さんように致されよ。さもなくば我が空腹の餌食となりてしまうぞよ。良いか、如何なる星も覚悟致されたし、くれぐれも我が神聖なる眠りをば冒さんように。何者か、もしも我をば覚醒させたれば、それは正しく虎の尾を踏んだも同然。我が正義の怒りや凄まじく、太陽系第三惑星など一たまりも御座らん程。故に注意の上にも慎重を怠らんように、それでは皆の衆、お休みなさい、御機嫌よう。

バビブベブー、こちらは大熊座ステーション。メシヤ567号殿に告ぐ、貴宇宙船と太陽系第三惑星との頻繁なる交信電波のノイズによりて、遂に我らが駅の守護神なる大熊神の神聖なる千年の眠りが冒された。大熊神は大変なお怒りであるぞよ。このままでは如何なる災厄がこの宇宙全土に発生するやも計り知れない。何故そげん、彼の星とやり取りばっかしとっとかいね。その必要性、正当なる理由をば述べてみさらせ。以上、バビブベブー。

ピポピポピー、こちらはメシヤ567号。これはこれはお騒がせ致しまして誠に申し訳ない、大変なる失礼をばどうぞお許し下さいませませ、大熊座ステーション殿。しかも只今救世主不在にて、併せてすいません。わたくし共現在、御存知の太陽系第三惑星へと向かう旅の途上。最終目的地は Yoshiwara 駅で御座いまして、到着前に調べ物をば完了させるべく現地調査を鋭意行っております最中で御迷惑をお掛け致しました、はい。調査と申しますのは他でもありません、Yoshiwara なる街に於ける第三惑星人の営み、ざっくばらんに申せば売春の調査で御座います。

バビブベブー、何々、こちらは大熊座ステーション。売春、売春とな。はてそれは聞き捨てならんと大熊神様も尚一層のお怒り。売春とは即ち人身売買のこと、然るに人身とは神の器とも申すべき神聖なるものであーる。それを売り買いするなどとは何事であるか、身の程知らずも甚だしい。

ピポピポピー、こちらはメシヤ567号。お怒りは御尤も、されど致し方ありません。なぜなら第三惑星人は宇宙に於ける否第三惑星上に於いてすらも余りに短き僅かなるその歴史の中で、永いこと人身売買をば行ってきた模様。しかもそれは経済成長と歩調を合わせるが如く第三惑星人社会の中に深く根を張りまして、更に深く深く浸透拡大しつつ今日に到っておるといふ現状で御座います。

なぜなら経済至上主義は彼らに莫大な富をもたらさしはしましたが、それと共に競争ひいては戦争をも助長し、生命を金銭的価値観でのみ量り物同然に扱うようになってしまいました。その結果第三惑星人たちは様々なストレス、不平不満、孤独感、また貧困の恐怖や不安に苛まれ、それらから逃れんとして知らず知らず刺激を求めるようになり、いつしか満たされざる欲望のはけ口として売春と称する安易なる人身売買に身も心も染まってゆくのであります。その需要は経済の発展と共に拡大し、そこに目を付けたるマフィア共裏社会の連中が、いち早く風俗産業などと称したビジネス化にまんまと成功し今日に至ったとこういふ訳です。そして登場したるのが Yoshiwara なのであり、これこそが風俗産業の象徴とも呼ぶべき性ビジネスの聖地、メッカなので御座います。

バビブベブー、はいはい、なんか話が理屈っぽくて、とりあえず分かったような分からぬような、こちらは大熊座ステーション。兎に角貴殿の情熱だけは何となく伝わりました。そこで、そなたたちは、その Yoshiwara なる汚れた都市をば勿論一掃せんとする為に、今第三惑星へと急がれておるとこういふ訳ですな。それならば大いに結構結構、大熊神もお喜びです。

ピポピポピー、実はそこが何とも、こちらはメシヤ567号。微妙な悩ましき点で御座いまして、正直申せばまだ決めかねておるところです。よって現在出張中の救世主とも鋭意検討中なれば、もう少しお待ちを。決して大熊神殿の期待をば裏切らぬよう進める所存故、何卒寛大なる御慈悲をば頂戴下さいますようお願い奉ります。

何しろ彼の Yoshiwara も今は梅雨の季節を迎え、日々雨また涙雨。その中で時折見せる街一面に広がる夕映えの美しさやら、しっとり雨に濡れたる夜のネオンの艶やかさ、また夜明けのアスファルトの路地に毒だみの白き花びらを濡らして降り頻る驟雨などといった堪りませブン。晴れ渡った日の朝陽は他の地と彼の地の分け隔てなく等しく降り注ぎ、名もなき草花も Yoshiwara の路傍に咲けば、汚れなき蝶やら働き者の蜜蜂共も飛んで参るし、娼婦たちの憐憫と菩薩の如き慈悲によりて多くの野良猫共は花街の片隅に命拾い飢えをば凌いで何とか生き延びております。そげな風景をば見せられますと、つつい鬼の目にも泪、心は迷い迷って決心が鈍ってしまうもの。とまあ今宵の愚痴はこれ位に致しまして、それでは御機嫌よう。

ザヴザヴシューワー、ザヴザヴシューワー、こうして大熊座ステーションを旅立てば、太陽系の入り口まではもう少し。目指す Yoshiwara 駅へと一星一星、確実に近付いてゆく我らが宇宙船。かくして果てしなき宇宙の旅はもう少し続くのである。ピポピポピー、ピポピポ……ザヴザヴシューワー、ザヴザヴシューワー……。

少年の空想が途絶える。傘に当たる雨粒の音がしない。河原の草を濡らす雨の音もしない。詰まり雨はもう止んでいる。雨音の代わりに聴こえて来るのは、少年の子守唄。

『……宇宙船は行ってしまった、人々の諦めた顔を眺めているうちに、お腹を空かした子犬とぼくを残して……もしもあの宇宙船が、きみを助けにくる夢を今夜見たならば、きみは行ってしまukai、この悲しき宇宙ステーションを残して』

目を開けると、空には銀河が瞬いている。

「ほな、にいさん。雪、もう行くな」

傘を閉じ、子犬と少年に手を振る雪。いつか弁天川の河原には、小さな無数の光が瞬いている。丸で地上に広がる銀河の如く、その正体は蛍。しっとり濡れた毒だみの花が蛍の光に恥ずかしそうに照らされながら、雨上がりの風に揺れている。

(八)

(八・一) 七人目の客

(八・一) 七人目の客

月が替わりお節は、エデンの東の玄関に蓮の花を飾る。梅雨が明け、猛暑が襲い来る。暑さだけでも敵わないものを、エデンの東には他にも鬱陶しいものが連日連夜押し掛けるようになる。何か、マスコミである。

大物俳優山口元の死をきっかけに、週刊誌、TVのワイドショー辺りが中心となって山口の死についてあぁじゃないこうじゃないと騒ぎ出す。追求していくうち、死因が桜毒であることが判明、遂に雪の存在にまで辿り着く。お陰でエデンの東及び店の入ったビルは元より吉原の街全体がどよめき出す。

TVカメラとその取り巻き、マイクを握り締め狂ったように叫ぶ女性リポーター、一日中焚かれるカメラのフラッシュ、取材申し込みの長蛇の列、雪の周辺を嗅ぎ回るハイエナの如きパパラッチ共。加えて一般大衆の野次馬が嵐のように押し掛ける。

「何やねん、まったく、この騒ぎ」

流星のお節もナーバスである。試しに点けたTVのワイドショーは『吉原の魔性の女Y』と題した特集を流す。雪とて一応は一般人であり、かつまだ未成年であるにも関わらず、なぜか無断で雪の写真やら録画された映像やらがTV画面にボカシなし、名誉毀損ものでばっちし映っている。格好のネタを得たとばかりに喜々としてマイクを握るリポーターの声。

「何でもこの女Yと遊んだ客が次々と一ヶ月以内に突然死。芸能人、作家、大学教授、医者、政治家、おまけに暴力団組長までもがこの女の毒牙にかかって死んでおりまして、はい。しかもなぜか死因はすべて、あの恐怖の性病、桜毒だっていうんだからおっそろしいじゃありませんか。ねえ、なんか妙、おかしい、ぶんぶん臭ってきませんかあ、みーなさん。現在のところ警視庁は確かにYを疑って徹底的に捜査を行ってはいるものの、未だ決定的な証拠はつかめておりません。だからね皆さん、このYという女、下手したら稀代の殺人鬼かも知れないってえのに、そんな女がまだこの世の中に野放しのまんま、のうのうとソープ嬢なんかやってんですよ、ね、恐いでしょ。だって皆さんとこのお父ちゃんだって、いつ犠牲になるか分かったもんじゃありませんから。ええ、でも貧乏なお父さんなら大丈夫。どうしてって、そりゃねえ、何てったってこのYのプレイ料金が高いのなんのって、高いの、これが。幾らだと思えます、ね、吃驚して下さい、皆さん。いいですか百万、はあ、百万円ですよ、みんなさーん」

パチッ、とスイッチを切ればTVなんぞ死んだも同然、ただの箱。

「しょうもな」

流星のTV好きのお節も呆れ顔、ぼんやりとため息漏らして、遂に始まってもたか、しゃないな……。窓から下界を見れば、絶えることなくビルの周りを取り囲む人だかり

と喧騒。連日連夜繰り返されるTV、スポーツ新聞、週刊誌のバッシング。兎に角わただけでも、あの子守ったらんと心に誓うお節である。

マスコミの騒ぎに影響を受けたエデンの東の入るビルのオーナー、ビルの中の他店の経営者連中は勿論、吉原の経営者組合だって黙ってはいられない。それ見たことか、だから言わんこっちゃないと、次々にお節に苦情、文句を浴びせる。営業妨害や、どうにかしてくれ、あんた。ねえ何とかならんの、あの娘。損害賠償だ、裁判だあ、舐めてんの、あの小娘。店やれんようにしたろか、おい婆さん。その他脅迫の類が後を絶たず、問い合わせの電話、冷やかし客の来店、ただの暇人共の見物、不審な輩の侵入等々、どうにもこうにも手に負えない。こりゃもう堪らんと遂にお節も根を上げ、渋々宇宙駅のドアを叩く。「どうしたもんかいなあ」

年老いた母お節の憔悴し切った表情に、流石の雪も申し訳なさに胸が痛む。自分はどうなっても構わへんけど、お節を始めエデンの東のソープ嬢たちに迷惑を掛けているのが耐え難い。

「しゃないなあ」

遂に雪も観念、ソープ嬢としての活動を一時停止することに。

「ほな雪、しばらく休むわ」

その言葉に、

「ほんまか、助かるわあ。これでわて十年寿命延びたわ」

胸を撫で下ろすお節。

そこでお節は早速エデンの東を臨時休業とし一時的に店を閉める。店のソープ嬢たちには他店を紹介してアルバイトを許可し、そのまんま移動する子は引き止めない。お節も内心では「もう年も年やし」と既に実質店じまいの心積もりで腹を括っている。

これにて、隣近所、吉原界隈の苦情、脅しは影を潜める。しかし相も変わらずマスコミ共の騒ぎは治まらない。週刊誌の取材、TV出演、インタビューの申し込み、果てはヌード撮影やらAV出演依頼などと止まる所を知らず、矢面に立ってそれらマスコミ、野次馬を追っ払うお節。しかし、

「ばばあはいから引っ込んでろ、女を出せ」

「殺人鬼を野放しにするな、公開処刑だあ」

などと、払えど払えど非難中傷、罵詈雑言は後を絶たない。

ワイドショーの世界では、もうとっくの昔に雪は稀代の殺人鬼或いは魔女、悪女としてダーティヒロイン、悪の主役に祭り上げられている。雪の過去、生い立ちを暴き、殺人の動機、目的は一体何か、殺害というか感染手段は、単独犯かそれとも協力者はいないのか等々、好き勝手な憶測を垂れ流す。かと思えば雪をモデルとしたTVドラマや映画も企画中だというから堪らない。本来ならば、名誉毀損や営業妨害や、どないしてくれんねんと文句のひとつも言いたいところではあるが、下手に刺激しないように、ここはひたすら我慢、我慢、お節と雪は沈黙を守る。

「ふう、わてもう疲れたわ。勝手にしてけつかれ」

年老いたお節はもうへとへと、匙を投げ後はひたすら騒動の鎮静化を祈るのみである。

そんな騒動をよそに休業直前、どさくさに紛れエデンの東に七人目の客というか一組の客が訪れる。しかも男女のカップル、男は五十代前半、女は三十代後半。

「あんたらもどうせ、冷やかしやろ」

なじるお節に、ところが二人は真剣そのもの。

「いえいえ、手前共は至って真面目。是非とも噂に聞く百万の娼婦とお手合わせ願いたい」

しかも、三人でのプレイ詰まり3Pを熱望。

「まじかいな」

お節は呆れ返る。

このカップル、金子という今をときめくIT起業家であり、著名な実業家夫婦である。近頃夫婦間の関係が倦怠気味で、現状を打破する強烈な刺激が欲しいのだそう。はて困ったもんやと迷うお節、しゃない後は雪に任せたら。変態プレイは御法度でっせと念を押し、はて3Pは問題ないやろかと首を傾げつつ夫婦を宇宙駅へと案内する。

実はこの金子夫婦も例の闇の組織の一員。組織は男ばかりではなく、女の構成員も結構いるらしい。実業家としてのキャリアは華々しく、国内でも屈指の資産家にまで昇り詰めたもののいかんせん成金、組織内では新参者とあって階級は低い。そこで一発逆転、組織内でも幅を利かせようと目論み、兼ねてより組織内で話題沸騰の雪と交わることを決意し、本日こうして訪れたという訳。

人間の心理とはまったく以て面白いもので、例えば性病にしろドラッグにしろ放射線にしろ、どれ程社会的問題となり身の危険があると警告されようとも、なぜか得てして誰もが、自分だけは大丈夫、自分に限ってそんな災難になど遭遇する訳がないなどと、やたら根拠無き自信を持つもの。金子もまた然り。まして金子には他の男にはない秘策をも持ち合わせているから尚更。それは何かというと、奥さん。金子自身は雪と関係を持たず、奥さんと交わらせるというもの。さすれば自分もそして恐らくは細君も感染のしようがなかりと高を括るが、さてさて上手くいくやら。

で宇宙駅の雪。絶えずマスコミやら野次馬やらが押し掛けるから、窓からゆっくりと吉原の街を眺めることも出来ないし、外出もままならない。従って少年に会いに弁天川へも行けず、いらいら欲求不満のナーバス状態この上なし。そこへお節に伴われ金子夫婦が訪れる。二人を見るや否や、お雪さんが『こいつをころして』といつにもまして激しく唸るものだから、雪としてはついやけにもなる。

お節が宇宙駅を後にするや、早速雪はいつもの警告を金子夫婦に告げる。

「あのな、もう随分騒がれとるから既に知ってはるか知れんけど、雪と関係を持つとな……」

ところが金子の反応は至って冷静。

「ああ分かってる分かってる。むしろそれを承知で来たようなもんだから、きみは何も心配しなくていいんだよ」

「はあ、そうでっか」

ため息の雪。

「それに、わたしは見てるだけ。きみは家内とプレイしてもらえればいから。何しろ近頃彼女不感症でね、頼むよ」

はあ、頼むよと言われても流石の雪も女との関係は初体験。それに相手はやっぱし男でないとかんやろ、なあ、と雪は密かにお雪さんへと問い掛ける。ところがお雪さん

は再び『こいつをころして』と激しく唸るから、分かった分かったと雪は観念。

「そんな言わはるなら、分かりました。よろしゅお願いします」

商談成立。でも『こいつ』って、旦那と奥さんと一体どっちやろと内心苦笑い。

いよいよ金子の奥さん、あざみ嬢と交わることに。といっても手馴れたあざみが終始小娘雪をリードする形でプレイが進行。しかし幾らねちっこく弄ばれても雪としては何にも感じない。あざみの舌がぺろぺろと雪の体を舐め回すも、雪にはくすぐったいばかりで、むしろあざみの舌の感触が弁天川の子犬を思い出させてしまうから少年に会いたくて切なさが込み上げて来る。そんなことなどお構いなし、あざみはとろんとした恍惚の目で雪を見詰めながら、

「雪ちゃんて、ほんと若くて綺麗、羨ましいっ。若い頃のわたしそっくりよ、うっふん」

つんつんと甘く切なき乱れ声をば発して狂いまくるから、何だかあざみのことが気の毒に思えて、お付き合いで感じた振りをしてみせる雪。

そんな美し過ぎる二人の女豹あざみと雪の激しい絡みを目の前にして金子もいつしか我を忘れて興奮状態、遂には欲情を抑え切れなくなり自らも身を乗り出す。しかしそこは冷静あくまでも雪との接触は避け、雪と選手交代してあざみと交わることに。こうして金子夫婦は、雪の目の前でその激しく燃え上がる夫婦の愛をば嫌と言う程見せ付けながら、遂には夜の果てに燃え尽きる。雪は内心あほらしとため息。

すっかり満足しお抱え運転手のロールスロイスで金子夫婦が帰ってゆくと、雪は虚脱状態。あざみの舌の感触が思い出され、こそばゆくてならない。相手は女やし、まさか死んだりせへんやろ、良かったわあ。一安心の雪は夜明けの訪れと共に眠りの中へ、そして夢へと無条件に落ちてゆく。

(八・二) 夢

(八・二) 夢

夢の始まりはいつも同じである、夏とて変わらない。夜明け前、何処とも知れない、ただ雪の降り頻る景色。夏の夕立や激しく窓を叩く雨だれの如く、雪にも音があれば良いのにと少女は思う。お雪さんはほんま無口なんやなあ、それとも恥ずかしがりやさんやろか。

少女は中学二年。相変わらず男子に人気があり、通う中学は元より他中学の生徒、高校生までもがナンパして来る始末。だから渋谷、原宿、新宿など東京の繁華街に出れば、ナンパは勿論、モデル、タレント果てはAVのスカウトまでしつこく声を掛けて来るからうざったい。少女はすべてしかと、どんなプレイボーイも相手にしない。少女は同年代の女子が興味を抱くものに殆ど関心がなく、大人びていて何処か冷めている。

学業の面も相変わらず真面目で優秀な成績を堅持してはいるが、不良グループとの付き合いも続けており、クラスから一目置かれる存在であるのも変わらない。男嫌いはなくなった少女であるが、かといって男を好きになることもない。今もって男にも恋愛にもまったく興味が湧かない。しかし同年代の子たちは異性に興味があるし、恋愛もしたい。不良グループの中でもカップルが出来てきて、彼女のいない不良少年は肩身の狭い思いをしている。

不良グループの中にAという少年がいてまだ彼女はいないが、少女とは割りと仲が良い。といっても少女にとっては、あくまでも友達、弟のような存在。その少年Aが少女に交際を申し込み、少女としては興味はないが断る理由もないので、とりあえず付き合いを始める。少年Aとしては口付けやそれ以上の行為に及びたいのは山々なれど、少女が嫌がるので我慢している。

時はクリスマスイヴ、少年Aと少女は不良グループから離れ、二人切りでデート。ゲーセンや食事など、しばらく繁華街でぶらぶらした後、少女は誘われるまま一人暮らしをしている少年Aのアパートに上がる。そこで少年Aは思い切って少女の唇を求める。咄嗟に少女は迷ったけれど、あんまり断ってばかりも悪いと思い、つい口付けだけならと、生まれて初めて唇を許してしまう。

ところがその時、突如少女は自分の中に得体の知れない何かを感じて驚愕する。この感覚もまた生まれて初めての経験である。そしてその得体の知れない何かは少女の中で、少女に向かってこう叫ぶのである。

『こいつをころして』

内なる声、しかもそれは何とも言えない苦しみもがくが如き、苦悩と悲痛なる叫びである。嫌悪と恐怖に、思わず少年Aに飛び付く少女。我に返って直ぐに少年Aから身を離すも、動揺は治まらない。

「ごめんな。なんか急に気分悪なったから、帰るわ」

そう告げ、少年Aのアパートを出ると、まっ直ぐに少女が向かったのは川。

夜の河原にひとり佇み、何とか混乱が静まるのを待って、少女は自らへと問い掛ける。

「あんた、誰」

けれど答えはない。確かにさっき自分の中で叫んだ、内なる声は沈黙したまま。けれど決して気のせいとか空耳とも思えない。あれは一体何やったんやろ。

「しゃない。ほならきつと、お雪さんやな。な、お雪さん」

少女は自分の心へと語り掛ける。こうして少女は得体の知れない内なる声を、お雪さんと呼ぶようになるのである。

ところが少女を襲うパニックは、これだけに止まらない。それは年が明けた一月初旬、突如少年Aが死んでしまうのである。クリスマスイヴ以降何となく少年Aを避けていた少女は、不良グループの仲間からそのことを知らされ仰天する。けれど詳しい事情、死因は彼らにも分からない。この時少女はふと、少年Aの死は自分が原因なのではないかという漠然とした不安に駆られるのである。もしかしたらあの声『こいつをころして』の、詰まりお雪さんが少年Aを本当に殺してしまったのではないかと……。

はっと目を覚ます雪。

「お雪さん」

ぼんやりと呟いてみても宇宙駅にいるのは雪ひとり。

「こら出て来い、魔女」

「俺を逝かせてみろ、この殺人娼婦」

固く閉ざしたカーテンの隙間からおっかな吃驚外を覗くと、相変わらずマスコミと野次馬の罵声が飛び交う吉原の街である。

(八・三) 子犬と少年

(八・三) 子犬と少年

エデンの東は休業したものの、まだまだ騒ぎは治まりそうにない月の終わり、金子夫妻が揃って息を引き取る。有名な実業家である為その死は直ぐにマスコミで報じられるも、死因は桜毒ではないという。否実は桜毒であるのだが、それでは今何かとお騒がせの魔性の娼婦、雪との関係が取り沙汰される故、金子の経営する企業のイメージ悪化を恐れ、別の理由にしたという訳である。従ってマスコミ報道は米国にて金子所有のセスナ機が事故を起こし、夫婦揃って事故死したと伝える。これにより皮肉にも雪への非難は向けられずに済んでしまう。

しかし相変わらずTV、マスコミのチェックに余念のないお節から雪に二人の死が伝わるや、雪は愕然とする。もし二人の死因が桜毒だとしたら……。でもおかしな、雪が接触したんはあざみさんだけやのに、どないなってんやろ。深いため息と共に憂鬱が心に重くのし掛かり、雪はどうしても子犬と少年に会いたくなる。今夜ならきっと、会える筈や。

恐る恐るカーテンの隙間から外に目をやる。もう夕暮れ時、夕陽が赤々と燃えて空を染め上げ、侘しく物悲しくまた人恋しい夏の日暮れである。セスナ機なあ、セスナ機でもあれば直ぐにでも飛んでゆけるやろに、背中に翼があればええのになあと、またため息。幾ら外を見ても相変わらずの人ばかり、これでは一步として外には出れそうにない。はて、どうしたもんか。下手な変装しても直ぐにばれてしまうし、タクシーでも駄目。誰かしら後を付いて来る、マスコミ、パパラッチの執念の凄まじさ。それでもにいさんたちに会いたい。山のように動かない外の連中が恨めしい雪である。

弁天川も夏まっ盛り。今頃河原には蛍が群れなし妖しい瞬きを放っているに違いない。くちなしの花の甘い香りもそこかしこに漂っているだろう。下流の町まで足を伸ばせば、夜市だってやっている。にいさんを連れてって喜ばせたい。

夜の帳が下りて、どないやろと外の様子を覗いても、相も変わらず店の周囲に張り付くマスコミ連中。あーあ、やっぱあかんわ、もう死ぬまでこっから出られへん。蛍にでもなって河原に飛んでゆきたい、蛍の光になって……。雪が深いため息を零すその時、
「ワン」

何処からか犬の鳴き声がする。

はあ、まさか。子犬のにいさんちゃうやろな。にいさん、雪は急いで外を見る、カーテンの隙間から。すると宇宙駅のガラス窓の上方に光、ふたつの小さな光が瞬きながら張り付いているではないか。何やろ、と見ると、それは蛍。二匹の蛍がそこに留まっているのである。

何で、こんなところに。吃驚した雪はそっと窓を開け、恐る恐る手を伸ばす。ところが
蛍は二匹共さっと何処かへ飛んでいってしまう。あーあ、行ってしもた。がっかり、ま
た雪がため息吐こうとしたその時、今度は、トントン。宇宙駅のドアを誰かが叩く。

「だーれ」

おっかな吃驚、雪が呼ぶと、ドアの向こうからはお節の声。

「わてや、あんたにお客さん連れて来た」

お客さん、そんなあほな。

「何で休業ちゃうの、お店。お客さんて誰」

「ええから、はよ開けて」

言われるままドアを開けると、何とそこには、お節の背後に少年。は、にいさん、何
でここいてんの、夢ちゃうやろな、目を丸くする雪。少年の胸には子犬も。

「ワン」

鳴くが早いか子犬は少年の胸から飛び降りて、そのまま思い切り雪に飛び付く。

「あらら、何で」

吃驚仰天の雪に、

「あんたの知り合いや言うから連れて来たで。一体何処の子や、ま、ええか、後は頼むで」
そう言い残すとさっさと宇宙駅を後にするお節。

宇宙駅のドアを閉じれば、そこは子犬と少年と雪だけの空間。ぺろぺろぺろっと雪の
頬っぺたを舐める子犬、くすぐったくて嬉しくて堪らない雪。

「どないしたん、にいさん。ようここ、分かったなあ」

「この子がここまで連れて来てくれたんだよ」

少年の答えに呼応するように、子犬がくんくん、くんくんと雪の匂いを嗅ぐ。ああ、成
る程、そういう訳かあ。

「流石、子犬のにいさんやな、偉い偉い」

よしよしと子犬の頭を撫でる雪。

「ちょっと待っててな」

子犬を下ろすと、事務所の冷蔵庫から食べものを掻き集め戻って来る。

「お腹減ってるやろ。ほら、遠慮せんと食べて」

雪に言われるまでもなく、がつつと食事を開始する子犬。にこにこ少年と雪がその
姿を嬉しそうに見詰めている。

「そや」

思い出したように雪。

「にいさん、後で夜市行こ、な」

「でもお姉さんの周り、意地悪な人でいっぱいだよ」

カーテンの隙間から外を覗く少年。

「ほら、あんなに」

でも雪は強がってみせる。

「平気や、にいさん。あんなん、ちっとも気にせんでええて」

「ぼくなら、充分ここで楽しいよ」

「ほんま、にいさん」

きょろきょろと宇宙駅を見回す少年、好奇心に満ちた眼差しがとらえたのは、ベッドの棚に置かれた一冊の書物。じっと見詰める少年に、

「にいさん、興味あんの。遠慮せんと、読んでもええで」

けど読めるんやろか、意味分かるんかいなと微笑む雪。

少年は目を輝かせその書物即ち新約聖書を手に取ると、貪るように読み始める。その間雪は沈黙したまま、嬉しそうに少年と子犬とを交互に眺める。少年のページをめくる速さが尋常ではない、十分、十五分、少年はあっという間に最後のページまで到達する。けど雪は少年が単にページをめくっただけやろと高を括る。子供に分かる訳ないやん、だから内容について感想など聞かない。

「な、にいさん。また人死んでもた、しかも女の人まで一緒やねん」

少年が新約聖書を元の場所に戻すが早いのか、雪は少年の手をぎゅっと握り締める。

「な、にいさん、これからどないなる思う。雪の周り、こない騒動になってもて。雪、正直怖いねん」

けれど少年はにこっと微笑んで、

「大丈夫だよ、そのうち大人しくなるから」

「ほんま、にいさん。それ聴いて、少しほっとした」

少年の手を片方の手で握り締めたまま、もう片方で今度は雪が新約聖書を取る。

「な、にいさん。神様で、ほんまいてると思う」

神様、冗談で雪が発したその言葉に、少年の手から伝わる鼓動が、どきどき、どきどきと一瞬激しく脈打つのを雪は逃さない。

「かみさま、神様って、な、にいさん」

どきどき、どきどき、明らかに少年が動揺している。そんな沈黙する少年の顔をじっと見詰めながら、更に問いを重ねる雪。

「な、にいさん。最後の審判て来ると思う」

どきどき、どきどき、少年の動揺、鼓動の乱れは増すばかり、今度は最後の審判という言葉で。何でやろ。そこへ、子犬が吠える。

「ワン」

いつ食事を終えたのか、子犬はじっと宇宙駅の天井を見上げている。

「どないしたん、子犬のにいさん。天井に何かいてるん」

子犬に問う雪に、くすくすっと少年が笑い出す。

「いやや、どないしたん、にいさんまで」

見詰める雪に、少年が答える。

「宇宙船だよ」

へっ、成る程と少年に頷く雪。それから思い出したように、

「実はな、にいさん。雪、この部屋のこと何て呼んでる思う。宇宙駅、言うねん、この部屋。宇宙駅、な、そやから、もしかして Yoshiwara 駅で、ここのことちゃう。どない、にいさん」

期待を込めて問う雪に、残念ながららかぶりを振る少年。

「Yoshiwara 駅はね、あの川のもっと上流の方なんだよ」

へっ、Yoshiwara 駅は弁天川の上流。

「ほんま、にいさん」

けれどもう少年は目を瞑っている。子犬も同様に大人しく目を閉じて、既に少年の空想の中。あらら、置いてけぼりは堪忍やと、雪も一緒に目を瞑り空想の中へ。意識がすーっと快感と共に吸い込まれてゆく。

「宇宙船、今夜は何処停まりはんの、にいさん」

「今夜はね、冥王星ステーションだよ」

(八・四) 冥王星ステーション

(八・四) 冥王星ステーション

ザヴザヴシュワー、ザヴザヴシュワー……永き宇宙の旅を続け遙かなる銀河を渡って来たメシヤ567号も、遂に太陽系へと突入。ところがその途端メシヤ567号は大雪に見舞われる、といっても太陽系宇宙空間に降り頻る雪は無色透明なり、従って目には見えない。更にこの雪の元素は、太陽系に無数に存在するかなしみである。かなしみであるが故に透明で、それはそれは美しき結晶となる。かなしみが存在するが故に太陽系には常に透明なる雪が降り頻り、それによって太陽系は今日に至るまで太陽のエネルギーによる爆発即ち滅亡と消滅から免れているのである。ちなみに第三惑星に降る雪は、かなしみが液体化即ち涙化したものである。

冥王星ステーションは太陽系の入り口(※冥王星は2006年以降、惑星でなくなり、太陽系外縁天体って扱いになったとかいう話です。あしからず)。冥土と現世との境界であり、心象界と現象界との境界でもあり、夢と現または夢と現実とのほざ間でもあり、死と生との間を静かに流れ続ける河でもある、即ち別名三途の川。この境界を模したものが、彼の有名なドラえもんのどこでもドアであることは意外に知られていない。第三惑星人から見れば、この世の終わり、人生の出口であり、同時にあの世の始まり或いは死の入り口でもある。

ま、兎に角高次元なるあの世から、この世と呼ばれる時空間的制約に拘束されたる低次元なる野蛮世界へと下生しなければ、メシヤ567号は第三惑星には辿り付けないということを意味する。

で、このメシヤ567号、実はわざわざ、ちんたらちんたら宇宙を旅せずとも、第三惑星になど一瞬にして移動詰まりテレポーターション出来るのである。がなぜそうしなかったかというと、Yoshiwara 駅のメシヤ567号を受け入れる態勢が整う為に、第三惑星に於ける時間の経過を必要とした為、わざと時間稼ぎをして待っていたという訳である。

そんなこんなでいよいよメシヤ567号が冥王星ステーションに停泊する今宵は、メシヤ567号にとってこれからしばし留守にする冥土への別れの夜でもある。今宵、冥王星ステーションにも雪が降り頻る。雪の元素がかなしみであることは前述の通りであるが、ではこのかなしみの正体は何であるかと申せば、それは三途の川に捨てられ蓄積されたるかなしみである。第三惑星人たちが死に際し冥土へ旅立つ前に泣く泣く捨ててゆくという。そんなことを知ってか知らでか降り頻る雪を眺めつつ、今宵はほろ苦き酒を酌み交わすメシヤ567号の乗組員たちである。

バビブベブー、こちらは冥王星ステーション。メシヤ567号殿に告ぐ、長旅御苦労さん。しかしながら聞けばそなた、三途の川をば渡られるという。何を好んでこの永遠の静けさに守られたる死の世界から、わざわざあのようなざわめき騒々しき野蛮な生の世界などへ行かれんとされるや。まっこと変わった方々と申すより他ありません。果たして何故なるか、ちょっと好奇心からお尋ね致す、差し支えなければお答え頂戴。以上、バビブベブー。

ピポピポピー、これはこれは冥王星ステーション殿、お尋ねも御尤も、こちらはメシヤ567号。ただ今生憎救世主は席をば外しておりまして、失礼致します。成る程わたくし共も変わり者とは重々自覚承知しておりますが、何しろ兎に角第三惑星にいかななりまっせんけん。しかも目指すは Yoshiwara 駅、どれ程にか重きかなしみの荷を背負う覚悟で参らねばなりません。

バビブベブー、なぜにそげな悲壮感いっぱいのお心で、こちらは冥王星ステーション。メシヤ567号殿、更に詳しく事情をば是非ともお聴かせ願ひ奉り候。

ピポピポピー、話せば長いことながら、冥王星ステーション殿、こちらはメシヤ567号。実は我ら第三惑星特に Yoshiwara に於ける売春についての裁き即ち最後の審判をば執行、下さねばならぬので御座いまして、ええ、売春、その最後の審判。はあ、確かに今更裁くまでもなく売春は悪、ええ、そりゃもう充分承知しております。がしかし果たして本当に悪なのかと、ふとそんな疑問も湧くので御座います。世には必要悪な一んで便利な言葉もありますから、ここで今一度原点に立ち帰りまして、売春が何故悪であるかを再検証してみたいと存じます。

では早速、売春とは言わずと知れた春を売る、即ち金銭やら物品と引き換えに我が肉体をば好きにさせることであります。で肉体とは何か、一見本人の所有物の如く思われ、ならば本人同意なら何にも悪になどならないのではないかとも思い勝ちですが然にあらざ。なぜなら肉体とは生命であり、神或いは宇宙、母なる自然が与えたるもの。それが証拠に肉体は宇宙を模してつくられておりますから、ひとつの命はひとつの宇宙。ならば肉体とは如何にも神聖なる神の器であります。それをよりによって金銭や物品を得んとして他人の欲望の的として差し出すとは、けしからん、何たることかこうなります。ところが第三惑星人たちにはこの辺のモラルが著しく欠如致しておりまして、自他に関わらず肉体をば軽んじ、粗末に扱う傾向が御座います。

ま、それはそれで良いとしまして、ここに見逃せないのが、売春に絡んで起こる様々な悲劇、性犯罪で御座います。例えば、金銭に困ったか弱き婦女を無理強いさせる、集団で襲う、小児を対象とする、欲望を満たしたら用済みと殺してしまう、その他、残忍、暴力、変態的グロテスクなるプレイを行う等々、まったく神聖なる生命の尊厳、自由、誇り、夢、輝き、美しさをば踏み躪る蛮行の数々であります。それに加え売春により得た

金銭が、マフィア等裏組織の資金源になっているのも大きな問題。

とまあこうしてみますと矢張り、売春は悪なりと結論付ける方がどうやら妥当のようではあります。がしかしここに悩ましいのが Yoshiwara の如き遊郭に見られる、第三惑星人特有のわびさびと申すもので御座います。例えば、気の早いネオン点りし夕暮れの遊郭街を背中丸め歩くひとり者の侘しさ、近所のコンビニで漫画などをば立ち読みしている出勤前のすっぴんの娼婦共、見るも耐えない素顔を必死に隠す高齢娼婦の厚化粧、アスファルトの路地に響く男娼の力強きハイヒールの靴音。また夜ともなれば更に妖しくネオンは毒々しく燃え上がりて、飛んで火に入る夏の虫よろしく海千山千ベテラン娼婦の胸に抱かれて童貞をば捨てゆくうぶな青年の涙やら、娼婦稼業もすっかり板についた娘がひと仕事終え、気だるげにくゆらす煙草の煙。また更に混沌として墮落した遊郭街にも昇り来る朝陽の眩しさ、そりゃもう美しゅうてなりません。

はてさて、ざっと以上で御座いますが、如何なるものか、いかが致すべしや。まっこと悩ましく、頭痛の種で御座います。

バビブベブー、それはそれはお迷いも御尤も、こちらは冥王星ステーション。メシヤ567号殿、わたくし共よりお伝え出来る言葉と申せば、まあ充分に悔いの残らぬようお悩みなさい、お悩みなさい、遠慮せず幾夜となくお気の済むまで、この三途の川の岸边に佇みお過ごし下され、どうぞごゆるりと。

ピポピポピー、かたじけなくも勿体ない、冥王星ステーション殿、こちらはメシヤ567号。さりとて Yoshiwara 駅にはひとりの娘がおりまして、大変なる危機をもう間近に控えており、のんびりと迷おてることも許されざる状況で御座いますれば、我々は予定通り、今宵が明けましたならば、また太陽系の旅路へと戻る所存なり。

ザヴザヴシュワー、ザヴザヴシュワー、かくして宇宙船は一星一星、Yoshiwara 駅へと近付くのであった。ピポピポピー、ピポピポ……ザヴザヴシュワー、ザヴザヴシュワー……。

少年の空想が途絶える。目を閉じていると、ざわめきが聴こえる、ビルの周りを今も取り囲むマスコミ、野次馬たちの喧騒が。恐る恐る雪が目を開けるも、もう宇宙駅に子犬と少年の姿はない。その代わり喧騒に混じって少年の歌う声が聴こえてくる、少年の子守唄が。

『……もう灯りは消してもいいだろう、みんな眠りについたから、宇宙船もかえってはこないだろう……もしもあの宇宙船が、きみを助けにくる夢を今夜見たならば、きみはいつてしまうかい、この悲しき宇宙ステーションを残して』

カーテンの隙間から僅かに光の明滅が見える。なんやろ、もしかしてと覗くと、そこ

には思った通り、蛍。二匹の蛍が宇宙駅の窓に留まっている。

「にいさん」

雪は蛍に向かって囁き掛ける。すると驚いたように子守唄は止み、蛍は二匹共さっと何処へとも知れず飛び去る。今も子犬と少年の息遣いが宇宙駅の何処かでしている気がしてならない雪である。

(九)

(九・一) 八人目の客

(九・一) 八人目の客

月が替わって暑さは増すばかり。

「ついな、習慣やから飾ってまうねん」

自嘲気味に笑いながらお節はエデンの東の玄関に、向日葵を飾る。もはや閉店同然、客など訪れる筈もないのに。

エデンの東が休業中、悪いことは重なるもので、今度はお節が倒れる、過労である。ただでさえ高齢、更に折からの心労が祟ってはどうにもならない。何しろマスコミ、野次馬を追い返し、隣近所、吉原の実力者たちと話し合い、店の子たちの面倒まで見る。それらを一手に引き受けこなしてきたのだから、当然といえば当然。人一倍がんばりやお節も、遂にガス欠という訳。気持ちばかり焦るも、体の方がもう言うことを聞かない。周囲の者たちは今迄良くがんばったものだと感心しつつ、心配でならない。

ところがお節は大の病院嫌い。

「寝てりゃ治るで」

そう言い張り、エデンの東から一步も動こうとはしない。そこを何とか雪が懇願するので、念の為毒島先生のとつてで一応検査だけは受けておくことに。結果、喉に癌が見つかり入院が必要との診断が下される。

それでもお節は頑固。

「わてはもういつ死んでもええのや」

頑なに入院を拒否、自宅療養というか事務所にベッドを置いて店で療養を行うことに。どっちにしろ、わてももうそんななごないし、ここで最期を迎えられたら本望や。そんな心持ちのお節である。

これにてお節はエデンの東の営業再開を半ば完全に諦め、

「いい潮時や」

まだ店に籍を置く娼婦たちに他店への移動を斡旋する。お節を実の母の如く慕う女たちは泣く泣くお節の許を去ってゆき、とうとうエデンの東には、お節と雪だけが残る。

「あんたは、どないすんねん」

尋ねるお節に、

「雪はここがええねん。騒ぎが治ったら、またここで商売再開したいねんけど、無理やろか」

申し訳なさそうに告げる雪に、

「あんた、ええ根性してるわあ」

呆れ顔のお節。

「あんたがやりたきゃやりゃええやん。な、気の済むまでやりなはれ」

逆に励ます。同時に自分にもしものことがあった時の為にと、残してある貯金のことを雪に告げる。

「いやや、ママ。そんな話せんといて」

雪は嫌がるけれど、これでもう思い残すこと何もあらへん、いつでも冥土に旅立てると、胸を撫で下ろすお節である。

その後マスコミの雪に対する騒ぎはどうなったかという、これが完全に下火。というのも大物芸能人の薬物使用が発覚したり各地で猟奇殺人事件やストーカー殺害事件などが相次いだ為、マスコミも庶民の関心もそっちへと流れてしまったのである。それに伴いエデンの東のビル周辺に群れなしていた野次馬共もいつしか姿を消してしまう。

後に残ったのは、絶世美少女雪の虜となったお宅小僧やら自殺願望男といった小物ばかり。どうしても雪と交わらせて欲しい、雪相手に昇天出来るなら本望と、百万円持参で休業中のエデンの東の玄関を叩くも、

「すまへん、まだ営業再開の見通しが立ったりまへんので」

丁重にお断り。

そんな小物連中の中で、唯一お節が興味を抱いた男がひとり。どんな野郎かといえば、何処ぞの新興宗教の教祖だと名乗る男で、是非とも雪を救済したいと申し出る。容姿はイケメンには程遠く小太りで長髪、自慢の顎髭を伸ばし、服装は白装束ながら清潔感はない、如何にも冴えない中年おやじで全身にカルト臭が漂っている。

はてそう言われてみれば、一昔前大騒動を起こし雪の如くマスコミの激しいパッシングにおうとった奴に何処か似てなくもない。けど確か死刑になった筈や、おかしいな。ま何でもええわ、面白そうやからちょっと話だけでも聞いてみるかいなど、乗り気になるお節。

「私の診たところ、娘さんにはどうやら訳ありの霊が取り憑いておるようだ」

「ほう、霊でっか」

「左様、お昼のワイドショーに出た娘さんの顔をば一見したばかりで、ピーンと来た。恐らくその霊が娘さんを操り、悪さをさせていると見て間違いなし」

「成る程。で、どないしたら、ええんです」

「うむ、我に任せてもらえば、何とかならんでもない」

「ほう、そら頼もしい。けどお高いんちゃいますの、こっちの方も」

にやりと笑ってお節、親指と薬指で丸を描く。

ごほん、とひとつ咳払いをすると、如何にも勿体振ったふうで教祖男、

「なに、我は世直しの一環としてやるつもりだから、ボランティアにてお払いをば、してしんぜよう」

「ボランティア、ほんまでっか。そら有難い」

「その代わりと言っては何だが、成功した暁には」

「はあ、何でっしゃろ」

するとやんちゃ坊主の如くにこっと笑みを作って教祖男、

「TVのインタビューで、大いに我を宣伝してもらいたい」

「はあ。まあ、その位なら何とかしますわ」

頷くお節に、

「よし、では早速今からどうであろう」

「今からでっか。善は急げでんな、よろしゅおます。ではこちらへ」

もし万が一でも解決したら儲けもんやと、教祖男を宇宙駅に案内するお節。

時は昼下がり。ドアを叩いて、

「な、あんた」

「どないしたん、ママ。どっか具合でも悪いん」

「ちゃう、ちゃう、うちやのうて、あんたや。ええ人連れて来たで」

「ええ人て、何。お客さんちゃうの」

「ちゃうて。こちらはな、そらご立派な教祖様や」

教祖様、口ぽかーんの雪。お節の背中に控える教祖男を一瞥し、何や、この胡散臭そうなおっさん。

「ほな、後は頼むで」

教祖男を宇宙駅に残し、さっさとお節は引き上げる。困惑の雪は仕方なし、

「何か、お祈りでもしてくれはんの」

すると教祖男、

「うむ。我こそは救世主である」

いきなし高らかに宣言。雪は再びぽかーんと口を開け、はあ、救世主、んなあほな、こんな人が救世主やて、冗談やろ、止めて。

ところがお節に語った如く、教祖男が、

「そなたには、何か訳ありの霊が取り憑いておるであろう」

などと続けたものだから、雪としたら堪らない。訳ありの、霊。確かに、お雪さんのことを言うてはるのやな、このおっさん。うーん、確かに鋭い。なら、ほんまにこの人が救世主。待ちに待った待ち侘びた、待望の救世主……。しかし、嘘やろ、なんぼなんでもこんな小汚いおっさんが救世主やて、どっぷりと失望感に溺死しそうな雪。

ところが、ところがである。その時、そのお雪さんが雪の心の中で叫ぶのである。例の如く『こいつをころして』と。はあ、混乱する雪。そやかてお雪さん、このおっさん救世主はんやで、どないなってんの。

然らばと雪は教祖男に問う。

「訳ありの霊て、一体どないな霊ですの。その訳でどんな訳」

「ふむ、それはだな」

如何にも勿体振ったふうの教祖男。しかし、

「そこまでは、流石の我にも分らんのだ」

はあ、がっくん、何や、と拍子抜けの雪。

「で、どないしたら、ええんです」

雪の問いに、気を取り直して教祖男。

「これから我が、お払いの儀式をば執り行ってしんぜよう」

「お払いの儀式」

「左様」

「それで雪に憑いた訳ありの霊が救われはんの、楽になりはんのやろか」

「ああ、勿論だ」

教祖男が自信たっぷり断言するものだから、雪は冗談半分、

「ほなら、お願いします」

お払いを承知する。

「良かろう」

例によって仰々しく答えるが早いか、教祖男は持参した鞆から次々と儀式グッズを取り出す。儀式グッズ……ところを見ると、蠟燭、縄、鞭、仮面、パイプ等、丸でSMプレイのツールである。しかも教祖男は自らが身にまとった白装束を脱ぎ、今や赤のふんどし一丁。流石の雪も慌てて、

「何してはんの。何やの、その道具、気色悪う」

「お黙りなさい、神聖なる儀式ですぞ」

「何処が神聖やねん」

しかし既に陶醉状態なのか、教祖男は有無を言わせない。

「そなたに苦痛を与えることによって、同時に霊が苦しみ嫌になって出て行くのである。さ、そなたも早く衣服をお脱ぎなさい」

「何でや、あほらし。いやや雪」

「神聖なるが故に邪念を捨て去るべく、身にまとった衣服をば脱ぎ捨てるのです。すっぽんぽんにならねば、霊は離脱出来ない」

「ほんまかいな」

教祖男の迫真の演技とでもいうのか、その迫力についつい下着姿になる雪。

「すっぽんぽんです」

自らの言葉を実践すべく、

「えいっ」

掛け声と共にふんどしを脱ぎ捨て全裸の教祖男。

「さ、そなたも」

大きく頷き脱衣を促す、しかしその目は神聖とは程遠く雪の裸体を拝まんと血走っており、生唾ごっくん状態。もう、あほらし、何がお払いの儀式やねん。さっさと商売モードに気持ちを切り替える雪。

言われるまま下着を取ると、そこには目映いばかり、絶世美少女雪の美し過ぎる裸身。

「お、おーっ」

ため息とも歓声ともつかない声を漏らしながら、完全に理性を失う教祖男というかただの欲望にまみれし哀れなひとりの男。最早お払いどころの騒ぎではない、鼻息も荒くさっさと野獣と化し、雪に襲い掛からんとする。

あらら、結局これかいな。何が教祖、何が救世主やねん、まったく。その時またしても雪の中で叫び声『こいつをころして』。分かっているがな、お雪さん。

「料金はちゃんと頂きませ。百万、ええでっか。それからもうご存知やと思いますけど、雪と寝たら……」

「ええい、分かっておる」

今や目の前にいるのは、ただの助平おやじ。桜毒に関する警告すら聞かず雪を押し倒し、むしゃぶり付く哀れ悲しき教祖男なり。結局一晩雪の肉体で遊び遊ばれた教祖男、渋々料金を払うと、夜明けと共にこそそと宇宙駅を立ち去ってゆく。

これにはお節も大笑い。

「何が教祖や、あほらし」

「ほんま。雪、がっかり」

ほんの一瞬とはいえ教祖男を救世主と信じた自分が情けない、改めて本物の救世主を待ち侘びる雪である。

宇宙駅に戻り、再びひとり切りの雪。朝とはいえ八月の強烈なる陽射しが窓から部屋へ。あつつう、カーテンを閉じて、そのまま雪はベッドに横たわる。ふう、ほんま、あほらし、ため息を吐く間に眠りへと落ちゆく。直ぐに夢が雪をつかまえる、季節が夏であることを忘れさせる夢。

(九・二) 夢

(九・二) 夢

いつもと同じ夢の始まりの景色、夜明け前何処とも知れない町に雪が降り頻る。少女はお雪さんに怯えている、降る方でなく少女の中に潜む得体の知れない内なる声に。

少女は中学三年。少年Aの死後も、少女は不良仲間との付き合いを続ける。勉強もし成績優秀、男子の人気者であることも変わらない。けれど少年Aの死のショックを引き摺っているのは確かであり、少女の生活態度、顔の表情に暗い影を落とす。が、家では高校進学勉強を口実に部屋に閉じこもり、母親である女とは殆ど顔を合わせない為、女は少女の微妙な変化に気付かないでいる。

そんな中、少女は不良仲間の少年Bと付き合い出す。なぜか。少年Aの死によって生じた漠然とした不安、自分のせいで死んだのではないか、お雪さんが殺したのではないかという疑問を確かめたくて。

少年Bとのデートの間中、少女はお雪さんに怯えている、いつあの声が叫びを上げるとか戦々恐々。けれどただお喋りしたり手をつないだり、その程度ならお雪さんは沈黙したまま。しかしいざ口付けしようという段になると、決まってお雪さんの叫びが聴こえてくる『こいつをころして』と。

吃驚した少女は唇を重ねる以前に、さっと少年Bから逃れる。そんなことを繰り返していると少年Bが段々と苛立って来るのは勿論、少女としてもいつまでも問題の核心に触れることが出来ない。かといって唇を重ねる勇気のない少女。

愚図愚図している間に、一年が巡り再びクリスマスイヴが訪れる。仕方なく少女は少年Bに応じ、こわごと口付けを強行する。が少女は直ぐに後悔、なぜなら『こいつをころして』とお雪さんの声がいつにも増して激しく叫んだから。そこへ調子に乗った少年Bが更に先へ進もうとしたから、慌てた少女は少年Bの腕から逃れ、さっさとその場を立ち去る。

少女が向かったのは矢張り、川。川に辿り着くと、一晩震えながらじっとひとりで河原に佇んでいる。少女が震えている訳は、勿論凍り付く冬の寒さばかりではない。むしろ自分がまたしても取り返しのつかない過ちを犯してしまったのではないかという恐怖の為である。

そして迎えた年明け一月初旬、冬休みが終わっても少年Bは中学に姿を現さない。まさか、生きた心地のしない少女は、ひたすら少年Bからの連絡を待ち続ける。ところが数日後、親から学校に少年Bの死亡の連絡が入り、少女の耳にもそれが伝わる。

少年Bも死んだ。その事実は、少女を奈落の底へと突き落とす。少女はお雪さんに対する恐怖でノイローゼ気味になる。

「なあ、お雪さん、雪のせいで二人共死んだん。それとも、お雪さんが二人を殺したん」

幾ら自らの心へと問い掛けてみても、お雪さんは沈黙したまま。

そんな中、少女は不良仲間のひとりから少年Bの死因について知らされる。それは、桜毒。少年Bは桜毒で死んだ。そう言われてもびんと来ない少女、

「何でそんなんで死ぬん、もしかして雪がうつしたんやろか。ほなら雪も桜毒ってこと。なあ、お雪さん、お願いやから教えて」

しかし自らの心へと問うても、矢張りお雪さんからの返事はない。

疑問と恐怖とが膨らみ、ノイローゼが加速する少女。少年Aと少年Bの親が教室や家に乗り込んで来るのではないか、警察が殺人罪で逮捕しに来るのでは。しかし最大の恐怖は桜毒、自らも桜毒に感染しており直ぐに死んでしまうのではないかと。少女は日に日にやつれ、顔も青ざめてゆくばかり、折角の絶世美少女が台無し、勉強も手につかない。

そんな少女の様子を遂に見るに見かねた母親の女が、少女と話し合う。

「なんか、心配事でもあるんちゃうの」

少女は、余計な心配は掛けまいと少年A、少年Bのことは語らず、自分が桜毒ではないかという不安だけを女に打ち明ける。

「あんた、もう誰かと関係したん」

少女はかぶりを振る。女は少女の言葉を信じ、

「本人にとっちゃ深刻な問題やな。そない心配なら一遍検査受けてみ」

女は知り合いの性病科の医師を紹介する。

「有難う、ママ」

流石、最後に頼れるのはやっぱり母親やと、少女は生まれて初めて性病検査を受けにゆく。

紹介された医師は、聡明かつやさしそうな若くて美人の女医さん。検査の結果は、

「何も異常ありませんでしたよ。桜毒の心配も一切ありません」

落ち着いた声で告げる女医のその言葉が、どれ程少女の心を救い楽にしたか。

この時少女は、その女医に強烈な憧れを抱く。自分もあんな素敵な女性になりたい、悩んでいる人を助けたい。少女は悩みと恐怖を振り払うように、ひたすら受験勉強に打ち込む。と同時に不良グループとの付き合いを断ち、真面目な中学生へと戻ってゆく。

結果、見事名門の私立高校に合格。少年A、少年Bの親が乗り込んで来ることも、警察が逮捕しに来ることもなく、顔色も良くなり、絶世美少女も復活。

卒業証書を握り締め、中学校最後の制服に身を包む少女は、桜舞う川の岸辺にひとり佇みながら心に誓う。もう二度と男とは付き合わへん、口付けもようせん。詰まり、一生独身で生きてくんや、そしてすべてを忘れてやり直そ。あの女医さんのような、人を助け世の中の役に立つ立派な仕事に就きたいと夢見る少女、十五歳の春……。

目を覚ます雪、思えば僅か数年前のことなのに、もう遥か遠い昔の出来事のようにならない。寝ている間に掻いた汗が涙の如く、雪の頬を滑り落ちてゆく。吉原の街には蝉時雨が聴こえる。

まだまだ残暑も蝉時雨も続く八月の終わり、稀代のペテン師とでも呼ぶべきあの教祖男の死が、ワイドショーや新聞の三面記事の片隅で質素に報じられる。死因も桜毒である

とはっきりと伝えられた為、お節も雪もこらまた大騒ぎになるでと、心配しつつ苦笑い。

ところが一向に騒ぎは起きない、むしろ更なる沈静化へと向かい、休業を続けるエデンの東の周囲は穏やかそのもの。ワイドショーも週刊誌も沈黙し、教祖男と吉原の魔性の女雪との関係を嗅ぎ回る者は誰一人現れない、不気味な程の静寂である。

その理由はといえば、実はマスコミに対し雪に関係する取材と報道の一切を打ち切るよう圧力が掛かったのである。圧力を掛けたのは例の闇の組織、教祖男も何を隠そう組織の一員であった。マスコミによる雪の客に対する調査が進めば、客同士のつながりからひょっとして組織の存在の発覚にまで及ぶかも知れぬと、それを危惧してのことである。彼らは世界も国家も裏で支配しているから、無論マスコミも彼らの操り人形であり、彼らに不都合な報道は一切される筈がないのである。

こうしてエデンの東も吉原の街も以前の静けさを取り戻し、知らぬが仏、何はともあれお節と雪は安堵に胸を撫で下ろす。それはそれとして雪のせいで教祖男が死去したのは紛れもない事実。従って雪は例によって憂鬱に陥る、何が教祖やろか、救世主が桜毒で死んでどないすんねん、情けな。救世主、その言葉に咄嗟に少年を思い浮かべる雪、救世主、宇宙船、メシヤ567号……。にいさんに会いたい、今直ぐにでも。

(九・三) 子犬と少年

(九・三) 子犬と少年

騒ぎが治まった今、もう遠慮する必要はない。夜の訪れを待って、弁天川へと向かう雪。子犬の食料の購入も忘れない。川沿いの通りに出ると、例によって河原にはふたつの小さな光が瞬いて、と言いたところ、そこには明滅する無数の光、蛍が瞬いている。加えて川沿いの桜並木、今は葉桜であるが、蟬が留まって夜にも関わらずそれは元気に鳴いている。

その中でも一際騒々しい一本の大きな木の下に、見るとふたつの小さな光が見える。もしかしてと、雪は歩を進める。ミニスカートにハイヒールではなく、今宵の雪は浴衣に下駄である。カランコロン、カランコロンとアスファルトの道に響く下駄の音に驚いたようにふたつの光は徐々に失われ、雪が木の前に来る頃には子犬と少年が立っている。「ワン」と雪に飛び付く子犬の声に、蟬たちが驚いて木から飛び立つ。

河原に移動し、蛍火の中で早速子犬の食事、少年と雪はしゃがんで子犬を見詰める。

「ほんま暑うて敵わんな、にいさん」

「うん」

少年は雪の浴衣になど無関心で子犬ばかり見ているから、雪としては物足りない。

「なあ、にいさん。また男の人死んでもた」

少年は顔を上げ、泣きそうな目で雪を見詰める。

「雪、にいさんのその目が好きや」

雪は少年の瞳を見詰め返しながら、少年の手をぎゅっと握り締める。ただそれだけで、どきどき、どきどきっ、女の喜びが体中を突き抜ける。

「ふう、気持ちええ、にいさん」

思わずため息を零し、潤んだ女の視線でじっと少年をとらえる雪。

「にいさん、ほんま気持ちえ、どないしたらええの雪。な、にいさんも気持ち良うない」

ところが少年は冷酷にもかぶりを振って、がっかりした雪はさっと興奮め、快感の波は途絶える。

「にいさん。その男の人な、自分のこと何て言うた思う」

少年は小首を傾げる。

「救世主、やて」

どきどき、どきどきっ、その時少年の動揺が鼓動の高鳴りとなって、握り締めた少年の手から伝わって来る。どないしたんやろ、にいさん。

「な、にいさん。救世主て分かる」

少年はかぶりを振る。そら、そやろな。

「でも死なはった、その人。雪にはにいさんが救世主やから、それでええねんけど。な、にいさん」

どきどき、どきどきっ、少年の動揺は尚も続いている。

「その人、こんなことも言わはった。雪にな、何や霊が憑いてるんやて。霊て分かる、霊が憑いてるて、どないなことか。な、にいさん」

するとこっくりと頷く少年。あれ、ほんまかいな。

「御免、またしょうもない話してもた。そや、にいさん、な、今夜こそ夜市行かへん、おもしろいで」

ところがその時「ワン」、いつのまに食事を終えた子犬が夜空を見上げながら吠える。釣られて見上げると、そこには夏の夜空を流れる天の川が横たわる。その姿は丸で暗黒の宇宙の中にぽっかりと浮かぶ海のようなのである。

「にいさん、海行ったことある」

「海」

少年は雪を見詰めながら、かぶりを振る。

「ほなら、今度一緒に行こか、海」

けれど少年は黙って、雪の顔をじっと見詰めるばかり。

「どないしたん、にいさん。雪の顔になんか付いてる」

尋ねる雪に、少年は嬉しそうに、

「お姉さんの瞳の中に、海が見えるよ」

「えっ、ほんま」

にこっと頷く少年。

「けど、ほんまの海はな、もっと綺麗やで、もっと広くて大きくて。そやから、な、一緒に行こ海」

うん、と頷く少年に、

「ほな、にいさん、約束やで」

「約束」

うん、約束や。雪は少年の小指に自分の小指を絡ませ、指切り。いつまでもそうしていたいと願う雪である。

「ほなら、いつがええ。雪はな、にいさん、冬の海がええねん。海に降るお雪さんが見たいねん」

しもた、お雪さん言うても通じへん。けれど黙って頷く少年。

「ほな、今度のクリスマスイヴ辺りにしよか」

その時突如雷鳴の如くドドドド、ドーンと音が炸裂したかと思うと、夜空がぱっと光る。

「花火や、にいさん」

毎年恒例の弁天川の花火大会である。子犬が釣られて「ワン、ワン、ワン」と、尻尾を振りながら吠える。

「子犬のにいさんて、花火好きなんやね」

すると少年がくすくすと笑い出す。

「どないしたん、にいさんまで」

少年は夜空を指差し、

「ほら、宇宙船だよ」

「へ、何処」

よく見ると確かに、打ち上げ花火で目映い夜空、その片隅に幽かにひとつの光が移動するのが見えなくもない。ところがドドドド、ドーン、打ち上げ花火が炸裂し、僅かな宇宙船の瞬きをも飲み込んでしまう。

「にいさん」

呼べど、子犬と少年は目を瞑って既に空想の中、雪も後を追って目を閉じる。花火の眩しさも轟音も忘れ、すーっと空想の中へ吸い込まれる雪。

「にいさん、今夜は宇宙船、何処」

「たった今、土星ステーションに着いたばかりだよ」

「土星、もうそんな近くまで来てはんの、宇宙船」

雪は少年の手を握り締める、何処にも逃がさへんというように。

(九・四) 土星ステーション

(九・四) 土星ステーション

ザヴザヴシュワー、ザヴザヴシュワー……太陽系第六惑星、壮大なるレコード盤を回しながら太陽系宇宙空間にどかっと鎮座したる我らが都、土星ステーション。土の星などではなく土曜日の星なれば、くれぐれも誤解なきように。我ら毎日が来る日も来る日も土曜日、毎晩が土曜日の夜の賑わいと祭りの後の寂しさでいっぱい惑星なり。

我らが壮大なるレコード盤が奏でるは、五感では聴取不可能なる幻の交響楽。そのタイトルこそは『永久』交響楽。但し未完のまま回転し続けること、既に五百六十七万年。そんな我ら土星ステーションがひたすら待ち続けるは、太陽系への救世主の降臨と新世界の到来である。ところがどっこい太陽系は、或る一つの惑星の腐敗と墮落の故に、今や地獄の業火と化しております。誰ぞ、未完の永久交響楽をば完成させる者はおらぬか。一体救世主はなんぼしととね、さっさと最後の審判をばどかーとかまさんかい。ほんに腹立つばい、何とかしてはいよ。

バビブベブー、こちらは土星ステーション。メシヤ567号殿に告ぐ、ようこそ今宵は我らの星へ。永らくの旅の疲れをばお癒し下され。ところで今宵もこの星は夜市の晩、宜しければ心ゆくまでご堪能下さい、では以上、バビブベブー。

ピポピポピー、これはこれは土星ステーション殿、かたじけなき光栄、こちらはメシヤ567号。生憎まだ救世主は不在にて、失礼をばかまします。我らの旅も残すところ後僅か、そのうちに救世主も帰還して参り、目指すはYoshiwara 駅、最後の審判へと向かわねばなりません。まっこと辛き宿命でござる。

せめて今宵ばかりは気分転換、夏の夜の土曜日の惑星の円盤の上、夜市など巡って参りましょう。みな皆様、ほーら見えて参りましたぞ、まだ夕映えの空の下に広がる、あれが夜市の街灯り。眩しきことは、あの第三惑星 Yoshiwara 駅のネオンライトの如し。

先ずは綿菓子屋、ひとつ食してみると確かに甘い。甘いは甘いなれど、同時に妙にほろ苦い。如何なる訳かと店主に問えば、

「へい、実は第三惑星は Yoshiwara 娼婦の涙でこしらえやした。よってにごう御座います」

お次は金魚掬い、と思いきや、水槽を覗くとそこには人魚。しかも掬いの網はモナカでなくて紙幣の札束。そいつを投じるや否や、寄って来るわ来るわ人魚共。一体如何な訳かとこれまた店主に問えば、

「へへい、その人魚らは、第三惑星は Yoshiwara 娼婦で御座います。生きる為とはいいな
ながら、まこと不憫なり。あたしらの元締めがマフィアなれば、尚更のこと」

それからお面屋、確かにご立派なお面がずらりと並んではいるが、良く見ると狐の面
ばかり、しかも更に詳しく見ると女狐。おいおい如何な訳かとまたも店主に問えば、

「へへい、その面らは、第三惑星は Yoshiwara 娼婦をモデルとした顔ばかり。道理でひ
ねくれ者だったり、愛想笑いだったり、厚化粧だったり。どうぞくれぐれも、娼婦らの
素顔だけは拝まぬようお気を付け下され。でなければ娘らの涙に、濡れてしまいます」

最後のお楽しみは射的屋でござい、バーン、バーン、バーンと威勢良くこのコルク銃
にて豪華景品をば撃ち倒して下されよ。ところが玩具、人形の類と思いきや、景品の棚
に並びたるは何ともむごい、第三惑星は Yoshiwara 娼婦共。ほんに残酷、丸で鬼畜外道
の所業ではあるまいか。店主、これは一体如何な事情かと問い詰めれば、

「へいへい、これぞ正しく人身売買。第三惑星 Yoshiwara で夜毎行われたるは、娼婦共
の胸をば紙幣というコルク銃にて撃ち貫くこと。故に射的ゲームと何ら相違は御座いま
せん」

かくして今宵も彼の Yoshiwara では、バーン、バーン、バーンと銃に撃たれて、娼婦
共の華が散っております。

そろそろ土曜日の星の夜も明けて参りました。Yoshiwara 駅も今は夜明け、娼婦たち
も束の間の眠り、その儂き夢にまどろんでいる頃。何処からか腹を空かした野良猫共の
寝息さえも、この宇宙の片隅に聴こえ来るかと思える程の静けさ。やがてまた夜が訪れ
れば鬨いの始まる娼婦たち、今は彼女らのささやかなる夜明けの夢をば守り給え。どう
やら、お後が宜しいようで。

ザヴザヴシューワ、ザヴザヴシューワ、かくして太陽系の旅は続くのである。まだ未完
なる永久交響楽を耳にしながら宇宙船もまた静かなる旅路へと復帰する、一星一星着実
に Yoshiwara 駅へと近付かん為に。ピポピポピー、ピポピポ……ザヴザヴシューワ、ザ
ヴザヴシューワ……。

ふっと少年の空想が途絶える。目を開く雪、べっとりとその掌は汗で濡れている。な
のに握り締めた少年の手は冷たい。そっと手を解く雪、少年の唇から零れるはいつもの
子守唄。

『……もうねむりにおちてもいいんだよ、ベッドにはきみひとり、もうだれも襲いかかっ
たりしないから、こわければ子犬をだいていればいい。ぼくをここに連れてきたのは子
犬、ぼくならきみを助けられると……もしもあの宇宙船が、きみを助けにくる夢を今夜
見たならば、きみはいつてしまうかい、この悲しき宇宙ステーションを残して』

「ほな雪、帰るさかい、にいさん」

雪が別れの手を振ると、少年は歌を止め、

「お姉さん」

雪を呼び止める。

「何や、にいさん。どないしたん、珍し」

すると少年は、

「もう夏も終わりなんだね」

しみじみと丸で大人の如く語るから、可笑しくなって雪も答える。

「有難う、にいさん。土星の夜市も楽しかったなあ」

うん、と頷く少年は、そのままただ黙って、歩き去る雪の背中をじっと見守っている
のである。

弁天川の河原では蛍が瞬き、川沿いの並木ではまだ蝉時雨。カランコロン、カランコ
ロンと弁天川を後にしながら、海に行く約束の小指の疼く雪である。

(十)

(十・一) Mr 霧下

(十・一) Mr 霧下

月が替わり季節も移り変わって秋、照り付けていた陽射しも和らぎ、蝉時雨も盛りを過ぎて既に大人しい。人の噂も何とやら、マスコミによる雪へのバッシング報道もとうに終焉し、ワイドショーでは完全に忘れ去られた過去の人。今はビルに群れる野次馬の姿もなく、騒動当時の喧騒が懐かしくさえ思え、物足りなさすら禁じえない今日この頃。お節はそんな雪と二人切りの静まり返ったエデンの東の玄関に、彼岸花を飾る。

実はひっそりと営業を再開しているエデンの東、といっても在籍するソープ嬢は勿論、雪唯ひとり。相変わらず強きの料金設定、一晚百万円で、しかもマスコミのバッシングの後では今更客など寄り付こう筈もなく、従って閑古鳥。

といっても元より真面目に商売をする気など毛頭なく、今のままでもお節と雪二人位なら充分に食っていけるだけの貯えはある。だから二人共のんびりとしたもの、雪はこの時とばかりお節を介護し世話を焼き、思えば今迄孝行らしきことなど何一つしてへんやったと親孝行に余念がない。お節の方も、雪の騒動中のストレスから解放され疲労も取れ、雪を前にして元気に昔話などお喋り、癌の診断など嘘ではないかと思える程ピンピンとしている。こうして仲睦ましく笑い合う、年の離れた母娘のささやかなる幸福の日々は穏やかに流れゆくのである、そう、ささやかなる幸福の日々。九月のお彼岸、二人の前にそのひとりの男が現れるまでは。

その男とは、Mr 霧下。この男、キリスト教の神父であり、
「暗いと不平を言うやつ、口はとっととふさぎましょう」

でお馴染み毎晩午前零時のラジオ番組『懺悔の時間』で説教を垂れる、現在日本で最も有名な神父である。霧下の宗派はカソリックでもプロテスタントでもなく、宗派を超え世界を救済しようとする真のキリスト教の団体であると自負しているらしい。がしかしこれらはすべて表向きで、実のところ例の闇の組織の一員、しかも組織内では司教という最高位に最も近い上層階級に位置する実力者、日本支部のNo1でもある。

でそんなとんでもない男が直々に一体何をしに、こんな吉原の片隅、寂れた一軒のソープランドへとわざわざ足を運んで来たか。しかも目立たぬようにとの配慮から、月並みなサラリーマンの恰好でのご登場である。さて如何なる訳があるのやら、簡単に言えばいよいよ満を持しての闇の組織による、雪への宣戦布告という訳である。

何しろ、きっかけこそ組織の下層メンバーである暴力団三上組組長の女遊びから始まったものの、その後も如何なる方法によるかは分からねど我らが同志がいても簡単に次から次へと雪の毒牙に掛かって死んでいる。流石にこのまま放置しておいては、今後どれ程犠牲者が増えるやも定かでない。いい加減組織としても黙って見過ごしてはおられない、何か対策を施さねば。という訳で、ここに霧下の登場と相成ったのである。

サラリーマン姿の霧下は、白髪、白髭、グレーのスーツで、如何にも草臥れたうだつの上がらぬ初老のサラリーマンといったところ。しかしその眼光の鋭きは、どう隠そうとも隠し得ない。まずは雪がどんな人物なのか、チェックしに来た次第。

いつもなら先ずお節が客を出迎え、面談し問題なければ、雪のいる宇宙駅へと案内する。がしかし霧下がエデンの東の玄関に立った昼下がり、生憎お節はお昼寝の最中。代わって雪がいきなし霧下と相対することに。初対面、その時お互い相手に対し第一印象、何かビビッと来るものがあつたのは言うまでもない。

何だ、この殺気、この娘矢張り只者ではないな。そう霧下がはつとすれば、一方雪の方も同様。何や、このじいさん、えげつな。しかも、しかもである。あのお雪さんが嘗てない動揺と共に『こいつをころして』と雪の内部で悶絶するが如き大絶叫を繰り返すではないか。雪自身も戦慄を覚えつつ感じずにはいられない、確かにこのじいさん、ただもんちゃうわ。

しかし流石に両者、そんな動揺などおくびにも出さず、にこやかなるお芝居で相対峙する。

「いらっしゃいませ、お客さんでっか」

「ええ、いかにも。そのつもりじゃが」

咳払いしながらの霧下に、

「たこうおますで、それでもよろしか」

「と言いますと、お幾ら」

「百万円」

ここで驚いてみせる霧下。

「何と、まあ。しかしそれだけの価値が充分にあるという訳ですな。で、お相手は」

冷静な霧下を前に珍しく緊張の雪は、ごくんと生唾を呑み込む。

「このわたくし、雪がお相手致します」

「ほう、これはこれは。あなたが噂の雪さんですか。成る程お美しい、しかもまだ少女の面影すら薄っすらと残ってらっしゃる。これは是非ともお相手願いたい」

ほんまかいな、このじいさん、何とも胡散臭い。雪がそう感じるのも無理はない。さっきから霧下のじいさん、じつと舐めるように雪の全身、頭から足の爪先まで幾度となく眺めているのである。なんちゅう目線、ほんまこのじいさん、気色悪う。嫌悪感いっばいの雪に対し、霧下の方はあくまでも冷静に雪を観察しているようである。それがまた不気味。

「どうか、しはりました」

「いや、何も」

無関心を装う霧下の、けれどその視線は刺す程に痛い。

「ほな、個室へと参りましょう」

いよいよ宇宙駅へと霧下を案内する雪。

「ここでっせ」

宇宙駅のドアを開け、にっこりと振り返る雪に、再び殺気を覚える霧下。不味い、このままあの部屋に入つては、この娘の思ふ壺ではあるまいか。この雪という娘の魅力否魔力、魔性にそそのかされて一度関係を持ってしまえば、待っているのは桜毒。後の祭

り、今迄の同胞たちと同じ運命を辿るしかあるまい。

不味い、不味いと、後退りの霧下。にこっと笑い返ししながら、頭を掻いて、「済まん、済まん。折角のところ、急用を思い出しましてな。いえ、お代はちゃんとお支払いします」

鞆の中からポーンと百万円を取り出すと雪に手渡し、後は逃げるようにエデンの東を後にする霧下である。

何やあのじいさん、行ってもた。ぽかんと霧下の背中を見送る雪。

迎いの車の中で霧下は、雪について思いを巡らさずにいられない。あの娘一体何者なのか、あの娘から発する殺気は何か、そしてなぜ犠牲者は我が組織の者ばかりであり、かつその死因は桜毒であらねばならぬのか。

ふむ、謎である。ただ、ただひとつだけ言えることは、兎にも角にもあの娘、我が組織にとって危険極まりなき人物であるということ。ああ恐ろしや、では如何致そうか、このまま放置プレイで良い筈がない。という訳で、やっちまえ、という結論に達する。やっちまえ、詰まり暗殺。でもまあ組織が組織なだけに、一人の小娘の命を奪うことなど朝飯前、赤子の手を捻るようなもの。霧下は早速実行に移すべく、組織が雇う殺し屋を招集する。

一方雪、損なこととは露知らず、嫌悪感いっぱい流石に乗り気でなかった霧下相手の商売がなくなり、ほっと一安心。但しお雪さんの方は残念無念でならない、そんなため息が雪の内部から漏れ聴こえそうである。

時は既に夕暮れ時なれど、霧下とのやり取りですっかり神経をすり減らした雪は、どうにも眠くてたまらない。ふわあーっと大欠伸したかと思うや、そのまま宇宙駅にて我知らずうつらうつら、眠りへと落ちてゆく。夢の中へと迷い込む。

(十・二) 夢

(十・二) 夢

秋なれば、落ち葉が舞い、白、ピンク、オレンジ、色とりどりの可憐なる秋桜が風に揺れなどしようものを、少女の夢の始まりはいつも同じである。夜明け前、何処とも知れない場所で雪が降り頻っている。音もなく雪が降り頻るのは、世界が夢であるからか、単に雪が寡黙である故か、ただただ雪は降り頻る。夢の世界を埋めるが如く、少女の髪に肩に降り頻る。少女の心を白く染めようとするが如くに。

少女は高校一年。男女共学名門の私立高校に入学した少女は、そこでもあつという間に男子の人気者。けれど少女は中学卒業時の誓いを胸にストイックな生活を送るのである。中学時代の不良仲間とは完全に縁を切り、服装は地味、スカートの丈は長く、髪もおかっぱ頭。大学進学を目指し、ただひたすら勉強あるのみ。

そんな少女のクラスに、熱心なクリスチャンである百合がいる。少女と百合は直ぐに意気投合し、百合は少女を自分が通う教会へと誘う。以前からキリスト教に興味のあった少女は躊躇うことなく百合の誘いを受け、生まれて初めて教会へと足を運ぶ。これが少女のキリスト教並びに聖書との出会いである。

それから少女は夢中で聖書を読み耽る。創世記を読み、イエスの生涯と教えを学び、神、救世主、同時に悪魔の存在を知る。最後の審判について知った時の衝撃は今も忘れ難い。

少女は人間的に成長し、それは母親である女への接し方にも表れる。少女は女に対してやさしくなり、時に自分が学んだ聖書、神様について語るようになる。そんな成長する少女の姿に、女は或ることを決意する。少女の出生に関する秘密を、少女に告げることを。

その年のクリスマスイヴ、女は少女を誘い、川のほとりに佇む。寒いけれど川の流れば穏やかで、透き通った川面には涙の雫にも似た銀河の瞬きが映っている。女は川の流れを見詰めながら、静かに追想する。もう十六年前、女がまだ五十代前半で、自分のソープランドをオープンしたばかりの頃。

女は唇を噛み締め、少女に語り始める。

「ええか、雪。よう聴いてや」

「何、ママ」

いつになく深刻そうでならない女が可笑しくてくすくす笑った少女も、女の真顔に直ぐに身構える。何やら、一体どないしたん、今夜のママ。

「実はな、今からちょうど十六年前のことや」

うん、と無言で頷く少女。

「そら寒い朝やったわ。わてはひとりでこの河原に突っ立って、ぼけっと川を見とったんや」

「うん」

「そしたらな、目の前になんか流れて来るやない。初めは人形かなんかやる思て」

「人形」

「ん、まだ薄暗くてな、空も曇っとったさかい。けどちごた、何や思う」

「分からへん」

かぶりを振って少女は答える。けれどその時少女は悟っている、自分のことやと。

「あんたや」

女の答え。やっぱし。

「うん」

表情ひとつ変えず頷く少女に、驚いたのは女の方。

「知っとったん、もしかしてあんた」

じっと少女を見詰める女に、少女は再びかぶりを振る。

「知らなかったけど、何やそんな気して」

「そうか」

女のため息が凍える大気中へと消えてゆく。

「ま、そういうこっちゃ」

うん、また黙って頷く少女。

「その年は珍しゅうはようから雪が降ってな。その日も夜明け前からずっと雪が降っとったわ」

「雪」

「そや。それは眩しい白い白い綿菓子みたいな雪やった」

「そんな綿菓子、食べてみたい」

「あほ」

笑いながら、女は少女の肩を抱き寄せる。この時ですら、少女の目に涙はない。

やっぱし、そやったんか。実の子でないことは覚悟していたけれど、まさか、この川を流れてきたやなんて。川に捨てられた、わたしは捨て子だったということ。少女としては確かにショックでならない。

「そやさかい」

「へ」

「そやからな、雪いう名前にしたん、あんたの」

雪、申し分けなさそうに天を仰ぐ女の顔が堪らない。

「うん、有難う」

「有難うて」

女のため息が白く、銀河へと昇ってゆく。と同時に女の中からほろりと涙、厚化粧の頬っぺたを落ちてゆく。すすり泣く女の肩を、今度は少女が抱き寄せる。

「有難う」

少女は感謝の言葉を繰り返さずにいられない。一片の雪の如く明日をも知らぬ儂き定めだったこの命を、何の因果かこの人が雪の降り頻るこんな凍り付く川の中から救い上げてくれはった。常々、いつか時が来たらあんたに本当のことを告げようと思っていたのだと、詫びるように女は言う。遂にその日が訪れたという訳である。

あの朝から変わらず川は流れ続け、冬になると雪が降り頻る。雪が、降り頻る……。夜明け前、何処とも知れぬ場所に降り頻る雪、何処とも。はっとする少女。ということは、この川の上流の何処かから、その日誰かがわたしを捨てたということやろ。そやったら、この川に沿って上ってゆけば、いつかその場所に辿り着ける。少女は身震いを覚える。

また夢を豪雪が覆う。夜明け前何処とも知れない場所に雪が降り頻る。少女はただじっと川の流れを見詰めている。その場所とは一体何処、一体誰がわたしをこの川に、なぜそして捨てたのか……。

はっと目が覚める雪、吉原の街はもうすっかり夜の顔。ネオンライトが巨大な蛍の群れのように瞬いている、しかも色鮮やかに七色の眩しさ。このネオンライトの群れを遠くから、例えば宇宙船の窓から見下ろせば、あたかも空港とか港の如く見えるのではないか、いつもそう思う雪である。そやから宇宙船が迷うこともないやろな、ここに到着する時に。しかし宇宙船というからにはそれなりに巨大な物体であろうから、果たして無事着陸出来るものなのか、一抹の不安を覚えなくてもないと、雪はひとり苦笑い。

(十・三) 子犬と少年

(十・三) 子犬と少年

宇宙駅の窓辺に佇み、改めて吉原の夜の街を眺める雪。一瞬チカッと何かが光った気がして、さっとその場所に目をやる。そこは隣のビルの屋上、看板も何もなく普段はまっ暗。なのに何でやろと思った時、ふとあの霧下の顔が脳裏に浮かび、不吉な予感に襲われる。ほんま、気色悪、雪は窓のカーテンを閉め、お節の様子を見に宇宙駅から事務所へと移動する。

その時、隣のビルの屋上で一体何が起こっていたか。実は早速闇の組織、霧下の命を受けたひとりの殺し屋、通称ゴルゴダ一号がそこに侵入し、雪のいる宇宙駅の様子を窺っていたのである。しかも雪が夢から覚め窓辺に立った時、既に雪へと目標を定めライフル銃を構えていた。ところがその時、突然ひとつの小さな光が何処からともなく降ってきたかと思うや光は直ぐに消え、その代わりライフル銃の銃口の前に、なぜか子犬を胸に抱いたひとりの少年が立っていたのである。

はあ、何だ。吃驚仰天のゴルゴダ一号、訳が分からず、

「こら、くそガキ、そこ退け。邪魔すんじゃねっつうの」

しっしっ少年を追っ払う。ところが少年はけろっとした顔で動こうとしない。

「おじさん、こんなところで何してるの。これ、何」

ライフルの銃口に自らの指を差し込む少年。

「おい、何してんだよ、死にてえのか、てめえ。とっとと退かねえと、ぶっ殺すぞ」

「いいよ、おじさん、やってみて」

はあ。子犬の頭を撫でながら、にっこりと微笑む少年。

なっに一っ、と頭に血が上ったゴルゴダ一号、子供だろうと容赦しねえと銃を構える。

「坊主、ほんとにいいのか、脳天ぶっ飛ぶぞ」

しかし微動だにしない少年。あほか、こいつ。遊びだと思っているのか、ほんとにいかれてんのか。いずれにしろ、こんなガキ相手にしたところでしょうがない。やめたと退散を決めるゴルゴダ一号、とっとと道具をしまおうと一目散に姿を消す。その姿を見送った少年も、子犬と共に何処かへすっと消えてゆく。

しかし簡単に引き下がる訳にはいかないのが、殺し屋。暗殺に失敗すれば、自分の身が危ない。失敗など許される筈もなく、有るのは生か死かのどっちか。だから何度でもトライするゴルゴダ一号。エデンの東は雪とお節の二人切りだし、暇な雪はいつも宇宙駅の窓辺でぼんやりと物思いに耽っていたりするから、隙だらけ。狙おうと思えばいつだってやれる筈である。なのに上手くいかない、なぜか。いつも少年に妨害されるのである。ライフルを構えた瞬間、必ず光が現われ、気付いたら目の前に子犬を抱いた少年が立っている。

おかしい、どういう訳だ。このガキ、一体何者、なぜ俺の仕事の邪魔をするのだ。目の前の少年に問うても、ただ笑っているだけ。では仕方がないと、ゴルゴダ一号は遂に意を決し、少年へとライフル銃の引き金を引く。

「女の前に、お前からだ」

バババババーン。

ところがところが銃弾が当たらない、なぜなら少年の体を通り抜けてゆくのである。これには啞然のゴルゴダ一号、

「ぎゃあーっ、てめえ化け物かあ」

敢え無く降参。絶叫しながら尻尾を巻いて、少年の前から退散したとき。

それでも諦めないのが、闇の組織。次にピストルの名手であるゴルゴダ二号、それでも駄目なら包丁の魔術師ゴルゴダ三号まで送り込んで雪の暗殺を謀る。しかし矢張り少年が現われて妨害、鉄砲玉も包丁も虚しく空を斬り、駄目だこりゃと退散。じゃ仕方ないから最後に集団で行ってみますかと半ば諦め気味に、五人組の殺し屋ゴルゴダゴレンジャーをば派遣する。すると今度は分身の術でも使ったか、同じ顔形の少年五人が現われ、各々五人の殺し屋を邪魔する始末。ありゃりゃ、これではどうにもならぬと観念した闇の組織、一先ず様子を見るかと、とうとう雪の暗殺を諦める。その代わり組織のメンバーには、くれぐれも雪に近付かぬよう注意されたしとの警告を発したのである。

こうして自分の身に危機が迫っていたとも露知らず、雪は無事月末を迎える。無事なのは良いけれど、考えてみれば今月はまだ少年に会っていない。それもその筈、結局今月来た客といえば霧下以外になく、その霧下も途中でキャンセルして退散してしまった。詰まりお雪さんの獲物というか犠牲者はゼロ。

これでは今迄のパターンからしたら、少年には会えない。でも会いたい、どうしても。という訳で、少年会いたさに弁天川へと出掛ける雪である。夕暮れ時、ミニスカにハイヒールという定番ファッションで決め、途中いつものようにコンビニで子犬の食糧も買い込む。

弁天川沿いの通りに出る頃は、もう日が暮れて秋の宵。恐る恐るふたつの光を捜す、けれど見当たらない。もう川岸に螢の姿はなく、辺りはまっ暗。あーあ、がっくしと、ため息が漏れる。季節は移り変わって河原の雑草の中にいるのは鈴虫やおそろぎ、あちこちに彼岸花が群れなし咲いている。

河原に足を踏み入れ、彼岸花に囲まれながら虫たちの音に耳を傾けていると、雪の背後で何か光る。何やら、もしかして、さっと振り返ると、雑草の中に小さなふたつの光。

「にいさん」

囁くように呼び掛けると、光はきらきらと明滅を始め、その目映さに雪は一瞬目を瞑る。すると光はさっと失われ、雪が再び目を開く時、そこには子犬と少年。

「ワン」と鳴くが早いか、雪へと飛び付く子犬、ぺろぺろぺろと雪の厚化粧を舐める。

「くすぐった、子犬のにいさん。でも会いたかったあ」

いつのまに少年も雪の隣りに突っ立っている。地面に食べものを広げると、よっぽど空腹なのか、がつがつと貪り食べる子犬の姿がいじらしい。

穏やかな川の面に銀河が煌めき、虫たちの美声が響き合い、彼岸花は夜風に物悲しそうに揺れている。子犬の食事をにこにこ見詰める少年へと、こわごわ雪が話し掛ける。

「なあ、にいさん。こないだ、変な男店来てな」

霧下のことである。すると、

「うん」

頷く少年の顔から、さっと笑みが途絶える。笑顔どころか、青ざめて怯えているようでさえある。どないしたん、にいさん。予期せぬ少年の反応に、雪は戸惑い唇を囁む。気色悪い男やって、大丈夫やろか。そんな心配を吐露するつもりだった雪。二人の間に沈黙が落ちる。

しばし虫の音と子犬の食事の音ばかりが響く中で、突如少年が沈黙を破る。

「お姉さん、御免なさい」

へ。その表情は思い詰めたように硬く、今にも泣き出しそうである。

「何、どないしたん、にいさん。行き成り」

驚いた雪は、少年の手をぎゅっと握り締める。どきどき、どきどき、少年の小さな心臓が高鳴り、激しく波打っているのが手に取って分かる。いじらしくまた哀れに思えて、力いっぱい少年を抱き締めてしまいたい。

「何で謝んの、にいさん。な、訳聴かせて」

「だって、ぼくたちお姉さんのこと、本当に助けて上げられないんだよ」

「ワン」

食事を済ませた子犬も悲しげに鳴く。

「そやから、何で雪のこと助けられへんの。なあ、にいさん」

子犬が雪の足に絡み付き、少年はじっと雪を見詰める。

「だって」

「うん。何で、にいさん」

「明日から神無月なんだよ」

「神無月」

じっと見詰め合う少年と雪。

「それが、どないかしたん。な、にいさん」

うん、と頷く少年。

「だからぼくたちその間、何も出来ないんだ。お姉さんとも会えないんだよ」

へ。そう言われても、何が何だかさっぱりぴんと来ない雪。ただ切迫した思いに駆られた尋常でない少年の様子に、兎に角落ち着かせようと、雪は少年の手を握り締めながら微笑み掛ける。

「な、にいさん。何や分からんけど、雪なら平気やさかい。たとえどんなことあっても雪は大丈夫、なんも心配せんといて」

けれど矢張り泣きそうな目で、少年はかぶりを振る。そのつぶらな瞳から、うるうると今にも涙が零れ出しそうである。堪らず雪は夜空を仰ぎ見る、そこには銀河の瞬き。その中にそしてひとつの光が見える、光はゆっくりゆっくりと星と星との間を移動する。

あれ、もしかして宇宙船やろか……救世主の宇宙船。救世主、と神無月。神無月、何で神無月やと、にいさん、なんもでけへんのやろ。

「な、にいさん。にいさんて、もしかして」

じっと雪を見詰める少年の瞳の中に、確かに宇宙船の光が映っている。

「救世主、ちゃう」

雪の言葉に驚いた後、少年は幽かに微笑む。雪は吸い込まれるように少年の笑みを見詰めながら、じっとそのままいたいと願う。な、にいさんて、神様やろ。

「ワン」

子犬の声に、少年は空を見上げる。そこには宇宙船の光。

「宇宙船やろ、にいさん」

確かめる雪に、無言で頷く少年。

「今夜は何処、停まりはんの、にいさん」

「今夜はね、木星ステーションだよ」

「ほんま、にいさん」

気付いたら、既に子犬も少年も目を瞑っている。雪もまた後を追うように目を瞑り、少年の空想の中へ。

(十・四) 木星ステーション

(十・四) 木星ステーション

ザヴザヴシューワー、ザヴザヴシューワー……絶え間なき宇宙の波音に混じって聴こえ来るは、第三惑星人グスターヴ・ホルスト作曲、組曲『惑星』。幾多の笑みを浮かべ、幾多の涙に頬を濡らした、我らみな永遠なる銀河の旅人兼戦士なり。理想の星、理想世界、豊かな暮らしを探し求め、永久の夢を追い求め、幾たび戦い幾たび勝利し、高き志の下幾度となく高度なる文明を築き上げたれど、求めし幸福は未だ得られず、じっと手を見る。遂には腐敗と墮落とに身を崩し、すべては無、砂塵の灰と化した。いつの世も真は偽りに、善は悪に、美はグロテスクによって冒涇され、敗北の憂き目を見たり。それでも尚、戦う銀河の戦士である我らは求めて止まない、やがて理想の宇宙の完成するその時を。今はこうして太陽系の片隅に甘んじ、戦いの傷を癒しながら、それでも尚、夜明けが訪れたならば旅立たずにはいない、傷ついた心の翼引き摺りながら。既にその時は近付いている、幽かなれどその足音がこの宇宙の波間に、ほら耳を澄ませば。すべての偽りと悪とグロテスクとを粉碎し永久の無へと帰する、そう、最後の審判の足音は、もう直ぐそこまで。

バビブペー、こちらは木星ステーション。メシヤ567号殿に告ぐ、ようよ、ここまでご無事で何より。救世主はんはまだでっか。ああ、そうでっか。何かとお忙しいご様子で、はあ何よりです。まだ例の最後の審判のご準備に追われてはりまっか、第三惑星の受け入れ態勢がまだ十分に整いませんですか、そうでっか。

昔、例えばノストラダムスの大予言だとか、二千年問題だとか、はたまたフトンベルトでしたっけか。まあそんな類の毎度毎度お決まりのお騒がせなる終末予想が現われては、これで最後最後と騒ぎ立てといて、されどどいつもこいつも肩透かしばかり。未だ最後だった例がない。やれ世の終末だ、第三惑星の終わりだ、第三惑星人の滅亡、文明の破滅だなどと大袈裟にフィーバー、好きに踊らせといて、いざ蓋を開けてみれば、はい、平穩無事。なーんだよ、まったくもう、いい加減にしてよし子ちゃん。そしたら何事もなきゃ、それはそれで良ござんした。何事も無いに越したこたない、やれやれ良かったですねえなどと、後はすつとぼけの知らん振り。まったくもって無責任の厚顔無恥。今度こそは一丁、是非とも頼んませ。我ら太陽系の惑星連中も固唾を呑んで見守っておりますさかい、そこんとこ宜しゅうお頼み申しやす、と来たもんだってんだ、いやまじで。以上、バビブペー。

ピポピポピー、これはこれは木星ステーション殿、こちらはメシヤ567号。ご心配は御尤も。まだちょっと救世主は取り込んどりまして。何しろ第三惑星に於ける悪の所業が、最後の審判の条件を満たすに後もう一步というところまで迫って来ておりまして、はい。ここは細心の注意の上にも注意をば払いながらの詰めの段階。よって救世主自らが出向いてことに当たっておる次第であります。

成る程太陽系惑星の諸氏に於かれまして、第三惑星に咲いたる悪の仇華、悪の文明が如何なる運命を辿りますかは、何よりの関心事。たかが第三惑星、されど第三惑星。高々ひとつの惑星の命運なれど、太陽系、銀河系へと周囲にどれ程の影響をば及ぼすかは計り知れぬところ。何しろ宇宙に於けるバランスは大事、結構疎かには出来ぬもの。さて如何相成りますやら。

ええ、ええ、悩ましきは彼の Yoshiwara 駅で御座います。宇宙にまたがる時空間夜行列車のそこは終着駅。ところが現在そこに栄えますのは、見た目はネオンちかちか派手なことこの上ないなれど、実体は悪によって咲いたる仇華なり。第三惑星人たちの血と汗と涙をば吸って、弱き者貧しき者をば犠牲とし痛めつけて得た資金を元にはびこっております。

では我らが救世主がいよいよよよよ、この悪の華をば裁くに当たりまして、はい。まずそもそも救世主と名乗りながら、世を救う主な訳で、そんな救世主ともあろう者が、なぜに裁くのか、とこういう素朴な或いは不可解なる疑問が誰の胸にも生じます。救世主たる者、善悪無差別、如何な悪人共ですらもひっくるめて救うのが筋ではないのか、と。

悪い奴が悪い奴となるのにも、それなりの理由というのがちゃんとある訳で、総じて悪に負ける、悪の誘惑に転げ落ちてしまうという弱さが原因です。なれば十分に同情の余地ありと言わざるを得ない。そこら辺の弱さを鑑みて、心やさしく罪をば許し悔い改めさせ天国へと導く、それこそが救世主のお役目ではあるまいか。善人を救うのなんぞ、第三惑星人でも出来ること。それを裁くだなんて、それじゃ第三惑星人共の裁判官と何ら変わりゃしないじゃありませんか。悪い奴等は滅ぼす、詰まり死刑って訳でしょ。だったら救世主なんぞ、何の存在価値が御座いましょうってんだ、とそんな不満を抱かれるのも御尤も。

では救世主に成り代わりまして、そこいらの点お答え致します。なぜ救世主は裁くのか、最後の審判とは何か。これには第三惑星人知を遙かに超越したる宇宙の永き計画いうもんが御座いまして、そこいらが微妙に関わってくるので御座います。成る程確かに善も悪も無差別に救いたい、その気持ちは救世主とて同じ也。それが出来ますならば、如何程楽か知れませんが、救世の大業も楽勝。

ところがどっこい、宇宙は遙かなる昔よりずっと少しずつ進化を遂げているので有りまして、それは太陽系のほんの片隅に浮かぶ一惑星に暮らす者共などからは想像すら出来得ないこと。では進化、その進化とは一体如何なる進化なりやと申しますれば、それは簡単に言いまして、宇宙もまた善と悪とが闘争しつつ天国と地獄とが絶えず戦争を繰り返しながら、徐々に善が勝利し天国化していくということに他なりません。三步進んで二歩下がるって奴ですな。例えればちょうど第三惑星人の歴史が、未開なる原始時代から文明社会へと徐々に進歩しているようなもの。それが宇宙規模でも行われているという訳です、はい。そしていずれの日か、宇宙は完全なる天国宇宙へと進化を遂げる。そ

れが壮大なる宇宙の計画であり、それこそが創造主がこの宇宙世界をばこしらえた深遠なる理由に他なりません。

ではそんなご立派な天国宇宙ならば、成る程善人にはまこと居心地が宜しい、なれど悪い奴等にとっては如何でしょ。第三惑星人の歴史に於いてすら、古きものが新しきものに取って変わられ詰まり淘汰され、時代は進歩して参りました。新しい時代に於いては古きものは居場所を失い、衰退しやがて絶滅してしまうのが世の常。ならば天国宇宙に於ける悪も同様、衰退しやがて滅亡するのが定め、とこうなります。

成る程悪い奴等の中にも説得すれば確かに善人になっても構わないと申す殊勝な者もおりましようが。そうではない、俺は悪のままでもよい、悪の世界でなければ生きられない、悪でなきゃ詰まんねえじゃんかよ、と申す者もおりましよう。悪とまでは言わなくとも、例えば孤独でいたい、寂しさや哀愁が好きだ、墮落、デカダンを好む、素人娘より厚化粧の風俗女がええべえ、第三惑星人の悪に負けてしまう弱さが俺は好きで堪らない、なーんて、そんな者だって世の中には確かにいるのです。

その者らは、言わば自らの美学、哲学として悪を良しとし、天国を嫌い地獄に墮ちることを望む訳です。世界から一切の哀愁やら弱さが滅びてしまうのなら、俺も一緒に滅び去るのみだ。悪と共に自ら望んで滅びの道を選ぶぞよ。そんな彼らを説得することは、流石の救世主とてなかなか困難なこと。そうするとやがて彼らは宇宙の中に、その存在する居場所を失ってしまうこととなります。それでは余りに可哀相という訳で、ここに最後の審判、即ち救世主による裁きがあるので御座います。

裁きとは詰まり進化したる宇宙に残す者は残し、そうでない者はぼっさりと滅ぼす、宇宙から永久に抹殺する、ということなのです。でも悪にとってはどっちにしる遅かれ早かれ居場所がなくなる訳ですから、その前に滅ぼすということは、即ち滅ぼして上げる、一思いに楽にして上げるということであり、詰まりは裁きとは、救世主から悪の手下共への慈悲とも言える訳です、なんてね。

とまあこんな感じでけちな御託を並べちまいやしたが、そこで彼の Yoshiwara 駅で御座います。さて Yoshiwara は、売春は、善か悪か。この点をばいよいよ裁かねばなりません。勿論悪には相違ない、しかしそうとばかり決め付けられないのがまた切ない。売春に対し第三惑星人の一部には必要悪などと称する者もおりますが、言い得て妙。間違っても善ではないが、その存在を否定も出来得ない。善ではまかない切れない役割をば、せっせと果たして来たのもまた事実。ではなぜ悪なのに必要なのか、必要なのに悪なのであるかと申せば、それは超簡単。現在の第三惑星人文明世界がまだ悪を必要とする世界であり、悪によって成り立っている側面が多々あるということに相違ありません。

売春もそのひとつ。具体的には、世には一生女に縁のない男というのも存在しておりまして、では彼らは一生女を抱く喜び快樂を得られずして死んでゆかねばならぬのか。それは余りにむごいこと。一方には女にももての男もいる訳で、余りに不憫、不公平じゃありませんか、ねえあなた。そこで登場したるが、古くは遊郭、現在の Yoshiwara とこうなる訳。では救世主はん、この必要悪なる Yoshiwara を、あんた一体どうすんの。ああ、何とも悩ましや、正直まだ結論は出ておりません、ほとほと頭を抱えておるまっ只中でありまして、言わば青春時代のまん中で尖がっておる最中です。

ほら彼の Yoshiwara 駅の街角の風景を御覧なさい。今宵も寂しき男共の背中が行き交

うアスファルトの路地にも、僅かながら雑草が芽を出しており、それがひんやりとした秋風に吹かれ笑うように揺れていたり、また草の陰に身を隠したる美声の虫たちは、善とか悪とか無差別に切々と鳴いているではありませんか。何と慈悲深き虫たちよ。とは申しましても Yoshiwara 駅までの旅程も後残り僅か。決断の時が刻一刻と迫っておることも十二分に承知している救世主でありますならば、さて如何致しますやら、はては弱った弱った。

ザヴザヴシューワー、ザヴザヴシューワー、こうして一星一星、星屑宇宙の中を今宇宙船は Yoshiwara 目指して、確実に近付きつつあるのである。ピポピポピー、ピポピポ……ザヴザヴシューワー、ザヴザヴシューワー……。

少年の空想はそこで途絶える。雪の耳には何かが聴こえ来る、それは少年の子守唄。雪は目を瞑ったまま聴いている。

『家の灯り、町の灯り、駅の灯り、ざわめき、犬のなき声、子犬が足に絡み付いてきた、まるで叱られて家出する少年、ひとりぼっち泣きそうな顔こらえて、子犬とふたり……祭りの灯り、いろまちの灯り、ネオンの波に濡れながら、とうとうここまで来てしまった、世界で一番眩しくて、宇宙で一番悲しい場所。子犬が突然なきだした、まるで合図を送るように、女の子がひとり、えさをやろうと店から飛び出してきた、悲しいほどに似合わないミニスカートにコートをかけて、誰の夢がかない、だれの夢がついたか。とうとう宇宙船はいってしまった、お腹を空かした子犬と桜毒の少女を残して、あんまり眩しかったので、宇宙ステーションと間違えたんだな吉原のネオンサイン、どうせなら奇蹟のひとつでも起こしてゆけばいいのに……』

子守唄が終わると、雪はそっと目を開く。けれどももう弁天川のほとりに、子犬も少年の姿もない。少年の手を握り締めていた筈の雪の手には、ただ一輪の彼岸花があるばかり。

(十一)

(十一·一) 拉致監禁

(十一・一) 拉致監禁

月が替わりお節は、エデンの東の玄関に秋桜を飾る。白とピンク、雪の好きな秋桜の色である。お節の体の具合に変化はなく、雪を訪れる客もなし。二人は毎日欠伸と退屈の日々、穏やかに時が過ぎてゆく。雪に物足りなさがあるとすれば、唯一少年に会えぬこと。でも来月になればまた会えるのだからと心慰めつつ、お節への親孝行に精を出す。ともあれ、何事もなく平和な時が過ぎゆくものと信じて疑わないお節と雪の二人。と思いきや月の中旬、突如雪の運命は激流に飲み込まれてしまう。

その日雪は、会えぬと分かっているながら少年会いたさに夕暮れ時、ついつい弁天川へと足を運ぶのである。いつものようにミニスカにハイヒール。河原に人影はなく、物寂しき川のせせらぎと虫の音が聴こえるばかり。雪はぼんやりと川を眺める。その時川沿いの道に黒のベンツが一台停車したのだが、雪は気付かない。

ベンツに乗っているのは、広域指定暴力団三上組の若い衆二人と中年の運転手がひとり。後部座席にでーんとふんぞり返る若い衆に比べ、運転席で控えめに坐っているドライバー。このドライバーこそ誰だろう、あのゴロ助、生まれたばかりの雪を弁天川に流した例のちんぴらである。

勿論もう年を取って頭は白髪混じり、すっかり草臥れた中年おやじになってはいるが、生まれつきのちんぴら野郎、未だに組の下っ端としてこき使われている。そのゴロ助が何の因果か、今度は雪を、雪の生まれたあの場所へと連れ戻すことになろうとは、流石の雪もゴロ助も夢想だにしなかったであろう運命の悪戯である。

一日の勤めを終え、今は川沿いに車を停め休憩中の三人。ハイライトを吹かす若い衆のひとりが、河原に佇む雪に気付き奇声を上げる。

「おう見てみ、あれ。えろうええ女やんけ」

それに答えてもうひとりの若い衆、

「どれどれ、ほう、確かにエロっ。何やあのミニスカ、強烈堪らんかう」

「どうするえ」

「どうするて、いくしかないやろ、われ」

幸い辺りに人影はない、速攻で雪を襲おうと企てる二人。

そこへ、若い衆の監視役でもあるゴロ助が口を挟む。

「兄さんら、止めといた方がええ。堅気に手出したら、後々面倒や」

しかし若い衆、今更たぎり立つ欲望の炎を消すなぞ不可能なこと。

「うっせえ、手前は引っ込んでろ蛸、じゃねえゴロ」

「心配ねえ、事が済んだら適当に脅かしときゃいいんじゃ。堅気なんざ、いざとなりゃ泣き寝入りよ」

忠告も聞く耳持たず、
「ほな行きまっか」
「よし行くべ」
ゴロ助をベンツに残し、仲良く手に手を取って河原へと向かう若い衆二人。
「ちょっと、あんたら何すんの、止めてーっ。誰か、助けてーっ」
か弱き雪を襲うなど朝飯前のちんぴら共。
「大人しくしねえと、ぶっ殺すぞ」
「エロい女に生まれた手前を恨むんだな」
さっさと雪の手足をつかまえ口を塞ぐと、河原の雑草の陰に押し倒す。
「いやや、止めて」
必死の抵抗も虚しく、今やちんぴらの餌食にならんとする雪。
とここまでは順調な若い衆、ひとりが雪を抑え、もうひとりが雪の上に覆い被さる。いざ唇を奪わんとして、雪の顔をばしげしげと見詰めるその時。ほんとええ女やあ、絶世美少女や、絶世美……。あれ、でももしかして、こいつ。興奮から冷や汗へ、欲望の波が引いてゆき、びたっと動きが止まるひとり。
「ん、どうした、お前。まさか男とかじゃねえだろな」
「ちげよ、それどころじゃねえ。こいつもしかして、あれ」
「何だよ、あれって」
もうひとりも雪を見詰め、またもや冷や汗。
「おっ、まじかよ」
「だろ」
顔を見合わせる若い衆、劣情も忽ちにして縮こまる。
「こいつ、ワイドショーのあれだべ」
「だな、やっぱし」
声を震わせ、
「吉原の魔性の女Yだあ」
二人絶叫ーっ。これはラッキー、あのマスコミ共の大騒ぎがここに来て福と転じる、世の中分からへんもんやとほくそ笑み、
「そやで、桜毒の使者雪やで。ええの、あんたら」
形勢逆転、ちんぴら共を見返す雪。
「くっそう、この尼。おい、どうする」
「まだ死にたかねえよ、俺」
では諦めて雪を逃がし、さっさと車に引き上げるかと思えば然にあらざるの二人。ひそひそと何事か相談した後、
「ほら立て」
雪を立ち上がらせると、雪の腕を引っ張る。
「止めて、離して」
「いいから一緒に来い」
「いやや、何処連れてくん。ママ、助けてーっ」
「何がママだ。つべこべ言わずに、付いて来りゃいいんだよ」

ナイフを取り出し、雪の頬に突き付けるちんぴら。おっそろしくて雪は言いなり。
そのまま雪をベンツまで連れてゆく若い衆。呆れたように運転席のゴロ助が咎める。
「何でもここまで連れてくんの。車ん中じゃ駄目だよ、兄さんら」
「ちげんだよ、ゴロ。ほら、よう見てみこの女」
言われるまま、雪をちらりと見るゴロ助。ありゃ、直ぐに雪が何者か気付く、少し前話
題だった吉原の女かい。でも見りゃ、普通の女の子じゃねえか。可哀相に顔面蒼白、こ
れから何されるんだろって小鳥のように怯えていやがる。あれっ、でも。
じっと雪を見詰めるゴロ助の胸に、忽然と言い知れぬ感情が湧き上がる。この子、どっ
かで会ったことがあるような無いような……。でも気のせいだろ。その時雪も、じっとゴ
ロ助を見詰めている。二人は互いに見詰め合う。なぜだかは分からねどそれぞれの中に
ほんの一瞬煌めいた、永遠の欠片とも呼ぶべき不思議な感情を確かめ合うように。どき
どき、どきどきっ、何やろ、このおっさん、なんか懐かしい。でも何で、この切なさは一
体何……。ゴロ助の顔を見ることで、ゴロ助がその場にいることで、急に落ち着きを取
り戻す雪。いつしか日は暮れて、弁天川の川の面には無数の銀河の煌めきが映っている。
「おい、ゴロ。何じっと見惚れてんだよ、この蛸」
「あんまりべっぴんさんなもんで、興奮しちまったか」
ガハハハハッとかケケケケッとか、品のない若い衆の笑い声が零れる。
「何愚図愚図してんだ、おめえも乗るんだよ」
無理矢理ベンツに押し込まれ、ちんぴらに挟まれながら後部座席に坐る雪。常にナイ
フが光り、最早騒ぐことも逃げることも出来ない。それに、恐怖にも増してゴロ助のこ
とが気になって仕方がない雪でもある。
「さ出発だよ、ゴロちゃん」
催促する若い衆にゴロ助、
「出発。何処行くってんだよ、こんな子連れて」
白々しく聞き返す。
「ばーか、決まってんだろ。あそこだよ、あそこ」
にやにや薄笑いで答えるちんぴらの言葉に、戦慄を覚えるゴロ助。あそこ……。
やべえ、あんなどこ連れてかれたら、この子、ぼろぼろにされちまう。何とか食い止
めねえと。
「いいのかい、勝手にあんなどこ連れてって」
唇の震えを抑え難いゴロ助。
「ああ心配すんな、組長には連絡しといたから。今頃組長から連中に報告が行ってる筈
だ。何たって今奴等の一番手に入りたいブツだかな、この尻」
何だと、ブツじゃねえだろ、人間だろが、歯軋りのゴロ助。
「ゴロちゃん、そんな怖い顔しないで。俺たち、すんげーお手柄なんだぞ」
「でも奴等、何でもこんな女ひとりに手こずってたんだ今迄。なあ、ゴロ」
「知らねえよ、そんなこた」
苛々しながら、ハンドルを握るゴロ助。
雪を乗せたベンツは走り出し、人影のない道を弁天川の上流へ上流へと向かってゆく。
雪は直ぐに目隠しされる。

「何でそんなもんするか、分かるか」

ちんぴらのひとりが雪に問う。雪に分かりよう筈もない、無言の雪にせせら笑いながらもう一方のちんぴらが代わりに答える。

「いいか、これから行く場所はな、日本のトップシークレットな訳、分かる。だからおめえに見せる訳にゃいかねえの、ガハハハハッ」

「そう、そこは別名、お化け屋敷と呼ばれている。そりゃこええ、こええとこなんだよ、ケケケケケッ」

これでバックミラーに映るゴロ助の顔も見えず、雪の前にあるのはただまっ暗な闇だけ。今走っている場所も目的地も、何も分からないまま走り続けるベント。頼りとなる聴覚に入ってくるのは、車の音と、ちんぴら二人のしょーもない会話ばかり。ゴロ助はずっと黙っているのか、一向にその声は聴こえない。後は幽かに聴こえる弁天川のせせらぎの音。ということは、まだ弁天川沿いを走っているらしい。

これから一体何処、連れて行かれんやろ。連れてかれて、何されるんやろか。しもたな、にいさんが今月は会えん言うてたんやから、宇宙駅で大人しゅう待ってたら良かったんや。と悔やんでも後の祭り、もう後戻り出来ない道を、何処までも車は走り続ける。トップシークレット、お化け屋敷、連中、奴等、お手柄、ちんぴら共の言った言葉を切れ切れに思い出す雪。組長から報告が行ってる連中、雪のことを今一番手に入れたい奴等って、誰やろ。何でそいつら、雪を手に入れたがっているんやろ。

恐怖、不安は勿論のこと、けれど雪はエデンの東にひとりでお節のことが心配でならない。今頃ママ心配してるやろ、どないしょ。せめてママに連絡を入れたい。一言だけ、心配せんといて、と。けれどそんな要求を、ちんぴら共が許そう筈もなからう。ここはじっと我慢、逃げ出すチャンスを窺って、待つしかあらへんと腹を括る雪。

それに何と言っても、こっちは吉原の魔性の女なんやさかい、そんなに無茶もせんのちゃうやろか、と希望的観測も浮かぶ。それから、雪にとって今唯一の希望であるゴロ助がいる。この男、他の二人とは違い、とても極悪非道の人間とは思えない。むしろ味方となって、もしかしたら雪を助けてさえくれるかも知れへん。そんな藁をもつかむ淡い期待を抱く雪である。

やがて弁天川のせせらぎの音が途絶え、あーあ、とうとうあの川からも遠ざかってしまふんかと思ったのも束の間、車は直ぐに停車する。エンジンが切られると、しーんとした静寂だけが雪の耳を覆う。果たして目的地に着いたんか。不安いっぱい雪に、
「ほら、着いたぞ」

車のドアが開き、ちんぴらに引っ張られながら車を降りる雪は、まだ目隠しされたまま。

地面には草、ハイヒールの踵を通して湿ったような柔らかい土の感触がある。ミニスカから出した足、膝へと秋の夜風がひんやりと吹き過ぎて鳥肌が立ち、ふう寒う、と震える雪。しもた、コート着てくれれば良かったわあと、悔やんでも矢張り後の祭り。ちんぴら二人に両腕をつかまれ、指示されるまま歩くしかない。草の地面を数歩進んだかと思うと、直ぐに止まれの指示。

(十一・二) お化け屋敷

(十一・二) お化け屋敷

ギーッ、ドアの開く音がする。古いのか、長い間開閉されなかったからなのか、錆び付いたその音が静寂の中に響く。何らかの建物の入り口にいるのであろう。背中を押され中に入ると、再びギーッ、閉ざされるドアの音が耳にこびり付く。ああ、これで完全に閉じ込められてもた、拉致監禁完了いうところやろな。よく拉致監禁事件というのが世間を騒がすけれど、まさか自分がその被害者、当事者になろうなどと夢にも思わざる雪。拉致監禁で……。その時雪は突如自分の中に何かを感じる……。お雪さんである。お雪さんが激しく動揺しているのが分かる。どないしたん、お雪さん。

パチッ、今度は電気のスイッチの音。照明のスイッチだと、目隠しされたままでも分かる。なぜなら暗黒の中に突如、仄かな灯りがぼんやりとはあるけれど確かに点ったから。

「靴を脱ぐんだよ」

その言葉と共に、ちんぴらが雪の目隠しを剥ぐ。それでも尚光は薄暗い、なぜなら点された照明器具は何であろう、裸電球だからである。今時裸電球やて、古う。

裸電球に照らし出されたそこは、今雪のいる場所は、確かにひとつの部屋ではある。そうではあるけれど、どう見ても空っぽとしか表現のしようがない、何にもない世界、殺風景というか風景にさえなり得ない、殺伐とした寒々とした、そんな人間の暮らしの息づかいや温もり、生活のにおいとはおよそ無縁の、大きなひとつの部屋ががらんと目の前に横たわっているばかり。成る程お化け屋敷という呼び名も頷ける、如何にも何か出てきそうな妖気すら漂っている。具体的には窓ひとつない灰色の壁が四方を取り囲み、一面に広がる土色のフローリングの床は如何にも凍り付きそうな冷たさ。息が詰まりそうな、例えれば檻のない牢獄であり、先程のドア以外に外界との接点が見つからない、逃げ場のない大きな洞穴である。

ハイヒールを脱いで、床に上がる。すると、どきどき、どきどき、鼓動の高鳴りを覚える雪。けれどその鼓動は雪のものではない、お雪さんのものである。雪の中で、お雪さんの動揺が忙しさを増し、と共に苦悩を帯びる。何で、な、お雪さん、さっきからどないしたん。ここは何処、お雪さんと一体どないな関係があんの、このお化け屋敷。問い掛ける雪へと、どきどき、どきどき、お雪さんの動揺は内なる声となり、遂には雪の心の中で絶叫と化す。

『だれか、こいつらをころして』

だれか、こいつらをころして。心の中で繰り返し呟く雪。だれか、こいつらを……。お雪さん、そやったんか。忽然とすべてを悟る雪。今雪の中で記憶の封印が解かれ、物心つく以前、いやそれより過去、生まれ来る前の記憶すらもが雪の胸に甦る。許されざる忘却の河を渡りて、たったひとつのキーワードによりて『だれか、こいつらをころして』の。

今甦るあの残酷なる日々の記憶、どきどき、どきどき、恐怖、戦慄、暴力、責め苦、出血、失神、嘔吐、空腹、痛み、痒み、不快、汚辱、傷み、怒り、諦め、虚無。女を取り囲む複数の男たちの罵声と嘲笑、男たちから発射され女の体中に付着したどろどろの体液、或いは血管に刺さった不衛生極まりない注射針から注入された後血液によって体内を循環し人格を破壊し尽くす薬物、局部へと挿入された異物、大人の玩具の冷たいモーター音、鞭、蠟燭、縄、鎖、手錠、飛び散ったアルコール類の瓶の破片……そしてかなしみと絶望。

お雪さん、ほなら、ここがあの場所、あの場所は、ここなんやね。ここが雪の生まれた場所、たとえどんなに悲惨な場所であろうと、懐かしい雪の故郷。確かに弁天川を上流へ上流へと上り、辿り着いた場所なんやから間違いあらへん。なあ、お雪さん。お雪さんて、もしかして雪の本当のママ。自らの心へと問い掛ける雪。けれどお雪さんからの返事はない。

改めて今自分のいる場所を見渡す雪。お雪さんはただ繰り返す。『だれか、こいつらをころして』な、こいつらて誰、誰かて雪のこと、お雪さん。以前遥か昔に発した問いを、今一度お雪さんへとぶつける雪。我に返ると、部屋の中には雪の他にはちんぴら二人がいるのみ。ゴロ助はベンツの中にいるのか、ここには見当たらない。それとも既にゴロ助はベンツを走らせ、もう遠くへ行ってしまったのか。ちんぴら共はじっと雪を監視している。大人しくしている限り、何か手出ししてくる様子はない。彼らはただじっと何もせず、雪を監視するばかり。煙草すら吸わず、ただひたすら何かを待つように、確かに彼らは何かの到着を待っているようである。

やがて外に物音がする。車が近付き停車する音、車を降り歩き出す足音、話し声。その声も一瞬静まり、ギョーッ、建物のドアが開かれる。その方角へと、恐る恐る振り返る雪。誰、入ってきたのはスーツ姿の四人の男。あっ、その中に見覚えのある顔、誰あろう忘れもしないMr霧下である。ああ成程、ゴロ助たちが、連中と呼んでいたんはこいつらやったんか。

霧下の方とて、雪を忘れる筈はない。一目見るなり、

「おっ、これはこれは。確かに間違いない」

驚嘆と歓喜の声で、囚われの雪を歓迎する。ちんぴら共は恭しく霧下たちに頭を下げ、指示を仰ぐ。

「御苦労様、お手柄でしたな。もう下がって宜しい」

これで雪をつかまえたちんぴら共も、お化け屋敷から姿を消す。

霧下たちの前に、ひとり取り残された雪。ゴロ助は勿論、今となっては若い衆の二人すら尋常に思える程の、霧下たちの不気味さである。霧下を含む四人の男を前にして『だれか、こいつらをころして』と叫び続けるお雪さんの内なる声は、今や苦悩と悲愴に満ちて、雪の胸を引き裂かんとする程である。

「何、あんたら。雪をどないするつもりや」

威勢良く啖呵を切ったところで、相手は男四人。しかもこの場所は、連中のテリトリーときている。

ちんぴら二人が去り、今や邪魔者のいないこの密室に於いて、男たちは早速本性を剥き出しにする。にやにやと薄笑いを浮かべながら、雪を取り囲む。お雪さんの叫び『だれか、こいつらをころして』も虚しく、今の雪にはどうしようもない。何やねん、と睨み返すのが精一杯。男のひとりが行き成り雪を殴り倒す。痛っ。忽ち衣服をむしり取られ、雪は全裸。更には両手首に手錠を掛けられる。これでは抵抗のしようがない、檻に閉じ込められた哀れな裸の小鳥である。

「騒いでも無駄ですよ。ここはね、完全なる防音設備が施されておりますから」

冷静かつ冷淡な霧下の声。バシッバシッ、雪を殴った男は鞭をしならせ、雪の横たわる床に幾度となく叩き付ける、威嚇。音だけなのに、刺すように痛くてならない。

「さて、如何致しましょう」

霧下の言葉に、顔を見合わせる男共。組織としては当初の計画通り、暗殺してしまうのが筋。ところが絶世美少女雪を目の当たりにした霧下以外の男たちは、既に理性を失い判断力を鈍らせている。

「うーん、実に美しい、美し過ぎる。この美しさは」

「ビーナス、イヴ、モナリザ、いやいや聖母マリア。いずれにしる超一級の芸術品ですよ、こいつは」

「殺すには美し過ぎる、勿体無い。余りに惜し過ぎますなあ」

競う程に雪の美貌を称え合う男たち。

そこで霧下、

「それではこの美しき人形をば、今宵は思う存分堪能致すとしましょうぞ」

他のメンバーは同意し頷き合う、にやにやと薄笑い。

堪能て、どないすんの。

不安な雪を尻目に、

「その方が、我らが同志を死に追いやったこの娘に対し、罰を与えることにもなりましょう」

罰、満足げに頷き合う四人。

「ではわたしが手始めに、調教をばして進ぜましょう」

高らかに宣言すると鞭を持った男は、バシッバシッと雪に制裁を開始する。

痛っ、痛っ。

忽ち全身傷だらけの雪。

「痛い、助けて、もう止めて」

苦しみもがく雪の絶叫が、部屋いっぱいに響き渡る。

「ほら、どうだ。我々はな、美しいものを見ると我慢がならんのだ。冒流し破壊せねば気が済まないのだよ。はっはっはっはっは」

こいつら、完全にいかれてるわ。男たちの瞳の奥に宿る、丸で宇宙のブラックホールの如きどす黒い闇に、戦慄を覚えずにはいられない雪。

その夜、男たちによる制裁、美を冒す儀式は、夜が明けるまで延々と続けられる。失神したら水をぶっ掛け、意識を取り戻せばまた責め苦、そして無限とも思えるその繰り返し。儀式の道具も、手錠、鞭は勿論、蝋燭、縄、鎖、パイプと登場し、ありとあらゆる変態プレイのオンパレード。但し流石の男たちも、桜毒への恐れから折角の儀式のお供

えである雪と直接交わることは出来ない。そのフラストレーションが、雪への制裁を更にヒートアップさせるのである。

そもそも雪の唯一の武器は、性交渉によって感染させる桜毒のみ。それが力を発揮出来ないとなれば、男たちに好きに弄ばれるだけ。流石のお雪さんも地団駄踏むように『だれか、こいつらをころして』と雪の中で虚しく繰り返すばかり。

やがて夜明けの時が訪れる。狂った饗宴の終わりである。どんなに残酷悲惨な夜であろうとも明けない夜などないのだと、けれどしみじみと味わうだけの余裕すら今の雪にはない。しかも雪にとってこれは、地獄の日々の始まりに過ぎないのである。

気を失ったまま冷たい床の上に横たわる雪をひとり残し、男たちはお化け屋敷を後にする。

ギーッ、ドアが閉じられ、カチャッ、外から鍵が掛けられる冷たいその機械音の後、それでも部屋に静寂は訪れない。なぜなら転がったパイプのモーター音が、乾電池が消耗するまで唸り続けるからである。自らの嘔吐物、蝋燭の蝋、これまた自らの血の滴、体中に付着した男たちの体液、縄と鎖の跡にまみれながら、雪は眠りへと落ちてゆく。全裸であり両手首に手錠をされたまま、寒さも痛み恐怖も今は忘れ。いつもの夢がそんな雪へと訪れる。雪は夢へと吸い込まれる。

(十一・三) 夢

(十一・三) 夢

夢の始まりだけは、いつも同じである。夜明け前何処とも知れない場所に降り頻る雪、絶え間なく雪が降り頻る。けれど眠りの主はもう既に知っている、そこが何処かを。ただ夢の中の少女だけがまだそれを知らない。

少女は高校二年。中学時代の不良仲間とは完全に縁を切り、将来に明るい夢を描き、真面目に勉学に励んでいる。加えて母思いでやさしく、服装や身だしなみに一点の乱れもない、目映いばかりの紺の制服に身を包む女学生である。聖書を学び、少しでも世の中の困った人の為に役に立つような、そんな仕事に就きたいと願いながら、日々高校生活をエンジョイしている。

元々絶世美少女であり、年を増す毎に女としての魅力、色香も加わって、学園一の美しさ。周りの男子が放っておく筈がなく、常に男子の人気ナンバーワンである。なのに外見の美貌に一切関心を示さない少女は常にノーメイクだから、同姓からの受けも良い。家がソープランドという負い目も、この年頃ではむしろ珍しがられたり羨ましがられたりでマイナスにはならない。こんなふうにならぬ少女の人生は、一見順調そのものに思われる。

ところが転機が訪れる。それ程までに魅力的な少女であれば、彼女にしたい、あわよくば関係を持ちたいなどと願う男子は星の数どころではない。中にはチャンスさえあれば、強引にでも我がものにしたいと野心を抱く輩もいる程。その中に少女のクラスメイトまりあの兄、高三の少年Cがいたのである。

まりあと少女は聖書研究を通じて知り合った友人で、少女はまりあの家頻りに足を運び、熱心に聖書を学んでいる。神について最後の審判について熱く語り合い、将来の信仰生活についても相談し合う、正に親友。その様子にただ少女に接近したい下心から、少年Cは興味もないのに妹と少女の聖書の勉強に加わってくる。

時は冬休み、その日もまりあと少女と少年Cの三人で聖書の勉強会を開く予定で、少女は昼間からまりあの家へ出掛ける。ところがまりあの家には彼女は不在、いるのは少年Cだけ。

「あいつ直ぐ戻るって。だから先に俺たちだけで始めといてって」

普段はまりあの部屋で行う勉強会を、今日は自分の部屋でと誘う少年Cに初めは警戒するも、親友のお兄さんなんだからと信じて少女は少年Cの部屋に上がる。

二人切り。まりあの帰宅を待って、そわそわと落ち着かない少女。少年Cの方はといえばすっかり興奮状態、時折目と目が合ってもうどきどき。絶世美少女の魅力は、いとも簡単に十八歳の男の子の理性を奪い去るのである。聖書など初めから眼中になし、欲望の虜となって少女に襲い掛かる少年C。

「雪ちゃん、俺ずっと好きだったんだよ。ね、だからいいだろ」

「あかん、止めて。絶対あかんで」

必死に抵抗する少女を、力づくで抱き締める。

「ほんまあかん、死んでまうで」

「雪ちゃんとひとつになれるなら、死んでもいい」

「あほなこと言わんと、離して。な、お兄ちゃん」

けれど少女の警告も虚しく、少年Cは少女の唇はおろか処女までも奪わんと、少女の制服を剥ぎ取り下着に手を掛ける。

「いやっ、ほんま止めてーっ」

少女の悲鳴とは裏腹に、お雪さんの方は今迄で最も激しく『こいつをころして』と懇願の叫びを上げる。

「あかん、もうお仕舞いや」

少女の声は絶望のため息へと沈むばかり。

欲望を満ち、理性を取り戻した少年Cは途端に怖気づく。青ざめた顔で少女に土下座。しかし時は既に遅し、たとえ少女が親友まりあの為にと少年Cを許したところで、既に少年Cの体内に埋め込まれた桜毒という時限爆弾を取り除く術は絶無。こうして少女は暴行被害というこれ以上ない悲劇の中で、処女を喪失するのである。

「はよ病院行って、検査した方がええで」

少年Cに精一杯気休めの忠告を残し、少女はまりあの家を後にする。それから半月と経たずに少年Cは桜毒によって死ぬのであるが、まりあの両親はその死因を恥じて、誰にも口外しない。その為少女の周辺が騒々しくなることもない。しかし少女の心にはまたひとつ傷が増える。暴行を受けたショックも然ることながら、今更ながら自らの中に潜む男の劣情を煽る魔性と、男を死に至らしめる毒性とに恐れおののき、それでも逃れられず十字架の如く自らに背負うしかない少女である。

少女の傷は深く、まりあを始めとする友人とも疎遠になり、将来を悲観。けれど相談出来る相手は誰もいない。唯一弁天川のほとりにひとり佇み、弁天川の流れに向かって問い掛けるのみ。

「どうしたら、ええの……」

(十一・四) ゴロ助

(十一・四) ゴロ助

「どうしたら、ええの。お雪さん」

自分が発した寝言に吃驚して、目を覚ます雪。目の前には人影。誰、はっとして恐る恐る見ると、それはゴロ助である。しかも他には誰も見当たらない、ゴロ助ひとり。何や、ほっとため息吐く雪。けど何でこの人、ここにいてんのやろ。

気付くと雪の体には、毛布が一枚掛けられている。ふわふわっとして、あったかくて堪らない。それに体に付着していた筈の汚物類も、いつのまにかきれいに拭き取られている。でも誰が、もしかしてこの人。じっとゴロ助を見詰める雪、ゴロ助も雪を見詰め返す。

「おはよう。良く寝てたから、起こせなかったよ」

それから、小さく謝るゴロ助。

「御免な」

雪を憐れむ気持ちが痛いほど伝わってくるその笑みと声である。返事する代わりに、ううん、とかぶりを振る雪。尤も雪はまだ声を出す気力すらない。

「腹減ったろ、食いもん買って来たから。それに下着やら何やら」

笑い掛けるゴロ助に、腹、食いもん、はっと我に返った如く腹を空かしている自分に気付く、空腹を否食欲を思い出す雪。今は拉致監禁の絶望状態を嘆く以前に、まず飢えを癒すのが先決である。

ゴロ助が買って来たのは、コンビニのお握りとカップラーメン。手錠の鍵を解くゴロ助。

「ったく、ひでえ事しやがる」

昨日は気付かなかったけれど、部屋の奥には小さなキッチンとユニットバスが備わっている。お湯を沸かし、カップラーメンにお湯を注ぐゴロ助。雪はゴロ助の買ってきてくれた下着と元々着ていた上着を身に付ける。上着といっても下はミニスカ。上着といえばゴロ助、

「似合うかどうか分かんねえけど」

白のワンピースを買って来てくれたらしい。お握りにがっつき、カップラーメンをすすする雪。余りの空腹に見栄えも味覚もどうでも良い、食する雪の恰好は丸で野生の狼少女である。

「慌てなくていいから、ゆっくり食べなよ」

こんな綺麗な若い娘さんがと、ゴロ助は雪が不憫でならない。

食事を終えると、雪はバスルームでシャワーを浴びる。体中がまだヒリヒリと痛み、充分には洗えない。その間にゴロ助は床の清掃を済ませる。雪がシャワーを終えると、改めて対面するゴロ助と雪、二人は床に腰を下ろし向かい合う。

「おっちゃん」

これが雪のゴロ助への第一声である。

「何だい」

問い返すゴロ助の声はやさしい。やっぱしこのおっさん、ええ人や。この人だけは信用出来る。

「雪、これからどないなるんやろ」

縋り付くよな雪の眼差しに、けれどゴロ助はため息混じり、かぶりを振りながら答える。

「分かんねえ。ただ言えるこたあ」

「うん」

「残酷なようだけど、もうあんた、こっから生きては出らんねえってこった。おいらには、それしか答えらんねえ」

生きては出られへん、ゴロ助の言葉を心の中で繰り返し呟く雪。詰まり、殺されるいうこっちゃ。しかしすべてが他人事のように実感が湧いて来ない。

「あんた、いや雪ちゃんだったね。おいら雪ちゃんの世話しろって言われてな、それでここにいるんだよ」

世話、丸で犬か猫やな。

「早い話、見張り、監視役いうことやろ」

「ま、そういうこっちゃ。あいつらからは逃げらんねえ、おいらもあんたもな」

「分かってる、おっちゃん。な、あいつらて何なん」

「ん……」

天井を見詰め、

「そうさな、正直おいらにも良く分かんねえ。あんまり余計な事喋ると、おいらだって殺されちまうしな」

そう言うと、ゴロ助は黙り込む。

「そやな、御免」

雪も唇を嚙む。

沈黙の間に、お節のことを思い出す雪。

「おっちゃん。ひとつだけ頼みあんねん」

「何」

「うん、雪な、店に年取ったママいてんねん」

「うん知ってる」

「でも雪帰れへんやろ、今頃心配してる筈やねん。な、雪のこと心配せんように、ママに伝えてもらえへんやろか」

「うーん、そうだなあ」

腕を組み、困惑のゴロ助。

「あの店だろ、TVでやってた」

「うん」

考え込み悩んだ末、ゴロ助が口を開く。

「分かった。何とかばれないように伝えてみるよ」

「ほんま」

頷くゴロ助。

「有難う」

雪の顔から笑みが零れる、この場所に監禁されてから初めての笑顔である。

「絶対内緒だぞ」

「分かってる」

そこまで話すと、疲れと痛みでぐったりと壁に凭れる雪。

「じゃ済まないけど、これ」

ゴロ助は再び手錠を雪の両手首に掛ける。その時一瞬、ゴロ助の手が雪の手に触れる。はっとする雪、初めてゴロ助を見た時に感じた懐かしさが再び込み上げる。

「おっちゃん。良かったらおっちゃんの手、触らせてくれへん。ええやろ」

「はあ」

突然のことに戸惑うゴロ助。

「触ってみたいねん」

「そんなに言うならいいよ。こんな汚い手で良かったら、幾らでも触りな」

「有難う」

ゆっくりとゴロ助の掌を片方ずつ、自分の両手で包むように握り締める。

「冷たい」

「そうだろ」

「うん。それに荒れてごつごつしてて、ママとおんなじや」

「そうか」

照れ臭そうに苦笑いのゴロ助。どきどき、どきどきっ。

「くすぐってえ。もういいだろ」

けれどゴロ助の声も今は聴こえない、雪はただじっとゴロ助の手を握り締めたまま。もしかして、咄嗟に悟る。もしかしてこの人ちゃうやろか、あん時の……。目を瞑る雪。このままじっとこうして、この人の手に包まれていたいと願う。

しかし、「奴等だ」とゴロ助の声。

確かに外で物音がする。車が停車する音、車のドアを開け閉めする音、そして近付いてくる複数の足音。目を開きゴロ助の手を離した雪の目は、既に恐怖に怯えている。その目を直視出来ず、視線を落とすゴロ助。

ギョーッ、ドアが開くとそこには、ゴロ助の言葉通り霧下と三人の男が立っている。霧下以外は昨夜と異なる顔である。

「また連絡するからな」

霧下の言葉に従い、後ろ髪引かれる思いでお化け屋敷を後にするゴロ助。雪はまたひとりになる、狂気の野獣たちの中にひとり取り残されたる美しくも哀れな小鳥。悪夢という名の白昼夢の始まりである。雪の美しさを一目見ただけで、男たちは舌なめずりを始めている。

お化け屋敷を出たゴロ助はベンツで最寄駅まで向かい、駅前の駐車場にベンツを入れると電車で移動を開始。尾行されていないか確認しながらわざと遠回り、複数の電車に乗り換え数時間を費やし、辿り着いたのは吉原。雪との約束を果たす為である。けれど直接お節の店エデンの東に出向く訳にはいかない。既に自分と同じような組織の手下が、お節を見張っているに違いないからである。

そこでゴロ助は、嘗てエデンの東に在籍し他店に移動したソーブ嬢を捜すことに。とはいっても吉原だけで二百店舗はあるソーブランド、いつ巡り会えることやら。それでもやるっきゃないと、こつこつと店を巡るゴロ助。女の子とちょっと言葉を交わすだけ、プレイには及ばないから体力は消耗しないが、料金を払わない訳にはいかないから出費はかさむ。

そんなゴロ助の願いと努力が天に通じたか、ソーブ巡りを始めて五日目の五十軒目、遂に元エデンの東嬢のひとりを見つけ出す。ゴロ助はその娼婦に中身は決して見ないでくれと懇願し、お節への手紙を託す。手紙の内容は以下である。

『あなたの娘さんは今身の危険がせまっているので、ある場所にかくまっています。しばらく帰ってこれませんが、心配しないでください。よけいなことをすると娘さんの命が危ないですから、警察には連絡しないように。それからこの手紙は読んだらさっさと燃やしてください。』

果たして秘密裏にゴロ助の手紙は娼婦を通じ、お節の手元に無事届けられる。お節としては雪のことが心配で、警視庁に相談するか否かと迷っていた矢先のこと。何も手につかなかったのか、エデンの東の玄関に飾った秋桜の花はすっかり枯れてしまっている。ゴロ助の手紙を幾度となく読み返したお節は、けれどゴロ助の文面に従わず、そのまま手紙を保存することに。

お化け屋敷では連日連夜、雪への責苦、儀式という名の暴行、虐待が繰り返される。フォクシズムに於ける生け贄の儀式、洗礼である。鞭で血だらけにされ、蝋燭の蝋によって蠟人形の如く固められ、縄で縛り上げられ吊るされ、聖なるミルクと称した男たちの体液を全身に浴びせられる。夜昼問わず、といっても雪には今が何時か丸で見当も付かない。ただひたすらいたぶられ、責められ、痛め付けられるばかり。これならば死んだ方が遥かにましという酷さであり、最早雪は言葉を発することも出来ず、ただ喘ぎのたうちまわるのみ。その絶叫や、とても人間とは思えない獣のそれである。

彼ら闇の組織にとって、生け贄は美しければ美しい程申し分なく、理想としては絶世美少女或いは絶世美少年が望ましい。その美しさを思う存分汚し生け贄が絶叫し苦しみもがけばもがく程、彼らの信仰は向上し、魂は満たされ、崇拜の的である女狐女王(フォクシーQueen)とひとつになれるのであり、それが彼らにとっての無上の喜びに他ならない。なお女狐女王、こやつこそが人類をたぶらかし、有史以来数々の無慈悲残酷なる

凶悪犯罪を行わせてきた、所謂悪魔と呼ばれるものの正体である。従って女狐女王こそが、人類の真の支配者であるとも言えるのである。

本来ならば儀式の一環として参列者全員と生け贄との性交は必須であり、その快樂に酔いしれることこそが最上の信仰向上に通ずる修行ともされているのであるが、残念ながら桜毒の恐怖から雪に対してはそれが出来ない。そのフラストレーションたるや凄まじく、殆ど憎悪の権化と化して更に激しく雪を責め立て、儀式は凄惨を極めゆく。しかも絶世美少女という最上の生け贄を擁した儀式とあって、儀式の司教を務める霧下に案内された組織のメンバーが次から次へと訪れるから、儀式はいつ果てるともなく延々と続くのである。

儀式の始まりに際し、司教霧下はこう唱える。

「どうだ、苦しいか。しかし当然の報いである。なぜならばお前は、我らの同志を次々と死の闇へと葬り去ったではないか。よってお前が同志の受けたと同等の否それ以上の苦しみを受けねばならないのは当然である。本来ならば即刻極刑に処すべきであるが、それでは同志の受けたる苦悩を贖うに充分ではない。従ってお前は生きながら、死の苦しみをば味わい続けねばならぬ」

こうして雪は死を除くありとあらゆる苦悩と恐怖を与えられ、女としての恥辱を味わわれ、人間としての人格、プライドをずたずたに破壊されてゆくのである。

加えてお雪さん。雪の内部に於いて雪と同様に否それ以上に苦しみもがき、悔しさをにじませ泣き叫ぶ。ただ憎しみと悲しみが降り積もってゆくばかり。だから雪にとっては、内と外からの二重の責苦となるのである。

誰も思うように、雪もまた死んだ方がましやと自殺を考えるようになる。しかし外に出られず毒物も持たない雪は自力で自らの息の根を止めねばならないが、最早それだけの力すら残っていないのである。舌を噛み切る力も、壁に頭をぶち当てる力もなく、死ぬ気力も、死ぬ希望すらも与えられない。

「どないしょ、お雪さん」

お雪さんに問い掛けても、ただいつものように『だれか、こいつらをころして』と哀願されるばかり。

こうして繰り返される雪への儀式、虐待の中で、司教霧下が不可解でならないことがひとつあった。それはこれ程の痛み苦しみを受け絶望に苛まれながら、儀式を開始してから未だ嘗て一度として雪は泣かない、その涙を一滴として零したことがない点である。これには流石の霧下も驚きを隠せない。生け贄の涙こそ儀式参列者の最大の快樂のひとつでもあり、興奮も倍増である。しかし幾ら雪への攻撃の手を強めようとも、矢張り泣く気配はない。それどころか霧下の動揺を見透かしたかの如く、余裕の笑みさえ零す雪である。姿形は絶世美少女でありながら、その精神たるや化け物ではないかと内心恐れおののく霧下である。

(十一・五) お雪さん

(十一・五) お雪さん

ゴロ助が霧下に呼ばれ、組織の面々と入れ替えにお化け屋敷に入ると、決まって雪はいつも気絶しているか眠っている。雪の呼吸を確かめ、後はそのままそとしておいて上げるゴロ助。たとえ血だらけ傷だらけ、どろどろの体液まみれであろうとも。その瞬間だけが雪にとって唯一の休息であり、すべての、生きているすべての苦痛を忘れられる一時だからである。

それに雪が目を開ければ、雪の悲痛な言葉を聴かなければならず、それがまた堪らなく辛く悲しい。つい逃げ出したくなってしまふ。けれど雪の方が自分などより遥かに苦しいのである。それを自分だけ逃げ出すなど出来る筈がない、雪をこの地獄にひとり置き去りにしてゆくことなど。目を開けてそんなゴロ助を見つけた時の雪の第一声は、決まってこうである。

「おっちゃん、雪死にたい」

「おっちゃん、雪のこと、ころして」

その声も上手く聴き取れない、もう声を出す元気もなく、精一杯搾り出すような掠れた声で囁くのである。がんばれよ、元気を出して、などと言える訳もなく、ただ言葉に詰まるゴロ助。

雪は自力で食べることが出来なくなっており、その為ゴロ助が与えている。お握りを細かく裂いて雪の口に入れてやり、カップラーメンは麺を挟んだ箸を雪の口に運んで食べさせ、カップを向けてスープを吸わせる。丸で幼い子供に食事を与えるが如くである。同様に自分でシャワーを浴びる力もない雪。汚れた自分の体を洗うことも、付着した汚物を拭くことも出来ないから、すべてゴロ助が手伝う。排泄にすら無関心であり、放っておくとそのまま床に垂れ流す為、ゴロ助が雪を担いでトイレに連れてゆく。

体が傷だらけである為、シャワーも駄目、猛烈に傷に沁みるから、痛がって狂ったように暴れる。だから付着した汚物を丁寧にティッシュで拭き取り、湿らせたタオルで全身を拭いて上げる。そうすると僅かでもさっぱりとするのか、声を立てずに雪が嬉しそうに笑うので、ゴロ助は堪らず嗚咽しそうになるのである。

体を拭いて上げながら、雪に語り掛けるゴロ助。ちゃんと聴いているのかいないのか、それすら判別出来ない。雪からの返事は殆どない。丸で人形に向かって独り言を呟いているようである。

「うちの若い衆が、何でここのことをお化け屋敷って呼ぶかっていうとな。それは、あいつらもう何十年も前からずっとここで、今あんたにしているようなことをやってきたんだよ。どっかから少女や若い娘さん、そればかりか少年までもかっさらって来やがってな」

ゴロ助の話に、言葉はなくとも雪の瞳は悲しみに溢れる。それには気付かず語り続けるゴロ助。

「世間的には家出、蒸発、行方不明ってことで片付けられた、そんな何人もの少女たちが、奴等の犠牲になってこのお化け屋敷で最期を迎えたんだけど、やっぱり成仏出来ねえんだろうな、噂によると化けて出てくんだとよ。おいらはまだ一度も見たことねえけど、そんなことをうちの若い奴等が口にしてやがった。おっと、詰まんねえ話して済まないね。眠いなら、寝ていいんだよ」

ゴロ助がいる時、決まって雪はゴロ助の手を握り締めながら、眠りへと落ちてゆく。掠れた声で雪が言うには、

「おっちゃんの手触ると、痛みが減んねん。なんでやろ」

雪が眠りに落ちた後も、ゴロ助は雪に聴かせるようにお喋りを続ける。雪は眠りの中で、その声を聴いている。

「それはもう十八年以上前のことになるかなあ。おいら今でも忘れらんねえ、あの少女のことは。そりゃ可哀想だった、とても口じゃ言えねえ地獄だったよ。来る日も来る日も、それこそ今のあんたと同じ、いやそれ以上の目に遭わされていたんだから」

十八年以上前、あの少女、地獄、あんたと同じ、いやそれ以上の目に……。眠りに落ちた雪の体がびくっと反応する、そして高鳴る鼓動、どきどき、どきどきっ。

「だってね、その子は何人もの男と関係させられたんだよ。おいらが知ってるだけでも、まず先代の三上組組長。こいつが先ず最初にその子に手出しやがった。可哀相にその子はまだ処女だった。それから次に北っていう政治家、泣き叫ぶその子を一晚中玩具にしてやりたい放題。お次が和田っていう医者、まだ若造の癖して、無抵抗のその子を大人の玩具で責め立て喜んでいやがった。それから黒岩っていう大学教授、こいつがSM趣味らしくて変態プレイでご満悦。次が海野っていうこれまたどうしようもないちんけなエロ小説家、こいつときたら一晚中その子の体舐め回して興奮していやがったとき。次に山口っていう男優、こいつなんぞTVで見る優しい顔たあ大違い、容赦なく鞭で叩いて悦に浸ってやがった。お次が変わったところで夫婦揃っての変態、金子っていう実業家。二人でその子を玩具にして楽しんでやがった。奥さんの方なんぞ同じ女の癖して同情する所か、その子を召使い扱い。それからその頃流行っていた何とかっていう宗教団体の教祖野郎、こいつがまた他の奴等に負けず劣らずの変態振り」

どきどき、どきどきっ、眠っている雪の指がゴロ助の手を捜し求め、ぎゅっと握り締める。

「これだけでもまだほんの一部なんだよ、他にも何十人といてさ。まったくひでえ奴等さ。だからその子は、連中のことを死ぬ程恨んでいたよ。そりゃそうさ。その子いつも口癖のようにこう言ってた、寝てる時もうわ言のように。誰か……」

お雪さん。

「だれか、こいつらをころして」

ゴロ助の声を遮って、そう呟いたのは掠れた雪の声。

「何だ、起きてたのかい、雪ちゃん」

目を開き、無言で頷く雪。

「その子、どうなったん」

訴えるような目で雪が問う。

「聞きたいかい」

ゴロ助の手を握り締め、うん、と頷く雪。けれどゴロ助はかぶりを振り顔をしかめる。
「実はね、生憎おいらも知らねんだ。ていうのもその子突如、こっからいなくなっちゃまったもんだから。死んだんですかって誰かに聞いたら、そうだって。でもそれ以上は奴等何も教えてくれなかった」

雪を見ると、再び目を瞑っている。ゴロ助は独り言のように言葉を続ける。

「でもね、実はその子妊娠してたんだよ」

妊娠、はっとして再び目を開く雪。

「誰が父親かなんて、分かりゃしない。そりゃ奴等の中の誰かにゃ違いないけど。その子、いなくなる直前にこの部屋の中で産んだんだ。でもその子はもう自分が産んだことさえ自覚出来ない様子だった。生まれた子供は女の子だったけど、扱いに困った奴等は どうしたかっていうと」

じっとゴロ助の顔を見詰める雪。

「連中、おいらの組に始末を頼んできやがったんだよ。そいでその役目が、おいらに回って来たって訳」

雪の顔を見詰め返すゴロ助、見詰め合うゴロ助と雪である。

「でもおいら、殺せなかった。殺せる訳ねえよ、あんなかわいい顔見ちゃったら。だからおいら迷った挙句決心して、その赤ん坊をこっそりと弁天川に流したんだ。ばれたらばれたでいいやってやけくそ、誰かいい人に拾われろよって」

「いつ」

「えっ」

「それは、いつなん」

問う雪に戸惑いながら、ゴロ助は答える。

「忘れもしねえ、十二月二十四日、クリスマスイヴの早朝、まだ夜明けの時刻だった。その年は珍しくもう雪が降っていてな。でも今から思うと、そんな時は殺すよりまじだって思ってやったことだけど、やっぱ寒さで直ぐに死んじゃったろうな。だからおいらが殺したも同然なんだ」

激しくかぶりを振ってゴロ助を見詰める雪、その手は強くゴロ助の手を握り締めたまま。その唇がぼそぼそと動く、けれど上手く聴き取れない。

「何、何だって」

問うゴロ助の耳に囁くように雪が語り掛ける、掠れた声で、ときどき、ときどき、脈打つ鼓動と共に。

「パパ」

「えっ」

雪を見詰めたまま、沈黙するゴロ助。

「おっちゃんのこと、パパて呼んでええ」

ゴロ助に微笑み掛ける雪、けれどその理由は語らない。

「いいよ、呼びたきゃ幾らでもそう呼んでいいから」

それでこの子の気が休まるならばと微笑み返すゴロ助、雪の手をそっと握り返しながら

ら。ゴロ助もまた内心もしかしてと思う、もしかして雪があ那时的赤ん坊なのではないかと。でもそれにしちゃ、産んだあの少女とちっとも顔が似てねんだなあ。

安心したようにゴロ助の手を離すと、再び雪は目を瞑る。今度は心の中のお雪さんへと語り掛ける為。

「お雪さん。なあ、お雪さんてそんな大変な目におうとったんやな。雪、ちっとも知らへんかったわ。そやかて雪まだ赤ちゃんやったやろ。お雪さんのこと、助けて上げれへんやった、御免な……。そやからお雪さん、雪に縋って来たんやね。お雪さんの憎しみがそのまま桜毒みたいな猛毒なって、雪に遺伝したんちゃう」

その瞬間から雪はもう、死にたい、ころして、と思わなくなる。

(十一・六) 弁天川

(十一・六) 弁天川

それからの雪は人が変わったように、儀式の中で、奴等の前で、ただ黙々と責苦を受け入れる。ただ必死に堪えるその姿は、十字架の上の崇高なるイエスの姿にも似、また悟りを得る前の我武者羅に難行苦行に耐え修行を積む仏陀の姿をも髣髴とさせるのであり、全身血だらけ男たちの体液にまみれながら、それでもなお神々しい雪の姿である。

生け贄が抵抗しもがき、苦悶し絶叫し逃げ回りのたうちまわってこそ、奴等にとって至上の喜びである。なのに雪があたかも悟りを得たかの如く無抵抗に耐えているのでは、興奮も快感も半減、まったくの興奮めである。そこで連中は何か新たな刺激はないかと思いを巡らす。かねてより雪がゴロ助に懐いているのを快く思っていなかった霧下が、妙案を思い付く。それは雪とゴロ助とを関係させることである。たとえそれでゴロ助が桜毒で死んだとて、雪の世話係なら幾らでも代わりはいる。勿論公開処刑宜しく、奴等みんなの見ている前で行わせる。であれば自分らは死ぬことなく、絶世美少女雪の痴態をば思う存分拝めるではないか。

それは素晴らしい、よし善は急げという訳で、早速実行に移す霧下である。部屋の中央にマットを敷き、雪とゴロ助をそこに寝かせる。勿論二人とも全裸、その周りを霧下たちが取り囲む。ビデオカメラを回し、さながらAV撮影の様相。さていよいよ撮影スタート。

とんだことになっちまったと面食らうゴロ助。雪とて同じである、折角父と慕うゴロ助を相手にまさかこんなことをさせられるとは。自分が殺されるならまだしも、これではゴロ助が桜毒で死んでしまう。

「後生ですから、それだけは勘弁して下さい。旦那方、頼みます」

手を合わせ、哀願するゴロ助。しかし連中が許す筈もない。

「駄目だ、いいからやるんだよ。良い冥土の土産になるではないか。我等でも手出しの出来ないこの娘と結ばれるのだから、本望であろう」

「羨ましいぞ、この色男」

冷やかされ、鞭で威嚇され、渋々雪を抱きかかえるゴロ助。

「済まねえな、まったく」

「雪の方こそ堪忍して、パパ」

男たちに聴かれないように、互いの耳に囁き合うゴロ助と雪。

「あん時おいらが、あの赤ん坊を始末しておけば良かったんだ。そしたらあんた、こんな目に遭わずに済んだのに」

「何言うの」

「許してくれ」

かぶりを振る雪。

「有難う、パパ。ほんま有難う」

「有難うだって、そんなばかな」

ゴロ助の目には、涙が溢れている。雪も出来るならゴロ助と共に泣きたいと願う、けれど矢張り雪の目に涙は溢れないのである。

「こら、何をつべこべ話しているのだ」

「おい、さっさとやれ」

霧下の鞭がゴロ助の尻を容赦なく叩く。

「いてえな、まったく。こん畜生」

霧下たちをじろっと睨んだ後、再び雪を見詰めるゴロ助。

「じゃ、雪ちゃん」

「うん」

ところがその時雪の中で、お雪さんは沈黙したままである。今迄男と関係を持つ時必ず聴こえたお雪さんの『こいつをころして』が聴こえない。それは、お雪さんがパパを憎んでへんからやろか、それでパパを助けてやろうというサインとちゃうやろか。だとしたら、もしかしてパパは。雪は悟る。パパ、助かるかも知れへん……。な、お雪さん。

「きれいだよ、雪ちゃん。世界一のべっぴんさんや」

「嬉しい、パパ。雪、気持ちええ」

「本当かい、嘘でも嬉しいよ」

「嘘ちゃう、ほんまや。ほんま、気持ちええよ」

「おいらもだよ。もう、いつ死んでもいい」

「雪も、一緒や」

目を閉じる雪、ゴロ助の目もまた閉じて。雪を抱き締めるゴロ助と、ゴロ助にしがみ付く雪。どきどき、どきどきっ、二人の呼吸が重なり合い、ふたつの鼓動がひとつになる。二人はひとつになる。どきどき、どきどきっ、その時雪の耳に何か聴こえる、遠く幽かに。それは川のせせらぎ、弁天川の川の流れる雪の全身を包み込む。

「パパ、雪はな今、弁天川や。すべての命を包み込んで流れる、あの川や」

「そうだよ、雪ちゃん」

雪の耳に、弁天川の流れるの音と共に何か聴こえて来る。何やろ。それはやさしい、確かに聴き覚えのある声。声、それは少年の歌声、子守唄である。

『家の灯り、町の灯り、駅の灯り、ざわめき、犬のなき声、子犬が足に絡み付いてきた、まるで叱られて家出する少年、ひとりぼっち泣きそうな顔こらえて、子犬とふたり……祭りの灯り、いろまちの灯り、ネオンの波に濡れながら、とうとうここまで来てしまった、世界で一番眩しくて、宇宙で一番悲しい場所……誰の夢がかない、だれの夢がついたか。とうとう宇宙船はいつってしまった、お腹を空かした子犬と桜毒の少女を残して、あんまり眩しかったので、宇宙ステーションと間違えたんだな吉原のネオンサイン、どうせなら奇蹟のひとつでも起こしてゆけばいいのに……』

「にいさん、どないしたん、こんな時に」

心の中で雪は、少年に問い掛ける。

「子犬のにいさんも元気やの」

するとふたつの小さな光が雪の中に点る。

「そうや。な、にいさん、宇宙船どないしたん。今夜は何処、宇宙船」

光に向かって問い掛ける。少年の答えが何処からか返って来る、確かに雪の耳に聴こえる。

「今夜はね、火星ステーションだよ」

「ワン」

子犬の鳴く声も聴こえた気がして、

「にいさん、雪も連れてって」

雪はそのまま少年の空想へと吸い込まれてゆく。

(十一・七) 火星ステーション

(十一・七) 火星ステーション

ザヴザヴシューワー、ザヴザヴシューワー……そこは弁天川の川辺か、それとも銀河の海の岸辺なのか。ふたつの小さな光がそこに佇み、佇んでいたかと思うといつか子犬と少年に化身している。何処とも知れないその大河の岸辺で、少年の目には涙が溢れている。少年の悲痛な叫び声が、宇宙の波間に木霊する。

「おねえさーん、何処にいるのーっ」

にいさん。返事をして上げたいけれど、少年に雪の声は届かない。その代わり少年の胸に抱かれた子犬が、ぺろぺろぺろっと少年の涙に濡れた頬を舐める。少年は幾度となく叫び続ける。

「おねえさーん、何処にいるのーっ」

少年の震える声は宇宙船を激しく揺さぶる、今火星ステーションに到着したばかりのメシヤ567号を。

バビブペブー、こちらは火星ステーション。メシヤ567号殿に告ぐ、今何か激しい、惑星レベルに於いては天変地異に等しき振動が発生し、宇宙全体をば揺さぶった模様。そなた何か心当たりはございませぬか。聞けばそなた、第三惑星へ行かれるとか。はて何もおもしろいことありませんでしょうに、一体あげな野蛮未開の星に如何な用の御座いますかい。何でも第三惑星の民もときたら、我が星をばあたかも兄弟の如く慕っておりまして、やれ火星人探索だ、移民計画だ、などとやたら威勢の良いことをほざいている模様。そもそも火星人という言葉からして誤り、人などという野蛮なる生きものと我々を同類にしないで頂きたい。しかし我らあげな烏賊か蛸かも分からぬような、変てこな生物なんぞでは御座いませんから、悪しからず。

ま、それはいいとして救世主はんはまだご不在でっか。一体何処においでです。えろう長いこと空席のようで、その間に闇の組織の連中に宇宙をば好き勝手乗っ取られはしまいかと、冷や冷やいらぬ取り越し苦勞の、そればかりが気になってなりまへんでして、はい。ま何はともあれ今宵はごゆるりと火星の黄昏酒場などお立ち寄り下さりませませ、思う存分ごくつろぎなさい。以上、バビブペブー。

ピポピポピー、これはこれは火星ステーション殿、こちらはメシヤ567号。ご指摘通りまだ救世主は不在にて候。いろいろと世の中への不安、不満、お怒り、疑問など御座いまいしょうが、それも御尤も。なれどすべては大宇宙の計画と法則、並びに運動で御座

います。世の中、何分善だけでは成り立たぬもの。そこにどうしても悪が必要となる場合も生じますよう。昼があれば夜があるように、夏が来れば冬が参りますように、光と闇、明暗、陰陽、長短、縦横、強弱、美醜、破壊と創造、戦争と無戦争、そして男と女となる訳です。こうして宇宙は相対関係によりて上手くバランス、均衡をば取りながら、ゆっくりゆっくり運行しておるので御座います。

それ故とろとろと宇宙の進歩、進化たるものはのろく、時に苛々も致しますが、どうぞ長き目でお見守り下さいませませ。またなぜ絶対でなく相対かと申せば、ぶっちゃけ片方だけでは詰まらぬ、面白みが乏しゅうなって退屈に陥ってしまうもの。男女にしても互いに互いを補うことで新たな命をば創造してゆく、そこに生命の芸術活動が宇宙の中に延々と営まれ、喜び悲しみが生活を潤し豊かにしてゆくもので、男と女のどちらが欠けても果たして命は生まれぬような宇宙の仕組みになっております。

しかしながら何事も度が過ぎてはなりません。度が過ぎますと救世主は大慈によって見過ごしましても、完全なる宇宙の法則が許しません。なぜなら僅か一点の曇りが大宇宙の計画をば狂わせてしまいかねませんから。そこで悪であろうがなかろうが過ぎたるものへの抹消作用、即ち自然淘汰が宇宙の中に発生するので御座います。こればかりは救世主といえども、手出しは許されません。例えば第三惑星に於きまして、生命の発生以来、幾たびか生物が繁栄しては絶滅し、また第三惑星人たちの文明が栄えては必ずや滅亡の運命を辿ったのもその為なのです。生者必滅、会者定離、栄枯盛衰の理……、夏草や兵どもが夢の跡、これらすべて皆、宇宙の法則によるものなり。

そして今、救世主並びにメシヤ567号は第三惑星にはびこる悪、その度を超したる悪の支配に対する自然淘汰発動の為、彼の地に赴かんとすなり。しかも救世主は一足早く、準備の為既に第三惑星の或る場所へと潜伏しておりまして、先程の振動はその為の……おっとこれはまだ内密のこと。何しろ救世主、第三惑星に潜り込む為、只今いささか不完全なる生命形態にて存在致しております故、それをば闇の組織に見抜かれますと、ちょっとやばい。救世主の存在自体が脅かされかねません。何れははっきりしますことですから、少々ご辛抱をばお願いします。

ではその第三惑星にはびこる悪とは、言うまでもなく凶悪なる性犯罪及び売春でありまして、例えばこのモニタをば御覧下さい。これが第三惑星 Yoshiwara 駅にて正に現在行われております、鬼畜外道によりまする雪なる娘への拉致監禁並びに性的暴行で御座います。まったく見るに耐え難き野蛮非道行為、ええ、あれが本来闇を照らすべく作られたる蠟燭と呼ばれるもの、あの熱き蠟をば如何にするかと申せば、ほら、ああやって、娘の柔肌に垂らして喜んでおるのです。あちちちちと見てる我らも火傷しそうな程。これが宇宙征服をも目論む闇の組織、その名も Hill of Golgotha によって操られたる第三惑星人たちの悪の所業のほんの一例に過ぎません。こうして最早 Yoshiwara 駅は風前の灯、救世主によります最後の審判の時をば待つのみです。

たとえ如何程救世主が Yoshiwara の街の哀愁、例えば夕暮れのネオン、店を探して通りを歩く哀れ一人身男の寂しき背中、自ら呼び込みをする娼婦たちの似合わないミニスカートの膝の鳥肌、腹を空かしてネオンの路地をうろつく野良の子猫どもの遠吠え等をばいとおしもうとも、そして何とか助けて上げたいと憂いたところで、所詮そんなものは救世主の単なるセンチメンタリズムに過ぎません。センチメンタリズムで悪をば救

済出来る程、世の中甘くはありません。以上、長々とお付き合い、有難うございました。

ザヴザヴシュワー、ザヴザヴシュワー、かくして宇宙船は、いよいよ第三惑星へ後一步、終着の Yoshiwara 駅へと迫っているのである。ピポピポピー、ピポピポ……ザヴザヴシュワー、ザヴザヴシュワー……。

少年の空想が途絶え、目を開く雪。ゴロ助は既に雪の肉体から離れ、弁天川のせせらぎも、少年の声、子守唄ももう聴こえない。闇の組織の連中も今はもう帰ってしまったのか、お化け屋敷に彼らの姿は見当たらない。ただ嗚咽の音が漏れるばかり、それは「済まねえな、済まねえな」とゴロ助が泣いているのである。

(十二)

(十二・一) 柿の実

(十二・一) 柿の実

月が替わりお節は、エデンの東の玄関に真紅の薔薇を飾る。雪が一番好きな花であり、待てど暮らせど帰って来ぬ雪が一刻も早く無事な姿を見せるようにとの、お節の切なる祈りからである。しかし幾ら待てども待てどもその気配はなし、謎の手紙の主からその後の続報もなし。然らば仕方なしとお節は重い腰を上げ、遂に110番、ゴロ助の手紙に書かれた忠告を破って警視庁に相談する。

お節はゴロ助の手紙を証拠として差し出し、目を通した警察は、

「成る程これは確かに怪しい、何か事件に巻き込まれた可能性がありますな」

雪の捜索に乗り出すことを約束し、一旦お節を自宅というかエデンの東に帰す。ふう、これで一先ず安心や、後はお巡りさんがはようあの子を見付けてくれはるのを待つだけと、今度は警視庁からの連絡をひたすら待つお節である。

ところがそんなお節の許へやってきたのは、警察の報せではない、何と包丁の魔術師ゴルゴダ三号である。

「はあ、あんた何もんや。誰か助けて、痛い嫌やあ。雪、御免なあ」

叫ぶ暇さえなく逃げ惑い、玄関の真紅の薔薇を抱き締めながら哀れお節は殺害され、ここに七十幾才の生涯を閉じるのである。これにてソープランド、エデンの東もまたお仕舞い。

しかしなぜこんな事態となってしまったか、話は簡単、相手は世界を裏で支配したる闇の組織である。ならばたとえ警察だろうが国連だろうが、如何なる正義と平和を唱える組織、団体でありとても例外ではなく、確実に彼らの支配下にあるのである。逆にその位出来なきゃ、世界を操るなんぞ無理無理って訳。

ならば極秘裏にお節に手紙を書いたゴロ助の身や如何に、場所は変わってお化け屋敷である。手紙がゴロ助のものであることは容易に想像が付く、なれど霧下たちはしばしゴロ助には手を出さない。なぜなれば先月の下旬、雪と関係を待たせたゴロ助であるからして、大事なモルモット。ゴロ助が桜毒を発症するか否か興味深々で見守っている最中である。もし桜毒発症となれば何れにしろ死ぬのであるから、わざわざ手を下す必要もなし。そのタイムリミットは半月、長くて今月中旬迄。それまでは今迄通り、雪の世話係をやらせておくことに。

相も変わらず雪は儀式の生け贄として、無慈悲残酷なる責苦の日々。といっても雪が責苦に対しじっと黙って耐えている為、連中としては面白くなく、それに雪をいたぶるにも正直飽きてきたと見え、お化け屋敷に訪れる男たちの人数も回数も段々と減りつつある。儀式が終わると、傷付いた雪をゴロ助が身心共にケアし、食事を与え、汚れた体を拭いて上げる。

ゴロ助が雪と関係を持ったのは、組織の連中に強要された一回切り。後はゴロ助、いつ訪れるか定かでない、けれど確実に襲い来るであろう桜毒の発症を恐れながらも、懸命に雪を支え続ける。そんなゴロ助を男女の関係を持った後も「パパ」と呼び慕う雪。二人の間には実の父娘以上の深い心の絆が出来ており、お化け屋敷の中で二人切りで過ごす時間は、外界のノイズから遮断された限りなくやさしく穏やかな一時である。外の世界と隔てられた雪は、まだお節が死んだことさえ知らないでいる。

時より外で何か物音がして、どんな些細な音でも組織の男たちの気配ではないかと神経質に怯える雪を、ゴロ助がやさしくなだめる。

「ありゃね、柿の木の実が落ちた音だよ」

「柿の木があんの」

「ああ、でも渋くてとても食べたもんじゃねえけどな」

物音といえば他には鳥や虫の鳴く声や風の音ばかり、それ程お化け屋敷の中も周囲も普段はしーんとしているのである。

そんな二人の前を時は流れ去り、遂にタイムリミットが訪れる。ところが月の中旬を迎えたというのに、未だゴロ助はピンピンとしているではないか。性病検査を受けさせても陰性、何ら問題なし。はあ、一体どういうことだと拍子抜けのゴロ助本人は勿論、霧下を始めとする組織の連中も首を傾げるばかり。その中で唯一雪だけが、やっばし思った通りやと、密かにほくそ笑む。

なぜだと、頭を捻る霧下。まず思い付いたのは、矢張り偶然だったのではないかということ。偶々被害にあった我が同志たち全員、元々桜毒に感染していたのではあるまいかと。しかしこれは考え辛い。そこで密かに疑ったのが、桜毒のウィルスである。元々雪は桜毒のウィルスを所持していて、自分の店ではそれが使えたが、ここお化け屋敷では不可能、従ってゴロ助は助かったのだと。

早速霧下は他のメンバーには内緒で、雪に対し徹底的に拷問を加え白状させようとする。きさま、一体何処で桜毒のウィルスを入手したのだと。ところが、今は無人となってしまったエデンの東を風潰しに捜しても桜毒のウィルスは出て来ず、雪も「そんなもん、知らん」の一点張り、満更嘘でもなさそうである。

悩む霧下を尻目に、他のメンバー共は早速儀式に於いて、生け贄である雪との関係を持つに至る。

「同志諸君、ここに目出度く我々は生け贄との交渉を許された。さあ皆で思う存分、この美しき生け贄を、この快樂をば堪能しようではあるまいか。さあ、皆の信仰向上の為」

おーっ、ブラボー、待ちました、拍手喝采、こうして儀式の興奮は最高潮へと達する。どいつもこいつも目の色を変え、鼻息荒く獣と化して、次から次へと雪に襲い掛かる。抑え付けていたフラストレーションの爆発や凄まじく、嵐か狂気の如く雪の肉体にむしゃぶり付き、丸で雪の肉を食らうが如しである。

こうして夜毎、一晩中夜明けまで、幾夜も幾夜も入れ替わり立ち替わり組織の男共が押し寄せ、絶世美少女雪と関係を持つ。饗宴否狂宴は月の末まで延々と続き、その数霧下をも含めて延べ六十六人に達するのである。その渦中、

「お前は娘の母親に手紙を送った危険人物である。従ってこれ以上お前を生かしておく訳にはいかない」

ゴロ助もまたお節と同様、雪の知らぬ間に殺害されてしまう。ゴロ助の死後、雪の世話係として三上組の若い衆が呼ばれるが、それを不審に思った雪は若い衆を問い詰め、ゴロ助が殺されたことを知る。悲嘆に暮れる雪、それでも尚男たちの容赦なき儀式は続くのである。

さてお雪さんの様子はどうか。お雪さんは雪が組織の男と交わる度、雪の中で『こいつをころして』と激しく絶叫する。従って雪は、自分と関係した男たちが桜毒になることを悟る。そしていよいよ最後の男、霧下が雪と関係する番である。霧下としては桜毒のウィルスの件があり気が進まぬが、儀式の司教という立場からしてそうそう逃れられるものでもない。

霧下を前にして、その時お雪さんは雪の中で雪に向かって静かにこう告げる。

『ありがとう、ゆきちゃん。これでなにかもおわったわ』

終わった、どういうこと、な、お雪さん。霧下に好きなように弄ばれながら、雪はお雪さんに問い掛ける。けれどもうそれ以上お雪さんからの声は聴こえない。雪は目を瞑る。終わり、終わったて、一体何が……。

すると薄暗いお化け屋敷の隅に、すーっとふたつの小さな光が現われ、ふたつの光はじき子犬と少年とに化身する。そこへ雪から離脱した、薄っすらとしたひとつの影が現われる。影はひとりの少女の姿をしており、古い十八年以上も昔の女学生の制服を着ており、更に泣いているのである。少年はそんな少女の涙を拭い、手を差し伸べる。子犬は少女の頬を濡らす涙をぺろぺろぺろと舐める。少女はくすぐったそうに笑みを浮かべ、笑い終わると、決心したように少年の手をつかまえる。途端に少女も少年も子犬もすーっと何処かへ消えてしまい、これにてお化け屋敷は元の薄暗い闇へと戻る。最期に少女が笑みを浮かべたことが、少女の霊が無事成仏したことを物語っているかのようである。それは、霧下も雪も気付かないほんの一瞬の現象であった。

そうとも知らず雪と関係し欲望を満たした霧下は去り、お化け屋敷には雪ひとりが残される。雪はそのまま眠りに落ち、夢の中へととらえられる。今何時なのか、雪には見当も付かない。しかし遠く何処からか一番鳥の鳴く声がして、今が夜明けだと告げている。

(十二・二) 夢そして救世主

(十二・二) 夢そして救世主

吸い込まれるように、抱き寄せられるように、夢へと落ちてゆく雪。体中に付着した男たちの唾液や体液、傷の痛み、空腹すらすべて忘却し。

夢の始まりはいつも同じであった。夜明け前何処とも知れないその場所に、雪が降り頻っていた。何処とも知れない、けれど眠りの主は既にそこが何処なのか知っている、或いは思い出している。それがいつかさえ、そして自分が誰なのか、既に思い出している。

少女は高校三年。少女は十二月二十四日生まれの為、この時まだ十七歳である。少年Cの件は表立った騒動にはならず、時の経過と共に少女は何とか平静を取り戻す。しかしその矢先、少女の運命は決定的に転換するのである、或るひとつの出来事によって。

それは平凡な夏休みの一日、晴れた夏の日の午後である。少女は聖書を通じて友人となったみさきと共に、いつもの川の川岸に佇んでいる。蝉時雨が聴こえ燦々と日が照り付け、水遊びに興じる親子連れや暑さを忘れてじゃれ合うカップルで河原は賑わっている。突然みさきが少女を誘う。

「ねえ、雪ちゃん。この川の上流って行ったことある」

「ううん、ないけど」

「じゃ、行ってみない」

「ええけど、何で」

「うん。雪ちゃん、霧下神父って知ってる」

「知ってるで。『懺悔の時間』の神父さんやろ」

「うん、その人の教会が川の上流にあるんだって」

「ほんま、なら行ってみよか。なんか有難い話聴けるかも知れへんし」

「うん、行こう」

こうしてふたりは軽い乗りで、川の上流へと歩き出す。上流へ上流へと進んで行けども教会は現われない、ふたりは汗びっしょり。

「まだ」

「もう少し」

「場所知ってるの」

「大丈夫、大丈夫。任せといて」

「ほんまかいな」

本当に知っているのかいないのか、みさきの足取りは覚束ない。

「な、もう随分川から離れてるで」

いつしかふたりは、川のせせらぎの音も聴こえない場所まで足を踏み入れる。それでも歩みを止めないみさきの背中に、仕方なく付いてゆく少女。

「ここら辺だと思うんだけどなあ」

突然歩みを止め、みさきが辺りを見回す。

「なんも、見えへんで」

立ち止まり、一緒に見回す少女。どきどき、どきどき、突然少女の鼓動が高鳴り、気付いたら冷や汗。

「どうしたの、雪ちゃん」

「うん、何や知らんけど、見覚えあんねん、ここ」

「来たこと、あるんじゃない」

「あらへん筈やねんけど、何でやろ」

きょろきょろと見回しながら、宛てもなく歩き出す少女。確かに昔来た覚えがあるような無いような、ここは一体何処なんやろ。

「何処行くの、雪ちゃん」

今度はみさきが後から付いてゆく。

「あった、ほらあそこ」

先に教会を見付けたのは、みさき。

「ほんまや」

びたっと足を止めるふたり。教会は雑木林の中にひっそりと建っている。しかも教会とは思えない、四方を有刺鉄線が取り囲む物々しさ。そして教会の隣りに、何とも言えない不気味な建物がある。大きな物置なのか、灰色の壁には窓ひとつない。どきどき、どきどき、再び少女の鼓動が高鳴る。と同時に少女の中で、お雪さんが叫ぶ。

『だれか、こいつらをころして』

どうしたん、お雪さん。動揺する少女。

「大丈夫、雪ちゃん」

みさきが心配するのも無理はない、少女の顔はすっかり血の気が引いてまっ青。何やの、この建物、な、お雪さん。懐かしさと恐怖、少女を襲った感情である。あの中にいたんちゃうやろか、そんな気がしてならない。でも、なぜ。な、なんか知ってんなら教えて、お雪さん。

「雪ちゃん」

みさきの声に我に返る少女。

「どないしたん」

「折角だから行ってみる、あそこ」

教会を指差すみさき。

「そやな、行ってみよか」

「でも、なんか気味悪くない、ここら辺。幽霊とか出てきそう」

改めて教会の周りを見回すみさきに、

「そやな、そう言われてみれば」

「場所も分かったことだし、今日はこのまま帰ろうか」

「そやね、もう薄暗くなって来たし」

確かに、気付いたらもう日没。ふたりは向きを変え、引き返すことに。帰路を辿りながら少女は思う、あそこにはなんかある。何か、自分とお雪さんの大事な秘密がある筈や。

家に帰り着くや少女はインターネットを駆使し、何者かに取り憑かれたように夢中で調べる。検索キーワードは、『十七年前』或いは『十八年前』、さっき見た教会の住所である『東京都台東区弁天町』、そして『桜毒』。

するとひとりの少女の情報が得られる。十七年前、変死体で発見された少女の記事である。その少女に関して写真はおろか氏名も伏せられており、発見された場所だけが東京都台東区弁天町付近と僅かに明記されているばかり。しかし情報が伏せられるにはそれなりの事情があったようで、少女の死因は桜毒である。しかもその桜毒こそ、日本、ということは即ち世界に於ける桜毒発症の第一号だったのである。しかし知り得た情報は残念ながらこれだけで、なぜその少女が桜毒に感染したかは未だ不明である。またその少女が何らかの事件に巻き込まれたのではないかと疑われつつも、結局何ら手掛かりはつかめないまま未解決事案として放置されていることも分かる。

そこで少女は続けて検索する。キーワードは『少女』、『性犯罪』、『行方不明』。すると行方不明となった夥しい数の少女、幼児から高校生までの幅広い情報が得られる。しかもその少女たちの殆どがまだ発見されず、今日に至っているという。

それにしても、少女の関心を引いたのは日々幼女、少女を襲う性犯罪の多さである。被害に遭った少女たちの悲しみを思い、暴行され殺害された少女たちの無念に胸を痛める多感な少女は、熱い正義感に燃え上がる。何てひどい世の中や、何て野蛮で残酷で墮落した世界なんやろ、許せへん、このままでは絶対あかん、加害者である獣、悪魔のような男たちと闘い、少女たちを救いたい、こんな乱れた世の中を少しでも良くしたい、そんな思いに駆られる少女である。

しかしか弱きひとりの乙女に過ぎない少女に出来ることは、ただひたすら祈るだけ。自分の無力を自覚し手を合わせ神様に祈る、それしかない少女は懸命に祈りを捧げるのである。祈りの場所は何処かのチャペルなどではなく、いつもの川の前。夜の河原にひとり佇み、川のせせらぎの音に耳を傾け、銀河を仰ぎ見ながら、はい合掌。

「どうぞ神様、一日も早く世界中からすべての罪と悲劇とがなくなりますように。もうこれ以上悪が栄えませぬように。そしてこの世界が美しく清らかなものとなりますように」
更に純真なる祈りは続く。

「神様、まじで頼みます。もしその為にわたしになんか出来ることがある言いはるなら、わたしは何でもさせてもらいます。どうか貴方の良き僕として遠慮なく、わたしを自由にお使い下さい。わたしは身も心もお捧げする覚悟で御座います、はい」

しかし考えてみれば、人類に於いて何らかの宗教発生以来恐らくは多くの宗教者たちが同様の祈りを捧げ来たにも関わらず、今もってこの世界は悪が支配する邪悪な世の中である。そこで少女は祈りに付け加え、銀河に向かってはっきりとこんなことまでお願いしてしまうのである。

「けれどそれが叶わぬ願いであると仰るならば、どうか神様、この地上にお裁き、最後の審判をばお与え下さい。神様、貴方の裁きによって、この汚れたる人類社会を滅ぼして下さい」

ザヴザヴシュワー、ザヴザヴシュワー……ピポピポピー……。その時いずこより聴き

慣れない妙な音が少女の耳に届くのである。はっ、何やこの音。と同時に見上げると銀河の彼方にひとつの光、それはあたかも吉原のネオンライトの眩しさにも似た七色の光が瞬くのを少女は見逃さない。何やろ、あれ。銀河の瞬き、光の河の中であって、それは一際きれいであり、つい見惚れてしまう程。しかもその煌めきは、僅かずつ移動しているようにも見えるのである。はっ、何で動いてんの、あれ。夜間飛行する飛行機か、はたまた、まさかの未確認飛行物体。祈りも忘れ、その移動する光に目が釘付けの少女。すると再び少女の耳に何かが聴こえて来る、宇宙空間のノイズに紛れながら。

ザヴザヴシュワー、ザヴザヴシュワー……ピポピポピー……ザヴザヴシュワー、ザヴザヴシュワー……。ピポピポピー、銀河系太陽系第三惑星、Yoshiwara 駅に属する雪隊員に告ぐ。こちらはメシヤ567号。祈りの言葉、ご苦労さん。今宵、折角のそなたの祈りなれど、生憎受付嬢がデート多忙で欠勤の為、救世主自ら、お答え致す、ピポピポピー。

はっ、なんか今聴こえたで、何や今の声、空耳かいな。それとも何処かに誰かいてんの、きよろきよるとおっかな吃驚河原を見回す少女。けれど人の気配はなし。それにも関わらず、再びその声が……。

ピポピポピー、我は救世主である。雪隊員、そなたの願い、了解した。

了解……、はあ、何のこっちゃ。雪隊員って、もしかしてわたし。しかも救世主で、んな、あほな。誰、あんた一体、誰やねん。恐る恐る、その声に問い掛ける少女。しかし相手はマイペース、さっさと自分の話を続けるのである。

ピポピポピー、ただし直ぐにという訳にもいかぬもの。何しろこの大宇宙には宇宙なりの壮大なる計画が御座る故。全宇宙にて発生し営まれるすべての現象は、その計画の為である。そなたの存在もそなたの身に起こる如何なる些細な出来事もまた、同様也。従って幾ら救世主と言えども、歯痒いのは山々なれども、この現象世界に対し安易に干渉は出来ぬこととなっている次第。とは言えど雪隊員、確かにそなたの暮らす銀河系太陽系第三惑星に於ける第三惑星人の不徳は少々目に余るもの有り。そこで早速ではあるが第三惑星に於ける悪に対し裁き即ち最後の審判をば執行すべきや否や、その調査を行うこととする。何しろ調査次第では第三惑星人の滅亡も視野に入れねばならぬ故、慎重の上にも細心の慎重を期さねばならぬのである。

ピポピポピー、という訳で前置きがなごうなったが、これより我らメシヤ567号は、そなたの待つ銀河系太陽系第三惑星、Yoshiwara 駅を目指し、大宇宙航海の始発駅、無よりもまた更なる無、ゼロよりもゼロであるところの、無限パワーステーションをば出発することとする。ただしその前に雪隊員にひとつ問いたい。

はあ、何やいきなし、訳分からん。

ピポピポピー、他にもない、そなた、美しく清らかなる世界をばお望みのようであるが、では率直に問う。そなた売春は如何致す、如何にすべきやと。そなたを育てたるは他にもない花街、吉原。して吉原とは宇宙でも名立たる売春のメッカなり。では吉原も滅ぼせと、売春も滅ぼせとそなた申されるか、そなたを育てたるこの両者をば。これは難問なり、これは弱った弱った……。返答を待つ、以上。ピポピポピー。

はあ、何が弱った弱った、やねん。でも確かに、言われてみればその通りやな、流石鋭い救世主はん。銀河を仰ぎ見ると、移動する七色の光の瞬きがまだ少女の目に幽かに映る。恐らくはあれがメシヤ567号とかいう救世主の乗ってはる宇宙船かいな。少女は救世主から問われた難問に腕を組み、深刻な顔で考え込む。しかし現役女子高生の少女に、答えの得られる容易き問題ではない。そこで少女はこう答える。

「ですから救世主様、そこいら辺も含めてすべてお任せします。どうぞ、お裁きを」

ピポピポピー、こちらはメシヤ567号。では仕方がない、すべて我に任せてもらおう。で雪隊員、先程宣言されたるそなたの誓いと決意に変わりはあるまいか。僕として身も心も捧げる覚悟、最後の審判の使徒として第三惑星、Yoshiwara 駅にて積極的に働く覚悟は出来て、おるのかーっ。

「はい、勿論です、救世主様。何なりとお申し付け下さい」

ピポピポピー、よし、ではそなたの望む通り、我は裁きの為、そなたに使命を課す。これから早速そなたは我らメシヤ567号到着までに、第三惑星に於ける最後の審判の準備に取り掛からねばならない。それは決して難しくはないが、大変辛く苦しき試練と犠牲の連続である。なぜなれば我が裁きをば阻止、妨害せんとして数千年の遙か昔より第三惑星に巢食うたる邪悪なる者どもによる攻撃が、使命を帯びたそなたを待ち受けているからである。しかし我らメシヤ567号は必ずや到着致す故、それまで何卒辛抱致されよ。

「はい」

銀河に向かって答える少女。

「では最後の審判の準備として、具体的にわたしは何をすれば宜しいのですか」

ピポピポピー、良く聴くがよい。そなたはこれから自らの意志によりて、ネオンの光瞬く吉原はエデンの東という名の店の娼婦となり、第三惑星人の衣を被った邪悪なる者たちを相手にしつつ、エデンの東にて我らメシヤ567号の到着を待たれよ。以上である。ピポピポピー、ピポピポ……ザヴザヴシュワー、ザヴザヴシュワー……。

こうして少女の返事も待たず、救世主の声は宇宙空間のノイズに掻き消され、いつか銀河に瞬いていた宇宙船の光もまた失われる。しかし純真なる少女は躊躇うことなく救世主の言葉に従い、吉原の娼婦となることを決意し、高校を中退するのである。

少女は吉原の街にエデンの東という名の店を捜し求めたけれど、生憎そんな店は見当

たらない。困った少女は母親の営む店の名がエデンの園であることを思い出し、ここやと閃く。母親に店で働かせてくれるよう懇願するも、はいそうですかと簡単に承知する筈はない。あんた、頭おかしいんちゃうと一笑に付すも、少女は真剣、その気持ちは揺るぎない。しかも店の名前を、エデンの園からエデンの東に改名してくれなどのたまう。呆れ果て、

「ほなら、あんたの好きなようにしなはれ」

匙を投げ、冗談半分承知するのである。しかし十八年間折角育てた娘があらうことか自分と同じソープ嬢になりたいなどと言い出すとは、母の悲嘆たるや察するに余りあるのである。

こうして絶世美少女による娼婦誕生となり、自らの誕生日である十二月二十四日を境に、少女はエデンの東にていつか訪れるであろう宇宙船を待つことに……。

はっと目を覚ます雪。見回してもお化け屋敷には誰一人いない。ゴロ助ももう今は既に亡き人であり、雪は完全にひとりぼっち。三上組の若い衆が世話係として来てはくれるが、食料を購入する以外は何もしてくれない。従って男たちによって痛め付けられ傷付けられ汚された肉体は自らの力によって洗い清めねばならず、空腹、排泄もまた同様、自力で解決せねばならない雪である。

(十二・三) パンデミック

(十二・三) パンデミック

月の末日三十日、お化け屋敷で雪と関係を持った霧下を始めとする男共に衝撃が走る。ゴロ助が桜毒を発症しないのを好い事に、月の中旬雪と関係を持った最初の男が、桜毒を発症し死去したのである。

さあ、これは大変、一大事とばかりに、闇の組織の日本支部はてんやわんやの大騒動。身に覚えのある者はうろたえ恐怖するのみ。検査に行ったところで、もし桜毒の陽性であればその時点でアウトだし、陰性だとしても体内に時限爆弾を抱えているようなものであるから、気休めにもならない。従って座して死を待つのみ的心境である。最早お化け屋敷を訪れ、雪を弄んでやろうなどという余裕の強者もない。よってお化け屋敷はしんと不気味な程の静寂と沈黙に包まれる。

流石は世界を裏で操る組織だけあって、日本に於いても重要な各方面、各分野、例えば政治、経済、マスコミ、芸能スポーツ、科学、医学、芸術界等々へと、組織の人材が万遍なく配置されている。で十二月に入るや、その日本の重鎮たちがなぜかころころ死んでゆくから、どういうことだ、今この国で一体何が起きているのだと、日本国中が戦々恐々。

ところが組織に操られたるマスコミが、真相を伝えることは有り得ない。死因が桜毒であることを隠蔽し、新種のウィルスが死因であると、日本はおろか世界中に虚偽の報道を行うのである。突如日本に於いて新種のウィルスが発生し、国内で猛威を振るっているのだと。

忽ち日本国内は騒然、国民は混乱と恐怖の渦中に置かれパニック状態に陥る。新種のウィルスって何だ、鳥インフルエンザかスペイン風邪か。調子に乗ったマスコミは更に煽り立てる、今日誰々が死んだ、矢張り新種のウィルスが原因であると。国際社会に於いても大問題に発展、急遽日本からの出国、日本への入国は勿論、日本製品の輸出にストップが掛かる。日本政府は直ちに国連に救済を要請、それを受けたWHOは厳重な警戒の下、日本に調査団を派遣。ところが国連、WHOすらも実質闇の組織の支配下にあるからマスコミ同様真実を隠蔽、原因は正しく新種のウィルスであり、これを女狐インフルエンザと命名する。更にこれは世界中に脅威を与えるものであると断定し、ここにパンデミックを宣言するに至るのである。

WHOは対策として多国籍製薬会社が開発したワクチンを用いた予防接種を、海外への汚染拡大防止という名目のもとに日本国民に対し強制的に実施することとする。加えてこの予防接種を世界中でも実施するよう、各国政府に要請する。とまあ忽ち世界的な大騒動へと発展するのである。

その頃お化け屋敷の雪は、どうしていたか。世の中が世紀末の如き騒動になっているとも露知らず、世話係の若い衆が定期的に置いてゆく食料で何とか飢えを凌ぐ日々。後は傷付いた体を癒す為横になり眠り続ける、何も知らざる眠り姫状態である。

(十二・四) 子犬と少年

(十二・四) 子犬と少年

さて先月、神隠しにでも遭ったかの如く雪の前に姿を現さなかった子犬と少年。久し振りに夜の弁天川に登場、河原に佇んでいる。冬近い河原には霜が降り、最早鳴く虫の声もない。地にはアザミ、竜胆が雑草に紛れ咲いており、時より吹く風の早い木枯らしに寒々と震えている。

そんな荒涼とした河原に幾夜となく立って、ひたすら雪を待つ子犬と少年。子犬などは腹を空かして死にそうである。けれど待てど暮らせど雪の来る気配はない。そこで子犬と少年の方から、エデンの東のビルを訪ねる。ところが店は既に閉店というか、もぬけの殻で灯りもない。入り口の前には、テナント募集の張り紙が付されている。

仕方なし弁天川に引き返す子犬と少年。どうしたもんかと途方に暮れる少年に、突如子犬が「ワン、ワン、ワン」と合図を送る。くんくんくんと、何やら匂うらしい。付いて来いと歩き出す子犬の後を少年も追う。くんくん、くんくん、けれど空腹で足取りはよろよろ、よろよろ心許ない子犬、懸命に匂いを辿って少年を案内する。弁天川の上流へ上流へと上ってゆき、段々と川からも遠ざかる。

一体何処へ行くのやら、少年は黙って付いてゆくばかり。するとどれ程歩き続けたか、いつしか目の前にひとつの建物が現れる。教会、そこは雑木林の中にひっそりと建つ教会である。しかし四方を有刺鉄線にて取り囲まれ、何とも不気味。これは確かに何かにおうぞと、有刺鉄線の前で立ち止まる子犬と少年。辺りに人の気配はなし。おまけに教会の隣りにはこれまた不気味な建物あり、その壁の色は灰色で窓ひとつないときている。ますます怪しい。

きょろきょろ周囲を見回した後、子犬と少年は幽体の如くすーっと有刺鉄線を通り抜け、そうしたかと思うと教会の前を素通りし、その不気味な建物即ちお化け屋敷の前に立つのである。ここ、ここと、少年に顔いてみせる子犬、確かにこの中に雪がいます。ではまたお化け屋敷のドアをすーっと通り抜け、中に侵入するかと思えば然にらず、子犬と少年はじっとそこに突っ立っているばかり。何かを待つようにただじっと沈黙し、確かに少年は何かを待っているようである。

しばらく時間が過ぎた後、ようやく子犬と少年に気付いた何者かが教会の中から出てくる。Mr霧下が責任者として運営するその教会は『日本救世主協会』という看板を掲げており、紛らわしいがあくまでも協会であり教会ではないところに留意されたい。詰まり闇の組織のカムフラージュ団体に過ぎないのである。

その職員であるひとりの男が出てきて、お化け屋敷の前の少年に声を掛ける。

「何してんの、こんなところで。危ないよ、坊や」

けれど少年は黙ったまま。それにどうやって侵入出来たものか、不審に思った職員は一旦教会の中に戻り、代わりに別の男が現れる。その男こそ実は霧下に次ぐ組織の実力

者、日本支部No2の佐端(さばた)である。かつこの男、病的な少年性愛者、美少年に欲情を抱く人物でもある。

そんな佐端にとって、目の前の少年は正に飛んで火に入る夏の虫、鴨ねぎである。少年を一目見るなり、佐端の目には欲情の炎が熱く燃え上がる。雪が絶世美少女なら、少年は絶世美少年、儀式の生け贄としても申し分ない獲物。そんな少年を、佐端が逃がす筈もない。早速組織の中の同趣味のお仲間、至急駆け付けるよう連絡を入れる。

にこにこ少年に笑い掛ける佐端。

「坊や、迷子かな」

すると無言で頷く少年。

「いい子だね。じゃ中に入って、おじさんとお話しようかな」

佐端は行き成り少年の手を握ると、教会ではなくお化け屋敷へと連れてゆく。

カチャッ。外からドアの鍵が解かれるその音に気付いて、びくっと目を覚ます雪。続けてドアが開閉された後、照明が灯る。眩しさにさっと目を瞑る雪、誰やろ一体。佐端はその性的嗜好故に女である雪には興味がなく、従って雪と佐端は初対面である。聞き覚えのない佐端の声が雪の耳に入ってくる。甘い猫撫で声である。

「さあ、こっちだよ。お犬さんも一緒にいいよ」

お犬さん、何やろ。毛布に包まり床に寝転がる雪は寝た振りを続けながら、そっと薄目を開けちらっと様子を窺う。するとそこには……。まさか、我が目を疑う雪である。それもその筈、何と今、ひとりの男の後ろに、あの子犬を抱いた少年が立っているではないか。思わず、にいさん、と声を発しそうになって咄嗟に口と目を閉じる雪。

にいさん、それに子犬のにいさんまで。何でこんなところ、来たん。少年の方は変わりなさそうであるが、子犬は随分と痩せているようである。ちゃんと御飯食べてへんのちゃうか、心配でならない。いつもの子犬なら、雪を見れば喜んで「ワン」と飛び付いて来る筈なのに、今は大人しい。もしかして雪を捜して、まさかここまで来たんちゃうやろな。しもた、こんなところ、にいさんたちの来るとこちゃうのに。

出来るなら今直ぐにでも駆け寄って、子犬と少年に飛び付いて、思い切り抱き締めたい。けれど間には、邪魔者である組織の男がいる。それにしてもこの男、何の目的でにいさんたちをこんなところに連れて来たんやろ、どきどき、どきどき、胸騒ぎがしてならない雪。そこへ佐端のお仲間が到着する、佐端を入れて人数は五人。

早速男たちは、子犬を抱いた少年を取り囲む。少年にしか興味のない彼らには横たわる雪など眼中にない。

「この女、このままにしておいて大丈夫か」

「確かに危険だな。今は眠っているのかも知れんが、大事な儀式の最中に目覚められ下手に騒がれては煩わしい」

男のひとりが眠った振りの雪の横腹を足で蹴る。う、痛っ。それでも寝た振りの雪。

「放っておけ。さあ始めるぞ」

とは、雪に見向きもしない佐端の声。大事な儀式……。始めるて、一体何が始まるんやろ。雪は緊張しつつ耳をそばだてる。

「坊や。いい子だから大人しくするんだよ」

佐端の言葉を合図に、まずひとりが少年の腕から乱暴に子犬を奪い取り、子犬の口を手で塞ぐ。といっても元より子犬は空腹の為、抵抗する力も吠える元気もない。次に他の二人が両側から少年の腕をつかまえる。

「何するの、離してよ、おじさんたち。その子を苛めないで」

吃驚したような少年の声。

「いいから、言うことを聞きなさい」

不気味な笑みを浮かべながら少年に近付くや、少年のシャツと半ズボンを取がそうとする佐端。

「止めてよ、おじさん」

けれど少年の抵抗も空しく、さっさと下着、靴下までも剥ぎ取り、佐端は少年を全裸にする。

「恥ずかしいよ、ぼく。どうしてこんなことするの」

「うるさい、黙ってろ」

佐端は憎しみを込め、少年の顔を叩く。

「痛いよ、痛い。止めて、おじさん」

少年の悲痛な声にとうとう堪え切れなくなった雪は、忽然と目を開き立ち上がる、ふらふらと今にも倒れそうな体を必死に支えながら。目の前には何と、哀れにも全裸の少年。その姿を目にするや、かーっと怒りの血が体中を駆け巡る雪。

「何してんの、あんたら。こんな子供に」

よろよろと少年に近付き、雪は少年の裸体を包むように少年の肩に抱き付く。

「にいさん、もう大丈夫や。雪がにいさん、守ったる」

雪の手を無言で握り締める少年。どきどき、どきどき、ぎゅっとその手を握り返す雪。

怒ったのは佐端と仲間たちである。

「邪魔するな、この汚れし女よ」

佐端を除いた四人の男が雪に襲い掛かる。その恐怖の中でけれど雪は、少年の囁く声を耳にする。

「お姉さん、心配しないで。これはね、定められた計画の一部なんだよ、だから大丈夫」

へ、どういうこと、な、にいさん。計画、定められた計画、て何。問い掛けるように少年を見詰める雪、けれど少年はただ微笑み返すだけ。

「止めてーっ。何すんの、この子に触らんといて」

荒馬の如く暴れる雪を少年から引き離すと、雪に向かって容赦なき鞭の嵐を浴びせる男たち。雪は忽ち血だらけ、傷だらけ。

「にいさん、御免な」

堪らずばたーっと床に倒れ、それでも止まない鞭の拷問に遂に気を失う雪である。

(十二・五) 狂った宴

(十二・五) 狂った宴

「さあ、邪魔者は片付けた。改めて儀式を行う」

佐端の声に、再び少年を取り囲む男たち。男たちも全裸となり、儀式の開始である。少年の体を弄び辱め汚し、男たちは快楽に酔い痴れ、交代交代少年へと自分たちの体液を浴びせ遂には果てる。彼らにとってこれ以上ない至福の時である。しかし儀式はこれだけに終わらない。むしろこれからが生け贄の儀式の本番なのである。

「では同志、準備は宜しいか」

佐端の号令に、

「ああ、抜かりなし」

男たちも声を揃える。いつ準備したか、男のひとりがビデオカメラを構える。加えて佐端の手にはサバイバルナイフ。さあ、ビデオスタート。佐端はきらりと光るナイフの先端を、少年の目の前に突き付ける。

「どうだ、恐いだろ、坊や」

ところが少年は落ち着いたもの。

「おじさん、そのナイフでぼくをどうするつもりなの」

そんな少年の姿を一瞬たりとも逃さすことなく、ビデオカメラは回り続ける。

「こうするのさ」

少年の頬に十の文字を描くように、ナイフの先で切り付ける佐端。少年の頬から血が滴り落ちる。

「ほら、痛いだろ、坊や」

佐端の顔は額に血管が浮き立ち、目は充血、頬の筋肉はびくびくと痙攣し、これで頭に角があれば正に悪魔の容貌である。ところが、

「ぼくをどうするつもりなの、ぼくをどうするの」

少年は表情ひとつ変えず、繰り返す問うばかり。

「ええい、うるさい。だからこうするんだよ」

佐端は床に落ちていた少年の白い開襟シャツを拾い上げ、ナイフでずたずたに切り裂いて見せる。

それでも冷静な少年。

「ぼくを殺すんだね」

はあ、何だこのガキ、本当に恐くないのか、それともただのばか。無言の佐端に少年は尚も問う。

「その様子をビデオに録画するんだね」

「ああ、そうだ」

「そしてそれをみんなで見るんだね」
笑みさえ浮かべる少年に遂には圧倒され、佐端は吐き捨てるように答える。
「ああ、そうだよ坊や、良く分かってるじゃないか。でももう少し恐がってくれないと、おじさんちっとも面白くないなあ」
薄笑いを浮かべ、少年を睨み付ける佐端。
「お願いがあるの、おじさん」
「何だい」
「ぼくならいつ殺されてもいいから、あの子に御飯を上げて」
「あの子」
力なく床にうずくまる子犬である。
「あの子もうお腹ぺこぺこで、死にそうなんだよ」
「ああ、そうかい、分かった、分かった。では飛び切り上等の御馳走を与えて上げよう」
「有難う、おじさん」
ところが子犬に与えられたものは、鞭の拷問。元より弱っている子犬は為す術もなく、ただ打ちのめされるばかり。
「何するの、止めてよ、死んじゃうじゃないか」
けれど少年の言葉も空しく、子犬の動きは止まり、そのまま眠るように息絶えてしまうのである。
「酷いよ、おじさんたちったら」
悲しげに子犬の亡骸を見詰める少年、ところが不思議なことを口にする。
「せめてその子を助けてくれたなら、少しはおじさんたちの罪も軽くなつたろうに」
「はあ、何だと、罪がどうしたって。何を訳の分からんことを言っているのだ」
佐端の目がきらりと光り、少年を捕まえる。
「さあ、いよいよ今度は坊やの番だよ。覚悟は出来ているようだね」
それでも矢張り顔色ひとつ変えず、目の前のナイフの刃を見詰めながら、少年は問う。
「おじさんたちは今迄ずっとこんなふうに、子供たちに酷いことをして来たんだね」
「何」
「たくさんの子供たちを殺し、それをビデオに撮って来たんだね」
佐端を見詰め返す少年。
「しかも、日本はおろか世界中の少年少女たちを」
「ああそうだよ。良く知ってるね、坊や」
「そして子供たちが殺される姿を、みんなで観賞して来たんだね」
「そうだよ」
「何の為に」
「何の為だと。我らの敬虔なる儀式の生け贄の為さ。儀式の成功と祝福によって、良いか、我らの魂は至福へと到達するのだ」
「至福とは天国か、はたまた地獄のことであるか」
「なにーっ」
じっと少年を見詰める佐端。

「きさま、さっきから聞いていると、とてもただの子供とは思えぬ言動の数々。一体お前は何者だ」

しかし佐端には答えず、如何にも穏やかなる心持ちにて、ゆっくりと部屋を見回す少年。倒れた雪、息絶えた子犬の亡骸、それから再び佐端へと視線を戻すと、少年は口を開く。その声はけれどボーイソプラノでは決してない、重々しき成人のそれである。

「何たる無情……、悪も遂に、ここに極まり。よって……」

「よって」

息を呑む佐端。祈りの言葉の如く、後を続ける少年。

「救世主は、最後の審判を決意する」

うわっはっはっはっは、うわっはっはっはっは、狂人のように笑い出す佐端。

「これが笑わずにいられるか。救世主だと、何、最後の審判。あほか、ちゃんちゃら可笑しいわ」

きょとんとして、佐端を見詰める少年。

「こら坊主、さっきから何を訳の分からんことをほざいておるのだ。そんな声色など遣いおって生意気な。何か、ではお前が救世主だと申すのか」

しかしそれには答えず、少年は元の声に戻って、

「さあ、おじさん。ぼくを殺すんでしょ」

如何にも、とナイフを構える佐端。

「言われなくてもお望み通り、とっとと地獄に送ってやるわ。さあ、死ねーっ」

どきどき、どきどきっ、叫びと共に佐端は、躊躇うことなく少年の胸をずぼっと一突き。どきどき、どきどきっ、どきどき、どきどきっ……。少年の鼓動が停止する。少年は目を瞑り床に倒れ、そのまま息絶える、すやすやと眠るが如くに。ビデオカメラはその一部始終を逃さず、確かに捕らえる。

少年の死を確かめると、絶叫する佐端。

「グラスア デウス。良し、完成だ。これまでにない最高傑作だぞ」

早速ビデオ観賞会へと移る佐端たち一同。いざ、再生スタート……。ところがモニター画面には何も映らない、ただ砂嵐が延々と続くばかり。

「何だ、どうなっているんだ」

「妙だな」

「故障か、失敗か」

「ええい、最高の生け贄だったのに。くっそーっ」

がっくりと肩を落とす男たち。

ところが僅かに一箇所だけ、少年の声の再生される部分が見付かる。従ってまんざら失敗でもなかったようではある。不思議に思って幾度となく再生してみるも、矢張り結果は同じ。その唯一ビデオテープから流れ来る少年の声とは、「救世主は、最後の審判を決意する」である。

狂った宴の後、例によって三上組に少年と子犬の遺体処理を依頼すると、そのままお化け屋敷を後にする佐端たち。雪はまだ気絶したまま。時は既に真夜中、お化け屋敷内

部からは拝めないが、空には満月が照り夜の闇を照らしている。満月の光はお化け屋敷の屋根を透過し、無風の筈のお化け屋敷内部に於いて、なぜにか一陣の風へと化身するのである。

風は、既に他界した少年の頬を撫でる。するとあたかも息を吹き返したかの如く、少年は立ち上がる。といってもその姿は幽霊の如く無色透明であり、輪郭だけが薄っすらと大気中に描かれているといった具合。次に少年が永眠したる子犬の頭をそっと撫でる。すると子犬も同様に起き上がる、無色透明の子犬である。

子犬と少年はそのまま宙に浮き、雪の頭上より、横たわる雪をじっと見下ろす。すーっと少年の目から涙の滴が零れ落ち、本来それも無色透明なれど、大気中を通過しやがて雪の顔に到達する間際、水分を帯びる。ぽたっとそれは雪の瞑った瞼の上に落下し、驚いた雪は意識を取り戻す。

その瞬間子犬と少年はいつものようにふたつの小さな光と化して、雪に気付かれる間もなく上昇を始め、上昇を続け、風船の如くお化け屋敷の天井にまで到達する。到達したかと思うとそのまますーっと天井と屋根とを透過し、尚も夜気の中を上昇し続け、天へ天へ銀河へと昇り、やがてふたつの流星となって銀河の中をいずこへと流れ去る。

「にいさん、宇宙船ちゃう」

ふっと宇宙船の気配を感じ、声を発する雪。部屋を見回せど、子犬と少年の姿はない。床にあった筈の亡骸も今はもう消失しているから、雪は未だ彼らの死を知らない。

「な、にいさん、宇宙船ちゃうの」

目の前にいない少年へと問い掛ける雪に、「ワン」と答える子犬の鳴き声が聴こえる気がし、また「うん」と頷く少年の顔も浮かんで来るようである。しかし今、雪はひとりぼっち。

自らの頬が水分に濡れているのを指で確かめ、なぜ濡れているのかと訝しみながら立ち上がり、雪はお化け屋敷の天井を見上げ目を瞑る。見える筈のない宇宙船の光を、その目にとらえようとするが如くに。

「な、にいさん。今夜は何処停まりはんの、宇宙船」

今迄がそうであったように、そして雪は少年の空想へと吸い込まれてゆく。

(十二・六) ムーンステーション

(十二・六) ムーンステーション

ザヴザヴシュワー、ザヴザヴシュワー……バビブベブー、こちらはムーンステーション。とは申しましてもここは無人駅にて、月面を吹き過ぎる寂しき風共が交信をば致します、ヒュルヒュル、ヒュー……。さてメシヤ567号殿、遙々大宇宙をば越えてこの太陽系第三惑星の守り星なるムーンステーションまでようこそ、長旅ご苦労さん。それに加えて無事救世主はんも御帰還なされたようで、先ずは何よりのこと。ここムーンステーションは御覧の通り殺風景で特にこれといった特産品もなく、然したるおもてなしも出来はしませぬが、後僅かで第三惑星への旅も終焉。いよいよ大事なるお勤めも控えてられましょう、どうぞ今宵はほんの一時、ごゆるりと疲れをばお取り下さいませませ。そうそう、うさぎ共のダンス位ならお目に掛けて進ぜましょう。

さて我らムーンステーションとしましても、救世主はんによる第三惑星に対する最後の審判、どうなりますことやら心配でなりません。何しろ彼の星と我々とは、切っても切れない運命共同体。我らが滅びれば彼の星は滅び、彼の星が滅びれば我ら滅びるまではいかなくとも、最愛のパートナーを失くしたようで、心は虚ろなり。例えれば、ただ宇宙の闇に今夜も浮かぶ石ころに過ぎません、なーんてね。メシヤ567号殿、第三惑星に対し一体如何なる裁きをば、執行のご予定ですか。ちょびっとばかりお聞かせ願えますると、有難き幸せ也。以上、バビブベブー。

ピポピポピー、これはこれはムーンステーション殿、こちらはメシヤ567号。救世主も無事、と言いたいところ、生憎少々頬と胸とにサバイバルナイフの傷をば負っておりますが、何とか出張から戻り今は宇宙船の窓辺にてちょびっとロンリネス致しております、はい。で、いよいよ我らメシヤ567号もこうして宇宙の果てより長い長い旅路を経、とうとうやって参りました、ここが終着駅の一步手前、最後の最後の途中駅なるムーンステーション。と来れば感慨も一入、目指す第三惑星、Yoshiwara 駅はもう直ぐ目と鼻の先、じゃーん。

しかしまあ、ここから見えます第三惑星の美しさと言ったらもう例えようもなし。青き惑星、ブルーライト吉原、正に宇宙の中の歓楽街じゃない樂園、汚れを知らぬ少年の或いは恋する乙女の眼差しにも似て、麗し魅惑のパラダイス。で第三惑星の象徴とも申すべきあの青さ、今迄海の色だとばかり思っておりましたが、確かに海は海でも涙の海、第三惑星人たちの嘆きの涙の海であったとは、救世主でも知らぬ仏のお富さん。あの美しさ、居心地の良さが何とも悪しき者どもの心をば虜にして止まぬようで、この数千年彼の星は邪悪なる者たちの支配に甘んじて来た模様。その間か弱き第三惑星人たち

の心は闇に閉ざされ、奴隷、玩具としていい様にこき使われ、貨幣制度の下、僅かばかりの人参ぶら下げられて、ただただ馬車馬の如くせっせせっせと働き尽くめの生涯であったという。

さてでは、ムーンステーション殿もご心配の第三惑星に於ける最後の審判に関しまして、救世主なりに本日さっきまで悩みに悩み苦悶致しておりました、はい。単純に悪となれば話は簡単、裁きによってさっさと滅ぼしてしまえばそれで良し。なれどややこしいのが何と言っても必要悪、こいつが悩みの種なりき。誰が言い出したものか必要悪、たかが必要悪、されど必要悪という訳で、その最たるが売春、空間的には吉原と、こうなります。

がしかし、ここで敢えて先入観念をば切り捨て去りまして、そもそも売春とは悪なのか罪悪か、この点について論じてみたいと存じます。なぜ第三惑星人は売春並びに買春するの。そもそも第三惑星人の男にはまあ女でもそうですが強烈なる性欲の有りと、それをば無償にて満たしてくれる存在あらば、何ら苦勞はいりますまい、さっさとメイクラヴ、好きなようにご勝手に愛し合えば良ろし。なれど現実超厳しくてですね、すべての者に等しくパートナーが見付かるという保障は宇宙の何処にも存在しません。するとどうしても満たされざる者たちが出てくる。俺だって男と生まれて来た以上、死ぬまでに一度位は思う存分女を抱いてみたい。女と一度も寝ずに死ぬなんて余りに侘しい、俺可哀相過ぎ。本人は勿論周囲とて不憫でならない。そこで登場したのが、売春というシステム。世の寂しき殿方を、お金を仲介してではありますが満たして進ぜましょう、と来る。あれっ、だったらそもそも売春が悪いんじゃないかと、満たされない男がいること自体が問題なんじゃん。その点どうなのよ。

はい、では今更ながらそもそもなぜ性欲は有るのか、というか必要なのか。それは世に男と女が存在するから、性欲もある。じゃ男と女が存在すること自体が問題なのね。でもちょっと待った、男と女が存在するって、あんた、そんなこと第三惑星人たちのせいじゃないわな勿論。じゃ誰、誰がわりいの、結局。じゃーん、それは誰だろう、創造主。は、だって創造主が勝手にそんなふうにし世の中創っちまったんだからさ、どうしようもないじゃん。

ではでは、なぜ創造主は男と女を創ったか。はっ、そんなこと知るかよ。でもまあ結論、売春が悪というよりは、創造主あんた自身が悪いんじゃないって言いたい。俺をこんな女にもてねえ男にしやがって、どうしてくれんだよ。ま、それは置いて、どうして創造主はまじ男と女を創ったんだろ。それはね、一言で言うと、寂しかったからなのさ。はあ、寂しかったから。そうそう、創造主は自分が創り出した宇宙のまん中で、たったのひとりぼっちだった。あれえ、おかしいな、こんな筈じゃ、何かが足りな一い。そう思った創造主は或る日、自分の姿に似せた生きものを創った。ところがそいつには創造主の存在が分からない。で自分と同じように、そいつもひとりぼっちでしょんぼりしていやがる。そこで見るに見かねた創造主は、その生きものをふたつに千切って、片方を男、もう片方を女にしたそうだよ。だから男と女はひとつの命に戻ろうとして、いつの世も互いに互いを激しく求め合い、愛し合うとこういう訳。おっとお喋りが過ぎたかな、ではお後がよろしいようで、はい。

ザヴザヴシューワ、ザヴザヴシューワ、今宵も第三惑星の悪と闇の中に一際眩しく煌

めいている、ああ、あれこそが吉原のネオンサイン。このムーンステーションからも鮮やかに見えております。その七色の光は妖しくまた切なくきらきらと瞬いて、その明滅はあたかも第三惑星人たちの儂き命の鼓動にも似、ささやかな営みを照らす仄灯りにも思え、その下で今も繰り広げられたる罪悪の数々を覆い隠すが如き美しさで御座います。しかしながら最早時は来たれり、夜明けが参りましたらいざ参りましょう。夜が明けたなら、今大宇宙の闇の中に降り頻る悲しみの雪の中を。かくして宇宙船は遂に Yoshiwara 駅まで、後一步と迫ったのである。ピポピポピー、ピポピポ……ザヴザヴシュワー、ザヴザヴシュワー……。

はっと目を開ける雪、その耳に幽かに聴こえ来るのは、少年の子守唄。

『家の灯り、町の灯り、駅の灯り、ざわめき、犬のなき声、子犬が足に絡み付いてきた、まるで叱られて家出する少年、ひとりぼっち泣きそうな顔こらえて、子犬とふたり……祭りの灯り、いろまちの灯り、ネオンの波に濡れながら、とうとうここまで来てしまった、世界で一番眩しくて、宇宙で一番悲しい場所……とうとう宇宙船はいってしまった、お腹を空かした子犬と桜毒の少女を残して、あんまり眩しかったので、宇宙ステーションと間違えたんだな吉原のネオンサイン、どうせなら奇蹟のひとつでも起こしてゆけばいいのに……』

今宵けれどその声がムーンステーションより月の光を通して聴こえ来ることを、知りよう筈もない雪である。

(十三)

(十三・一) 第三惑星 Yoshiwara ステーション

(十三・一) 第三惑星 Yoshiwara ステーション

ここは夜、夜の世界。夜でなければ或いは罪悪を犯さねば存在し得ない街、今日そして嘗て吉原と呼ばれた、あたかも丸でひとつの村か集落の如き夜の華。

世界は夜、未だ世界は夜の闇に覆われたまま、ここ吉原のネオンが夜の巷に妖しく瞬き続く間、世界は夜によって支配され、いつ果てるともない魔物の呼吸を営み、その積み重ねたる人類の罪の清算をば為すこともなく、日々この夜の世界のひとつの宇宙駅(ステーション)として、あたかも魔物の心臓の鼓動の如くここ吉原のネオンは瞬き続け、瞬き続くことが何よりこの世が夜であることの証明であり、従って夜と共にこの瞬きもやがて訪れる世界の夜明けの前に、滅亡し夢の如く潰えることは、宇宙全体の必定である。

月が替わり、東京では珍しく月の初めより雪が降り始める。吉原の街にもお化け屋敷の屋根にも雪が降り頻る、ただ静かに穏やかに。その後も雪は止むことを知らず、かといって大雪となる訳でもなく、ただ粉雪が降り続くばかりである。

その頃世界では女狐インフルエンザの予防接種が世界中で実施されたのであるが、これと時を同じくしてなぜか突如桜毒が世界的な爆発的流行を見せ、多くの人類が命を落とす。その為WHOは緊急調査を行い、その結果女狐インフルエンザの予防接種のワクチン中に、原因は不明であるが桜毒のウィルスが混入していたことを突き止める。これにより世界は更なるパニックとなり、女狐インフルエンザの予防接種は直ちに中止されるのである。

そんな中、お化け屋敷で雪と交わった六十六人のうち六十五人までが桜毒で死に至り、最後に霧下がひとり残される。霧下もまた桜毒の発症については例外でなく、今月中旬遂に発症した為治療に専念する。しかし治療、桜毒の治療とはこれ如何に。未だ人類にとって不治の病とされる桜毒なれば、治療法など有り得ない訳である。ところがどっこい、実は密かに桜毒のワクチンなるものが存在し、それを所持している者が世界中に数人いるという。して、その中の一人が誰であろう、Mr霧下その人なのである。だから霧下は雪と関係を持ちながら、唯一生き残ることとなる。

ワクチンにより桜毒から生還を果たした霧下は、自らを苦しめ多くの同志を奪った雪への恨みを晴らさんとして、一路お化け屋敷へと向かう。時は十二月二十四日クリスマスイヴ、雪十九歳の誕生日である。吉原はもとより東京の街は月初めから降り続く粉雪で、僅かに積もっては融け積もっては融けしていたが、流石に今はもう積もる一方で既に五センチの雪景色である。しかしいつ止むとも知れない雪に、都民はホワイトクリスマスなどと喜んでいられない。

霧下がお化け屋敷に現れたのは日暮れ時、ドアの開く音で雪は目を覚ます。裸電球を点けなければ、そこは一切光のない暗黒の世界である。誰やろと闇の中に目を凝らし見ると、目の前には髪は逆立ち目も真っ赤に腫れた霧下が立っているではないか、丸で妖怪変化である。殺気を感じながらも逃げ場のない雪、無理矢理立たされ、霧下から容赦ない平手打ちの連打を食らう。空腹により衰弱し切っている雪は、直ぐに意識朦朧となり床に伏す。それでも顔を上げ、健気に霧下を睨み返す雪。

裸電球が点され、その目映さに一瞬目を瞑ったものの直ぐに霧下を睨む。

「何だ、その目は」

霧下の怒号。

「この殺人鬼が、よくもまあ抜け抜けと今日まで生き延びて来たものだ。正に虫けらの如きしぶとさである」

あんたに言われとないわ、鬼畜に鬼畜呼ばわりされては苦笑いするしかない。

「しかしその命運も、これにて尽きる。覚悟は良いか」

言うが早いか霧下は懐中に忍ばせし注射器を取り出すと、速攻でちくり、抵抗する力もない棒の如く痩せた雪の腕へと針を刺す。

「死ね、化け物」

どくどく、どくどくっ、注射器内のドラッグが雪の血管へと注入される。すると見る見る、雪の顔、全身に桜色の発疹が現れる。けれど気付いているのかいないのか、雪はぼんやりとしたまま無反応である。

「冥土の土産に教えてやろう。今お前に打ったドラッグ、一体何だと思うね」

沈黙の雪。

「これこそ何であろう、死に至るウィルス。では何のウィルスかと申せば、お前の大好物、そうさ、桜毒だよ。まっこと哀れなる、今桜毒の殺人鬼自らがその桜毒によって滅するとは何たる皮肉、これぞ正しく因果応報也」

雪は床に横たわり、力なく目を瞑る。最早無抵抗、人形の如き雪を前に、霧下は自己陶醉、軽率にもべらべらと秘密を暴露する。

「桜毒とは、元々化学兵器として我々の組織の下、ここ日本に於いて極秘に開発されたウィルスである。開発は成功し、その第一の感染者が、およそ十八年前この場所で我が手によってウィルスを注射したひとりの少女であった。同時にワクチンも開発したがトップシークレット故、世界でも限られた極僅かの者にしか配布されておらず、この日本国で所持するのは唯一わたしのみである」

大声で笑い、悦に浸る霧下。ところがその時……。

お化け屋敷の天井にめきめき、めきめきとひびが入る。

「何だ、何事だ」

慌てる霧下、しかし慌てるより他に術はなし。その内天井の数箇所が崩壊し、ぼろぼろぼろっと破片が落下して来る。一体何事が起こっているかといえば、じゃーん、たった今宇宙船メシヤ567号が、ここお化け屋敷の屋根の上に着陸したのである。即ち遂に第三惑星への救世主降臨と相成った訳。しかし着陸したは良いが、宇宙船の重さによって今建物全体が圧迫されているのである。

損なこととは露知らず、やばい、このままでは押し潰されてしまうと焦る霧下。逃げ

出そうとしてドアへ急ぐも、時既に遅し。天井からの圧力がドアに掛かり、ドアは開かない。しかも自業自得、閉じ込めたる獲物の逃亡を防止する為とドアは強固に出来ており、体当たりした所でびくともしないと来ている。しまった、閉じ込められたか、何ということだ、粟を食う霧下。その耳に何か聴こえて来る、崩れ掛けた屋根の上即ち宇宙船から。一体何だと耳を澄ませると、それは歌である。歌、あの少年の澄んだ声が歌う子守唄である。

『家の灯り、町の灯り、駅の灯り、ざわめき、犬のなき声、子犬が足に絡み付いてきた、まるで叱られて家出する少年、ひとりぼっち泣きそうな顔こらえて、子犬とふたり。高層ビルの灯り、空港の灯り、宇宙船でもやってきそうだ、寒さこらえて待っていよう、辛さも悲しみもこらえて、子犬とふたり。都会の灯り、ふるさとの灯り、遠い宇宙の彼方の灯り、とっては消え、それを繰り返す。道に迷ってしまったのか、それともはじめから、道など存在しなかったのか、みんな夢だったと言うように。宇宙船はいつってしまった、人々の諦めた顔を眺めているうちに、お腹を空かした子犬とぼくを残して。祭りの灯り、いろまちの灯り、ネオンの波に濡れながら、とうとうここまで来てしまった、世界で一番眩しくて、宇宙で一番悲しい場所。子犬が突然なきだした、まるで合図を送るように、女の子がひとり、えさをやろうと店から飛び出して来た、悲しいほどに似合わないミニスカートにコートをかけて、誰の夢がかない、だれの夢がついてたか。とうとう宇宙船はいつってしまった、お腹を空かした子犬と桜毒の少女を残して、あんまり眩しかったので、宇宙ステーションと間違えたんだな吉原のネオンサイン、どうせなら奇蹟のひとつでも起こしてゆけばいいのに。もう灯りは消してもいいだろう、みんな眠りについたから、宇宙船もかえってはこないだろう、もうねむりにおちてもいいんだよ、ベッドにはきみひとり、もうだれも襲いかかったりしないから、こわければ子犬をだいていればいい。ぼくをここに連れてきたのは子犬、ぼくならきみを助けられると思ったんだな、もしもあの宇宙船が、きみを助けにくる夢を今夜見たならば、きみはいつてしまうかい、この悲しき宇宙ステーションを残して』

「にいさん」

子守唄に目を覚ます雪。上体を起こすと、その顔も全身も既に桜毒の発疹が醜く覆っている。最早絶世美少女の面影はなく、枯れた桜の花の如しである。

「にいさん、何処いてんの。な、見んといて。にいさんの透き通った目潰れてしまうさかい、雪の醜い姿、見んといてな」

けれど少年の返事はない。その代わりお化け屋敷に閉じ込められたパニックで、何とか喚き散らす霧下の声がするばかり。

しかしそのMr霧下の声をも沈黙させ、いずこよりひとつの音が……。その声とは左端たちの最後のビデオに唯一残された「救世主は、最後の審判を決意する」の声であり、子守唄のした屋根の上、宇宙船から聴こえて来るのである。

ザヴザヴシューワ、ザヴザヴシューワ……。この宇宙に生きとし生けるものみなに、ただ喜びを与えんとして、夜空に灯したる幾千の星々、この麗しき銀河の瞬く夜に、など人は悲しき罪を重ねしか、我はただ清き愛の秘め事と安らかなる眠りの為にこの夜を、

人に与えし筈なれば……。我は今、最後の審判を執り行ふ。この青く美しき海の星、第三惑星に裁きを下す……。ザヴザヴシューワー、ザヴザヴシューワー……。ザヴザヴシューワー、ザヴザヴシューワー……。

この時より、地球全土に雪が降り始める。既に雪の降り、雪に覆われたる地はもとより、熱帯地域、常夏の地、今が真夏の南半球に於いてすらも。更に雪はこの時を境に二度と止むことを知らず降り続き、やがて地球全体を白く覆い尽くすに至るのである。

(十三・二) エデンの東

(十三・二) エデンの東

お化け屋敷の天井を見上げ、うろたえる霧下。

「誰だ、何者だ」

宇宙船から聴こえて来た声に向かって叫ぶ。されど返事はなく、代わりに、

「救世主」

そう答えたのは雪である。ふらふらと立ち上がり、雪もまた天井を仰ぎ見る。

「何だと」

雪を睨み付ける霧下。しかし最早霧下など眼中にない。雪の胸は、救世主、宇宙船、子犬と少年、それだけでいっぱいである。

「とうとう宇宙船、到着したんやね、にいさん。ほな、ここが Yoshiwara 駅やったの。しもた、雪てっきりエデンの東や思ってたのに」

ひとり苦笑いの雪。

黙ってられないのは、霧下。

「ええい黙れ黙れ、何が救世主だ、何が宇宙船だ。愚かな戯言をほざくでない。良いか、この星はな、我ら、Hill of Golgotha が支配する惑星であり、かつ永久にして真なる救世主こそ、我らが崇拜して止まぬ女狐女王様であらせられるのである」

「ん、女狐女王て、誰」

「誰て。ま、無理もない。簡単に申せば、悪魔」

「悪魔」

苦笑いの雪。

「何が可笑しい」

「そやかて悪魔が救世主て、洒落にもならんわ」

「ええい、笑うな」

ここで霧下お得意の説教を垂れる。

「そもそもこの数千年の永きに渡り、この星は宇宙でも比類なき美しく豊かな惑星だったではないか。見よ、人類は未開の大地を開拓し、産業革命を起こし、貨幣制度、科学、医学を進歩させ、輝かしき物質文明をば築き上げて来たであろう。奴隷否市民たちはその恩恵を受け、豊かで充実した幸福な人生を送って来たではないか。それは一体誰の御陰だと思っておるのだ。愚かなる野蛮人に過ぎなかった人類を陰で見守り支え続け、知恵を授けて下さったのは、誰だろう、我らが女狐女王様に他ならないのである」

しかしまたも雪は反論。

「あほな。それ言うなら女狐女王でなく、神様やろ」

「そっちこそ、あほである。分かったような口を利きおって。よし、ではきさまにひとつ問う。この星に於いて古今東西神と名乗る者共が現れ、それぞれに宗教を創設し、ど

れも皆異口同音に天国、パラダイスなるものを作ると宣言したが、結果はどうだ。未だ一度たりともそのような桃源郷がこの星に出現したためしはあるまい。これは如何なる訳か、さあ答えよ」

「そんな難しいこと、雪分からへん」

がくっ、聞いた俺がばかだった。

「では質問を変えよう。成る程仮にいつか天国は訪れるとしよう。しかしその天国なる世界、一体如何なるところ也や。果たして人類は天国に暮らして、本当に幸福になれるのか、答えよ」

「そんなん、決まってるやない。幸福になれるから天国言うねん」

「うむ、娘よ、そなたまじで愚かなる子羊である。では聞くが、天国とは醜き者などひとりもおらず、美しく清らか、嘘偽りなく正直で悪を許さず正義に溢れ、周りにはみんな善人ばかり。そんな世界で間違いあるまいな」

「そやね」

「てことはだ、このMr霧下なんかから言わせれば、天国とはまことに堅苦しくて窮屈、退屈極まりなき、あーあ詰まんねえって毎日毎日欠伸ばかりしてなきやなんねえ、そんな世界じゃん、な、どうよ」

「どうよて、そんなん言われてもなあ、雪まだ十九なったばかりやし」

「おっと失礼、しかしよく考えてみよ。酒、煙草、ギャンブル駄目、水商売、風俗、ラブホも駄目。女は古女房一筋、スポーツだって敗者を出すから駄目で、映画、TVドラマだって所詮嘘っぱちだから駄目って、おいおいそんな世界の一体何処が楽しかろうかいな」

「んま、確かにそう言われてみれば、そうかも知れへんなあ」

「そやろ、じゃない。な、そうであろう、娘。不細工がいてこそ美人が引き立つ。ブ男がいてこそそのイケメン。面白いのは、あんなブ男に何であんなええ女が、というようなカップルもいるではないか。要するにみんな同じじゃ詰まらん、個性もへったくれもないわいな、っていうこと。それから嘘も方便と言うだろ。何でもかんでも馬鹿正直にやったら、融通は利かんし、おもしろないし、何かと角も立つというもの。それに秘密、男女の秘め事などというのも、なかなか色気があって良いではないか。よく色恋は芸の肥やしなどとも言うであろう。そして悪、悪があるからこそスリル、ミステリードラマが生まれる。正義の味方と悪の支配者がいて初めて、芝居が成り立つ。ウルトラマンにはバルタン星人がいるから、ウルトラマンは正義の味方。でなければウルトラマンなんぞただの変なおじさん。恋愛ドラマとて男女を引き裂く邪魔者がいるから、ハラハラドキドキするではないか」

「そやな」

「であろう。こうして見ると、悪もそんなに捨てたものでもあるまい。それを頭ごなしに悪を否定しておったら、それはそれは詰まらぬ退屈な人間ばかりの世界になってしまうのではあるまいか。悪があるからこそ、世の中おもしろ可笑しい人生が送れるのである」

「成る程」

頷くも、ほんまにそやろか、釈然としない雪である。このまま霧下の言う事を肯定していたら、救世主に申し分けない、そんな気がしてしまう。折角遙々遠い宇宙の彼方か

ら宇宙船に乗って来てくれはったのに。

「そら確かに、あんたの言うことも一理ある。けどドラマはドラマや。現実にあんたらの儀式や快樂の為に、玩具にされ責苦に遭わされ、殺される少年少女たちの身になったら堪らん。それに退屈で平凡で欠伸ばっかしの時間の中にも、誰かと一緒に生きるささやかな喜びや切なさ、いとしさいうんは、あるんちゃう。誰かと出会って、平凡な恋愛して、やがて結ばれ一緒に暮らし始め、寄り添い合い、最期を看取る。そんな退屈でしようもない人生、雪、好っきやな。それがほんまの幸福いうもんちゃうやろか」

「何だど。何がささやかな喜びだ、いとしさだ、何が雪、好っきやなだ、調子に乗るな。ほんまの幸福だと、生意気な小娘が」

むかーっと来た霧下は、雪を殴ろうとして、けれど思いとどまる。今や桜毒に侵され衰弱し切った雪である故、遅かれ早かれ苦しみがき死んでゆくであろう。案の定、雪は立っていられず再び床に伏し、鼻水を垂れ、咳、嘔吐を繰り返し、全身の皮膚を掻きむしる。呼吸は荒く、鼓動もせわしない。桜毒の末期症状である。野獣の如き呻き声と共に、床をのたうちまわる雪。

「何と、哀れなるかな。これが妖怪変化、殺人鬼の末路である。まっこと女狐女王様のコントロールされる因果応報の鉄則は完璧、僅かの狂いもなくすべての者に適用、遂行さるのである」

床より手を伸ばし、救いを求める雪。しかし冷酷なる霧下は、その手を払い除ける。

「ほら苦しめ、もっともっと苦しむのだ。よいか苦しみがき、死んでゆけ」

ぜえぜえ、ぜえぜえと床に伏し、最早雪の命は風前の灯火。そんな雪にまだ罵詈雑言を浴びせねば気の済まない霧下である。

「どうだ、苦しかりょう。なぜお前がそのような醜き姿と成り果てて、苦しみのたうちまわらねばならぬか分かるか。それはお前が我らの同志を次々と殺した罪の報いなのだ。しかし一概にお前ひとりが悪いとも言い難い。なぜなら、そもそもそのような罪を犯す魔性と美貌とを持って、この世に生まれて来てしまったことが既に罪悪なのである。然らば悪いのはお前自身ではなく、お前を産んだ母親であり、お前を育てた吉原の女であり、お前を育てる為に女が営んだ売春宿であり、売春によって栄えたる吉原の街、なのである」

吉原、売春、エデンの東、お前を育てた吉原の女……お節……、ママ、わたしのママ。ママはなんも悪くない、ママはただわたしを愛してくれただけや。わたしを愛して……、愛、して。雪は最後の力を振り絞り、顔を上げ霧下を睨み付ける。その目には涙が溢れ、滴が頬に零れ落ちる。雪の生まれて初めての涙である。

「ほう、鬼の目にも涙とは、お前のことであったとは、お釈迦様でも知らぬ仏のお富さん也」

そんな戯言の霧下に、雪は桜色の発疹に侵された唇を動かし、何かを呟く。

「何だ、何が言いたいのだ。聞いてやるから言ってみろ」

「あ、い、し、て、る」

「何」

「それでもわたしは、よしわらをあいしている。それでもわたしをそだててくれた、ママをあいしているから……」

「何だと」

雪は手を伸ばし、霧下の手をつかまえ握り締める。どきどき、どきどきっ……。

「そやから、ひとりぼっちのあんたのことも、ゆ、る、し、た、る」

雪は笑みを浮かべ、そのまま力尽き息絶える。霧下はしばらく呆然と立ち尽くした後、雪の手をそっと雪の胸に置くのであった。

お化け屋敷の天井がめきめきめきと軋み出す。我を忘れた霧下は、されどただぼんやりと雪の遺体を見下ろすばかり。なぜなら死と共にその遺体から、桜毒の症状が跡形もなく消え去ったからである。天井が激しく揺れ、宇宙船が屋根から飛び立ってゆく。宇宙船が去った後、屋根にはぽっかりと大きな穴が開いており、そこから中へと粉雪が落ちて来る。驚いて霧下が天井を見上げている間に、床に横たわる雪の遺体に異変が起こる。遺体は瞬時にして透明化し、そのまま軽々と上昇を始め、天井と屋根とを通過し、遂には空へと消え去るのである。お化け屋敷には霧下のみが残され、やがてそこが雪に埋もれてしまうのも最早時間の問題である。

(十三·三) 救世主

(十三・三) 救世主

ふっと目を覚ます雪、そこは宇宙船の中。ザヴザヴシューワー、ザヴザヴシューワー……ピポピポピー……宇宙空間を絶えず飛び交うノイズが耳に響く。見渡せど船内には誰もいない、雪ひとりきりである。

宇宙船は動いているのか止まっているのか定かでない程緩やかな速度、けれど確かに移動しており、宇宙船の窓を見下ろせば、そこには吉原のネオン。それは眩しいネオンの海が広がり、あたかも宇宙船を迎える宇宙ステーションの如し、さながら大宇宙時空間夜行列車の終着駅のようなのである。しかしそれにも増して、降り続く粉雪の白さよ。

雪はその景色に見惚れ、窓に額を押し当て食い入るように見詰めるばかり。窓に額を押し当て……窓に映る雪の姿を見ると、幼女である。幼女は白いワンピースに身を包んでいる。

宇宙船の何処からか声がして、はっと振り返る幼女。しかしその声は少年のそれではなく、お化け屋敷で耳にした救世主の声である。

「子犬に御飯を有難う」

子犬、子犬のにいさん。泣きそうな顔でかぶりを振る幼女。

「子犬のにいさん、死んでしもたん」

幼女の問いには答えず、声は続ける。

「済まなかったね。第三惑星では、辛い思いをさせてしまった」

再び幼女は、泣きそうな顔でかぶりを振る。

「もうええねん、過ぎたことやし。なあ、それよっか、ほら、きれいな雪やな。ネオンの海に降る雪やで、一緒に見よ。雪、ひとりぼっちで寂しねん」

宇宙船の窓から指差す幼女。

「では、海へ行こう。一緒に行く約束だったね」

約束……冬の海がええねん、海に降るお雪さんが見たいねん。ほな、今度のクリスマスイヴ辺りにしよか……。何で知ってはんのやろ、子犬のにいさんのこともそやし。救世主さんやから、何でも知ってはんのやろか。そやったら、にいさんのことも……。どきっ、胸が痛む幼女である。にいさんのこと聞いて見たい、けど怖い。もしにいさん死んでほたら、たまらん。

「けど、にいさんとの約束やし。なあ、にいさんも、死んでしもたん」

問う幼女の頬に、吉原のネオンの瞬きが映る。ほんま、きれいやなあ。

幼女は吉原のネオンから目を離し顔を上げ、今度は夜空に広がる銀河を見詰める。ただ地上から見上げるしかなかった遥か遠い銀河の瞬きが、今は吸い込まれるかと思う程直ぐそばに。

「にいさんの瞳の中にいるみたいや。雪、今にいさんの涙の中にいるみたいやで。な、にいさん」

月の初めより降り続く粉雪により、吉原のネオンの看板にも徐々に雪が積もり出す。ネオンライトの上にも雪が、ネオンの熱でしゅっと融けては積もり、融けては積もりの繰り返し。そんな吉原も今はもう真夜中、雪の為訪れる客は皆無。東京では積雪の影響で電車を始めとする交通機関が運休止、道路も閉鎖。学校は既に冬休みの為影響はないが、休み明けの見通しが立たない。大人たちは通勤困難で、仕方なく家に閉じこもっている有様。電線は勿論のこと、電力施設、通信網、基地局にも深刻な影響が出始め、水道の水は凍結の危機に曝されつつある。地上の流通は完全にストップし、食糧は勿論生活物資は不足気味。専ら空輸に頼っているものの、頼りの他県や地方もいよいよ積雪が始まり、最早東京都民の生活はパニック寸前である。

「なぜあなたは、今日まで悪を許して来たのですか」

救世主へと問う少女。問われた救世主は答えに困っているのか、なかなか返答がない。確かに救世主は考え込んでいるようである。なぜ我は悪を許して来たか。それは……悟らせる為である。悪では決して救われぬ、憎しみでは幸福にはなれないと。答える代わりに独り言のように呟く救世主。

「悪が滅すれば、必要悪なるものも最早無用の存在。悪の世即ち夜の世界もやがて潰える時、夜に咲いたる吉原の華は散り、夜に灯りしネオンの海もまた、消え去りゆくのみ」

改めて吉原のネオンを見下ろす少女。そのひとつひとつの明滅が、そこで暮らす人々の鼓動のようにも見え、またその輝きは人々の涙によって保たれているかの如く思えてならない。そこは宇宙ステーションというよりは、例えば山手線か何かのように、いつまでも同じ悲しみの上をぐるぐると巡り続ける夜行列車の始発駅でありまた終着駅のようにでならない。

「ほなやっぱり、吉原も滅ぼしはるの」

「左様。ただ我の耳には、あの夜明けの吉原の街を腹を空かして彷徨える野良の子猫の鳴き声が、どうしても忘れ難くてならないのである」

「子猫……。にいさんに会いたい、雪も子犬のにいさんとにいさんに」

そう呟く少女へとひとつの音がする、聞き覚えのある音が。

「ぼくたちなら、ここにいるよ」

その声と共に、少女の前にすーっとふたつの小さな光が灯る。

「ワン」

鳴き声と共に光の片方は子犬となり、少女に飛び付きぺろぺろと少女の顔を舐める。もう片方の光も少年となり、少年はその手に何かを抱えている。

「にいさん」

歓喜に震える少女。少年が抱えているのは、真紅の薔薇の花束である。

少年は、少女へと問い掛ける。

「雪という少女の一生を通して、きみは一体何を悟ったのだろう」

へっ、驚いて少年を見詰め返す少女。

「何言うてんの、にいさん」

ところが少女が少年から花束を受け取った瞬間、見る見る少女の姿は変貌を遂げるの

である。宇宙船の窓に映りし少女、その姿は、誰あろう、女狐女王のそれであった、とさ。

ザヴザヴシューワー、ザヴザヴシューワー……。

宇宙船は第三惑星を出航し、吉原の街はネオンの瞬きを保ったまま、やがて雪に埋もれゆく。丸でみんな、夢幻であったというように。そして第三惑星は、永い永い冬に入るのである。

ピポピポピー、ピポピポ……ザヴザヴシューワー、ザヴザヴシューワー……。後には宇宙空間を飛び交うノイズがするばかり。

(了)

終わりに

終わりに

お読み頂き、ありがとうございます。

宇宙ステーション・救世主編

著 SKY BLUE

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
